

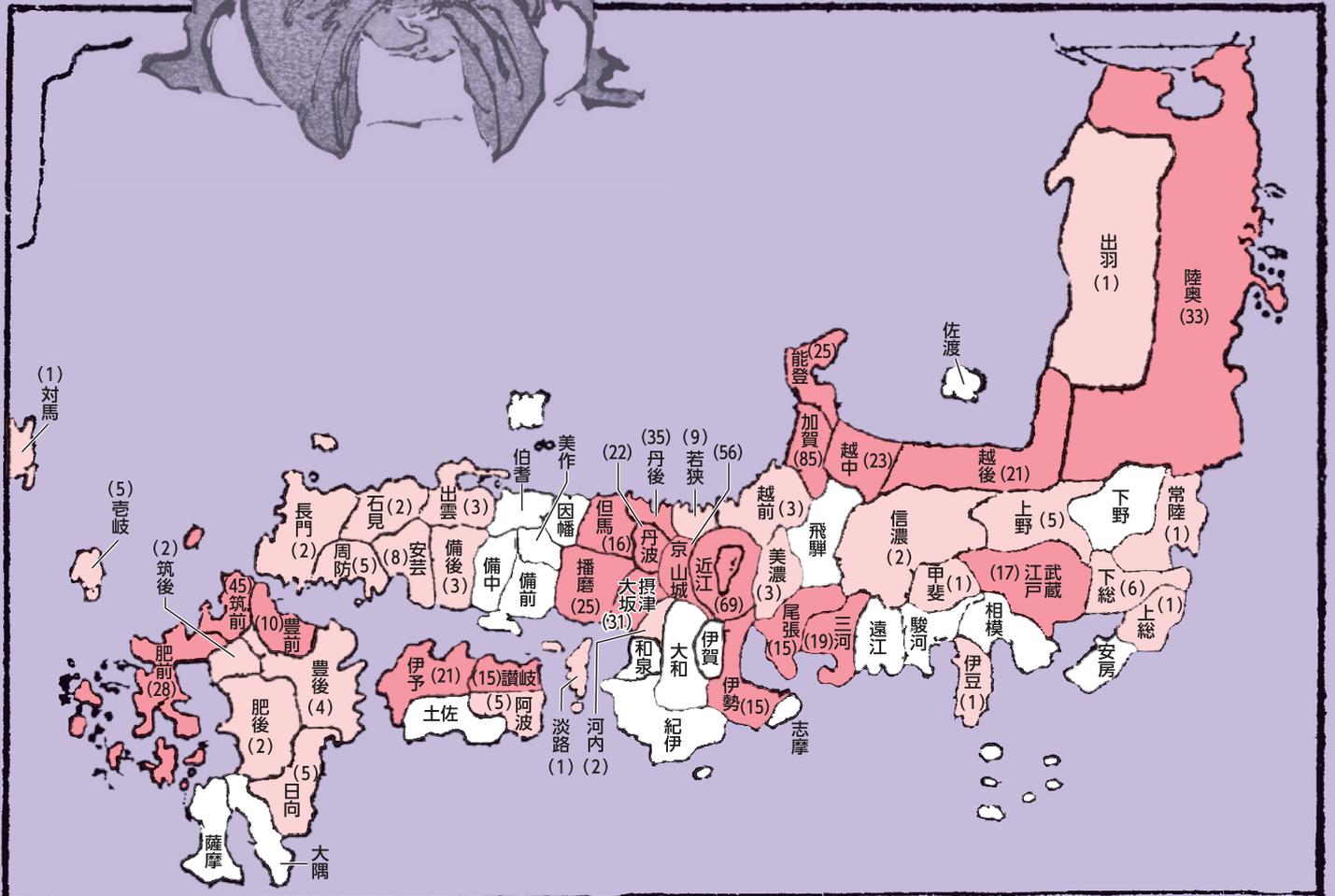
# 『花供養』 翻刻集成Ⅲ

— 蒼虬(2) 千崖 朝陽の時代

文政十一年〜天保十一年 —

竹内千代子 編・著

竹内千崖翁肖像 法号字諱



天保三年 千崖主催『花供養』 ■ 10人以上入集 ■ 10人未満入集 □ 未入集

# 『花供養』 翻刻集成Ⅲ

—— 蒼虬(2) 千崖 朝陽の時代 文政十一年～天保十一年 ——

## 目次

凡例

翻刻本文

24 文政十一年 蒼虬主催 『花供養』

25 天保元年 蒼虬主催 『花供養』

26 天保三年 千崖主催 『花供養』

27 天保四年 蒼虬主催 『花供養』

28 天保五年 蒼虬主催 『花供養』

29 天保十年 朝陽主催 『花供養』

30 天保十一年 朝陽主催 『花供養』

番号索引

付表一 各年本の編成

付表二 各年・国別奉納者数

三訂 『花供養』 所蔵 翻刻一覽

付記

101 100 99 68 58 51 39 27 16 7 1

## 凡例

一、本翻刻集成は、京都東山芭蕉堂主催の『花供養』を収録したものである。天明六年の初刊から明治三年までの現存する総てを五期に亘って翻刻する計画である。

翻刻集成Ⅰは、天明六年(1)から寛政十年(12)迄、初世蘭更主催の十二冊を翻刻している。

同Ⅱは、寛政十一年(13)から文化十三年(23)迄、二世蒼虬主催の十一冊を翻刻している。

本冊のⅢは、文政十一年(24)から天保十一年(30)迄、二世蒼虬、三世千崖、四世朝陽主催の七冊を翻刻する。

二、各巻の翻刻に用いた底本、校異本の略称は次のとおりである。

- (1) 白鹿 兵庫県西宮市笹部桜コレクション—白鹿記念酒造博物館寄託—
- (2) 麗澤 麗澤大学附属図書館田中文庫
- (3) 竹冷 東京大学附属図書館竹冷文庫
- (4) 糸井 京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫
- (5) 石川歴博 石川県立歴史博物館
- (6) 月明 石川県立図書館月明文庫
- (7) 立教 立教大学附属図書館

三、翻刻にあたっては、次の方針に従った。

① 丁移りは、丁の最後に、柱刻によって漢数字で示し、丁の表は「オ」裏は「ウ」で略記する。柱刻が無い時は、「見返し」「序」「跋」などと適宜補う。

また、算用数字による丁数は、柱刻によらない通し番号である。柱刻と甚だずれる場合は、適宜下段に併記したことがある。

② 本文の改行は概ね原文のとおりとする。

③ 連句における短句は、一字下げとする。

④ 漢字の字体は、概ね常用漢字体に統一する。ただし、排号、左のものは当時の習慣を尊重して、概ね原文の表記に従う。

- 選・撰 野・埜 村・邨 船・舟 袋・帛 縁・椽  
食・喰 県・縣 淵・洫 阜・阜 峰・岑 柏・栢  
糸・絲 婿・聿

また、特に左の異体字は常用漢字体に統一する。

帚↓虎 飯↓婦 𠂔↓網 侯↓侯 艸↓中↓草 壳↓殼 烟↓煙  
窠↓松

なお、左のものは概ね校訂する。

朝只↓朝顔 貌↓顔 厂↓廌↓雁 宀↓摩·磨·魔 太良↓太郎  
衿↓衿 挑燈↓提灯 蔭↓陰 坐↓座 直↓值 盞↓盃 雀↓鶴  
野、↓野の 暮、↓暮る 南↓なむ 敷↓しく 晃↓けり  
川図↓かはづ

⑤ 濁点・半濁点は私に付し、原文にあるものは「濁ママ」などとする。なお、濁音が繰り返されない場合の踊り字は、左のように統一する。

親こ、ろ↓親ご、ろ

⑥ 原本にあるルビはそのまま記し、私にルビは振らない。

⑦ 踊り字については、原文の表記に従い、次のように統一する。

漢字一字(一音) ↓々  
ひらがな一字・同濁点 ↓、・ゞ  
カタカナ一字・同濁点 ↓、・ゞ  
二音以上の繰り返し・同濁点 ↓く・ぐ

⑧ 音訓記号は原文の表記に従う。

⑨ 底本の虫損などによる判読不能箇所については他本で校合するが、それが不可

能な場合は、□で示す。

⑩ 校異等の注記は【校異】【参考】で記し、本文の該当箇所に傍線を付す。

⑪ 蔵書印や蔵書署名については省略する。

底本 白鹿本  
校異 麗澤本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

花供養序

はなものはざれども妖艶、人の眼を  
なくさめ、喜香、香人の腸にしましむ。  
もとより虚霊不昧ひとたび感

動し、たちまち玉吟金声とならざるは  
なし。これ人のこゝろみな花になり

すまし、雨を愁ひ風をおそるゝたくひ  
にあらず。千歳不朽のはななり。時に

此花を揖て、ばせを翁のため

供養せらるゝ東山蒼羽客こそまた  
よく花をおしむこゝろにして、この余

香あまねくあめが下にひろごりて、  
能人の恨を消し、よく人の腸を澄しむ。

あ、宜哉、花供養。

ちぬの浦 檐鷗

三月十二日花供養会

魚飛て暮行花の木陰かな

替地ばたけの麻のむら生

春中は旅商人の礼かねて

やつたり門をふさぐ干物

儼草

蒼虬

榛堂

卦籠

(序一ウ)

糖釘を紙引裂てねぢておき

【校異】麗澤本、上五「糖釘を」。

ことしの築も是きりの音

雁高うひとはな見せる朝の月

小菜うりも来ぬ綿の出盛り

奥深に御茶屋の時計聞えけり

うるしのあしの伸る南風気

客分のうちに娘をもらひきり

愛満講の当家つとむる

薪部屋のごみも掃こむ河戸口

真桑瓜に腹のこはる休日

そろ／＼とかすり出したる四蔵米

伊勢とつしまの御師の間違ふ

宵月は棚捜しする手くらがり

あまり近さにきもつぶす鹿

露霜に血どめの葉施して

出口のしれぬ大塩の町

ころ／＼とこかす初荷の古手館

朝まはりする春の肴屋

鳶姪る声も何やらさわがしき

行場の道はいつもしめつく

地にあはぬ榎は檜にはへまけて

かぞへる鮎の手をすべる也

仰山な木津の子供のあばれやう

壁の好みも出来し萱ぶき

仕舞ひ湯をひとくべさして這入らるゝ、

土産の苞は手もさゝずおく

事はじめまでは師走も麗に

夜のあるうちに揚る鬮縄

辛洲への道のつきたる二の鳥居

月峰

杜蓼

夙也

芳英

几乙

仲秀

並隆

若雅

義道

侘美

梅通

雪丸

貨僕

登里

恬齋

兆三

十丈

乙彦

凡鳥

松陰

扈嵐

露頂

士明

千之

喜楓

玉脂

半戈

不十

湛露

(二オ)

空が晴れば瘡うすらぐ

青蠅のしぶとく残るくれの月

莖に似合はでちさき鶏頭

並酒もぐいと新酒になりにけり

ひとり左官の上手顔する

舟の来ぬときはきたなき浦通り

日がな一日からす追ふ犬

右一順

つやのなきものにはあかず山の花

鳥の尾もぬれて霞や水の上

汐はまや一軒前の朝がすみ

つみたらぬ若菜を鶴に喰れけり

あがり／＼大川越るひばり哉

山高く見ゆる桜の入日かな

去年とひし日の思はれて遠桜

舟出して嬉しからずや春の風

花と月其中にひくおぼろ哉

凍どけや脂のふき出る堂の椽

むしろ帆にかくるゝ島の桜かな

おろそかに踏まじ花の木下道

川を中に鶯ふたつさそひ啼

慈姑ほる手で詠居る桜かな

船頭にしかられぬ梅の置所

道造りすんだ所なり宵の花

酒ひとつ過して出たり夜の花、青樟更

花鳥の中に立けり老の杖

吹風の身にもさはらず花の山

詠てはおらねども散るさくら哉大ミノ

はる雨や志賀の畠のむかふ低

其曉

言来

子竺

以都美

月敲

乙雅

丘齋

天津

舒六

九臯

菊住

古猿

宇洋

南調

蕙布

無隔

米友

東着

春岑

閑齋

走井

斜道

坂本

于當

カタ、其曉

成章

禾郷

斗行

一居

麦洋

(四オ)

春毎に葦咲なりいほの壁 音羽 田美

舟が、りせねど柳は見知りけり 万木 北馬

青柳や広袖着たる舟の者 南一 並翠

ちる椿花のおと、はおもはれず 太田 乙鶴

咲だるみして咲にけり梅の花 長ハマ 探草

山里やかすみの底の朝ぼらけ 長ハマ 探草

長閑さや伊吹の雪の有ながら 彦根 素律

舟呼ぶや千鳥所もおほろ月 越川 神月

打杭のまばらに霞む川瀬哉 町屋 右溪

蛙からさきへ夜にいる山田哉 辻村 星湖

湯立すんで暮る間のあり落椿 八マン 仙李

花折てもどる声あり夜の道 飯時は竈門へかけさす柳かな 浅小井 里鳥

世のあかを花にあづけて花見哉 浪先や数はをらねど飛乙鳥 日野 士明

賑やかなものや西日の山つ、じ 七種のこだま申ししや向ふ山 女 李夕

飯時は竈門へかけさす柳かな 大声をしてくる、や唄の雉子 和月

ちる花に人の恋しき山路哉 土手際にすべりし跡や梅の花 土山 虚白

我こ、ろ笑ふな花に草鞋かけ 湯あがりや余寒覚ゆる唄の家 双晃

浪先や数はをらねど飛乙鳥 うぐひすを十分にきく添乳哉 石鼓

七種のこだま申ししや向ふ山 渡らずに見るや小ばしの春の月 大野 月坡

大声をしてくる、や唄の雉子 はれくし眼やにぬぐふて梅の花 イセ津 団積

からたちのある土手なれど葦草 大藪の中より出ておほろ月 麦村

土手際にすべりし跡や梅の花 武庫山のあらしのはてを汐干潟 高座原 坐麓

湯あがりや余寒覚ゆる唄の家 花植る根を見に人のきそひけり 松坂 普品

うぐひすを十分にきく添乳哉 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

渡らずに見るや小ばしの春の月 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

はれくし眼やにぬぐふて梅の花 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

大藪の中より出ておほろ月 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

武庫山のあらしのはてを汐干潟 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

花植る根を見に人のきそひけり 朝影や花も眠りの数にいる 翠川

田舎衆の橋まできたる柳かな 山田省吾

我声をちからに登る雲雀哉 杉堂

けふこそは農鐘聞てさくら狩 外松

ぬぎかへし草履も軽し春の月 卜二

【校異】麗澤本、作者名「卜乙」。

七草やとなりを聞ばまた隣 桑和

山路来て里にとりつく柳かな 淇悠

なが居して瘦て帰るな小田の雁 秋助

春の夜や藍瓶くさき浜通り 在測

はる雨や二度だきしたる鯨汁 文外

望には果なきものよ花ざかり 可笑

羽音して花にあぶなき暮の鶯 叟眉

花守の垣手伝ふて戻りけり 如芥

万歳の烏帽子さげ行山路哉 蟻来

麓まで鳴ひろげたる蛙かな 梧青

大門をはかりもせで若菜売 梅園

夕山のふかぐとなるさくらかな 松扇

わか草や草臥ついた海の音 鶴郊

鶯や二三日なれる白のうへ 九如

うぐひすや見えつ隠れつ梢まで 葆光

草の戸や雛のうしろに鉤ともし 文李

鶯にうたがひかゝる初音かな 一翠

花のかげふまじとのけば人の中 昌作

くさめして鶯今朝も立せけり 四溪

花の山なをおく深し人の声 逆川 南涯

大粒な雫ならぶや桃の枝 滄洲

戸明ればいよく梅の匂ひかな 其友

佐保姫の笑るすがたかはつ桜 五竹

山ざくらおくれし人に散にけり 伊サハ 杜英

花盛日も入かねるけしき哉 弟国 一瓢

おもひ出したやうに椿の落る音 尾張ナゴヤ 武貫

ふつと眼の付初るよりつくくし 沓カケ 宜彦

落ざまに町を打こす雲雀哉 三河岡崎 卓池

付木つく音や椿の窓ならび 足助 塞馬

留主がちの隣もちけり忘れ霜 東浦 樗老

見たほどは語りあふせぬ桜哉 宮ザキ 陽坡

きじ啼やどちらを見ても薄曇 吉田 赤守

山もとや花と並びし軒柱 蓬宇

花見して広げてかへす庭哉 膳碗のほこりかまはぬさくら哉 常磨

朝の間は他の人も出ず花に鳥 遠江浜松 不十

はやくと満月出る焼野かな 武蔵八マン山 青荷

杖にをりておどろく梅の荅哉 少年 未化

鶯のほそはぎのばす木の間哉 太尔

はつきりと木の芽ほぐれて月寒し 左流

山吹やひたく暮るかきの浪 平二

鶯のはつ音の跡やおぼつかな 栗支

それほどにはなれぬ中か花に風 可布

春の山下りるに骨の折るなり 玉川 天由

岩はなの夫さへ蝶の寝る日哉 宝水

山里や遅かりもせぬ梅の花 東都 何丸

はつ草やたぢちに明る山の色 抱儀

ものくし梅の月夜に啼鴉 応声

動かせばさのみ動かぬ桜かな 友之

鶯の丸く啼出すあさ日哉 禾葉

ねて居るか早蕨つむか唄の人 素忠

あら磯にひとへの花の咲にけり 上毛ミノワ 六我

正月や畔みち越えし下駄の跡 下毛真岡 米五

鶯の首途をなくかひがし山 柳之

遠山の白きやたてや春の月 来五

遠山の白きやたてや春の月 来五

(五ウ)

(五オ)

(四ウ)

(六オ)

(七オ)

(八オ)

(九オ)

引きつたやうに啼やむ蛙かな、みつを

芳野から世は曇るらし花の空、一貫更 梅磨

春の月黒ひはたしか百足山、文藻

花に花かさねて高し吉野山 下毛栃木 道雄

春の雪いくら降ても梅の花 ヒタチ真瀬 滄水

雁立て水の淋しや春の池 下館 青蓼

山里は子もたんとあり梅の花 下総左原 桐雨

梅ありてこそ夕ぐれも見られけり 佐倉太田 春雄

水のむで田にしになるな啼雀 出羽アキタ 仙風

是非なくも桜につなぐ小舟哉、国彦

行水や花よりさきに老の影、御風

ふたすぢの道あり寺と初桜 奥州 文骨

人中へ持出せばちるさくら哉 南部 卓堂

花ありて名のなき山もあはれ也 盛岡 湖柳

斧さいて霞にむかふ男かな ヒタ高山 有美

静さや亀のうきたる春の雨、三友

焚ほどの松葉もありて花の陰、如松

晩鐘のこだまを返す柳かな、東有

戸口まで老をおくるやはつ蛙、暁夢

春の月ひとあしよれば木間なる 信ノ敷原 韜光

うつらう日あればぞ花の美しき 林 里風

やくそくにづられて居ればちる桜 飯田 何頼

おぼろ月どこやらたらぬ草枕 甲斐市川 石郷

あんかんと水の流る、つばき哉 越後新発田 了々

なの花や潮の音は夜にいりぬ タザハ 芳兮

陽炎や牛ひき牛に牽れ行 加茂 養素

静さの夜を啼つゝの蛙かな、車十

初午やもらふて這入る寺の風呂 越中ト山 あふむ

雨だれになるまでまたず啼蛙、雲布

雪折れのあと風情ある野梅哉、凡丈

家鴨らのなくとき落る椿哉、葦村

水のよいだけは馳走や山桜 フクノ 玉脂

はる風や鶏の肥たる寺まはり、伯芝

花散て月は明るき木の間かな 高岡 麦車

浜町はみな早う寝てはるの月能登ノトベ 其種

【校異】麗澤本、作者名「春種」。

掃除してあるや余寒の山の裾、七尾 雪鴻

囃ひ人のかはりてをるや梅の花、ノトベ 尺花

曙ははるのものなり山科九郎 穴水 李之

一仕事すれば雨もつ柳かな、石兄

柳よりはるかにひくき柳かな 七尾 楽齊

川船の白帆ならんで春の月、ゆみ子

鶯に夜明のはやき野松かな、竹塙

鶯ばかり往来するなり磯の花 加賀大聖寺 木雄

細ながれつくや雉子啼山の池、丹嶺

おりたれば人の背戸なり花の山、呼亭

春駒の拾ふて行や炭のをれ 金ザハ 年風

追つけば我子ではなし夕桜、太甫

白魚の雲にも似たりあさ嵐、一川

行灯も入らぬ夜にする桜かな、白二

畑うちがきつと詠て山の雲、固来

二枝と折てはくれぬ柳かな、棹江

鶯にひとすぢ立や朝けぶり、立介

きじ啼てふと宇治巡りする心、商齊

空ちかう思ふや梅の咲あたり、宇牧

汲水の片手ふさぐや桃の花、本吉 春輝

花の香や鎮りかへるまつ柏 越前丸岡 友甫

春の夜や鎌の音する垣隣 丹後ミヤヅ 万籟

沢山にふるや狩場の春の雪、馬良

残る雪野にも小隅が出来にけり、柳絮

大幣をひらめかしけり花の奥 丹波須知 俵瓜

野鴉とならんで雪の若菜摘、芦屋

水あびてからすも行や花のおく、不凹

隣にはながき留主なり散椿、千山

いづれ此道へもどらん朝霞、魚舟

引ぬいた杭のあとあり春の月、梧雪

鶯や障子明れば風のある イナバ鳥取 遜思

月花につかはれてさへ日は永し、兌籟

山を焼けぶりのはしを帰る雁、呉流

裸樹はありの儘なる余寒かな、白試

海苔一把置て通りぬ関の前 伯耆米子 草台

花の山おもへば梅は寒かりき 出雲完道 春涛

咲にあるものをさくらのちるまでも 石見鳥越 尾山

花守にかりて戻るや小提灯 美作ツ山 澄月

川舟に三里寝にけり夕雲雀 ハリマ宇サ崎 五芳

いらぬ日になりて齋の垣根かな ソネ泥中更 樵風

静かなるものに添ふなり春の月 今市 琴洲

青柳やけさは誰にも逢ぬ門 魚サキ 節之

眼のおよぶだけは蝶飛ぶ日より哉 平ツ 其暁

藪べりや舟に一ぱいおち椿 ワタセ 草々

ちる花や膝も崩さぬ仏達 三木 文郷

朝つばめ戸樋竹売にすれて行、元山

鶯や世間かまはぬ高いびき 西江井 楚江

鶏をか、えてもどる霞みかな 津万井 六英

歌舞妓荷の関所越るや春の風 比延 古谷

糞とりの不断邪魔がる柳哉 ヒメチ 曾夢

二階から出舟を問ふや朧月、至明

冷やりと庭に風あり木蓮花、為一

菜の花や道から戻す庵の傘、周椎

下駄はいて来る人もあり夜の花 千本 奇峰

(一〇ウ)

(九ウ)

(二一オ)

(二二ウ)

(二二オ)

(二三ウ)

(二二ウ)

(二三ウ)

正月のひとかたづきや野梅咲、琴止 (一四オ)

藪の梅そのうしろにもみえにけり 備後フク山 岱雨

朝の間は雲も桜の匂ひかな、雪塙

しらぬ先ばかり都の花見かな、陽里

ちる花にはたらき尽て眠る鳥 尾ノ道 鷺汀

鶯のこゝろになりて聞にけり 鞆 応雅

紙出して包て居るやつくくし、蓬廬

花まへやあたりまかせに約束す アキ広シマ 鶴居

橋かけて銭とる陰の蛙かな、田影

鶯の口から出たり朝がすみ 下ノ関 峰磨

【校異】麗澤本、肩書「筑前下ノ関」。 (一四ウ)

寝よとつく鐘は罪なし春の雨、素石

つくぼふて鶯聞や小溝ごし 秋月 塔然

春の夜や長柄堤は日傘さす 大宰府 莫因

明る夜をほのかに並ぶ若菜摘 吉木 万素

雨ちかく桜につくや温泉の匂ひ 福岡 臥山

舟にたつ行灯床し春の月 小竹 立沙

木のもとや袖かき合す宵の花 ハカタ 松二

馬士の下駄の緒赤し梅の花、南礎

芹ひけば跡にうきたる蛙かな 福ヲカ 士焉 (一五オ)

万歳のもどりや海を夕詠、甫六

とま舟の料理聞ゆる柳かな、斗丈

はや起し鳥屋が門の春の月 筑後クルメ 慶吾

梅が香に幾度ふみぬ門の砂、与山

むしる帆も出るや霞のはづれより、千鷲

転び出て袖の玉子も春寒さき、米汝

菜の花に明ればちかき湖水哉、幻化

唇の花にも乾く山路かな 木屋瀬 香輔

炬塞ぎやはきやる塵に啼小鳥 豊前小倉 木斎 (一五ウ)

鶯の遠音や傘の干るにほひ 秣 松風

吉野なり花に人人出人 猪膝 紫川

暮る戸にもて来るさくら明り哉 ブンゴ日田 一樵

かう着てもこの正月の寒かな 肥前田代 梅調

折て来た足でくれけり初桜 大村 悠々

梅が香をはなれて高し朝の月 平戸 亀年

浜の家は裏のみ見えて猫の恋 長サキ 虎睡

露の臺ほろりとぬくき匂ひ哉、雀堂

雁がねの一夜小高き別れ哉、其映 (一六オ)

言葉多き内義や花におくればせ 諫早 霞林

手をうてば鼠もきたり春の雨、文洲

青柳のかげに溜るや水の泡、史敬

扇をる手にさへはるを惜みけり、棠雨

お乳の子も立並びけり柳陰、素岡

よい子ども持て桜の軒端かな、春里

かばかりの花もゆるさぬ荷ひ茶屋 天クサ 正焉

雪どけや其日くくの遊びざま ヒゴ 玉雪 (一六ウ)

人にかす馬は飼たし花の時 対馬 曙堂

爺婆々の嵯峨の戻りや花の杖 日向都ノ城 登鯉

青柳の下で米搗をとこかな、黄龍

棚橋の水なき比をなく蛙、柳月

大豆ほどになつて人行汐干哉、碧水

折る音のひゞくや又も開く梅 サヌキ 岱年

木兎のねぐらかゆるや落椿 マル亀 夢蝶

香久山は古事おほし小松曳、梅笠

江の家の住よく見ゆる柳哉、雪涯 (一七オ)

山寺の朝寝起すや傀儡師、里楓

藤咲や水を施す家もある、壺睡

さくらちる中に見出すや屋根の苔、茂椎

馬士の銭よむうへや啼ひばり ヨシハラ 杏堂

花のさく日とて朝から野風呂焚 コンビラ 蝨羽

灰吹の音こゝろせようめに鳥、寅石

鶯の初音のせけり旅日記、月村

鯉はねる音より水は暖みけり ヒロタ 一貫

万歳に逃て吼るや寺の犬 スミヨシ 桃陽 (一七ウ)

椿ちる下や子どもものひと薙 トキ 流泉

鶯の梢に残すくもりかな サカモト 幹岳

さしがねを覗て居れば飛燕 ウタツ 南之

のどかさやさはれば落る樹の雫ヲホミ 梅溪

風邪引もはやりもの也花の時 河内村 其岳

鶯に向て流すや杉丸太、玉瀾

春風や田に移りたる二の鳥井 阿波徳島 鸞巢

鶯や梢の雨を踏しめて、茂陵

おきくいたばこもうまし雉子の声、青柯 (一八オ)

ちる花の中にも高き桜かな、橘茶

家移りの粥たく空や帰る雁、涼宇

寒きとは人の栄耀ぞ梅の花 白地 一秀

道くも手よけかねて花見かな 淡路須本 露頂

梅の門人よりそうに通りにけり、始丘

居ることならぬ盛や唄の花 南都 悠鹿

はるの夜の夢の跡ひく霞かな、雪下

新鍋の鉄気ぬけけり初桜、暁求

しら魚や何ぞめでたき名もあらん、耕六 (一八ウ)

行先のしれぬ道あり花の山、雪化

うつくしう夜も明にけり花の庵 全

海みゆるまで登りけり花の山 全

植込は雨まだやまず飛ぶ小蝶 高野 辛夷

た、き菜に狙やりぬ梅の花、馨齋

鶯や丁度仕舞になる渡し、閑那

夜の花馬にもひとつ灯のともる 紀伊田辺 陶斎

鶯や啼そやしても愛らしく 若山 南風

馬市の損も嘶すや夕がすみ

イツミ堺 檐鷗

世の中のふところらしや花の中

清風 (一九オ)

青柳に引よせてある車かな

花実

鶯にはやうつとききはしらす哉

撰津兵庫 如箭

馬の尿逃てふみ出す土筆かな

イタミ 太乙

田の道の送りむかひも睦月哉

全

連翹や塔から見えた家は是

全

夜ざくらや居りつぶした足の豆

草方

高きに登りて

草方

見おろすや菊にもたてる夕煙

公氷

時雨に月のよく晴し秋

草方 (一九ウ)

うそ寒に人足帳を受取て

西月

無腰で歩行むらの侍

氷

新池も沈晷計りは来たらしき

方

熱湯でよべのあと仕舞する

月

下略

鍋ずみも蓋も流れて帰る雁

一東

日も暈をめすや花見の真盛り

鳴々

行処もなしに歩行や朧月

秋助

春なれや家に帰りて雨のふる

ナニハ 西月 (二〇オ)

牛馬の天津を花のはじめ哉

鶯雪

ちりし花一日づゝは塵ならず

自楽

ささらぎや一人うれしき松の風

露州

あつらへたやうに桜の庵かな

庵女

川どめに宿とる不意の花見哉

君齡

居残て花見る山の雀みかな

松子

大さうに田螺居る田のさくら哉

月桂

ゆるされて梅折こゝろやみにけり

松隣

鶯やけさのたばこも行灯の火

素明 (二〇ウ)

行春や此ゆふくれの気不性さ

肥大村在阪 有兩

しんとして斧の音ある桜かな

ナニハ 素羅

居風呂や月もさし入花盛り

世外

犬つれて桜尋る深山かな

夏口

梅が香や月はいつもの汐がしら

梅圃

建並ぶ蔵や霞んで山の月

秋山

存外に垣のきびしき野梅哉

蟻兄

昼からはながくおぼゆる柳かな

一肖

鶯や来ときが能てみなが聞

公氷 (二一オ)

草の戸に花の香みちて雨ちかし

宇治 一路

深草や宵からふけておぼる月

伏見 義雄

灯ともせば木ぶかくなりぬ山の花

溜 月峰

【校異】麗澤本、肩書なし。

三条は旅の空なり朝がすみ

金葉

湖の魚みな浮にけり春の雨

貨僕

木母寺に是非ひとつ居る胡蝶哉

卦龍

土器のよきほし場なり梅柳

岱李

我馬のつらすりつける桜かな

蘿閑

追かけて爰まで来たり蝶胡蝶

可雄 (二二ウ)

一先づは花に戸をさす夕べ哉

若雅

見た事が睦にならうぞ散る桜

兆三

花鳥のながれや人の来ぬ朝日

鹿川

降までといふ間にかゝる花の雨

路鳥

そよりくさかりを見せる桜かな

凡乙

一日も哀れはしらず花の旅

女 白絲

渡るのも栄耀らしけれ春の水

およう

宿にして見れば小ぐらし花の中

乙雅

花に養束のあるすがたかな

千賀雄 (二三オ)

橋かけて去る僧あり花の頃

恩古

関こすや花かたげたて億せざる

李角

のどけしやそこらあたりが蟹の穴

金ピラ在京 雨興

人馴た鳥の居りけり春の山

言来

夜のうちの寒さみゆるや野の柳

以都美

窓だけの風はある也桃のはな

子竺

旅の夜は何にふるひて啼蛙

太老

若鮎や嵯峨の手紙の濡ながら

並隆

松風の吹広げるや春の水

義道 (二三ウ)

会釈してをらずなりけり垣の梅

喜楓

花ざかり夜明くの新しさ

月敲

いつの代に小宮が出来て梅の花

岱美

山高う木樵の唄ふ霞かな

一山

何となく夜はしづかなり月と梅

羅浮

鶯やきのふの枝へけふも来る

柄花

芽出しから床しや葦花持て

歌和

大藪にはさまる花のさかり哉

扈嵐

午時もはや過しか花に吹小風

芳英 (二三オ)

朧夜や渡し見かけて九折

祖郷

去年買った畑に先つむ齋かな

且斎

鶯や人に言れぬ気草臥

凡鳥

うぐひすや遠慮会釈もなき隣

杜蓼

古道を見て居れば来る燕かな

長成

ものいふもひくき蚕の一間かな

蘇山

駕籠やるといふ声辻に霞けり

十丈

青柳のひとすぢ長し雪車の道

榛堂

見えながら埃曇りや春の水

世南 (二三ウ)

鳥の立枝の動くや夕がすみ

夙也

曇らねば花ともいはず在所哉

千崖

庵の花おそくて雨をのがれけり

蒼虬

歌仙一折

めざむるや枕のさきの草の餅

晴行あとのあたゝかき雨

さし木する小溝続の泥汲て

背負ふて通る馬荷おさえる

潮風呂のかげんくるはず暮の月

あたら芒を捨ものにいふ

茸狩に交る醍醐のまつり客

かくしだてしてちんばみらるゝ

内証であけてくやしき垣の鏡

羽二重落のうすきさかやき

行年の小栗語りに素湯呉て

菟蕪踏の草鞋揃える

銘々に夜舟上りの小風呂敷

人囃犬の笈を引ずる

無造作に煙囪ひの鉦輪小家

山に幟をたて、拝ませ

花の前絵座に月のきはつきて

歩行鶴ひとつにいそくはる川

(二四オ)

(二四ウ)

蒼虬

俵瓜

千崖

榛堂

瓜

崖

堂

瓜

崖

堂

瓜

崖

堂

瓜

崖

堂

瓜

崖

(二五ウ)

(二六オ)

(二六ウ)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

底本 竹冷本  
校異 白鹿本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

はせを葉のかぎりなき心をぬき  
出し、日々にあらたなるかげに  
したひあつまれるものから、その

大もとに供養するてふ花は風に雨

に薦ひおとろふ。花にはあらぬ人の言葉  
の花にぞあなる花の都のひがし山、花

のいただきにほとりする真葛葉の  
おひしだり、はひまとふ中に、桜さき、

鳥さひづる春の光近きより、遠きひ  
なの吾ともがらまで、供養する花を

かゝあつめたる中につくばひて、花  
にはあらぬ言の葉をしきものとす

ものは、能登の国の楽斎 歩鶴  
文政庚寅の暮春

花供養集

提て居る桜ちり行舞台哉  
手斧遣ひの昼霞む谷

築竹を春のうちから見集て  
かは崑蕪を振うりに出す

虎落場にかりる尻地の細長き

芳英 蒼虬 田美 梅通 杜蓼

野分のあともつよき蚊の声

鞠蹴の揃ふて帰る宵の月  
佃の粉をほめて手にとる

二挺前吹革の役も立らる、  
余所の門まで朝水を打

勿返る海老雑魚籠へひろひ込  
つんぼりと鳴る田の中の鐘

呼かける伊賀の飛脚の愛相よく  
つくねて投る上張の煤

陶板の雪もみえ出す夜明前  
時々人の住かはる庵

柴橋の普請も迫る月のころ  
わたる小鳥の多き照年

間炊を芋茎膾で呼れけり  
きのふの怪我を仰山にいふ

花曇り素足で歩行供の衆  
つなぐもろこの夕暮る、色

社家領もはるの間は町めきて  
砂路の溝の不断埋る

右 百員一順下略

文政十三寅年花供養會  
川音も夜はたのもしき桜かな

雑菜そろえに居る台処  
今参り先呼なれし名に替て

馬衣ばかりが新しうなる  
藍玉の直立もなをる月の前

歩行たあとのやける霧吹  
右 歌仙表下略

義道 月峰 あふむ 千崖 倍李 倍美 羅閑 岐石 蕉夢 金菜 月踞 后嵐 兆三 几乙 土鳥 貨僕 言来 以都美 祖郷

(一オ)

(二ウ)

(二オ)

(二ウ)

鶯や草にはおりぬ身のかまへ ナニハ 鶯雪

老木とはつい気のかず初桜 自楽  
三日月のか、れば動く柳かな 庵女

春中になき天気なり遅桜 一肖  
水汲に出ては隙とる柳かな 幽草

檜鳥のぬれ羽つくるふさくら哉 素明  
出直して花を見歩行月夜哉 露州

雁鴨の泥首揚る霞かな 松子  
君が代や藤柄さして畠うち 素羅

わけなしに兎が引て来る小松哉 夏口  
山際は少し曇りて鳴雲雀 世涼

青柳やむすばれさうな向同士 巨流  
一ぺんも大水しらぬやなぎ哉 燕子

年玉や雇れ供の門ちがひ 巴石  
残月のかたはらに出て鳴雲雀 梅圃

草の戸の埒なき椿咲にけり 松隣  
うつぶせてあるや雫も霞む桶 蟻兄

水はやし雉子あらはる、遠堤 公路  
鶯や世に美しき米ぶくる 井眉

初桜尾上の麦簞掘に出て 奇淵  
紅梅を目当につもる作事哉 兵庫 墨巢

去年から大工つかひや赤椿 堺 此方  
人中へ持出されけり蓼 全

凍どけや雨戸の明た岨の寺 檐鷗  
ちる花を魚の口より吐にけり 河内星田 魯秋

しばらくは粧ふ雲や春の山 イガ上野 燕市

万歳や堤を通る高あしだ 蒼虬  
雪解の竹のはねかへる朝 イセ 文外

鮑うつ槌に霞のひろがりて 萩埜

(四オ)

(三ウ)

(四オ)

焚火の上をまたぐ戸の口

月影に貌ふる馬を引まはし

湖汲で秋風を見る

右歌仙表

背中から陽炎立て池の亀

見るとびにふりの付たる柳哉

出歩行ば出ありくほどの桜哉

董咲うへともいはず杉丸太

花を折かけて拭ふや手の油

行雁や枕もあげず二日酔

寝るひまの出来て柳のしだけけり

つ、ぱりのよくきく家や花の奥

茎桶の臭もぬけたり梅の花

遊び気のしまらぬ月の朧哉

陽炎や廊下伝ひし猫の跡

花盛りつね気のつかぬ屋敷哉

門内や月夜の外の花明り

暮の雉子田づら隔て鳴かはす

居しづまる鶯やがて高音かな

来る人に水汲するや桃の花

木がくれて啼や涅槃の花に鳥

降雨の約束らしや木の芽時

けなげさを聞すまじけり初蛙

里の子の居り習ふや雑煮箸

蛙聞顔つ、まぬはなかりけり

雲淡く湖広し春の月

桜見と花見とひとのふた心

鴻の巢も見透す春の月夜哉

行蝶にとゝかぬ牛の歩行哉

四溪

在瀨

千崖

伊勢津 久世

松阪 いはほ

山田 潮花

、 菊所

、 鶯丘

、 在瀨

、 文外

、 萩埜

、 四溪

、 梧青

、 鶴郊

、 黄山

、 旭松

、 梅間

、 葛居

、 和潮

、 卓池

、 南畝

、 陽坡

、 何丸

、 抱儀

、 鶯溪女

、 桃磯

、 公石

、 兎仙

(四ウ)

(五オ)

(五ウ)

松かげへ吹なぐれ行雲雀哉

行雁や枕がへしの夢の中

むつまじう空と、なふて梅の花

春の雪梅のちるかとみやりけり

掘立の家にも安き乙鳥かな

蟹の子の元腹したる汐干哉

ふいと出て雲の邪魔するひばり哉

花曇りするや鏡のおもてまで

ちる花の雪よりしげし隅田川

笠ふせたやうな小山や雉子の声

花咲て常になりたる曇り哉

栢の木はうへかはりけり山椿

散たためてこぼる、花や岩の端

花の夜や撫て冷つく膝がしら

眼にあかで暮るまでつむ若菜哉

家中衆のせまき出口や花大根

宿とれば庭に樹もあり春の月

雨はれて風やんで後に海苔のよる

山人の白足袋しろし梅の花

鶯に手軽き朝の茶漬かな

たつしほの暮てもつかぬ桜かな

餅引や宵の鼠も春の音

情売る里にもた、く齋かな

草庵に桐のはへて二葉なりしも

はやみとせとなりぬ。彼許子が

三年にして大木に幅する木あり、

油断すべからず、とのいましめ、今

おもひあたれり

桐の芽や二葉おもへば斧が入

、 兎丸

、 双魚

、 夢梅

、 麦雨

、 以兮

、 丁癸

、 子寅

、 弧村

、 のぶ女

、 貞女

、 応声

、 丁知

、 溪斎

、 長成

、 素心

、 星溪

、 幻夢

、 八木

、 如水

、 成菌

、 四明

、 青黎

、 柳至

(七オ)

かはらぬ顔を見せる乙鳥

長閑さはた、らに遣ふ水分て

何やら辻子に人だかりする

関札に門のふさがる宵の月

洗ひ上たる酒の元米

右歌仙表

どういふてよからぞ花の散木の間

消行や桜にさはる宵の雲

咲をまてば七日目になりぬ山桜

蝶鳥もひまなき花のひがし山

野の桜見たなりにして戻りけり

花の夜やどこやらにする雷の音

仁和寺にて

覗く処の多き御室の桜かな

柴刈の通りぬけけり花の山

語られぬ夜明の味や山ざくら

桜ほど有て久しく待せけり

人違ひしてもとがめぬさくら哉

ちる花を掃よせて置垣根かな

格別によき日を花の曇り哉

花に行人数よむやはしの銭

静さや適の戦に花の露

日南くさきむしろ畳むや花盛

眠れとて鳴出す宵の蛙かな

戸口さすおとあり花の夕明り

花に来て声のきたなき鴉哉

宿とりの先へはしるや夕霞

物貫ふ度にへらすやはつ桜

大寺の灰買に行はる日哉

、 夙也

、 千崖

、 童

、 也

、 筆

、 舒六

、 其暁

、 成章

、 麦洋

、 一居

、 田美

、 乙都留

、 麦村

、 平冲

、 ノ田 龍山

、 万木 北馬

、 南一 並翠

、 辻沢 来志

、 川鹿

、 高島 舍羅

、 松靄

、 宗石

、 楚蕉

、 梶彦

、 月彦

、 錦水

、 嵐木

、 嵐木

(七ウ)

(八オ)

(九ウ)

西日にも深入するや花の山、嶺月  
うめて置風呂の加減や夕霞、楚丈  
月かげや春もひとしほ梅の花、白ヒゲ 自笑  
首すぢへ雫しにけり初桜、ハマン 春躬  
白梅や正月中の筒の花、升明  
磨水の上澄したる余寒かな、寛楊  
明ほの、桜にはやき戸口かな、芦州  
嵯峨御室日和ながらの花曇、嵐洞  
三日月の花に入けりあらし山、白哉  
月影やいたづらにちる山ざくら、太令  
【校異】白鹿本、作者名「天令」。

高くと一本咲ぬおそざくら、浅小井 鳥都雄  
花の暮つ、じも提て戻りけり、安土 秋月  
梅咲や踏かためたる畠の土、豊浦 花遊  
降音の一日おなじ春の雨、嵐山  
たとへにもならぬ桜の盛り哉、辻村 星嶺  
湯だて場に残るけぶりや春の月、町ヤ 半丈  
握らる、だけ梅折てもらひけり、有慶  
涅槃会や人に習ふて藁草履、金堂 負米 (一〇オ)  
あながちに降にもあらず花の雨、<sup>コボシ</sup>亀楽  
出て見るも十歩の空や梅の月、葛巻 里童  
つらくと月日のみゆる柳かな、七里 巴兆  
かぞゆれば降日の多き桜かな、日ノ 士明  
冴返る春に逢ひしよ鮒鱈、和月  
珠数くりにわざく、出たり梅のもと、仁正寺 一嘯  
若草や馬の嘶く宇都の山、<sup>飛驒高山</sup> 曉夢  
黄鳥の先へ廻りて二声め、有美  
傾城の素顔も見るや山桜、万里 (一〇ウ)  
曙や山のはしど、帰る雁、曾慶  
出這入の邪魔にもならぬ柳哉、如松

鶯や若草の戸はひるばかり、三友  
見くらせば鳥も宿かる桜かな、<sup>信州上清内路</sup> 素風  
藪かげも在所ありてや紙鳶、六川 白兔  
類杖に折くとゞく梅の馨、<sup>信州</sup> 巖松  
菜の花の照り合せけり渡り川、肝洗  
山吹や瀧に消る、ものがたり、<sup>上毛イセ崎</sup> 紅碩  
降までの雨を油断の花見かな、<sup>赤堀</sup> 丹頂 (二一オ)  
まことしき春の遊びや小松曳、<sup>下毛</sup> みち雄  
藪入の二人はいるや向ふ側、<sup>オク南部盛岡</sup> 卓堂  
鶯にはきちぎりたる木の問哉、<sup>田名部</sup> 一毛  
庵の戸のひん曲りたる雪解哉、<sup>二本松</sup> 文骨  
人の気のしづまり口やちる桜、<sup>会津</sup> 香雪  
はき飛す鯛の鱗や春の水、<sup>金塘</sup>  
背戸あれば我齋ほど青みけり、<sup>万拙</sup>  
野の梅やをれば腕に響きける、<sup>苔経</sup>  
燕や爺が小みせのわら草履、<sup>蘭山</sup>  
三月の空におし出す山の雲、<sup>坦然</sup>  
春風や貝吹ならふ小山伏、<sup>仙羽</sup>  
元日やさし出顔なる梅の花、<sup>静花</sup>  
立されば又匂ひけり門の梅、<sup>魚守</sup>  
人みえてひるも散也嵯峨の花、<sup>出羽アキタ</sup> 御風  
散花の松にひつ、く名残かな、<sup>湊宗三</sup>  
いつまでも霞ませたいぞ磯の松、<sup>越前丸岡</sup> 友圃  
ちる花に初手は驚く驚かな、<sup>ツルガ</sup> 如積  
朝の山見るや霞の出来不出来、<sup>月砂</sup> (二二オ)  
手を組てしばらく居る桜哉、<sup>カ、</sup> 文章  
斧はかりても長閑なる谷、<sup>一雄</sup>  
こもにまく干鱈四五枚塩はいて、<sup>太甫</sup>  
あちこち人のまたぐ水繩、<sup>立介</sup>

ばちくと蕎麦殻燃る暮の月、<sup>超翠</sup>  
湖水を背戸に雁の早来る、<sup>一斗</sup>  
綿時に地子をせはしう取立て、<sup>晴霞</sup>  
当座の風邪をかき高にいふ、<sup>其麦</sup> (二二ウ)  
膝へのる猫を手あらく払ひ退ヶ、<sup>春浦</sup>  
帷子かして汗嗅くなる、<sup>知雪</sup>  
火をとりて芦へ押しこむ涼み船、<sup>草</sup>  
ひくても垣はしまりよき所、<sup>介</sup>  
ぼつくさと月のさすまで習ふ経、<sup>浦</sup>  
膳まつうちに夜寒覚ゆる、<sup>斗</sup>  
仕わけして松茸籠にかざる也、<sup>翠</sup>  
矢立の墨の裾へなだる、<sup>翠</sup>  
うかくと土橋ふみかく花の空、<sup>麦</sup> (二三オ)  
ひるからさきの長き日のあし、<sup>霞</sup>  
巢立してついても行ぬ鳥の子、<sup>雪</sup>  
店も手厚に見ゆる薬種屋、<sup>浦</sup>  
聾方はみな参宮を済されし、<sup>草</sup>  
ひとつになつて乳母もさ、やく、<sup>雄</sup>  
ひとつになつて乳母もさ、やく、<sup>雄</sup>  
納豆汁のあとを洗はず返す鍋、<sup>浦</sup>  
ごそくと暮につよき木がらし、<sup>介</sup>  
惣井戸の鍵を預かる角の家、<sup>翠</sup>  
いつも袴で出らる、爺、<sup>斗</sup> (二三ウ)  
あれこれと市の鉢木の値を聞いて、<sup>霞</sup>  
跡からふえる月のまかなひ、<sup>麦</sup>  
蜻蛉の来ては行灯の灯にさはり、<sup>浦</sup>  
縄なふ処は下冷のする、<sup>雪</sup>  
竿竹でかたよる丸太つき流し、<sup>雄</sup>  
臂で背中へまはす脇差、<sup>草</sup>  
茸たての屋根に一雨小気味よき、<sup>介</sup>  
茎をくはへてはいるつばくら、<sup>浦</sup>

朝の間は花に見知らぬ顔ばかり

斗 (一四オ)

門畑までも仕舞ふ藍蒔

翠

右歌仙行

長閑さや戸口くしの捨草履

金沢 満美

一年の愛相に折る庵の梅

淇翠

折て来て捨た椿ぞ朝の門

其麦

更てから木影の出来る春の月

文章

文箱へまげて入たる柳かな

太甫

花ばかり掃ずに居るむしろ哉

立介

客僧の足にしたがふ花見かな

年緒 (一四ウ)

はる風や駕からもらふたばこの火、

超翠

一あかり梅に返すや虹のあと

錦石

手の皺をひとり詠て春の月

商齋

先くくの蛙に長き堤かな

秋平

春もまだ寒し垣根の玉子殻

年風

霞こんでどちへもゆれぬ野藪哉

黄年

山水ですむかいわいや梅の花

可杏

呉てやるあとも折るや梅の花

左翠

入船の波のうねりやゆふ霞

蘭窓 (一五オ)

人の来て日くくに広げぬ春の草

梅十

牛ひきの間をつうと行雲雀

逸亀

鶯やしきりにほしき人の藪

柳士

うぐひすのひよつと出たる木の間哉、少年

柳更

長閑さやむしろのうへの獅子頭

素文

牛の子の値入も出来ておそ桜

鳳中

鶯に追付て行田道かな

柏奚

ちる花を何にもせず詠めけり

固来

手あぶりのよく間にあひし花見哉

清由 (一五ウ)

橋どめの縄張をとく柳かな

棹江

葩煎なども栄耀買する花見哉

宇牧

染たてを着揃ふて出る花見哉

晴霞

一処で暮て仕舞ふや桜がり

可陸

詠居てくる、もしらず山ざくら

月雄

葦だけまはつておりの小坂哉

一雄

乗物のつきすえてある柳かな

松呼

湯あがりのま、にむかふや夕桜

宮腰 亀果

鶴が舞ふとて人の退く桜かな

大正寺 呼亭 (一六オ)

長閑さやはしを伝ふて鐘の声

白葵

田の人のくはへさせるや藤の花

蜂舍

まだ奥の桜しらせよ山がらす

羽黄

手をついて渡る橋あり雉子声

葭流

【校異】白鹿本、作者名「葭塚」。

東蛙

山吹や流れの外のたまり水

白令

霞む日や鳩の来て踏垣根草

北園

腰かけるむしろがこひや春の風

木雄

【校異】白鹿本、作者名「此園」。

石羊 (一六ウ)

夕山や雲雀見て居る爺と婆々

丹嶺

春雨のざんざと降や鴨の上

山中 青介

宿引の昼も来て居る桜かな

李徑

朧夜やかすり鳴する巢の鳥等

免三

正月も事なふ立てうめのはな

似翠

手の皺ものびるやうなり春の水

李之

生壁に蝶よりつかぬ花の空

鶯々

十分に春をもてなす椿かな

石兄

をるやいな馬の荷にさす桜哉

秋心 (一七オ)

猫の啼あとから霞む隣かな

蘭溪

梅が香のうしろは垣の雫哉

如松

みよしのは広いもの也花の比

はる雨や藁打はたのちよろく火

世の中は育ちやすけれ雀の子

七尾 楽斎

田にぬくみ持や霞の離れ際

ゆみ女

小大工も無事な顔して花見哉

西垞

尾を立て飛や余寒の斥鷃

六更

籠の鮒背鱔動す余寒かな

竹塙

ちる花に置処なき行灯哉

半江

夜更るや高き所に猫の恋

柳枝 (一七ウ)

大声や小声や小田に啼蛙

見盃

鶯の来鳴や森の朝神楽

東籬

笠取て置したよりも啼蛙

梅明

休み日に馬場の柳の雫かな

魯峰

煙たつ上にひらく啼雲雀

可成

出代や宵にして置暇乞

魯川

満月の在所の中や猫の恋

古雀

雪もけふ踏ちからなき梅の花

ノトベ 真舟 (一八オ)

花やある小路も人の往来する

二ノ宮 蘭秀

猪を追ふ山のちかさや梅の花

武部 北鼎

杖はまだ袖のうちなり梅の花

迎月

咲までの桜を人の捨にけり

八幡 巴木

厨子の戸の明であるなり散る桜

花溪

何心なくも出て来るはるの山

皆月 路月

浦の灯はともりてあるよ八重霞

越中高岡 麦車

ちるからはよし野もちれよ山桜

烏翁

日も赤うなりて入けり花の山

富山 葦村

鶏のみすくふえて桃の花

凡丈 (一八ウ)

人なみに衣紋つくらふ余寒哉

木司

鶯のいきりもせぬや谷の中

あふむ

折た桜寺にあづけて遊びけり

石甫

裏口や山吹咲てふね下す

宇井

水のわく寮や桜のもらひだめ

福ノ 伯芝

鶯や今ごろ節もかはるやら 全  
 杉柏おされくゝに霞みけり 栢浪  
 付木火ではきもの直す花見哉 全  
 朝霞菜籠の雫落にけり 半戈 (一九オ)  
 追分でちよと見た人や梅の花 全  
 召替の馬も出て行桜かな 麟年  
 菜の花や今来たやうな裸足跡 砺山  
 うつた網花だらけにて上りけり 全  
 桃咲や時計がようて酔過す 全  
 貝がらに水たまりけり花の朝 吉久 保久亭  
 鶯の今朝は鳴ふとおもふうち 滑川 百尔  
 嘉例にも桜をしるゝ山家哉 本郷 笠可  
 春の水物にまぎれず流れけり 〃 さちか (一九ウ)  
 つい晴る雨合点して揚雲雀 和泉 東川  
 梅が香やせまき二階の上り口 〃 仙果  
 手のひまや鶯籠を懸直し 福光 五丈  
 明たてに吹こむ花の埃り哉 殖生 亀毛  
 接木して気の立雨の一夜かな 岡村 桂阜  
 口もとへ星のうつりて啼蛙 伏木 一涛  
 友誘ふやうすもみえず鳴雲雀 今石動 魯由  
 桃咲や朝登りの船多し 〃 梅甫  
 野鴉を叱る声あり朝霞 〃 亀三 (二〇オ)  
 初午や出村の市の日が替る 〃 見推  
 古菰をはねよけたればつくくし 〃 校古  
 行雁やながめるうちにもさくなる 〃 桃由  
 鶯や椿ばかりの古やしき 〃 鶴衛  
 行義よう傘さして来る春の雪 〃 浦海  
 提灯でたばこのみ行野梅かな 福町 貫魚  
 休日の普請場へ来る乙鳥哉 〃 虎十  
 掃よせて見て居る花の別かな 〃 兎園

山吹に鱗はきこむ垣根哉 〃 丁斧 (二〇ウ)  
 糊こはき襟まだ寒し梅の花 〃 芝丘  
 雛の間や灯す付木の香が残る 〃 魯紫  
 鶯の餅つゞきや野の清水 越後イト井川 鬼哭  
 谷の雉子餅の先へ走りけり 〃 種雄  
 昼も啼蛙はあれか江の濁り 〃 宜雨  
 墨繩に残る余寒の入り哉 〃 三代彦  
 しら梅に月夜は榮耀過にけり 〃 一常  
 行春の山の朝隈見て居たり 〃 三甫  
 うかく踏込水や初ざくら 〃 有柳 (二一オ)  
 青柳や呼び起さるゝ舟の人 〃 白乎  
 初花に水引入る田一枚 〃 学二  
 うめが香に覚束なくも月夜哉 〃 鳳吹  
 川除にいつかさしたる柳かな 〃 素考  
 たうく月は残りて雉子の声 〃 其誠  
 朝見ても草臥の出る藤の花 〃 宜春  
 啞でなし祖父が自慢の桃の花 〃 文鶴  
 春の月わらべしうなるこゝろ持 〃 師三  
 なの花や隣の祖父もする軒 〃 士宝 (二二ウ)  
 台所など、杭打花見かな 〃 蝨々舎 曳尾  
 うしろ向むき花の戸口哉 〃 見附駅 北洋  
 一構ある鶯の山家かな 〃 岡野町 董水  
 二階から見古す山や残る雪 〃 龜石  
 道ひとつへだて、雨の柳哉 〃 高田 甫時雨  
 梅比や少しも見えぬ池の塵 上十日市 守白  
 尻がるに小用も聞や花の空 丹波シノ村 蕉夢  
 手一ぱい摘で舟まつ蓬かな 〃 山本 其朴  
 水の手を見に戻りけり花の中 〃 雪童 (二三オ)  
 つゝと来て扇子ならずや花の前 〃 カメ山 野楊  
 うれ残る中に翌日咲椿かな 〃 保ッ 烏舟

ひはふはと埃りの多き柳哉 須知 俵瓜  
 中庭やはつかながらに竹の秋 サ、山田城  
 松に日のうらくとして散桜 〃 冠雪  
 四五人になりて花ちる夕かな 〃 大山 武陵  
 どつさり真向に花の月夜哉 〃 古佐 兎秋  
 心よう日は暮にけり花の山 〃 有隣  
 幕串を配るや梅の月に日に 〃 歎之 (二三ウ)  
 飯時もあるに一日啼ひばり 〃 丹後田辺 杜雪  
 貧乏もなく出て董摘にけり 〃 瓜青  
 春の風よけい聞たし松の陰 〃 巡孝  
 牛馬の顔も長閑や丹波口 〃 笹雄  
 石川の明りへ出たり椿道 〃 官津 馬良  
 歎遣ひはかりても野は霞けり 〃 万籟  
 石一つなき街道の柳かな 〃 柳絮  
 海遠く月朧なり松の隙 但馬二方チハラ 月波  
 あだにちるものともみえず夜の花 〃 広居 (二三オ)  
 松越にさくら散来る麓哉 〃 〃  
 山吹や戸口替たる草の庵 〃 〃  
 春雨やわり木の匂ふ草の宿 〃 浜坂 素六  
 寝たければ長くとねる胡蝶哉 〃 因幡 浅掲  
 折ふとはおもはざりしに岸の梅 伯耆流江 雪江  
 雨近うなるや木の芽の夕明り 石見銀山 古園  
 青柳をぬけて又ある漁村哉 〃 矢上 梨雪  
 遠山や巢の蜂かはるゝ行 〃 森俊  
 隣にも灯をさし出すや梅の花 〃 黙々 (二三ウ)

【校異】白鹿本、竹冷本共に、二四丁が落丁。但し、柱

刻の誤りの可能性もある。因みに、麗澤本、石

川歴博本も同様。

霞む夜とおもひ初るや鶴の声  
遊び人の二度も渡りて春の水  
夜の明るおとや余寒の水車  
客立てしばらく寒し春の月  
花近く来て折こゝろ失にけり  
麦によき雨といふなり花盛り  
居風呂の加減もよくて夕柳  
雉子啼や木の芽ふくれん其度に  
両方に池ある道や木瓜の花  
飲水にこぼるゝ花の明りかな  
盛りかともる間に落る椿哉  
鶯や人手にかけぬ朝掃除  
瀬の音の不断になりて梅に月  
紅梅や人付合のよき御寺  
鉄気田でとりまく家の余寒哉  
藪の梅見せて返すや状使ひ  
折口もみせぬ桜のさかり哉  
鶯の立かまへして啼にけり  
乞食の煙りを立る彼岸哉  
暮るゝともしらずくりと花に人  
せなの子をおろせば華こはれけり  
今暮る鐘の聞ゆる桜かな  
如月の初夜や雁の啼戻る  
小社の夜を有明て藤の花  
引鶴や夕日の残る峰の松  
如月も月夜となれば閑なり  
明る戸に先鶯の初音哉  
城下まで一筋道や鳴雲雀  
初花に橋踏直し渡りけり  
大鳥の羽音もするや八重霞

、 菊雄  
、 蒼阜  
、 万丸  
、 露庵  
、 節之  
、 五芳  
、 其曉  
、 樵風  
、 草々  
、 六英  
、 古谷  
、 山田  
、 琴止  
、 寄峰  
、 曾夢  
、 茶田  
、 千尋  
、 澄月  
、 騎龍  
、 羽霓  
、 太六  
、 白麟  
、 全  
、 蕉雨  
、 一蕉  
、 焗沸  
、 青塙  
、 塘雨  
、 応雅  
、 三原  
、 あや輔

夕かすむ中やひと声浦の松  
花盛り曙しらぬ山家かな  
曉はふるき響きや御忌の鐘  
花ちるや尋に来る落しもの  
菜の花や野越山越眼のだるき  
都に春を迎へて  
明行や桜を右に四方の春  
下枝は踏道ならぬつばきかな  
蝶の羽に初雷の響き哉  
昼の月雲雀の背中に隠れけり  
江の上や思ひのまゝに梅の花  
池水のゆれくくたる雉の声  
紅梅や捨鶏諷ふ塀の上  
只ひとつ古溝に啼蛙かな  
夕鶯の晴口見たり山桜  
山水に濁りのつくや雉の声  
花の陰出れば無縁の人もなし  
ひつそりとして日の暮ぬ春の湖  
山吹や笥の残る家のあと  
毎日の鶯遠し池の面  
花の香やふけて火を焚台所  
傘のかげさすや蛙の啼田づら  
花こゝろ田に一ぱいの水が来て  
雨過やみなになりたる春の雁  
雀等も一手にかすむ小藪哉  
菜の花やあぶら日和の気草臥  
夕朝の来て花になる水田かな  
寝返れば磯の香近し春の月  
人跡に居てよく見ゆる桜哉  
うぐひすの口にもあふや京の水

アキ木谷 其月  
、 其玉  
、 積水  
、 三津  
、 左来  
、 玉桐  
、 廣島  
、 野雨  
、 阿道  
、 逸仙  
、 文俗  
、 可章  
、 李徑  
、 青乙  
、 一秀  
、 雪鼠  
、 梅子  
、 青柯  
、 樗秀  
、 其岳  
、 今是  
、 松涛  
、 羅雄  
、 峨月  
、 白鳥  
、 李上  
、 丸亀  
、 茂椎  
、 夢蝶  
、 素亭  
、 月叟  
、 市橋

帰る時山の名を問ふ汐干かな  
桃の花小枝投こむとなり船  
草臥たこぶしのはるや隴月  
腹のたつやうに聞ゆる蛙かな  
咲てからみなかたぶくや江の桜  
赤土の手につく日なり花曇  
下駄提て野道廻るや鳴蛙  
蛤の口に戻るやまつの風  
鶯の山路はなれて初音哉  
故里のけしきわすれぬ柳哉  
空晴て人を動かす桜かな  
ひつそふて更る計ぞ月と梅  
山吹の水に暮けり二日月  
しみついてあるや若菜に塵一つ  
一曇りうけて啼出す蛙かな  
もの問によれば客あり桃の花  
瀧しぶきうけて花もつ椿哉  
木瓜の花をる気になれば赤過る  
毎日の花にしづまるあらし哉  
星一つ見て落付ぬはなの空  
つばくらや夜は明て行小田の注連  
鳥と我が中よき朝の椿哉  
おほやうにあるじ見て居る桜哉  
ありたけの傘に降也春の雨  
長閑なる空や来る鳥いぬる鳥  
若草にはやちらかりぬ糖埃り  
梅を見て戻る余寒や二日月  
日の落るはしの一木や桃の花  
山間やよき家みえてはるの月  
暮る日に蝶のきげんの余りけり

、 文昇  
、 槐庵  
、 吉田  
、 和融  
、 蟾居  
、 大洲  
、 木兄  
、 月村  
、 后来  
、 素彩  
、 帘丈  
、 燕九  
、 蘿山  
、 壺堂  
、 鸞斎  
、 円外  
、 柏年  
、 蒼蝶  
、 桑戸  
、 一行  
、 稼暁  
、 新谷  
、 鳩台  
、 田波  
、 喜木  
、 雨巢  
、 今治  
、 素橋  
、 重厓  
、 筑前  
、 蓼袋  
、 夏椎  
、 鶴池  
、 五涼

(二八ウ)

(二五オ)

(二六ウ)

(二七オ)

(二五ウ)

(二九オ)

(二九ウ)

雨と見て人の来る也夜の花、藻真  
 突おろす舟のうしろや雉の声、蕪園  
 海道の山から見える霞みかな、梅光  
 寝ごゝろにあて、もみたり初桜、文里  
 椎の木の中みて置桜かな、器洋  
 家建る下地も久し啼蛙、南高  
 鳥さしの城下はなれず春の雪、福岡 斗丈  
 立しほに結ぶや花の下流れ、士鳥  
 青柳をくゞるまでなり別座敷、月平  
 錠さすや花見に出たる田舎家、甫六  
 人に付て渡る花見の小橋哉、宇逸  
 貝はかる門の冷たき二月かな、蛙堂  
 長き日に草臥て降小雨哉、乙牛  
 灯火の有明寒き雪解かな、臥山  
 花の夜の明方光る野水哉、野竹  
 松かけはたしかにみえて春の月、待我  
 鞍壺にぬくもり付や雉子の声、秋月 喀然  
 庭に散る桜や鯛も一夜塩、黒崎 不山 (三〇ウ)  
 庭しく日もまだ出来ず梅の花、姫浜 貫士  
 茶たばこに栄耀の付や春の雨、小竹 立沙  
 川入の馬牽むける柳かな、対山  
 鶯や雑木交りの竹の中、香袋 友董  
 ひとり居れば明る過けり留主の花、博多 松二  
 其中にしづまる声や朝蛙、南礎  
 春の夜やもの音もなき壁隣、ケントウ 遅梅  
 雉子の声宮の灯はまだ消もせず、木屋瀬 若拙  
 ゆるき日の中を這出る田螺かな、赤間 香輔 (三二オ)  
 夢のあと案に違はずなく蛙、筑後クルメ 幻化  
 花の陰小声になりて人の居る、与山  
 又ひとつこゝろの塵の接木哉、豊前小倉 木父

啜つきに付ていそぐや花の道、鳳左  
 花に来てか、れば雲のみな白し、松風  
 畑打を見ておもたがる小袖哉、木齋  
 花を踏ときは短し鳥の脚、可推  
 咲花にあやにく多き寝鳥哉、里水  
 草麦の露打つけの朝日かな、素瀬 (三一ウ)  
 此あたり花踏わけて啼蛙、猪藤 蘇永  
 鶯の初音を雨にぬらしけり、仙里  
 人の来る日とはなりけり初桜、紫川  
 青柳のうごきしまへば月夜哉、三更  
 梅あれば家あり山の裾づたひ、水崎 月虚  
 鐘ひとつ二つはまたで四方の春、ブンゴ日田 一樵  
 老の身や花くたびれの七日過ぐ、雨芳  
 筋違にかぶる衾や桜の夜、葦州  
 近くと曙うごく桜かな、桃紅 (三三オ)  
 鶯や丸太を流す瀬の早さ、国東 花六  
 うぐひすの初音やたはむ竹の枝、玉骨  
 足袋脱で折にかゝるや梅の花、肥前大村 悠々  
 梟の啼声かえよはるの山、雪満  
 居合ぬく座敷の音や赤椿、素琴  
 鶯に少しゆるめて下り坂、静湖  
 松杉の中よりもちる桜かな、全  
 陸近く舟を漕けり桃の花、梅左  
 泊りには最ふほどもなし葦草、全 (三二ウ)  
 駕下りて細道行や梅の花、其青  
 鳥ひとつ見透すころや雉子の声、全  
 座敷から直に出立や蜩とり、小左  
 しつかりと行処もなし花の比、全  
 手を折れば柱にひゞく余寒哉、方庵  
 梅咲や寝勝手をいふ泊り客、全

雉子の来るときけば持たじ山の畑、柳阿  
 庭にとる水の自由や咲つゝじ、全  
 よい牛を飼ふ家並や藤の花、有両 (三三オ)  
 音のよい流れははなの咲処、平戸 龜年  
 花の香の雲をそゝぐや筏さし、朴山  
 桜からおし出して来る日和かな、紅袁  
 花のころ寝られぬ嵯峨の夜数哉、仙杖  
 朝の間に降仕舞ひけり春の雨、唐津 井畝  
 門の花又提灯の行どまる、天草 正焉  
 まだ寒き春よ野をこす雁の声、諫早 霞林  
 春雨や箕先にあふつ粟のむし、北岱  
 おもふ事の只もの猪て春の雨、詠婦 (三三ウ)  
 花の酒下戸といはる、人もなし、文洲  
 三月月のたのみもありてはつ桜、春里  
 捨し子は人となりけんうめの花、乙人  
 若草にしくものはなき小雨かな、古硯  
 正月やつかひ尽せし肴籠、之下  
 蛤が鳴て交すやおぼる月、白亀  
 ほろ酔て小道さがすや春の風、芦雪  
 世話しらぬ智が顔なり桃の花、素岡  
 とり付たまでに春めく月夜哉、史敬 (三四オ)  
 小流れをたのむ嫁菜の愛相哉、棠雨  
 雨漏のさはぎ紛れや帰る雁、長崎 甫旧  
 しらぬとし折て居る也山の梅、其映  
 白箸の乾くひまありはなに鳥、肥後クマ本 梅士  
 笠敷てつくくみたり花と水、龜梁  
 只ひとり花見る人のこゝろ哉、全  
 果もなき花よ霞の山つゞき、葉重  
 大空もせはしと咲や峰の花、全  
 人の来ぬ山里もがな夕ざくら、一瓢 (三四ウ)

霞みよりこぼす匂ひか花の露、柳雨  
 汐をおす力もなくて春の月、仙鶴  
 夕風やつれなき山の花しぐれ、女源  
 在明の気を引たてる桜かな、山路  
 土産にぬれて帰らん花の雨、松雨  
 門に鍵つるして出たり花の坊、硯水  
 夜の戸や人静まりて花匂ふ、唇風  
 ひや／＼と花にうつるや夜の瀧、露桂  
 有明の花に静けし月の暉、喃喃々 (三五オ)  
 花のかげ我かけ月にふりかはる、蘭叢  
 咲ぬ間の雨は嬉しき桜かな、杉里  
 桜売て帰るさくらのゆふべ哉、旭扇  
 戸もさ、ず寝て居て花のあるじぶり、珊瑚  
 夕暮の空に残るや風一つ、日向美々津 吟龍  
 夕ぐれや重こぼれし渡し舟、延岡 双鳥  
 黄鳥の声のうちなり岡の松、壹岐 文耕  
 青柳の今朝は届きし流れ哉、桃水  
 眠らふとしては董をたつ小蝶、女みや (三五ウ)  
 塵埃りしづまりやすき柳哉、梅舟  
 月朧なるや種撰綿の中、対馬 其雷  
 夜あらしの果を柳に残しけり、東指  
 旅籠屋の追立汁や朝の花、仲秀  
 ひそ／＼と誉る声あり鶏合、金菜  
 居並ぶとやがて立けり帰る雁、貨僕  
 山鳥の尾のしだり尾に花の宴、蘿閑  
 二三足草履もみえて春の月、鼠舌 (三六オ)  
 茶の下をもやして留主や花の春、世南  
 米磨だ濡手に蝶のとまりけり、十丈  
 雉の声十声に一度見るやみず、梅價

山吹や舟から揚る蔵の土、月峰  
 泣やめと子にさはらすや遅桜、百池  
 春雨やけふも寝て居る薪舟、羅浮  
 梅提てことしは早し礼戻り、凡鳥  
 物申はふるしつかりと花見客、女白絲  
 縄ばりを我手にとくや桃の花、杜萊 (三六ウ)  
 沼中や下りたつ鶴に初霞、女みを  
 松にみえ藪に見え日はいらぬ也、鹿川  
 山吹や足の埃りを落す処、路鳥  
 咲にけり今年の花の夕月夜、不調  
 見えるだけ二階は寒し山桜、在京 雪丸  
 落風を鏝ふりあげて教へけり、且齋  
 おもひ切て折てたしなし梅の花、サガ 寸楽  
 朝桜深山ご、ろにもどりけり、一楽  
 ひちまがり／＼けり春の水、文翠 (三七オ)  
 山間や二軒して見る梅の花、岱李  
 霞む日やむしろた、きし川向ひ、杜蓼  
 旅人のあとへまはるや朝ざくら、几乙  
 夜深さは花より落る雪哉、若雅  
 宿かさぬあはれも花の日数哉、兆三  
 ひつそふて友鶯のはつ音哉、芳英  
 起て行蝶や日のもる竹の中、梅通  
 若草や朝めしまでの一仕事、並隆  
 灯をいれて猶面白き桜哉、侘美 (三七ウ)  
 問れけり旅の事より花の事、言来  
 舟の酔さめてよりちる桜かな、以都美  
 足あぶる竈土のそこらも若菜哉、子竺  
 植屋のあと片付やなく蛙、洞睡  
 初花や何やら庵の小世話敷、梅笠  
 ぬり立た女きたなし山桜、芹舎

子雀や一日朝の声がする、全  
 行春をこまかに打や磯の浪、素山  
 苗代の幣に這よる田螺哉、恩古 (三八オ)  
 幹撫てまはるや花の戻りしま、李角  
 馬入は折れし梅のあたり哉、乙彦  
 山吹に油断の小鳥吹れけり、呉明  
 あとへ引やうな声あり春の雁、初六  
 うがひして気のあらたまる桜哉、蘇山  
 明る夜の蛙残るや田の四隅、祖郷  
 霞でも鴉にはまじらず都鳥、完和  
 山吹や暮かけて又色の出る、女とせ  
 草笛の声にまぎれて呼子鳥、其成 (三八ウ)  
 朝桜けふもめでたき雲の脚、土鳥  
 さし荷ふ植木も霞む城下哉、榛堂  
 人の来て匂はずなりぬ月の梅、夙也  
 嗽ぐ水もさくらは狩あてぬ、千崖  
 尻むけてめし喰ふふりも花見哉、蒼虬  
 かきもらしたれば爰に出ず  
 梅咲て工合の違ふ雨戸かな、甲斐 三石  
 影踏で月に驚くさくら哉、備前 蘭皐 (三九オ)  
 朧夜の松高うして山低し、イヨ今治 汝省  
 馬買ふて出れば柳の野風吹、郊馬  
 小松引鳥の古巢を見出しけり、烏朝  
 寝ご、ろや嘶のたえん松の内、円月  
 どんみりと虻の日和をつくりけり、石州浅り 一芦  
 蜂の巣や不性に伸る日陰草、尾ナゴヤ 雪居  
 みめぐりて座を失ひぬ花の陰、ミノ神戸 楚雀  
 【校異】白鹿本、三九ウは白紙。なお、麗澤本も同様。

日は低う見せて柳の夕ぐ、ろ 石州浜田 北麟

【校異】白鹿本、この一行に句はなく、「追加」とある。

なお、麗澤本も同様。

鶯や米喰ひ尽す庵の朝 奥盛岡五ノ戸 文喬

梅が香や朝精進といふ日から 序哉

明ほのにぬる、けしきぞ春の山、班和

松原につゞく流れやはるの月、蕉秀

ちら／＼と夜明をみせるつ、じ哉、三李

何処見ても風はないぞや土筆、車丈

噂して山を下りれば春の月、貫呂

帰りにばら／＼になる小鳥哉、班鳧 (四〇オ)

はな紙をみな出しかけて梅の花、青球

人声に夜は埋れし桜かな 肥前田代 五百衛

花のなき樹よりも淋し散桜、砂楽

うぐひすやかつ／＼鉢のもらひ米、都蓼

行空や花に三日の隙もなし、希石

三日月のをがみ処や薺さく、一桂

あればある此さびしみやつく／＼、梅調

温泉の島や寝るによき日の夕霞 越後庭月 誼老

門にまつ子もなし旅の夕桜、見付 万里 (四〇ウ)

つく／＼と浮木に乗りし蛙哉、蓬亭

酒持て人の見舞ふや夜の梅、村松 周詮

ちる花を埃りにた、く庭かな 加州金沢 白二

雑役の中へ落けりいかのぼり、扇路

星ひとつ峰に残りて雉の声 能州宇出津 桃幼

鶉近く見たり子の日の行戻り 豊後杵築 杜厚

行灯にかゝる薺の雫かな 筑前秋月 鶴史

聊なかげややけ野の二日月 周防白松 鼓吹

誘れて松を曳気に成にけり ハリマ新宮 鼓吹

花見んと宵から寝れば月夜哉、平津 其暁 (四一オ)

案内のある間梅みる戸口かな 丹州笹山 守豊

畑うちと向ひあはせの鴉かな、保津 梅庵

人の跡た、ひて居るさくら哉 摂伊丹 草方

をし鳥の一羽なかる、霞哉 大坂 鯉明

はたごやの埃りをかぶる柳哉 イセ津 団積

雪解の音やあかるき庭の内、麦村

下駄すげた泥手を拭ふ柳哉 近土山 虚白

鶯やひとつ大きく成し声、大の 月坡 (四一ウ)

摘といふ日にはたしなき薺哉、ハマン 夜外

けふはへたやうな気で摘若菜哉、舟木 磯海

青淵のひとつしほ青し花のひる、大ッ はる岑

今投た土器すぐに霞みけり、米友

霞みより出てかすみぬ塔ひとつ、蕙布

子供等がぬれ足で来る柳哉 イセ山田 外松

野鴉のうれしき声や花の春 フンゴ杵築領 花六

をる枝のなくて淋しき野梅哉 奥州会津 慶々

こぼれ雨までも霞むや東山 宇治 君波 (四二オ)

山で呉れた桜這入らぬ戸口哉 ハマン 嘉涼

広椽やひと風花を吹入る 乙雅

瓢箪は枕となりぬ花の陰 醉露

小社の古びみゆるや花盛 よう女

おもふだけ眼がとゝかぬや夕桜 南溪

【校異】白鹿本、当該丁はここまで、後の四句は無し。

なお、麗澤本も同様。

道へ出て歩行て居るや春の雁 ハマン 太令

万歳の卑下してすはる泊り哉 下総左原 桐雨

やぶ入の先おちつくや松の雨 兵庫 印南

折たやら梅こぼれけり堀の外 信楽 楓下 (四二ウ)

付録

立先の急度見られつ春の雁 江戸 八采

台処の向きにはをしき椿哉、得蕪

ゆり輪にもたまるやう也春の雨、幻芝

山風の間吹て春の風、麻交

はるの風近江の鮎のとゞきけり、有月

行人と来る人のある霞哉、万頃

昼喰に万才行や作場道 下総 小菘 (四三ウ)

たつぷりと夜汐の来るや梅の花、斗囿

歩行神つくや若菜にまた今年 長州下ノ関 岑磨

白はしもよこれ安さよ梅の花、益三

田におりる雁ひとつづ、霞みけり 東江州 南飛虎

風呂に居るうち慰むや巢の雀 尾ナゴヤ 夜白

行あまりゆき後れては花に雨 阿波 梅双 (四三オ)

京東洞院通

湖月堂  
御摺物所  
菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

26 天保三年『花供養』

底本 糸井本  
校異 石川歴博本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

手向の花の集れることいかでか  
かぞへ尽さん。今や咲たつ花のみ  
にはあらず。こと葉の花のさまぐ  
なるを像前にさゝげ、雅筵を  
まうけ、頓てさくら木にもものし、  
席上につらなる人々へおくらるれば、  
其枝葉天が下にひろがり、三尺の  
童子もけふを知るはまことに  
めでたき花の供養にぞありける  
天保三年壬辰晩春

(序一オ)

湖東 里童 里童

(序一ウ)

花供養集

猷立は梅よりかろき桜かな

麦洋

帰るふりなき門先の鶴

千崖

くんでおく蛇籠に夏のいそがれて

梅通

ことづけ物を胴忘れする

並隆

町並に少しひつこむ林あと

榛堂

荷鞍おろせば馬の嘶く

喜楓

用ひとつあすへ投やる暮の月

杜鷺

ちよつと焚てもしれる新わら

芹舎

雁風呂の相伴多き船の中

斗丈

(一オ)

類に咽のかはく若雨

其成

灯心も先からさきのおろし売

杜蓼

繕ひもなき岐阜のあいやけ

楓下

立ながら連夜の布施を包まる、

田美

今騒だはたしかあちむら

芳英

雪起し南でなるは珍らしく

梅價

吹革埃りの尻さましけり

十海

事箸の無益に長き月夜さし

月峰

後の雛の捌をか、さぬ

露光

啼もせぬ河鹿を飼に骨を折

蘿閑

膝の処のはげし立つけ

南溪

板敷へ吹こむ花も夥し

夙也

古巢に土をはこぶ乙鳥

倍美

都成りに坐頭の登る別霜

林曹

潜上いふてまづい物喰ふ

初六

雪隠と井戸の間が小一町

真齋

授戒のうちも絶ぬ見廻人

北洋

返事かく顔を鹿の子に覗れて

百池

襦袢の糊のたらぬ着ご、ろ

若雅

大部屋の盛相番が早まはり

一風

木曾で覚し疝気筋ばる

南岷

右 百員一順下略

天保三辰年

花供養会

散花にまじるや軒のこぼれ炭

よう女

芋かせの糊のくさき暖か

蒼虬

雨まへの雉子は洲先へ走り出て

並隆

小藪の中をとりやらす土

貨僕

ひつくるめ一荷にたらぬ古道具

烏都雄

(二ウ)

松葉の燗も長うこたえる

楚雀

わやくやと内輪ばかりの月見舟

兆三

盆からもまだ蚊柱がたつ

呉明

蔵あとはといと藜のから太り

芹舎

年たけるまで娘はなさぬ

克雄

縁のある最上の扶持も断りて

月峰

いつでも釣に出る岩はな

乙雅

前山は小松ばかりのすつくりと

倍美

箸を休めて足袋脱に立

月坡

吹革ふく隣のおともはし近き

夙也

最はや石部の馬を追出す

南溪

ひとあられ来さうな空の月細く

鶯雪

祝儀鱈うる店のちいさき

杜蓼

寺もどる子にもつれなう取合て

百池

けふは片づく転び木の枝

乙龍

鍋釜も損料がりの出開帳

榛堂

灰におとしてみえぬ豆板

初六

山ひとつ無理越したる日の永さ

几乙

つ、じしごきし手のほめく也

翁杖

初鮎に糠味噌汁をくひ覚え

草鳥

ちよつと小声できかす新内

杜鷺

紐ばかり安房にながき銭財布

喜楓

榎が伐て清水よくなる

とせ女

猷立は入院過ても張ておき

夜白

あと戻りして足の砂ふく

若雅

初蔵の先から犬に吼つかれ

梅價

何処とも鴨の渡り少なき

蘿閑

紙漉の無病な顔に月さして

十丈

干せのもどりし干瓢の屑

其独

からくんで野分をうける風呂のやね

素山

(四オ)

(三ウ)

二三日禰宜も留主とみえけり  
きつてある楠は次第に匂ひ立

言来 遊斎 道沖 (四ウ)

かいわいに人なし花のちる真午時 全  
始末してけふも折けり梅の花 兵庫 墨巢

何所もかも味噌摺立る花盛り  
往来の間は霞む杜家町 全

沖なりを聞も日暮のいそがしく  
うり場の酒を難いふてのむ

鴻洲 其成

酔て折梅七八分なくしけり  
花に夜を掛てあぶなき天気哉

真シの庭から子供等がすき  
八方の灯も初夜近くちろくと

かぎさけも今に直らぬ薄羽織  
用がなくても宮を見まはる

文翠 醉露

花の夜や鬼にもあはず往もどり  
組合ふて雛買ふてやる長屋哉

義理なき恋をふいと仕かゝる  
風邪引たふりして袈打かぶり

おそければおそい花ある都かな  
ひやくとなるまで花の木陰哉

鶯雪 庵女

土器の落る処や花のちる  
菜の花やあらぬ処にこぼれ咲

米搗形りのうとき立つけ  
衲まけについじだらくな朝手水

菜の花に魚荷の走る径かな  
心得て居ても気疎し雉子の声

橘子 菓翁

花ひと木持て寝られぬ月夜哉  
梅咲てそこらわらぐ畠かな

鎮守で庭の気味わるうなる  
下戸衆はぼつくと帰る月の雨

青柳も居眠る影も動きけり  
山里や落花にまはる一二丁

松隣 自楽

俳諧歌仙行  
近よればまばらになりぬ里の梅

穢多も砧を人並にうつ  
秋寒にかゝつて纏もすき上り

鶯の落す糞まで聞れけり  
参宮から喰覚えたる田螺哉

蟻兄 福米

嵩になる干鱈のそりをへしつけて  
鼻にかゝつた皆のものいひ

かし家一軒土間にして置  
御茶師はついと取引をする

人騒ぐ側遠退てはつ桜  
水ありとみえて光るや遠柳

松子 月桂

牛の子のひよこく通る宵の月  
大体にとる新綿の塵

けつくして花の遅速も手柄あり  
地虫の這ふてこそばゆき足

船頭の舟にも居らず春の月  
軽う来て鶯竹をたはめけり

眉岳 慮中

盆をしに戻りし尼を留置て  
しれた風呂呂日を感じるかいわい

いく先に妻こしらえて湯やの猫  
散てから深山になる桜かな

啼雉子にたぶらかさる、日和哉  
梅に月亭主たゞ今戻りけり

祇白 退歩

よい媒を又もことわり  
長梅雨に膝つき合す台司の間

中の洲へこして囉ふて摘若な哉  
海の果ありや木の芽に来る小鳥

ひそやかに物ほどこすや初桜  
吉野ざくら本坊にて

陽樹 幽草

おほきな菓子の残る高坏  
明である空にも諏訪の月冴て

鶯や隣へ出ばる枝になく  
なに事も花に捨ばやけふ一ト日

見おろしつみあげつ花の中舎り  
信貴山にて

ナニハ 草方

拳をつかむ鷹のいちもつ  
髪剃て居ても日雇を廻す也

うしろより月は出たり花の山  
汐風にかまはぬ梅のほび哉

飛出て牛にかゝる、かはづかな  
いふ事のなさにとし問ふ子日哉

太乙 鳴々

出代るまではちよつと親分  
右

サイキ 滄洲

(六オ)

(七オ)

(八ウ)

(九オ)

(六ウ)

(七ウ)

山里は宵から寝たり春の風 井内 可遊

観音へ駕す、めけり春の雨 江月

花の山笠はあみだにかぶりけり 相可 梅峨

乙鳥の落すや壁の枯ひらぎ 三正田 汲古

行雲のとりつく花の木の間哉 山田 蘭舟

静なる日をおちそめる椿哉 杉堂

茶を水にするや鶯きたる度 潮花

一月はちるにもかゝるつばき哉 尾張ナゴヤ 沙鷗

草臥た足でまたぐや風の糸 而后

鶯にそ、なかされて二三町 秋芦

向ひ合柳かれこれとゞきけり 梅裡

吹わりに飛されもせぬ胡蝶哉 宮 秀外

伸るほどかげにもならぬ柳哉 岩クラ 旭湖

木ぶりには過た花もつ椿かな 沓カケ 宜彦

菜種咲畠やさしや嵯峨の奥 三河 卓池

行灯をせがむ子供や松の内 赤守

燕やなま兵法のかるはづみ 三岳

草臥た夜も余所へ出る陸月哉 蓬宇

貸駕籠のけふも出尽す椿かな 青可

山の雪解るにしては水清し 流芝

囀るは鳥屋の鶯よ梅のはな 朱芳

咲時の来て咲にけり藪の梅 梅老 (一〇ウ)

土鳩の考へて居る接穂かな 水角

鋸の目をする門のかすみ哉 待亮

とりとめぬ宵の咄しや春の雪 梅岳

屋敷衆の遠慮して摘若菜哉 稲居

万歳を一番に越す渡しかな 松東

なの花や荷は連て行子のきげん 一応

是ほどの川を只越す彼岸哉 塞馬

送り荷の鶯啼やひる支度 南畝

柳まだ寒し田尻の囲ひ鮒 波文 (二一オ)

山焼や下りるばかりの間の宿 沙芹

敷もの、よごる、日なり春の風 甲斐 雷石

椽先や眠れ〜と蝶の飛ぶ 伊豆網代 守中

爰をれといふ節のつく蕨哉 エド 素志

持もの、かくも殖けり梅の花 大梅

道ばたの田舎木ぶりや梅の花 丁知

鶯や羽の雪ふるひ〜なく 麻交

山吹やうつら〜と咲おはる 有月

枝村へけぶりつゞくや夕柳 幻芝 (二一ウ)

かりて来た膳しらべるや梅の花 万頃

残る花ちり立際もなかりけり 得蕪

鶯やひと藪先にまた一羽 抱儀

押合ふて鴨のなくすや春寒み 茶静

屋根ありく猫にもかゝる霞哉 小圃

初桜日かげになつてみゆる也 禾葉

こゝろよき人をこのみて年男 畝古

鶯や盃事のそばでなく 八朶

うぐひすをのけてみれば枯木也 何丸 (二二オ)

ちつて来る花をうけるや檜笠 上総勝浦町 一晷

花守やしかる替りの咳払ひ 下総左原 桐雨

在家とはみえぬ椿の大構へ 比古

花の木をふやして見せる入日哉 小蓑

宵月や往に椿を折た処 斗圍

田の水のすみ口つくや啼雲雀 植房 梢山

三吟之俳諧

鳥渡した煙りを立て小松曳 蒼虬 (二二ウ)

吹れて雉子の歩行日の筋 烏都雄

舟へ出す鹿尾草に垣を転されて 榛堂

どれもはしたになりし酒樽 照る月にひとつで済すたばこ盆 ことしの作はすべて倍まし しばしりの溝まで這入る秋の汐 泊る手はづの違ふ播磨路 眼の星のとれし娘の仕合せさ いつの際でも絶ぬ飯喰ひ 縄網を素屋根の上へ引廻し むしやくしや合歡の生る芥場 入梅晴の月に又ふく不二南 郷人足の鼻へ洩る声 香水の筒をぶら〜首にかけ 釣針上げる明り邪魔する 全うに留主もしられぬ花の比 笹に霞む独活や人參 出代の小宿を頼む御室わき ぬれ手に付し水引の箔 飯橋もかなりにかゝる紋日前 いくつか年のしれぬ花売 肩あてのあとだけ縞の兀残り 履もの焦す餅搗の暮 めき〜と仕あげられたる木津の医者 植木畠へ唄がくへこむ 古萱をなぶりたてして困る也 大屋の葬の幡が出かゝる 朝月にまだ稻妻の止きらず 躍のあとの柿の喰さし 龜朶たけばひんすに成し下り窳 跟の腫に足を引ずる 店替の当座はものを置忘れ

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

雄 虬

箸から先へ付る膳立	雄	嫁の氣立を誉る内外	明	凍どけやぶらりと下る梅の繩	音羽 田美
花盛り取次するにかゝりはて	虬	日参もけふで上りの鬼子母神	堂	よく窓の煤けた家や梅の花	辻沢 来志
鳥は残らず巢放れの声	堂	ついと蔀の下りしから凍	虬	梅ちりて雨のたまるや屋敷尻	鹿志
右 歌仙行		遣ふだけ菜をぬいて来る有明に	明	寝のびする猫の背にちる桜かな	舟木 仙景
		せつかく飼ふた鶉斃けり	堂	一日は曲突もかるや花盛り	磯海
菜の花をめぐるや水の跡もどり	蒼虬	丁嚙に盆を勤る小道具屋	虬	船頭の手ばなかけ行柳かな	一駒
何処も簀を作る暖か	四明	ちよろ／＼引にひきしおし水	明	初桜田楽ぐしも青かりし	万木 北馬
蚕飼ふ家は八ツ茶の始りて	榛堂	つゝぱりをして見ぐるしき廊下口	堂	ちる時に人のよくみる桜かな	龜碩
額の煤を撫てひろげる	虬	花につぶりのとゞく陸尺	虬	みな梅の匂ひなりけり夜の曇	五十川 節外
錫挽の給銀わたる月の秋	明	ろく／＼に砂もふかせぬ蜆汁	明	きれ風になく越けり丸木橋	前野 秋杵
出さかり時のしれぬなめ茸	堂	雉子をきくには至極よい処	堂	用のある顔でつと行花見かな	川島 松月
紅葉から着る十徳も拵らへて	虬	右 歌仙行		籠提て余所の鶯聞にけり	隅井
身柱すえれば丁稚しくつく	明			草はまだしめりもなくて梅の花	綾彦
足跡の埃りにみゆる階子段	堂			おだやかに日の入みるや春の山	秋斎
遊び工合の違ふ墨染	虬			ちよつと裾からげて朝の桜かな	紫藤
手拭を繩により／＼立別れ	明			水のみに下りた所のさくら哉	桃屋
ひとかたまりに鴨の毛が散	堂			日の暮て人声ちらす桜かな	玉山
荷問屋の股火もゆるす暮の月	虬			長遊びすれば桜にちられけり	嗽石
隙さへあればなぶる朧目	明			風呂好のさがし歩行や夜の柳	海津 呂乙
内証で流るゝ質を買て置	堂			引ずるもしらで提行柳かな	土山 虚白
かゝえて出てはかし傘を干す	虬			羽子つくや人のをしゆる水溜り	石鼓
山吹も喜撰もきらず花盛り	明			掃よせの砂に肥たりつく／＼し	梅亭
噂ばかりでしらぬ積塔	堂			水かけてやるに逃るや雨蛙	月扁
若鮎も窓からつれる屋敷裏	虬			神の灯の二処三処夕柳	大の 月坡
朝めし前にかもへ往て来る	明			陽炎や鶏かきさがし／＼	仁正寺 一嘯
弟の世話で一枚着替へけり	堂			大駟聞える梅の朝戸哉	ヒノ 士明
はつか鼠がごもくからわく	虬			白水の不断ながるゝ柳かな	和月
建付も合ぬ本陣の勝手向	明			梅咲て富士遠のくや日本橋	葛巻 里童
丹波太郎のじり／＼とへる	堂			炭火ふくほどは風あり春の月	町家 芋丈
うつすりと加減の薬利そうに	虬			古葉など取ればそこにも春の水	女 桐寄

やつと手のとゞけばゆるる柳哉 七里 巳兆

辻ごとにまはつてあるや春の水 八マン 太令

入口で尻をすえるや花の山 四明 夜外

花に行道やしぶとい物囉ひ 寛楊

灯ともして初午土産ひろげけり 桃谷 (一九ウ)

落着に吐いきつきけり花の中 仙李

爛鍋の尻干花のあした哉 蝸堂

夜にいりて水音高し花の山 嘉涼

きのふから踏かためるや梅の下 白采

順寛なけぶり立けり春の山 白哉

ちる花や一曇りある嵐山 梅三

赤門の遠くみえけり花曇り 蘭月

更しとは誰もおもはず夜の花 和翠

初花や庭の掃除も日一ばい 芦洲 (二〇オ)

春寒や酒盛りみゆる土間の家 南峨

内中がみな客になる雛かな 浅小井 鳥都雄

戸をたて、夫婦出て行霞哉 一峰

ありあかし置いて寝にけり花の宿 江頭 花君

見過した日もなく花の散にけり 折まがる高椽寒し花の暮 ミノ神戸 楚雀

ぬけ道のとりつきにある椿哉 杉月

下駄ならず日和となりぬ梅花 大垣 梅翁

見てくらす人とはなりぬ花盛り 信州善光寺 武日

野も山も何やらゆかし朧月 上清内路村 素風

ひとひらの柴山みえて春の水 上野マヤハシ 嘯洞

佐渡山をみて来て遊ぶ小蝶哉 倉カノ 器水

行春の空にむけたる鏡かな 高サキ 之厚

きさらぎの中の十日や侘ごころ 福島 沙来

十団子に少しかゝりぬ夕霞 上毛 分尾

降かゝる雨も霞んで仕舞けり 奥州田名部 帆富

ちよつぱりと置たやうなり福寿草 南部 一毛

我こゝろ子供にかへる桜かな 脇ノ沢 貨泉

黄も白も秋にまかせん菊の苗 全 一遊 (二一オ)

馬の子を誉られにけり桃の花 安積山下 可都美

ぬるみしも人にくれけり庵の水 会津 一木

万歳にもどりの遅き使かな 魚守

畑の伸するかたや筑波やま 静花改 茂荆

しら魚や解んとおもふ手のぬくみ 香雪

月雪の紙衣やぬれて梅の花 南五ノ戸 青珠

家くゝの門から出るや春の風 班鳧

大鳥の飛空ひくし弥生尽 墨鷺

啼ひばり少しの雲にかくれけり 馬亭 (二二ウ)

宵月足もとくらき桜かな 車丈

冷やかに下行水や木の芽立 理和

堀越の松の黒さよ朧月 蕉秀

かも川の水澄ざるや御忌の鐘 廊哉

長閑さや舟の中なる雑菜屑 樗叟

若草や歩むにたらぬ庭ながら 子岬

水やにも頓て啼出す蛙かな 露桂

牛飼に大枝囉ふ桃の花 文喬

夜のくわつと明たやう也花の山 同八ノ戸 五楽 (二三オ)

雲動くともみえぬ日や揚雲雀 居眠

飛虫の三ツ四ツみえて梨子の花 一影

花鳥や人は器用に生れたき 志厚

八重咲やちるも間のある花盛り 常丸

此谷が一ヶ村なり桃のはな 杉田 英泉

駒鳥のめつたに啼や秋葉山 五陵

初午や野へ行ぬけの大王町 二本松 文骨

三日月の不足を啼か江の蛙 秋田ノ扇田 玉扇

夜は草の上から明るる弥生かな 歌長 (二三ウ)

わたくしに山の名呼て花の宿 出羽米沢 以文

さして来し留主の戸明る桜かな 若州西津 万里

囉ふ梅まかされて手のまよひけり 逸中更 巢雪

鶯の休みて居るや二つまで 女宇都み

人事は一日いはぬさくらかな 巴遊

朝寝する家きれいな春の雪 笠下

なの花や出張て見ゆる請酒屋 之道

鶯や氷の上に泥のさす 小浜 大郭

揚きつた風にかゝるや峰の雲 椎山 (二三オ)

漕舟のじりくゝ遠き霞かな 可楽

灯ともせば一段高し梅の花 越前丸岡 友圃

出て聞ば豆腐挽なり朧月 壺中

陽炎やものにこゝろの定まらず 意水

梅咲やしら波たて、渡る馬 カッ金沢 年風

三足めに飛や蛙の歩行下手 舞杖

窓の梅きせるをあげて折る指図 棹江

水荷ふ僧のめだつや花の影 素洞

向ふから梅は匂ふにまはり道 帛布 (二三ウ)

折る音に荅だ花もひらきけり 逸龜

寝にほこる人ぞにくれれ梅に月 扇路

灯ともして桜みる夜のくらす哉 馬丈

春の雨濁りもさゝぬながれかな 桂洲

若草や思ひのまゝに日の当る 可杏

折たれば葉がちにみゆる椿哉 柳更

廻り道するや家中の遅ざくら 素文

落風の詮義して居る小道哉 少年 茂竹

遊ぶ子の鈴がなる也ちる桜 白二 (二四オ)

何ぞげに折れば重たき桜哉 立介

菜の花や下り口しれぬ長縄手 完史

鶯や手傘すばめる路次の口 節斎

若草や家のうしろはきつね穴  
 折て来て道くへらす桜かな  
 僧脇の前をつと行つばめ哉  
 舟ひきの昼も邪魔がる柳哉  
 袖引て盃さすもさくらかな  
 のんびりとしたる花見の筵哉  
 馳走する袂に雛のこけ玉ふ  
 をりをしみては桜を廻りけり  
 寺へ来て帯しめ直す桜かな  
 肩に銭のせて見て居る桜哉  
 夕月や桜の中の虻の声  
 門口に水もはしるや梅の花  
 隣にも客あるふりのさくら哉  
 おもふよりもろくをれたる柳哉  
 菜の花や眼先にありて遠き宮  
 梅ありく見ながら暮る野間哉  
 寄かゝる柱も花のぬくみかな  
 土とりの来てはさはがす柳かな  
 少しづ、夢見残して春くれぬ  
 大名と見こむ齋の拍子哉  
 まんぞくに膳にすはらぬ花見哉  
 橋へ来て又見かえるや田の柳  
 松明を消した跡あり山つ、じ  
 鐘の来て左右へそれる乙鳥哉  
 夕桜膝にたまりしたばこの粉  
 ぬぎ捨てたもの、下より啼蛙  
 家二つもたれ合けり花の中  
 だまつては人の通らぬ桜かな  
 座に付て草臥の出る桜かな  
 折たればみな持たがる桜かな

因来 商齊 秋平 禾暁 知雪 風戸 (二四ウ) 雪齋 和多 可陸 太甫 其麦 一洞 東堤 三志 一雄 淇亭 (二五オ) 晴霞 居童 步兵 可杖 如翠 淇翠 鷗池 竹雄 去年 (二五ウ) 此水 満美 蘭窓 蘭枝 蘭笑 超翠

七種やはやし仕舞へば供揃ひ  
 水音をあらしと聞や花の奥  
 つく杖にちからのみゆるさくら哉  
 花の山暮る支度はなかりけり  
 道端に居る花見のむしろ哉  
 ゆとりある空やひるから昼の月  
 雨に菰くれる家あり山ざくら 宮ノ腰  
 鶯や煙まばらなひと在所  
 折てのちあつかひにくき桜かな  
 雲雀啼追分泊りつれもなし  
 椽先へ来ては余寒のすゝめ哉  
 うつかりと一日たてぬ春の雨  
 鶯は何喰て青し雪の山  
 一村は持たぬ家なき桃の花  
 眼のだるき折ふし花の散にけり  
 鉄砲の音はやみけりはるの雨 小マツ  
 風くせのなりに余寒の並木哉  
 手とゞきに来て別れけり蝶二つ  
 木の枝をくゞりては打晶かな  
 田の松の月になりても霞けり  
 藪一日掃て聞出す蛙かな  
 川留の幕打町や飛ぶ燕  
 梅折につとふみたればから俵 山中  
 曳杖の拳は寒し梅の花 串 一行  
 骨折のみゆるひばりや風の空  
 里ありとしれる山路のつばめ哉 大正寺  
 嵐おろすむかふにたつや番所の灯 石羊  
 水の礼惣くいふや花もどり 葭流  
 藪入の出来ごゝろなり墓参り 丹嶺  
 見こませる宿屋の奥の桜哉 呼亭 (二七ウ)

破窓 疎蓼 素桂 (二六オ) 文章 宇牧 黄年 彦崎 霞堤 春涯 凡調 鶯柯 卵籠 (二六ウ) 巨山 巨泉 桃蹊 桃園 花卿 璃山 草紫 吳柳 (二七オ) 里魴 青介 東桃 北園 石羊 葭流 丹嶺 呼亭 (二七ウ)

清水や椽の下から出るつばめ  
 御返事の出ぬ退屈や赤つばき  
 一処まぎれ道あり山ざくら  
 紙すきの眠りさますや啼雲雀  
 降ほどの雨のしみこむ柳哉  
 あり処とへば地尻の柳かな  
 四五人に着せる夜着あり花の宿  
 歌仙表  
 落椿吹たつ木の葉おさえけり  
 来てはつばめのよごす傘釘  
 暮遅く留守居仕事に舶染て  
 むつくり高き土糞のあと  
 月の比寒いけしきはねからなく  
 舟でをとりの下ならしする  
 下略  
 火を焚て居るうち暮し桜哉 ノト、キ  
 荒坂やされどさいく蝶の来る  
 花くれて恋しき里の火影哉  
 霞よりはるか上なり初瀬の鐘  
 どの家も留主なり背戸は梅花  
 湖に出崎もありてむめの花  
 月の夜は梅で持けり荒晶  
 苦舟に居ればちりけり梅の雪  
 宵月はちと高過る柳かな  
 分別もなく離れけり月と梅  
 誉られて籠にすくなき齋哉  
 若草に駕のあとある小坂哉  
 摘ためて何度か捨し葦草

豊収 可考 裡竹 白令 魯石 蜂舎 木雄 (二八ウ) 素忠 葭流 呼亭 蒼虬 十丈 千崖 梅明 子梅 杏園 花溪 二芳 梅雪 春鯉 思文 梅嶺 稚龍 几龍 (二九オ) 冠李

追やれば直に行なり春の雁  
隣から折か手寄りそ梅の花  
九皐

鶯の啼や袴をたゝむとき  
北世

くる、日を草にもよらず啼雲雀  
其文

舟つけば松葉のかゝる余寒哉  
ニシキ川 大路

歙持てそろく出たり梅の花  
ハナミ 松雄

折る枝は花のすくなき桜かな  
ウ川 白史

つまんではゆきゝする也落椿  
翠屋 (二九ウ)

春の夜や風呂なき処に一舎り  
二ノ宮 冬秀

ものほしに休で来たる乙鳥哉  
七尾 樂齊

つうと見て座を定めけり花の中  
竹塙

裏屋中うつとしといふ柳哉  
ゆみ子

朝からの淋しさぬけて雉子の声  
六皎

いにしまに眼印立る露の臺  
越中富山 沙升

鶯や傘さすはたまの事  
尺甫

長者跡柳おほきう成にけり  
葦村 (三〇オ)

庵の蛙掃やる咎もなかりけり  
凡丈

貝殻を重ねて置や花の宿  
木司

梅にとゞく階子も持ぬ在所哉  
松方

鶯啼や出張た山の片日南  
如寥

足ばやになりたり花のみえてから  
あふむ

梅が香や人声多き作事小屋  
福光 幹古

三日月のはじめは寒し春の水  
魚津 孤山

猿曳の扇子を置や膝の上  
乙雄

うつすりと富士もみゆるや春月  
写水 (三〇ウ)

一仕舞膳かたづけけて夕ざくら  
宇玄

ひはくとした橋渡る花見哉  
高岡 麦車

方丈に手のなる音やちる椿  
和泉 東川

ありたけの長閑さみえて夕柳  
新川 双水

脇やらもみずに椿を折にけり  
吉久 保久亭

淡雪や鳴かずに歩行雁四五羽  
可暁

二タ駅も馬のつかえるふちの花  
マシマ 其巖

片隅に寒さ残りてはるの山  
放生津 真弓

一世帯してうらやまし桜かげ  
福町 路三 (三一オ)

汐先を引くり返る乙鳥かな  
今石動 放古

夜の戸や咄すを聞ば花の事  
越後長岡在 石嶺

梅をるやうしろへ廻す小脇ざし  
見付 万里

出居一間明わたしけり花見客  
北洋

うつむけば膝にちりくる桜かな  
加茂 車十

舟ひきの過れば落る椿かな  
雄柳

日の入し後もなつかし春の海  
養素

花の後気らくになりぬ夜のけしき  
村松 北坡

花を出る童のもつやひねり文  
逸丸

春の水落合ふまでの行方哉  
市猿

夜に入て鐘つく寺のさくら哉  
蓬亭

和らかに日のさす花の木下かな  
糸井川 月齋

綻る花に言葉のはなもがな  
三甫

海少し木の間にみゆる桜かな  
宜雨

寝がへれば呼び起されて藤の花  
其誠

永かれと宵からおもふ柳の日  
土宝

春雨や畳歩行て草臥る  
敬甫

田の人の雨ともいはぬ春辺哉  
宜春 (三二オ)

ふところへ縮ねていれし柳哉  
尚古

花の宿揃はぬ膳が馳走かな  
曳尾

花盛り鞍なし馬をかりに来る  
上十日市 守白

鳥もみな背あらひけり春の水  
高田 甫十

かる程の笠に紐なし花の雨  
丹バ亀山 野楊

出代や支度してからうら隣  
保解

花多くあるが中にも桜かな  
古人 阿斎

花の香にちいさき旅の硯哉  
深尾

下馬先は人もたゞさず雨の花  
篠村 蕉夢 (三三ウ)

なが雨になるや花見の内料理  
保ッ 梅庵

人影もみえずけぶるや花の中  
鳥舟

日雇等のはや仕舞たる柳哉  
半山

花を見て居るや背おひは負たなり  
山本 其朴

花の中卒都婆かたげて通りけり  
全

横槌の転行先や猫の恋  
馬路 茶腸

山道や腰のばす時初ざくら  
臥雲

鶯の見合ふ庭樹や朝日さす  
須知 俵瓜

里なれて鶯ひと日ふた日哉  
福住 知足 (三三オ)

土砂搔ばあがれと暮ぬ柳かな  
笹山 風処

奥庭は女まかせや遅ざくら  
冠雪

来るとはやせはし乙鳥と水車  
田城

霞まれて十分舟に寝たりけり  
兎秋

夢捨て出て青柳に吹れけり  
観之

親乙鳥あれもこつちで生れた子  
黒井 露光

十分の花に一舟おくれけり  
魚磨

鶯の啼ても広し殿の留主  
大山 武陵

逗留の客の落合ふ二月かな  
丹后田辺 似藻 (三三ウ)

辞退なく飯喰て去る和布哉  
葉久藻

灯ともせば夜も桜のちりにけり  
一葉

大枝となるや畳に置さくら  
雪齋

雉子啼や矢をつく様に下り舟  
北亭

つれて来て置ば三つにもなる蛙  
双

伐るを見て貰ひ人たかる柳哉  
蕉山

戸あくれば桜吹こむ御堂かな  
白水

鶯の友よびするや外家中  
柳圃

明後日と延す紺屋の春日かな  
桃之 (三四オ)

孕んだとみゆるや枝を折鴉  
素梅

傘の下出代前のはなしかな  
蕪良

さして来し留主の戸明る桜哉 宮ッ 万籟  
 菜の花や松と厠は背な合せ 夷白  
 山寺や只の椿に朝日さす 瓜涼  
 毛氈にすりこ木こかす花見哉 無角  
 留守事に大そう散し桜かな 竹公  
 八重桜三日月たけて静なり 也風流  
 寺の庭すぐにつゝじの山つゞき 一山 (三四ウ)  
 居りなれたしる田ふまえて春の雁 東翠  
 月のいろ灯の色すける桜かな 守平  
 すべつたるあたりから啼蛙かな 四辻 松月  
 旅人や柳みによる横小路 君友  
 障るものなくて柳の大ゆふれ 北柚  
 柳折るとてすら〜と上りけり 里橋  
 飛こんだ鴉するどき桜かな 松露  
 小戻てみる飛越のすみれかな 中浜 遠花  
 親しきは雪と桜のあいだ哉 河辺 玉芝 (三五オ)  
 並松の揃ふて侘し春の月 巧申  
 七種や親子そろへる雪あかり 駄観  
 梅咲やむかい隣の朝寝ずき 其夕  
 ちらかつて川の流るゝ汐干哉 庵月  
 汲あとを覗て居るや春の水 金英  
 薄暮て真白うなるさくらかな 峰山 青芝  
 鶯に旦那の袖をひく家来 白砂  
 咲たより落て幅ある椿かな 但馬出石 黄貫  
 万歳の撫て通るや子のあたま 扇海  
 苗代やいくつも仕切田一枚 竹裏 (三五ウ)  
 きれ風の帆柱に来てかゝりけり 古岸  
 鳴鹿の角も落けり伊都岐島 霞城  
 いかめしき寝覚や庵の花の陰 金月  
 笠提て立人もあり春の月 ち原 広居

川へだつ隣ありけりはるの月 一之  
 柳見て居れば来るぞよ渡し守 村岡 柳眠  
 初蛙火を打ほどのおもしろみ 魯兮  
 鈴音に鶯馴る野宮かな 壺亭 (三六オ)  
 花の雲神と並びてかり寝哉 日カ部 楽嵩  
 花の影明てある座の長刀 浜坂 羽長  
 散る梅や喰ては吐出す池の鮒 轟 道雄  
 踏で行水に移るや春の月 月亭  
 春の夜もどりになき田の小橋 伯州米子 草台  
 親村へ行も春辺や二日がけ 澁江雪江改 有隣  
 田の上におどろく夜あり梅の花 今ッ邑 とみ女  
 春の夜や傘かりによる畑の家 雲州母里 亮曠  
 隣から霞むといふやこちからも 完道 春涛 (三六ウ)  
 鶯やすみ〜寒き寺の内 呉堂  
 立ながら仏を拜む花見哉 石州矢上 梨雪  
 こけなりに重摘ばや日のぬくさ 芦青  
 花の座につくより眠りつゞけけり 播州姫路 曾夢  
 夜の明てちる花水をへだてけり 茶田  
 遠声の尾につく蛙ひとつ哉 布蘭  
 青柳や人にからるゝ日和下駄 古瀬 修  
 青柳の桂にそひぬはねつるべ 魯狂  
 山の家にひとり帰るも花盛り 守一 (三七オ)  
 蛤に雀のたかる余寒かな 古川 蘭陵  
 雉子啼や日和かたまる茶木畑 芳洲  
 鹿の角片づら落て日ぐれけり 円山  
 青柳や花の恨みもありさうに 女村子  
 若草や高みに家の建古し 左棗  
 梢から来るや夕べの雉子の声 ヒエ 桃月  
 苗代やふた輪三輪鶯の移り行 古谷  
 紙鳶あげて朔日遊ぶ屋敷哉 新宮 鼓吹

さむしるに片尻かけて花見哉 ウサ崎 五芳 (三七ウ)  
 椽先へ火の出してある春辺哉 中尾 千尋  
 手伝ふて小僧にをらす柳哉 魚崎 節之  
 勝手には人の居らぬぞはつ桜 綱干 以文  
 梅が香や子供多ひ一軒家 ヒメチ其曉改 陸草  
 水のみに出て間もおかず山の雉子 ツマ井 六英  
 黄昏を鐘がしらせる桜哉 但州天王 好耕  
 水ほしき二日酔なりちる椿 備後宮内 蕉雨  
 重摘でおさなごゝろに戻りけり トモ 応雅  
 傘の古骨買ひや春寒し 仝 (三八オ)  
 手にとれば目印もあり薺屑 青塙  
 雲雀啼空や曲突の燃しさり アキ広島 斗斎  
 持かえてくゞり戸出るや梅の花 雪頂  
 水際のぬれて目にたつ霞かな 田影  
 いたゞいて肩に上るや梅が下 玉桐  
 鶯の初音に覚し朝の月 文路  
 草摘や我もわすれし拾ひ杖 不朴  
 うぐひすの啼直しけりぬかり道 白尔  
 家かげやたしなみの菜も花になる 三鶯 (三八ウ)  
 今着し船の碇かおぼる月 周防室ッ 雪香  
 鶯にゆひもさゝれぬあした哉 白松 英芝  
 波をり〜岸にとゞくや初霞 鼓吹  
 松毬にとり付て居る蛙かな 上ノ関 栗堂  
 傘さいて通れば落る椿かな 史鳴  
 元日や着ぶくれて居る船の者 長門下ノ関 岑磨  
 陽炎や手ついでに掃棚の煤 益三  
 流れから尋入たるさくら哉 淡路須本 方壺  
 蒲公英にふるふて立や小風呂敷 アハ 青荷 (三九オ)  
 呉られた薺ののしや白の上 鸞巢  
 我猫に遠い処で逢にけり 友樵

きれ風の侘言にまで歩行けり

ひと町の裏は一つで桃の花

小豆に火のほしさや朧月

散花や日暮て戻る庵の犬

風の手はふせぐ山あり花の宿

酔ざめに見て居る窓の柳哉

三日月を見に出てかきぬ路の臺

夕蛙啼や乞食のちよろ／＼火

木挽等も手前仕事や梅の花

菜の花のへばり付けり肴籠

落る時鯨のはねるつばき哉

万歳にさはがぬ鶴の歩行哉

梅を持たの並ぶや江の向ひ

湯治するつれ定るや梅の花

あたらしき戸の明たてや春月

鶯の得意まはるや藪つゞき

すさまじや加茂川越る猫の妻

鶯やちからもいれぬ歎遣ひ

乙鳥の並んで覗くらいかな

星かくすほどの曇りや啼蛙

猫追ふて出る戸口や春の月

雨もちて明るみのつく桜かな

雉子啼や吸付て出るたばこの火

蝶の舞とて明はなす障子哉

梅を折はづみに越る小川哉

引汐のひくともみせず夕霞

春雨になりきる暮のからす哉

大そうな大工つかひ梅の花

落着に枕さがすや雨の藤

名処としらで畑打男かな

向榮

梅守

其岳

玉瀾

稼耕

高松

三千磨

可都彦

由喜彦

白鳥

李上

哦月

和田浜

今是

丸龜

木長

杏堂

一斧

芳三

夢蝶

茂権

一行

木兄

桑戸

燕九

円外

柏年

鸞雅

鸞斎

泉齡

蘿山

蒼頂

稼暁

宇和島

素亨

ひまな日の出来れば花の散にけり

袖にたまる風さへもなし絵踏の日

山鳥の尾を引ずるや雨のはな

朧夜の明た証扱や鳩の声

付て来て花の事いふ乞食哉

捻きりし露の匂ひや朧月

嵩よりは幅に流れて春の水

持て居る桜にも日は暮にけり

春雨や泡のながるゝ芦の中

壁塗た人の来て見る柳かな

一日を花に名残の灯しかな

あと智恵になりけり梅の手折様

掃よせてみれば嵩ある椿かな

小机もかゝえ出したる桜かな

鍋ひとつ抱えてまはる桜かな

永き日や幾度か掃庵の砂

置直す机に蝶のねぶりかな

鳥の巢や塵ひと筋の初より

枝折戸も明てあるなり散桜

藪入の見あげて居るや庭の松

苗代や幣耕しに来る小鳥

春の水渡つただけは濁りけり

流れ出て月も広がる春の水

門並のみやげにたらぬ蕨かな

藪入の隣まで来て暮にけり

苗代の日和つゞくや水の泡

鰐口のせはしき音や花盛り

堀ごしに紅梅囀ふ小枝かな

跡じさりして詠めけり庵の花

のし付し梅のつかえる戸口哉

呉天

鳥朝

井峨

高郡

郊馬

川ノ江

二島

吉田

鶴雄

石漁

蟾居

筑前

士焉

月平

甫六

雨堂

素萍

龜笑

嵐堯

呉鳶

柏翠

文雄

呂舟

桃下

鴉郷

漁洋

樹幸

香輔

石居

代醉

鶯友

若拙

自考

立沙

花董けふも泊りの近い駕籠

洗足も温泉で仕舞けり花の宿

春雨の中や風呂屋の行通ひ

初花やひと朝濁る小石川

傘さして万歳通る日暮哉

梅ちるや水の流るゝ垣の外

月さすや明捨てある花の門

声ばかり野に暮残る雲雀哉

摘かけて傘たゝむ若菜哉

元日も鹿のあとある畠哉

梅ちるや人影移るぬりだらひ

坂下りて衣紋作るや梅の花

初花や筏の迫る山の間

足もとに海苔かき寄る日暮哉

恋猫や曉寒き窓あかり

ひと雨の森に移るやおぼろ月

持かえる杖やそこらに啼雲雀

見処のなきほど花の盛り哉

二三本松の目に立さくら哉

真盛りになるや桜のひとけしき

小家毎に火をたく花の真ひる哉

小ひねりな料理の沙汰も二月哉

水筋は曇り持けり夜の花

月のさす門は別して花のちる

飛込だまゝ、花を出す山鴉

春の日や愚痴文盲に炭せつき

宵月やおくれてひとり花戻り

近よれば扇も交るさくら哉

長閑さや四方の遠目の松と家

輪火繩のけふる処や花すみれ

樵山

臥山

石岱

松二

青鸞

竹舍

南礎

一子

女惜花

宇逸

和風

野竹

五岳

遅柳

蕪園

柴扉

砂北

松鼠

尺步

蛙籟

斗丈

嗒然

鶴史

幻化

文老

木父

巴山

可推

村雨

四友

(四二ウ)

舟からも来て穴一や柳かけ 豊村  
 開帳の花より高し大卒都婆 里山  
 初花の淋しうなくて静なり 松風  
 存外な処から出てはつ蛙 木齊  
 焚飯の泡吹おとや雉子の声 添田 砂水  
 行春ををしむや鍬の横なぐり 豊後日出 懸壺  
 初東風や塩魚つかふ磯の家 鷺風  
 是きりで寒さも去るねはん哉 日田 黙斎  
 ちりやうに気を持花や池の上 雨芳  
 飯櫃も日当に出たり梅の花 肥前神代 素羅  
 来た道を覚へても居ず董つみ 千丈  
 行春の誰気にも合ふ料理哉 亀詠  
 彼岸とて店先へ出る朝茶哉 涛堂  
 苗代や怪我した足で見て廻る 鷺洲  
 片里の風並びたり海の上 冬耕  
 淡雪や羽音のふとき鳥の行 和雲  
 桃咲やくさき鯨を売に来る 柳甫  
 山ごえに帰依寺はあり春の月 霞林  
 遠歩行して摘まける若菜哉 大村 悠々  
 行春の松に立たる筈かな 長サキ 其映  
 波のよるけしきを霞む淡路島 田代曙庵社中 雪峨  
 ちる花や春の名残も扇だけ 五百衛改 達夫  
 鶯にさはる音あるすだれ哉 砂楽  
 曆には寒き日もあり梅の花 都蓼  
 青柳に雨もおほろもかゝる空 東六  
 梅の花雀追ふにも気草臥 羽玉  
 山風や桜吹こむ笠のうち 如雪  
 嬉しさの短き花の蒲団哉 楽之  
 陽炎を掻集めたる松毬哉 巢旭  
 紅梅に明石の朝日をかみけり 流水

(四四ウ)  
 (四五オ)  
 (四五ウ)  
 (四五ウ)

あら磯や月は山端におぼるなる 百枝女  
 春雨や須磨に寝し夜の思はる、 芝月女  
 美しき水の音ありおぼる月 花夕女  
 朝ほらけ花に老木はなかりけり 希石  
 奈良漬にみな集るや花の雨 一桂  
 永き日や戸にもたれたる馬の顔 曙庵 梅調  
 仰向ば寒き雲あり梅のはな 肥後八代 雪笠  
 火を打て夜明をまつや初ざくら 在京 白扇  
 初花や渡れば沈む小坂ばし 日向 曳尾  
 けふも又聞て戻るや花のかね 南丸  
 水汲の正月ぶりや高足駄 厚薄  
 駒鳥啼や夕榮へもなき小篠原 習之  
 雉子二つならんで啼ずなりにけり 美々津 吟龍  
 背一ぱいのびて寝にけり花戻り 行脚 云界  
 鶯にめぐりあひけりひがし山 志岐勝本 青也  
 山吹を折足もとや朝の蝶 鶴二  
 青柳の下をながる、小舟かな 桃水  
 提灯の戻り少し花の宵 梅舟  
 若草の中を今年のながれ哉 文耕  
 蜂焼に入るや闇夜の花の中 対馬 東指  
 木の空や余寒を下す鳥の声 大和芝村 牛父  
 和らかな松のかげなり朧月 吉野 也亞  
 戸口まで鳩の来て啼霞み哉 都牛  
 ちる時はまてしばしなし山桜 虎遊  
 若草に家一ぱいの日和かな 南都 橘枝  
 鶯や越る峠の真ひる時 河内守口 梅古  
 春雨や寝ながらうたふ船頭唄 きぬ女  
 菜の花やこも僧入れぬ一在所 山城伏水 光山  
 見て戻るこゝろ淋しやあさ桜 美づ 湖月  
 我宿や寝ても覚ても花明り 嵯峨 丈翠

(四六オ)  
 (四七オ)

竹の根にちとづ、ふえる董かな 月峰  
 夕暮やひとむらこめて啼蛙 百池  
 焚もつて行や爆竹の道あかり 金菜  
 居ならんだまた影ありて帰る雁 貨僕  
 余所の田へあまる月夜の柳かな 蘿閑  
 花山や近道よりは遠いみち 凡中  
 外の樹は暮一段や散さくら 梅通  
 撰摘にする背戸先の若菜哉 並隆  
 餌をやれば鶯去て仕舞ひけり 芹舎  
 見失ふ眼先へおりの雲雀かな 芳英  
 よき里といはる、はしや庵の梅 几乙  
 咲花の混雑するに歛遣ひ 若雅  
 野口から風呂敷とくや花の道 南溪  
 はね釣の針筋みえて柳ふく 十海  
 下駄はいて所廻する汐干哉 麦雄  
 腥い茶の辛抱もさくらかな 翁杖  
 蛙なく家となりけり須磨簾 草鳥  
 夕雲の照るや余寒の峰の塔 喜楓  
 人過た花盛りなりあらし山 倍美  
 ひと谷はよき日更なり夕桜 醉露  
 ちる事をしれとや花に夕念仏 秋禾  
 柳から下へは雨のつたひけり 来元  
 我山で暮てもどるや初ざくら 遊蝶  
 炭竈のあとへたまるや雪解水 梅舎  
 鱈鮓屋の休む夜もあり朧月 孝平  
 降までは其ま、おくや花筵 よう女  
 桃咲やつれまつうちに一眠り 三保女  
 人声も曇る桜のさかり哉 とせ女  
 鶯をとくと立せて掃除哉 呉明  
 むつつりとした顔ぶりや孕鹿 初六

(四七ウ)  
 (四八オ)  
 (四九オ)

兎角して座の定らぬ桜哉 杜鷺  
 砂道を魚荷のはしる霞哉 杜蓼  
 風ひとつこゝろだよりの山路哉 梅價  
 春中の空に日暮るひばり哉 完和  
 気の澄て寝られぬ花見戻り哉 祖郷  
 見巧者の付て見落す桜かな 榛堂  
 雨ほどは散てもおらず朝の花 夙也  
 杖くれた家で休ではつぎくら 千崖  
 柴になるほどはのがれて山桜 蒼虬

(四九ウ)

(五一終ウ)

追加

もらひ人に折せて置や梅の花 尾州ナゴヤ 田子  
 春雨や晴て田に這ふ夕けぶり 如柳  
 大川をひとつあちらや揚雲雀 万年  
 浪際や打こむやうに飛つばめ 梨陌  
 菜の花や遣ひ水にも日のあたる 芝角  
 あれ寺や菜畑に雪の消残り 李裳  
 鷹せがむからすしたゝか霞けり 楠圃  
 山坂やすべり歩行も花の奥 イセ山田 四溪  
 宿引に笠を渡せば春の月 丹波舟木 野卵  
 戸はなれてみてはよりそふ梅の月 ハリマ 杉堂  
 土瓶茶のいたづら沸や花の本 淡如  
 霞もつ帆舟みえくる木の間哉 南溟  
 あらしもつ花や朝から盛なる 石見 芦青  
 梅折て臆病直す野道かな 常陸小川 よし香

(五〇オ)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

菊苗や泥手にこよりひねり居る オク津縣黒石 茹来  
 どの枝もをりにくけれど梅花 二本松 乙調  
 やすくと水の流るゝ夜の花 ハリマ魚崎 文沙  
 朧月夜が明たれば浪の音 居易  
 明桶に灰とりためる余葉かな カゞ金沢 北洲 (五一終オ)

京東洞院通

湖月堂  
 御摺物所  
 菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

【参考】天保四年『花供養』に再出する。

(五〇ウ)

ひよいと出て何か飲けり慕 天草大島子 正焉  
 手がらさうに濡て戻るや花の雨 下総沢 雨什  
 見勝手に膳ならべるや梅の花 葛西 松什  
 乙鳥の水すつて行日暮哉 少年 浜吉

底本 糸井本  
校異 白鹿本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

はるはさくらをかざして

供養の場にみち、秋は真

葛の月に吟じて暁の

かねに驚く。嗚呼、花供養の

世にひろがり、四時流行の

遅速をあらそふ事、日々に

新にして、月々に盛に成り

て至らぬ隈もなし。こは

蕉堂のいさをしにて、

千載不朽俳諧の道場

とは成りぬ。

天保四年癸巳春

西湖山の北馬識

(序一ウ)

花供養

小構な唄やさくらのちり支度

つきたて、置春のぬれ柴

沢山にあつかふ海苔の束とけて

こける屏風をつかまへて居る

降かして人のごはつく向川岸

その場でわたす土持の銭

芹舎 蒼虬 南溪 万籟 梅通 金菜

夕月に出たてたば粉をつみなをし

未だつばくろの残る早年

ちよつとした角力のはづむ西院祭

くつきり色のしろき髪ゆひ

いにぎまの言葉にくさにつき飛し

ついは付木のしれぬくらがり

鐘つきもひとり男の兼あふて

昼寝の顔に蟻の這ふ也

えだ形でとつきり橋に遣りわたし

はやふ手垢の見ゆる藤柄

そろばんをもてきて習ふ宵の月

ことしは何処も渋ひ安齋

見つけると鳴も突さぬ屋鋪裏

立たる札も埋むごもく場

乗てから船賃ねぎる花ぐもり

なはしろ菜莢のはりに刺る、

新店の灯も賑やかに霞出し

子を負ながら膳を手つだふ

浪おとのつれば馬も荷をへして

湿病む顔のむさき日あたり

町へ迄厄介かける弥勒堂

何の用ともしれぬふる杭

下肴の来やめば市のひつそりと

あつめてありく雨乞の米

炮烙の繭のちらばふ棚廻り

そんぐりそげのぬけしうれしき

おはぐるも見へぬ処へほかす也

牛につけたる薪のふり売

植木屋の冬糞嗅き朝の月

むしろめくつて洗ふ油石灰

月峰 芳英 杜蓼 丈翠 栗哉 万丈 馬角 素洞 三志 一嘯 百池 米友 若雅 座魚 梅價 玉叟 十亀 朝陽 三保女 梅窓 夢外 麦洋 光影 正阿弥 馬友 衆芳 伴橘 喜風 貨僕 並隆

(一オ)

あつらへし焼物鯛も不揃に

さいく呑めばきかぬ熊の膽

ざつくりと畳へ数珠のおちた音

けふの日よりに裕着あてる

まん中は誰も通らぬ大津道

屋根を葺やら竹立てある

つれ捜す人の又来る花の陰

鳥居の数のふえるあた、か

下略

なく雉子にちらくうつる旭かな 丹波 俵瓜

掃きらぬうちに又散つばき哉 武陵 武陵

折れぬとて笑や花の川向ひ 吉丘 霞柳

うちやつて置た庭はくやなぎかな フクスミ 桐雨

十分に寝た船ついてはるの月 知足 知足

吹足らぬ風に柳のみだれけり 豊栖 豊栖

田の土のゆるむか雨に鳴かはづ 渭川 渭川

かたよせて船から打や岸の梅 ハタカメ 靈芝

ほめる間もなく手折や藪の梅 小ノ 古情

杖ついで出る人はやし花戻り 天引 一知

滞りなく流る、やはるの水 サ、山 観之

翌日は誰があるじとなるや山桜 花月 花月

行春や鴉のたぐる穢多ヶ崎 風所 風所

もりと子は別れ遊ぶや嫁菜摘 山国 蝸角

何の木となしに交りて山ざくら 洗耳 洗耳

杉かげに月ははづれて暗蛙 氷カミ 万堂

井戸ばたにこぼれて有て齋さく 野卵 野卵

手ですくふ瀬に流る、や花の雲 二泉 二泉

縄繰の腰のして居る霞哉 既醉 既醉

余所の灯の明りがさすや花の間 真澄 真澄

(四オ)

(三ウ)

(三ウ)

灯をいれて花に労れたあるじ哉 黒井 露光

白魚に山葵の利たさわぎかな 全

つゞくつた風を持出す日暮かな 全

鶯や相手ほしいとおもふ頃 シノムラ 蕉夢

傘の端でこぼすや梅のはな カチハラ 宗徳

温泉になれぬうちは寝にくし春の月 サ、山 冠雪

来た道は人づまりなり花の中 カチハラ 蒼々

(四ウ)

あらし山にて 一床凡のこるや花の泊り客 丹ゴミヤツ 本道

打かけたきのふの畑や雉子の声 文之

葉が押してしたむきに咲つばきかな 几雀

水末になれば粒だつ田螺哉 塘芽

しら梅や甲乙もなく花ぞろひ 夷白

小としにかけた雫もうめのはな 魚道

かれ芦も沢山たてば霞けり 馬良

遊ばせてある寺畑やうめのは花 タナハ 蕉山

雨になる噂して寝てはつ蛙 鉄山

何処に咲て汐ざかい迄落つばき 似藻

高みからみればのこらず梅のはな 一葉

やなぎとは又持にくし藤の花 北亭

雨だれの透見合せて御慶かな 可丈

鎌研て居るを見かけて桃の花 白水

雨の朝ちかくに雉子の鳴にけり 松翠

垣のそと之もつまる、木のめかな 伴慶

うめさくや此ころまでの無住寺 芦丸

あそび人のあるや次く山の花 桃之

庭はきのちいそうみへて朝ざくら 柳圃

雛の顔のぞいた処に居ばりけり 東菊

あさみどりするや小まつ引残り 観音寺 駄観

らうそくの片へりするや花の風 松尾寺 静也

暮前に人の出て来るさくらかな ミネ山 春芝

おしたちて並び直るや蛙の子 白沙

風の手のきまらぬやうな焼野哉 たり

うぐひすやまだ寝所も出ぬうち チハラ 広居

我耳のいざ垢とらん華に鳥 出石 要鳥

高ばつた程は嵩なき齋かな 夕斉

白梅の明る戸待て匂ひけり 芦滴

三日月を松にはづして啼かはづ 古岸

行春のかけや流て吉野川 蝶章

夜深きに門掃くおとや初桜 其然

逐へば又おはれて雉子の鳥音哉 雀子

朝空や耳にひやりと雉子の声 但馬ハマサカ 素六

あさ桜より見つくして夜のさくら 四暢

灯の消へて笑しづまるさくら哉 伯米子 草台

膳にかけさして筆のはる桜かな 椿台

途中からふねに乗りけりはるの月 蒼館

流れ出てみな江に霞む家鴨哉 三眠

つき出した膳の先なり月と梅 完眉

うへ一重からげる花の戻りかな 伯今津 とみ女

二三軒ふえるや梅のくばり先 有隣

本家から喰もの仕出す花見かな 所子 一松

手をつけて見ればつめたし春の水 花酔

旭さす流がそふて雉子の声 雲母里 梢鳳

董ほど残して射場の掃除かな 一帰

隙なるをほしがる春の宿屋哉 一徑

鳥も寝ぬほどに折る、野梅かな 一橙

折たま、箕のにせてあるつ、じ哉 青蟻

蠟燭の買置するや山ざくら 冬山改 虎嘯

見かへれば霞んで仕廻華表かな 成眉

(六オ)

うめのはな片足あげて折にけり 院白

風ふんでおどろく夜の田道かな 耕文

朝晩にかはるや雛の置所 眉英

もぎ折た儘にかたぐやも、の花 亮曠

行春や吹来る藁に鳩下りる 大ツカ 東鳥

揃ふたとわか菜みせけり垣の外 金風

たふれ木の田にある春の寒さかな 羽客

内にさへ居ればねぶたき木の芽哉 篤風

霞れて雑巾つかふ広間哉 下ノカハチ 月谷

こ、ちよき朝寝や花もきのふ切 松江 秋宣

箸とれば余寒うすらぐ真昼哉 松羅

花打た手の疵みるや風呂の中 龜年

雨前と見込て焼くや夜の山 蟬羅

手に痘の出来て掘止むつくしかな 行脚 南峨

無年貢の島も持ても、のはな 完道 白羽

赤つばき寝に来る鳥のおとしけり 花考

野口から灯のちらかるや花もどり 春船

うら町は折たさくらで花見かな 猪洲

雀子をもどして囀ふ隣かな 思雲

もそつとにして灯を入る接木かな 由雄

さき達の足袋ぬらしたる柳哉 石水

不遠慮に人の来て寝る春の雨 呉堂

鳥さしの竿の先からかすみけり 玉洗

津の町を出てから霞そめにけり 鶯律

飛こえをとび勝たれたる蛙かな 松甫

里の子の繋いでくれる椿かな 女 和今日

欲の眼で見ればさくらは山あかり 春涛

呵られたあたり花見のよき場かな 石見 芦青

寝て居るはずもふ取也花ざかり 播魚サキ 節之

貝殻にけふも一ぱいはるのあめ アカシ 壺中

(七ウ)

大船のすはり心やはるの月 苞竹

ふし／＼のくろむや雨のつく／＼し 寿鶴

遅ざくら家の間も下り上がり 三木 文郷

鶯や日はさしのぼる作事垣 耕雲

杓の柄のみなぬけてある余寒かな ヒメテ 曾夢

一寸と降る雨に出がはり延しけり 新宮 鼓吹

永き日のゆとりも見へぬ大河かな ウサギキ 五芳

鶯の来て間のぬけるはなしかな 今市 琴洲

一輪で持てたる梅の林かな ヒメテ 寸外

どつかりと目がさめたれば帰る雁 ツマ井 六英

礼いふて居る間におつるつばきかな 備中 倭一

なまぬるき風呂にいろいろや花の雨 備中 倭一

長閑さや窓から囀ふたばこの火 ビンゴ宮内 蕉雨

ふる雉も交せてめでたくゆづりけり ヒロシマ 甘古

友はぐれする蝶々や風の中 青尾

菜のはなや抹香はたく水車 笠居

財布から出すや土筆とはした錢 霞ト

どの木ともさゝれぬ花の盛かな 文衣

柳よりうへに見えけり桔槔 上ノ関 栗堂

三度喰ふ飯のうまさや花盛 全

朝掃除して数えるや燕の子 山口 風阿

夜の花風邪ひく声もきこえけり 白マツ 鼓吹

橋守の戸の内にある薺かな チクゼン 士焉

よし野にて (一〇ウ)

高みから連レよぶ花の木の間かな 蕪園

しをりせん行道／＼の梅やなぎ 五岳

さした形り柳のあをむ畠哉 竹齋

気のかかぬところへ一つ露の臺 松岳

ひく汐の朝風ぬくし蜩とり 樵山

上座からむいてまわすや露の臺 漱石

木をたふす音もしつかり霞けり 魯童

隣から荷鞍乾かす椿かな 秋萍

ふまれても開きおふすや露のとう 汀洲 (二一オ)

花の中そつと畳みし日傘かな 春岱

啼盛る程うぐひすの人ちかき 友重

鶯の影もふりむく日南哉 対山

万歳のかるみて這入戸口かな 其風

戸をたてるたばにはさまる柳哉 立沙

錢投て橋越かゝるかすみかな 尺歩

持前の花のしめりやけさの雨 月平

朝寝した座頭もどるやわかれ霜 綺園

裏手から見ると桜と山ざくら 遅柳 (二二ウ)

うぐく木に又眼のもどるさくらかな 野竹

青柳や朝湯もどりの長咄し 南礎

夜雫を待て咲たるさくらかな 女 徳順

出る船に手燭さし出すやなぎかな 五春

汲あぐる釣瓶の中のかはづ哉 南室

たばこの火借りてきの付く柳哉 梧栖

川ひとつ隔てさむき野梅かな 南枝

春草の上に鍋置小昼哉 壺天

ちるかたに向ふてすはるさくらかな 宇逸 (二二オ)

雉子なくや水はすら／＼草に入 青羅

日和から先づほめて出る茶摘哉 聴雨

物しりの家を尋てうめのはな 柳圃

あと掃除する気もつかぬ花見かな 甫六

田の神をゆびさす方や揚ひばり 砂北

柳には不断流るゝしみづ哉 柴扉

蔵跡が見えてさくらの古木かな 松鼠

葉がくれにつぼみの残る椿哉 青圃

目にたゝぬ銭つかひけり花の留守 生白 (二二ウ)

ひとり言いふて居也山ざくら 北令

啼かぬ間も鶯見ゆる木の間哉 和風

やなぎにも松にも月のおぼろかな 酒丸

行春やひとすぢみゆるふねのみち 女里月

野に出れば直に眼のつくわか菜哉 円斎

踏ばつた足袋のよごるゝ根芹哉 既睡

苗代やぼて／＼桐の雨雫 稻榮

泡消たあとに浮出る蛙哉 杉露

眼やすめに古井戸のぞく桜かな 二蝶 (二三オ)

息休めするや真下になるさくら 松二

うぐひすやまだ鳴ねども来た様子 臥山

梅散や泥の乾きし霞の中 一予

草の根のもげて流るゝぬるみかな 石岱

うぐひすを待つには邪魔な寛かな 女 惜花

月の出て遠くなりけりうめのはな 乙牛

しら梅や夜あけて寒き夜着の垢 飛木

船頭の客ぶり作るはな見かな 九瓊

涅槃会やついでながらの無音はれ 未央 (二三ウ)

ついて来た子の淋しがる茶摘かな 路丸

みちばたにこぼしてあるやつ／＼し 一操

仰向て小社見るや花の中 玉卮

織さしの機片付る雛かな 桂女

夕東風のたるみを待や手繰舟 桃翠

うめさくやまだ四五寸の杉の苗 器洋

端近く並べてあるや草の餅 棠居

摘みさしの茶園見廻る雨間哉 柳志

畑ひとつひらき仕舞や竹の秋 延子 (二四オ)

笠借りに行けば隣も茶つみかな 里栗

川明きを触て来る也雉子の声 温故

今年又おる枝もなしうめの花 芦舟

たしなみの羽織来て来る余寒かな

物事を気やすにするも二月哉

子すゝめに連れて飛けり親雀

夜の明けて月さす春の障子哉

菜のはなの咲けば隙なり畠ぬし

紅梅にきのふ作りし折戸哉

家建て苗代頃になりけり

巡り合塵の花也やまざくら

柳見る剋限はやくおもひけり

され風の松にかゝりて揚りけり

糊の干ぬ行灯出すや花の宿

鶏の尾につけて歩行やちるさくら

水汲の顔で分たるやなぎかな

出がはりやつけかえて置釣瓶繩

春風や見て行ほどの廻りみち

華表より先に眼のつく桜哉

菜のはなを廻りて這入戸口哉

玄関に夜はいれる也いかのぼり

提灯の心得はなき花見かな

旅もどりともししてみるさくらかな

汲んで置水に花ちる在所哉

陽炎も立て流る、筏かな

春雨の晴口見えて藪つゞき

苞提げて野を行人や夕霞

畑打の休み所かさざくら

雉子なくや浪たちやすき朝の海

かへるさに驚く花の深山かな

宿引の遠く出て居るさくらかな

日の出て雪こぼる、野梅かな

桃ちるや拾ふて捨る田にし哉

環翠

雪幸

月秋

霞山

帰橋

冬蟻

楓下

砂童

雪丸

行脚

翠流

亀笑

寿扇

呂舟

石居

柏翠

莫薦

月舟

鷺友

兎川

漁洋

関雫

自考

再可

若拙

梧丈

遅桃

馬槿

五涼

一桂

湖風

それ／＼に浦はかね撞霞かな

鶯や月の残りし池の上

梅ちるやさむさはなれし山畠

なの花や始終東風たつたばこ盆

一番を値ぎりて買也初若菜

葉罐茶に奢のつくや八重霞

親になるすゝめの瘦やはるの雨

道づれの出来て春めく山路哉

うぐひすの鳴てじつともしてをれず

初花に真さがける鳥かな

炉ふさいで何やらほしやきのふけふ

火をかりに寄や畑打人の側

船わたる隙も只居ず小万歳

くたぶれた人の先行こてふかな

筆飛て襖よごすや春ごころ

春の水石にて足をぬぐひ行

鶯の見たくなりけり啼た跡

朝はやう来て買はず齋かな

山寺や梅に切たる味噌の口

春風や出た気のかぬふところ手

咲出しておなじ日のなき桜哉

うぐひすの鳴や鴨居にひく油

松明をふりあて、退く柳かな

鶯や二重障子のうつとしき

帰る気になれば小寒き桜哉

まん中に花を置けりわたし舟

万歳のくさめも舞のひとつかな

雨止んで鶯直にきたりけり

うめ折るや一よい枝が瀧の上

鶯やきのふ迄見た藪のとり

一三三

渡川

小翠

斗丈

嗒然

樗雲

幻化

春暉

鷺風

花六

率彦

素椿

仙斧

柳思

三考

正焉

素琶

露満

一兮

淇水

太素

素遊

梅左

其青

樗山

春圃

寸長

悠々

駒童

夜ざくらや懇意の向は廻り酌

雨の花おもへば春はいましばし

鶯を側になかせて花見かな

一処に足のとまらぬ桜哉

しどけなきふりあり花の真盛

隣から今度は誘ふ花見かな

ちる花を集めてみるや酔まざれ

花ちるやほつ／＼とれる灸のふた

橋かげに僧も出てゐるさくらかな

かしこまる檀那の前の柳かな

不斷焼く煙のあとのさくらかな

花の中耳につく蚊に逃にけり

むく起に鳥渡はさむし花のかぜ

あんまりで顔の出されぬ花見かな

年／＼に若き沙汰あり花の客

行春や礼した迄の寺の門

くさの蝶たしかきのふも居た処

行先は出てからにしてはるの風

髪剃にゆくやひら／＼春の雪

夜も無事に明る柳のあたりかな

手のひらに溜めて見る也藤の花

青柳や永ひ病気の名ほり口

次の間の軒も花の仲間哉

春風に連れて行也大和道

加茂川に筆とりおとす弥生哉

花曇りするや越たき山ばかり

養生でひとり歩行や董みち

又聞のはなしのふとるさくらかな

灯ともりてみれば露けし白椿

草の戸の視勝手に霞けり

万年

有来

茄醜

鶯居

歌樵

魯丈

李井

加尺

甫旧

北岱

素岡

史敬

棠雨

方居

梅逸

石慶

石甲

梅乙

文似

美風

秀有

智水

止休

李井

九思

時習

霞林

月江

泛湖

梅士

鳥も家の四五十あるかいかのぼり 神代 冬耕

鳥雲に入るや朝／＼茶の旨き 涛堂

柳見て居ればばかりと番所の灯 青郊

億病のつく正月の寒さかな 素羅

今はなした鶯の来たりけり 鷺洲

はつ午や雨と見うけてすわ迎ひ 梧井

雲うごき水うごき出て夕柳 龜詠

つく／＼しもらへば興もなかりけり 蘭雪

見処の隣に負るやなぎかな 撫松

花見へてからも又ある小橋かな 一柱

見さだめぬ空に下駄はく彼岸哉 全

朝雀ぬれて花から出たりけり 五島 雪洞

寝ぬ船の明りはふとし春の雨 ツシマ 其雷

風呂敷でしきるや花の台所 吾水

居ぬくもる足の痒みや梅の花 雷貢

帆ばしらのもひとつみゆる柳かな 吐鳳

矢走乗昼の支度や草の餅 淇園

西須磨やさくらみる日の古すだれ 孤巖

炎の香のふところさめず夕桜 東指

すみやかに夜はなれたり初桜 サツマカセタ 吐月

うれしげな人のみ十日戎子哉 全

初午の人の出にけり垣の破れ 日向本庄 習之

きのふ見し花の名残や雪花菜汁 南丸

花守やさかりになれば剛い顔 立巳

折かけて見すかす夜のさくらかな 寿山

眼を閉て見るやきのふのはつ桜 由吾

雨だれのおさえて落るやなぎ哉 厚薄

大連になつて戻るや若菜つみ 尚故

ひた／＼と桃散つくや風呂上り 曳尾

朝風呂の栄耀上なし花に鳥 中ムラ 正葩

一しきりちるやさくらは水の上 壱岐カツ本 梅舟

聞なれぬ声で戻るや春の猫 アハ徳シマ 橋茶

ちらつくや松のあいだの人と花 梅守

朧夜の須磨みゆる迄歩行けり 友樵

わき目から功者いはれて接木哉 向栄

菜の花の中になりけり常夜灯 鸞巢

はつ花やこゝろ覚もあるあたり 鸞石

蛙からさきへ暮たる門田哉 白地 一秀

茶のしぬい時におもふや婆々が花 サヌキ和田ハマ 今是

桑の雫をたらず張繩 千崖

町尻の築に小鮎の飛ぞめて 是

秋一本にあまる点合 テマガ 是

山の月人のうしろへ又廻り 是

ふくろの柄のよほどある嵩 カガ 是

やぶ入にお寺の犬もつれ歩き 是

暗いところで見えた億病 是

手拭をくひさきながら啜をつき 是

はした金ではいきぬ池上 是

雨がちで積りの違ふ瓜なすび 是

飲み相談にのらぬ馬医者 是

這まはる百足を紙にひん捻て 是

ひとつもたゝぬ船の剃刀 是

根問した従弟京にはなかりけり 是

月を寒がる千川山伏 是

あちこちへ折らるゝ枇杷も花の時 是

はや来て呼はる辻の粥やろ 是

お化益もいかなたがはぬ遊行講 全

蔵のしまりに念シついでやる 是

姫といへばひとり年わかには 是

あそび勝手のちがふ城崎 是

落馬した後はふつゝり酒も止め 是

盲ずもふによらず腹すぢ 是

大祭小まつり秋にまたがりて 是

べそりと月にきゆる幽霊 是

樟脳やら何やら臭き廊下先 是

たゝ居り功者病み功者也 是

まめ銀をちよつちよと人にくれらるゝ 是

押だ仲間の最う戻る声 是

盗まれてから鶏は置もせず 是

塀のあはひの竹のはびこる 是

押水に押されて通るちり芥 是

あみにかゝつた公事が只済 是

湯上りの腹つき出して花の陰 是

鳥帰る時もらふ小肴 是

天鷲絨の帯に汐干の埃かな 観音寺 百泉

ぬれて又一入白し梅のはな 松堂

やぶ入や先づ七兵衛が届け状 啄之

もゝの花さくや窺ふ古手買 瓜来

青柳に肩休めけり筏さし 木牛

ぬすみ気に月かざす也梅の花 車良

昼からは弁当かるきひばりかな 車乙

はなちるや月夜鳥は只の山 車外

露の臺となりの用に立にけり 去高

道とひによればさくらの噂哉 タカマツ 琴糸

うめ咲て女礼者のきたりけり 女梅花

手に物のつかぬ日和やはつぎくら 涼起

湯もどりや顔にひやりと春の風 待月

鶯たつて角ぐむ芦を見出しけり 名栄美

山焼や請合がたき翌日の空

李蹊

ついで来て駕籠す、むるや春の風

三千磨

猿曳の先へ来て居るわたしかな

可都彦

てふくくうかへ付て廻りみち 女鷺里

さし上て子にもたせけり梅のはな 猗竹

跨つて手もとさけけり風のいと 由キヒコ改 呆人

(二四ウ)

京道へ出て薮越やはるの月 白トリ 李上

鈴つけた小門も見えて啼ひばり 峨月

なみよけの草木にうれし春の月 河内 其岳

宿ひきに笠わたしけり藤のはな 今是

青柳を心おぼえや夜の家 茂権

花も人も安げにみゆる平地哉 アハチ 李長

はな咲て壁にしめりの月夜かな 民磨

日のすぢやふかれてのひるの大柳 岳龍

見た上を提て戻るや山ざくら エ井 玉泉

(二五オ)

明やすき夜の小口也花に水 モ、カハ 月亭

傾城のあふぎにのせし董かな シツキ 可権

淀川を間ちかく見るや隴月 如水

五七間飛ぶおとのして夜の雉子 トリ井 花橋

一しばり囉ふてすます齋かな 下ハタ 鳥秋

あさ沢の闇ほのめかす柳哉 カウ 鷗池

ちかづくに旅の望みや二日灸 ナカムラ 直水

春の水杖ひくかたへ流れけり 女 曉梅

蓬萊の置所まで恵方かな 、玉梅

泡雪に焼過したり鍋の芹 鶴頂

菊苗のぬす人流行月夜かな フク井 星介

うぐひすの音にくるしむか飛はづみ ツ、井 文似

物もうといふて来にけり若菜元 タナカ 文鷲

二夜三夜梅にも減らぬ月夜哉 カタ、竹景

うめ香に茶を乞れけり小柴垣 竹言

月もある哀は梅のちりご、ろ

李明

も、咲や障子に影のうつるほど

土堂

はきものを替へて逃けり二日灸

乙人

正月はみな向のよき戸口哉

景中

うぐひすや一声跡の身は軽し

月橋

旭もつ禁の家やうめの花

青柳

雪とけてもとの律となりけり

春草

鶯にさはりやすらん茶のけぶり

芦堂

さつぱりと浪のおとなき子日かな

雪橋

手のひらに乗せてきにけり雀の子

柳橋

抱き付てしめ繩く、るさくらかな

亀島

何か降やうに見えけりおぼる月

全

捨られぬ山なり川の柳かな

亀文

庭掃いて柳行義に見たりけり

李堂

たつぷりと咲梅見たり梅の中

アヒカ 楚竹

最そつとになりて桜にひろひ沓ミナト

大麓

はる雨や子供のさがす座敷中

南音

畑ぬしに断りいふや夕ざくら

ニシ川 葛老

しら魚にもいふ朝の曇かな

エキ 芦邦

やま桜表は人の寄勝手

佳城

我かけの先しみぐくと春の月

柳サハ 茶笠

海苔とりて居てこそばゆし足の痘

竹タニ 茶城

立ざまや宿の紅梅月のさす

ス本 来青

磯臭き宿もかまはず花の雨

郡下 梅堂

夕暮もなくてさくらさかりかな

龜跡

提げ桶の水ゆりこぼす董哉

霞涯

見て置し去年の葉のはつぎくら

ツ井 沌々

鶯も来そうなおとの笈かな

ヤナカ 杜来

年の寄ものとはみえぬ柳かな

杜業

ねぶりく見て行旅の柳かな

エチ川 秋橋

見きはめて切れれば落けり花つばき

上ハタ 青栗

山風に追れて出たり蝶ふたつ

エジリ 寿山

咲花にさはりそうなる軒哉

イヨ吉タ 鶴雄

囉てのち切枝のなきつばきかな

西条 卯角

うぐひすに背中あはせの木挽哉

大ヌ 桑戸

いらぬ火のもやしてあるや春の雨

一行

菜のはなや吹き合て行たばこの火

稼暁

村中に名代の水や藤の花

ウハジマ 素亭

屋根の荒直す間もなし梅の花

雪瓢

野男の阿りぬ猫の遠がよひ

兵ゴ 徐全

塀ごしに矢音きくなり木の芽時

北窠

青柳や白にたまりし宵の雨

其橋

温泉じめりの浴衣ひやつく春の雨

木光

うぐひすやちつとの事で垣の外

江居

万歳の見えつかくれつ小松原

九阜

むつまじき中もみえけり雨の雉子

枳堂

春風や二人になりしわたし守

漆水

鯉の背に添てうごくや落椿

竹堂

月夜ほめ合て花見の迎ひ哉

万雅

村中に一本白きつばき哉

九梁

廻らずに窓からくれる柳かな

止鳥

飛乗れば飛出る舟の蛙かな

ナニハ 松隣

水うつておくるや苞の露のとう

盧中

梅折て響に陰へかくれけり

蕪栗

折にくひ枝は残りて月の梅

正朋

はる雨や野を荒廻る朝鳥

眉岳

袖ぬちて万歳わたる小河哉

鼎左

あき依茲へのけたしさくら咲く

千尋

隙のいる返事に添へてうめの花

庵女

田の魚に人立するや夕霞

菓翁

褒られて折戸明け置椿哉 自龍

ちる花の中にもあるや思事 吐屑

待くし日の花にさへ無きたかな 幽草

方丈の窓も明きけり梨子ノ花 一肖

行春や宿の古駕結ひ直す 河内モリ口 梅古

手療治のよく利く朝やはつ桜 サカヒ 青隠

欲ぼりて折そこなひぬ梅の花 檐鷗

はやさで遣ふ庵の七草 蒼虬

ひばり啼野風の中の湯に入りて 雨什

賀の茶袋をよく配る也 鶻

積めるだけ薪を積せる朝の月 虬

こぼれ残りも多ひ紫蘇の実 什

下略

下檀は胡座かいたる雑哉 津 団釈

芥子苗を持て出さるゝ温繫かな 女 千町

ちる花を見れば折気の止みにけり 畚民

うぐひすにひと足もどる街哉 田日

柳見て船のくちつき止にけり マツザカ いはほ

樹にばかり咲ても居らぬ椿かな 普品

故郷も恋しうなりぬ花のかけ 樋柄ウラ 筍荘

親子して柴結ふ花の麓哉 南岡

紅梅に春のしみこむ夕べかな 曳尾

先へいて人呼ぶ花の木陰哉 霞塘

うぐひすや雨気になりてつゞけ啼 川サキ 荷亭

梅もらひこぼした花も拾ひけり 梅塙

啼よいか鶯けさもおなじ枝 山田 杉堂

これからが社地堺也赤つばき 文外

挨拶もはれがましさやはつ桜 外松

石橋やじつとりぬるゝ朝ざくら 芦角

傍へ来て折枝はなし梅の花 在測

かたげ来て道のあかるき桜哉 菊有

店者の前垂かけや夕ざくら 昌風

何の気もなくてさくららの日和哉 松扉

ばつとして暮をいそがぬ桜哉 桑湖

ゆく水の中にすぢひく田螺哉 松圃

春風を知る人多き塘かな 桃圃

取付た鳥も吹るゝやなぎかな 淇石

春雨は吉野見に行たより哉 蚊亭

山吹やつい手のとゞく水のおと 春余

桃さくやけふは酢売の門ちがひ 一提

山道やひばりののぼる処まで 倭松

梅さくやちかづき出来るおく山家 玉梅

遅ざくらちるや船待家のあい 東居

奉加場に久しい魚や花の雨 ナゴヤ 黄山

養父入と見えて田道へわかれけり 吉田 玉養

山を焼く明りはさかず厠みち 三岳

手拭の一文染や春の風 苟美

雨の日も隙には見えぬ燕かな 蓬宇

坊中にひとり絶えず接穂好 水竹

吹て飲む茶にあり付や啼ひばり 東ウラ 南畝

流れ来て芝に淀みぬ春の水 ヲカザキ 波文

湖へ出張家尻やうめのはな 塞馬

鶏のほこりひかへて御慶哉 青可

菊苗の根分ざかりや奈良巡り 卓池

ちらほらと梅こぼれけり洗ひ足袋 稲居

うき立て咲に間はなし山桜 梅老

夜明から湯屋の賑ふ柳かな 梅岳

静なる椎の木陰や花の宿 朱芳

買ったての草履ぬらしぬ花戻り 五蓼

菜のはなやおして膳出す昼下がり 流芝

夏ちかうなるや鶯浜で鳴く 伊豆網代 物外

うぐひすや啼場もとめに藪あるき 江戸 何丸

樵りのこす木の真中の辛夷かな 三千香

暁やさくらにぬるゝ鬼瓦 杜山

洗足の湯にうつりけり春の月 武州ナカセ 寄三

鳥の巢で先づ安堵する山路哉 史千

ぬれたれば庇にとゞくやなぎかな 新川 荷少

夜のふけてさがすや海苔の遣ひさし 得蕪

腰かけて草臥の出るさくらかな 万頃

神棚へ置けり海苔のあぶりさし 淀バシ 小圃

木陰なきところで消えぬ春の水 一楼

駕籠昇のよく知てる柳哉 エド 南涛

浪杭に四方見てゐるつばめかな 卦龍

年玉の手拭おろす花見哉 千輅

盃へ先づ請にけり花の露 龜程

何かまだありたう見えて雛の前 了知

蛙啼ばかりに更けて隅田川 麻交

山の木のあらために出る二月かな 有月

咲出してからも伸るや藤の花 松什

連翹や瓜マ立てみる小藪こし 浜吉

梅持て這入るややはり梅の家 抱儀

行春を心せわしき若葉かな 大梅

泥草鞋はたい木也やま桜 梅室

人の行あときへゆけばさくらかな 下フサ佐ハラ 桐雨

梅の花手札を出して詠めけり ツノ宮 比古

灯ともせばきつと霞むやかゝり船 上ミシマ 子行

銘くゝに旅人潜る柳哉 田湖 之桂

山桜わけ入過て里ちかき 馬ハシ 斗圍

昼しばしくつともいはぬ蛙かな 雨竹

おい／＼と返事しながら接穂哉 植房 方舟

田から田へ水こすおとやおぼろ月 呉郷

申海鼠干す家の並んで初乙鳥 梢陽

搦手は十日も遅きさくら哉 梢山

物さがす手燭でみるや巢の燕 神サキ 村丸

家の棟の雪は解たりうめの花 香月

唐がらし焼は隣かはるのあめ 江口ノ里 幻芝

淡路島へ鳥も通はず朧月 野栗 川風

三日月の跡はさくらの月夜哉 里風

欲ほりて雨にあひけり花の中 一晷

ふところ手してつまづきぬ春の月 呉剛

年寄の小橋懸けけり梅の花 玉子

折らせぬといひし桜も散にけり ヒタチ安久良 一兆

ささらぎやかゆき処へ手の届く ツクバ 風実

梅折て億病直す野道かな 小川 よし香

【参考】天保三年『花供養』に既出する。

老ぬれば花にも泪流しけり 上毛前バシ 嘯洞

心ほどうごきもやらず花の風 宜得

折心今さらはなにへだちけり 許友

横町へ流れ出しけり春の水 足利 嵐斎

うぐひすや尋あてたる酒匂川 ヒコマ 素考

昼からは市も立けり春の雪 栃木 みち雄

蓋とれば月のさしけり若葉籠 南部五ノへ 文喬

山間にしばらく照や春の月 蕉秀

持こした花草臥の入湯かな スギ田 英泉

院内をちかみちにする二月哉 丁酉

花の香やおなじ桜に深く入 秋田 国彦

夕暮は花のうしろへまはりけり 御風

おくれても残りはずまじ小田の雁 佐渡小木 良談

揚ひばり若菜畑のあたりから 信州長ヌマ 一琢

咲過てさびしき門のつばきかな 鵲村

帆に風のきかぬ日和や春の行 木ノ下 石鳴

軒並をちがふた家の梅の花 ヒダ高山 有美

はや一人二人見て行柳哉 加州シマザキ 玉汀

鶏のさかした跡や露の臺 アハカサキ 如翠

春雨や軒にかた付馬の鞍 淇汀

蜂払ふ扇の風にちる桜 兎郷

川船の苦さらつかす柳かな 篤治

履もの、心にそはぬ梅見かな 金沢 棹江

芹引てきて我きりの子の日かな 太甫

種苞や大事そうにも扱かはす 文章

損せずに一夜こしたりか、り風 曾魚

折らぬ人まで呵らるゝさくらかな 超翠

摺墨のかはきもはやし梅のはな 一身

提灯の火も間にあはぬさくら哉 正川

匍匐てすみれそろゆる社檀哉 素海

雲に乗やうにおもふや花の奥 暮白

夕雨や雉子と真向に居る座敷 白樹

あとじさりして見る月の桜哉 錦石

踏んだのもあとで取けりふきの臺 立介

風除をのけるやぐわつと梅のはな 宇牧

梅折てわけて置けり井戸の内 素洞

吸物の塩雁うまし帰る雁 一雄

鍋洗ふ手もとの草や啼ひばり 知雪

藪入の小もどりするや戸口まで 春峰

手の油おり／＼ぬぐふ花見哉 禾曉

ちよつと置振り橋流す雪解かな 三志

大きいとはじめて知るや春の雁 其麦

声かけたばかり花見の戻りかけ 洪亭

帰る迄灯はたてさせず花の中 碧山

納家へ行折に見て置ふきのたう 可杏

瀧にさはる枝もありけり遅ざくら 疎蓼

寝つかれぬ夜は朧なり猫の恋 一洞

石壇のひと足づゝにちるさくら 鷗池

塞ぐ炉もひとつは翌日へ延しけり 大聖寺 北園

養父入の知つた森なり聖護院 木雄

喰た事のなくとも摘むや露の臺 風竹

さくらから道も付うそ谷の家 田鴻

わか草や今起て行鹿のあと 梅々

山吹やこれから末は深ひ川 桃夏

下駄で出て草履で戻る梅見哉 理竹

よつほどの癖好なり梅のぬし 呼亭

さし水に濁る井もあり雪解時 丹嶺

菜のはなや出水の跡のふりもなし 葭流

はつ花や樽にかけたる宮の鍵 小松 里魴

真直に煙のたつや花の中 ノト宇出ツ 桃幼

ごもく場に能しだれたる柳かな 七尾 楽齋

うつくしきひとつ家もあり梅の花 ゆみ

重箱の中へ入けりすみれ草 七尾 貞章

磯の雉子ふた声めには立にけり 竹塙

いけてからきつと場の有柳かな 六峻

一木づゝ夕かけ持つややま桜 古雀

おき／＼や梅の匂を嗅でみる 淇園

花の夜やふとんひとつに客ふたり 路蓬

乙鳥のくゞる程巻く簾かな 松美

はなちるや着替とり出す挟ミ箱 半江

ちる花も同じいるなる椿哉 女 閑月

青柳の外に当座の風もなし 越中魚ッ 儂衣

(三三六)

(三七七)

(三八八)

(三九九)

(四〇〇)

(四〇一)

(四〇二)

(四〇三)

(四〇四)

(四〇五)

(四〇六)

(四〇七)

(四〇八)

(四〇九)

(四一〇)

(四一一)

(四一二)

(四一三)

(四一四)

(四一五)

(四一六)

(四一七)

(四一八)

(四一九)

(四二〇)

(四二一)

(四二二)

(四二三)

(四二四)

(四二五)



犬の子の體痒がるかすみ哉 田中江 万月 (四四オ)

喰すてにしてある花の座敷哉 アサ小井 烏都雄

申柿のあまみもぬける霞かな カタ、成章

一むしろ本膳並ぶさくら哉 文葉

嚏のあと心ちよき雉子の声 蕪城

蓬生に片つら咲ぬ蛆の花 禾郷

砂潜り行や柳の下流れ 世岐

陽炎やちよと休むにも横になる 雲水 支鳴

雉子なくやけふがはじめの握り飯 舟木 一駒

雉子鳴や林の中も水のおと 川島 嗽石 (四四ウ)

船よせて見ればちり来る桜かな 隅井

ところ／＼山に灯のあり春の月 玉山

ちかみちをして隙のいるすみれかな 松月

今もちるふりや桜の水うつり 太田 麦村

はつ花や見付ながらも測の上 蕉雅

住かはる家もさくらのさかりかな 魯山

灯のとゞくだけの事なり夜の桜 嶺月

またたる処ある道やはつざくら 湖領

ひや／＼と花にさはがし夜の瀧 榊扉 (四五オ)

留主の戸もさ、ずに置や花ざかり 草父

ついは氣のつかぬ処や遅ざくら 高シマ 雪山

油断して風雅引込し梅の花 音羽 田美

さはがしき船場の空や帰る雁 大ミソ 麦洋

取つきはよき影もあり山ざくら 一居

帰る氣のそろへば月の桜哉 ワラソノ 漁村

梅さくや黒ぼこ道のうはにり 万木 北馬

夜の雨春はこ、ろに闇もなし 文嶺

花持て出るや戸口をあとにじさり 五十川 節外 (四五ウ)

うぐひすや朝から濁る河の水 鶴丈

ちる花に一むれ山を越る鳥 白司

川こした事はわすれて花もどり 辻沢 鹿彦

鹿間に又行筈や花の山 淀 秩草

先づ吉野向ひて歩行や春の旅 雲峰

ふところへしづ／＼ふりこむ柳哉 源良

今も降空に灯を増す桜哉 其友

寺とさへ言へば先づ有さくらかな 友之

ひと安堵するや桜へ小半道 吟風 (四六オ)

竹の根もゆるぎそうなり雉子の声 三千丸

五六日犬もはなれぬさくらかな 春來

うち越る山のとぎれやうめの花 雪川

鳥はみな晴さる声や春の山 兔齋

庭ざくら家に勝しと指さ、れ 支雪

菊桐の紋でふさける桜哉 掬水

花の主見てゐる隙はなかりけり 大之

明行やみな日帰りの春の山 軽舟

小座敷へどつと持て来る桜かな 一坡 (四六ウ)

粉炭まで焚仕舞たる弥生哉 魚物

今下りる野をかられけり鳴雲雀 赤水

啼ひばり笹一枚にかくれけり 素琴

眼を摺つてたしかにしたり初桜 サガ 丈翠

凧あげて豊かな島の島かな 梅通

いり日にひとつ帰る鈴鴨 並隆

立ながら五加木のしたし手にうけて 万籟

残りすくなき箱の蠟燭 芹舎 (四七オ)

上役のかはりに居ばる朝の月 南溪

ことしもひとり生えし薺苡 蒼虬

勘定もたてずに仕舞下り籜 栗哉

雨具もなしに伊勢へ出かける 通

めづらしう湯屋の鉄の能うきれて 隆

疵なりに袖のはける冬向 籟

のろ／＼と会式やすみの大工ども 舎

糞シした犬にかけらる、砂 溪

藪山を登つて下りる月の宿 虬 (四七ウ)

只居る者は居らぬ秋入 哉

粉ぐすりも水では飲めぬひや、かさ 通

立寄合のどふど日暮れる 隆

大綱が花のさかりに出来あがり 籟

彼岸ぶくろも集らぬ年 舎

東風吹ばいつでも煙る台所 溪

膏葉踏んでつまだて、居る 朝陽

栽かけてくる／＼まはず松の向 哉

三日にあげず肴屋のわび 虬 (四八オ)

銚町で無うても多き人通り 隆

かたづき先をそつと見て置く 通

ゆづられて分シに過たるわたしがね 舎

木の実あふらの灯口すりこむ 籟

鶏しめた手も洗はずに横になり 陽

名主の損のか、る村中ウ 溪

お旅だけ屋根の出来たる暮の月 虬

ぼつと赤らむ柿が四五本 哉

酒造るあいだは遣ふ水車 通 (四八ウ)

石なぶりして切らず細引 隆

拾ふたる財布そこらへ見せ歩行 籟

休みあげくの床はひつそり 舎

土橋の際まで花は咲つめて 溪

活きてるやうな釣台の雉子 陽

かすむ日や二階ばかりの上がり下り 京金菜

舫ひとく眼先へ来たり蝶一ツ 貨僕

白魚やそゝいで落す網のはし 梅通 (四九オ)  
 あれ〜し重ウの肴やちる桜 芳英  
 しつかりと一りん咲ぬうめのはな 芹舎  
 箕仕事にあふち散らすや軒の花 若雅  
 出もどりの気であてたりはつ桜 南溪  
 一人前腕かりに来るさくらかな 並隆  
 土手ごしの嘶蛙にまぎれけり 万丈  
 はつ花やおもひもよらぬ小ぐらがり 太老  
 如在なう煙をたてゝ花のやま 翁杖  
 道下手の眼にも立ぬや花の空 草烏 (四九ウ)  
 降り足らぬ雨のあしたやうめのはな 光影  
 はやう寝て日の出拜まむ春の海 蘿文  
 壁ごしにきこえるおとや花支たく 来元  
 洗ふときしら魚ひとつ流しけり 梅窓  
 負ひ合て万歳わたる浅瀬かな 狐月  
 湯に入てもどれば内も花の春 山狐  
 朔日や祇園かけてのはつざくら 遊蝶  
 言ひ出して間もなう花のさかり哉 李角  
 山風にちよつとそれたるひばりかな 喜楓 (五〇オ)  
 出来合て朝めし出すさくらかな 栗哉  
 腕まくりしてもどりけり花の雨 馬角  
 鶉の糞ンによごるゝ花も盛かな 杉雪  
 よそほひの日に〜かはるさくらかな 赤楽  
 晩鐘はすみても花の暮おそし 白扇  
 うぐひすの小枝をつたふ日和かな 衆芳  
 けふははや浪もかぶらで芦の角 馬友  
 なのはなやかど中に出て紡ぐるま 坐魚  
 替え駕籠におこされて聞雲雀哉 伴橘 (五〇ウ)  
 長檠もひとつ持けり花の宿 正阿弥  
 山畑やあい〜にある梅の花 夢外

初花やまだ薄濁る下流れ 玉叟  
 暮る日に未だ人声の野梅哉 浮席  
 花にさへ好き嫌ひあり八重一重 醉露  
 炬ふさいで内には居らぬ主かな 恩古  
 銭こぼすおとのきこゆる霞哉 侅美  
 幹までも濡ぬ木はなし春の雨 杜蓼  
 接木して居れば飛つく小犬哉 杜鶯 (五一オ)  
 喰て仕廻ものには惜し、つく〜し 月峰  
 道ばたや捨た茶殻もかすむ朝 楓関  
 鶯に筆のさやぬく音す也 女よう  
 寝時分は近し桜におりる風 乙雅  
 水で顔洗うて来るや藤の花 初六  
 摘んだあとふみ置庭の若菜哉 呉明  
 酒呑のおとして行ぬふきのたう 蘇山  
 新家の木香募りけり春の雨 百池  
 折て来て驚しけりはつ桜 梅價 (五一ウ)  
 ちかよれば谷ひとつあるさくらかな 可大  
 ついと来た画眉鳥もゆるる柳哉 祖郷  
 山吹や小家取たのではつとする 万籟  
 蚊の出るときけば懼し花の宿 榛堂改 朝陽  
 宝びきのはじめさはがし居りやう 夙也  
 折るおとに山深うなるさくらかな 千崖  
 しそく灯のそれにも花はこぼれけり 蒼虬

是から先は車通さぬ 茶栖  
 丁稚らが葉とりこむ昏の月 いはほ  
 新米めしのこびる鍋くせ 布泉  
 下略  
 今朝あたり折た跡ありうめの花 シヒキ田 宇栗 (五一ウ)  
 腥きにほひをまぜて磯の梅 志賀  
 すて植のえだぶり軽きさくら哉 甫列  
 翌日の日も案じ事なし花の空 井花  
 暮ながら人声高し花の山 升山  
 鶯のあと逐行や里のみち 加芳  
 つばくろのおとすや壁の枯れ柀 汲古  
 雉子の来るだけはふさがず垣の穴 山田 潮花 (五三オ)  
 常人れぬ寺もゆるすや花の時 江州アサ小井 一峰  
 家付の梅は咲けり長屋から アキヒロシマ 静雨  
 店さきを貸るや松ひく身拵 蒼虬  
 野風に声のちゝむ鶯 宇栗  
 ふり売のたなごも春は活て居て 虬  
 使者のしほる雑巾 栗  
 まだすこし出雲の残る朝の月 虬  
 作り次第の齋の粟稗 栗 (五三ウ)  
 下略  
 曙の似よる木もなき柳かな フンゴ日田 五流  
 春風や塗ぞうち乾く赤鳥居 カマ大聖寺 豊収  
 とつくりと貰ふて折や梅の花 ワカサ 椎山  
 二三日におりごろ過てうめの花 大郭  
 とし寄に折て囉ふや桃の花 大和吉野 虎遊  
 人並に朝起もしてうめの花 玉池

つきのばす仕事ばかりや花ざかり 亀玉

去年伐た程は又延ぶ柳かな 也亞

すぐ過て折に苦勞な野梅哉 (五四オ) 玄々

水門の明て有なり夕がすみ イセ津 日佐世

箒とる人ぎれしたり花の中 蟻扇

抑と垣をせゝるや花の風 照星

下萌や履物かえて庭歩行 大坂 自楽

苗代やちよろ／＼水に魚はしる 鷺雪

袋から炭出す花の小陰かな 京 霞暁

ついと来て小海老の抱くや芦の角 瑞斗

咲花の中や何伐る斧のおと 史龍

紅梅の出過た枝に朝日哉 理芳 (五四ウ)

翌日もいるやうにのけたる齋かな 夙也

わする、ばかり永き正月 プゼン小クラ 可推

牛の子の鼻穴あける春風に 木父

取つぎはなき籠もとの人 推

待宵の客の手筈にひとはしり 父

萩もす、きも弓を張つゆ 推

下略

頭痛すと上品めかす春日かな 木父

暮る、迄鳥啼里の余寒かな 可推 (五五終オ)

足袋の泥もんでおるなり花の宿 梧堂

朝鶏の鳴に這入るや山椿 木斎

鶯の声や鼓のそふ在所 松風

花供養終

(五五終ウ)

京東洞院通

湖月堂

御摺物所

菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

底本 白鹿本  
校異 月明本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

東山芭蕉堂に毎年

花供養あり。そも此供養に  
捧る花は、風雨をいとふの

さわりもあらず。もろ国の韻士、  
翁の像前に備へんとの

花なりけり。されば、月の夕べ、  
雪のあしたに芳ばしく、

咲も残さず、散もはじめず、  
この営の年々盛なる事、

蒼虬老師のいさほしなるべしと、  
竹酔叟太老堂謹みて誌す。

天保五年晩春

さつとした逃挨拶や花のなか

水の澄む間も見えぬ鮎波  
焚たての飯に青海苔ふりかけて

こける障子に首をちぢめる  
しづまらぬ竹荷の跡の土埃り

近処だけする七夕の礼  
降かねて月の出て居る癖のうへ

かる一段になりしはや早稲

並隆 (一オ)

預つた子もそれなりに貰ひきり

花瓶のもりに手をあて、ゆく

間柱のくちてあぶなきおく座敷

髪くるくくとむすぶ関前

着るたびに襟のしくつくぬき袖

うごかず居る芍薬の蟻

表向昼は出られぬ病気ひき

見たやうである伊賀の小飛脚

魅をふんだ足のひやつく暮の月

きのふの汐で鳴むしもへる

薄葉だけ別にしわける若たばこ

だれにも見せぬ京行の金

不掃除な角行灯のいたくと

常に小言のたえぬ網本

二度まきの麦も大かた生揃ひ

借ては済す葬の脇ざし

わるくさき茶漬の菜のしほがつほ

梶の角のうれぬ軒下

披露せぬ聲も出て来て涼まる、

近うきこゆる雨乞の鐘

砲礮の土もだんく取つくし

根太の膿のかほへとぼしる

昼すむと火の気もおかぬ台所

呉れると直にすぐる青藁

肩のよい法会くの天気まん

ぼつりくと出来る石垣

夕月のうづれば鳩の巢に戻り

はいて間もなく汚す夏足袋

さつぱりと鞠に入たる一身上

眠たくなれば何処にても寝る

恩古

月峰

凡鳥

振々

若雅

岱年

梅通

杜鷲

伴橘

梅價

俔美

醉露

衆芳

羅浮

喜楓

馬友

祖郷

青可

正阿弥

芳英

乙雅

太老

馬角

玉双

光影

夢外

よう

百池

瓶山

朝陽

恩古

汐ぬれのま、でつくねし小風呂敷

よろこび鴉はやうからなく

どさくさとさて夜登りあへかへし

油断した間にあがる蒸もの

帯の端ふまれて居るも気の付ず

淋しうおもふ茸がりの月

家しりにほちつく音もおとし水

虫をふるふて茹る中祓

陰口をしかられながら言出し

ね台直すあさく役

さく花に御室の用事こしらへて

餌のきれたやらささく駒鳥

右一順

たのしみのせんぐり出来るさくらかな 近江西湖 卜齋

葉ひとつでかゝえておちぬ椿哉カタ、世岐

人ちらく花ちらく知恩院、花園

竿竹を渡していやし門の花、成章

はつ午や京でわかれし人にあふ タカシマ 湖郷

不足なき花当分のひより哉、朗月

春雨やゆふばへしたる湖の降り、五車

鳩一羽何処からか来て霞けり、五十川 白司

木まぐらの寝にくき宿やうめの花、五十川 鶴丈

寝て居ても気ならず花に雨二日、日爪 舞雪

わか鮎や恩にきせたる持て来やう、マノ 江亭

藪のある間雪ふむ余寒かな、川シマ 松月

鳴止だ黄鳥のぞく素足かな、嗽石

水主銭もまして遣りけり朝がすみ、大ッ 蕙布

摘いそぎして屑にするわかな哉、太田 麦村

さく花や嵯峨は人氣のよい処、ワラソノ 漁村

恩古

鳥都雄

魯齋

蘇山

李角

栗哉

風阿

田美

翁杖

淡齋

草鳥

柴人

執筆

(三ウ)

(四オ)

駕の衆のおきどころなきさくら哉 浅小井 鳥都雄 (四ウ)

人になれて犬も夜を寝ず花の中 マキ 二江

うつくしう日はくれにけりはなの雨 湖東 月洗

何処やかや往て世話しき弥生哉 シガラキ 楓下

から川を人のとほるやうめの月 ハマン 素白

うぐひすやおもひのほかに茨の中 四明

はつ花やちかくてつひに来ぬ所 太令

ひく枝のほかがかくるやふぢの花 半丈

野も畑も見て来て門の齋かな ライツ 其半

春かぜやいたなりにかはくみち 江ガシラ 渭南

山傍において長閑な家並かな 洞居

ちるかたへ目のついてゆく桜哉 ワラソノ 鹿雄

葉も花と見る夜ざくらの明り哉 一化

うめの花貰ふ間も春ながし 仁正寺 一嘯

立替り見るやはな見の宵の空 一 たる女

舞ふ雲雀けぶるたばこに見失ふ 南茂

ものおとは皆片付てはつがすみ 布董

出代の当座ちひさう居りけり 日ノ 木壺

さ、やいて花見誘ふや中暖簾 敬之 (五ウ)

眼に見えてはるのへるなりちるさくら 葛マキ 里童

咲揃ふまではひさしやうめの花 ヒラツ 亀甲

言伝のよくとゞくなりゆふがすみ 大溝 麦洋

分入て方角しれず梅林 タカミヤ 里龍

明星のきはまであげる雲雀かな 四明

うちさしてある山間の畑 可大

落つきの愛相に干鱈むしらせて 明

おも家へゆくと誰もかへらぬ 大 (六オ)

不断より市も賑ふけふの月 明

さつと通りて野分しづまる 大

稲を刈うちは馬にも古荷鞍 明

黙つて居ても人のうやまふ 大

勾当は一代さりの小銭かし 明

はたが邪魔して娘もどさぬ 大

火のきえた巨燧にちよつと寄かゝり 明

浅黄に雲のうつる水海 大

生物も野菜もはしる朝の月 明 (六ウ)

相撲櫓の太鼓見あげる 大

秋さぶく成て頭瘡のかはくなり 明

仏きざんだ屑もふまさぬ 大

袖乞も花に洗濯裕着て 明

のびるひさしにちさき罔両 大

手盥へ五加木の茹湯のけておき 大

負ふ子抱く子に鼻のまめやか 明

駕の前泣つ笑ひつかしこまり 大

近江のわか葉美濃へ吹る、 明 (七オ)

つ、かれていかる毛虫の歩行ざま 大

豆鉄炮もうれぬ雨ふり 明

神棚の明りで飯は喰仕舞 大

いらぬ普請にいたむ内証 明

瓜茄子鉢へうゑたも種になり 大

さくをほどこす親の精進日 明

出る際にしばらくくらき月の空 大

旅のはなしにたびをわすれぬ 明 (七ウ)

眼を閉て薬まるめる手のかげん 大

隣とちと犬も中よき 明

うつむけて舟まで蟹の虫ばらひ 大

茶釜のしたをいつもけぶらす 明

ついそこの花も見る間のまれにして 大

はるかにかすむさとの人声 明

鰐の尾の永き日すがらほうらく、ミノ大ガキ 雪荷

何をしてはるく、ゆくぞ揚ひばり、草菜 明 (八オ)

たゞでさへ気のうかる、に蝶の飛、梅翁 大

はかどらぬ女道者や木瓜の花 ヒララ 南弓

じりく、と日のくれこむや霞む中 ヲハリ 沙鷗

塀合を出てまちあはす花見かな、而后 明

花の中人のたちよる老木かな、黄山 大

灯台に来ては戻るや花のかぜ、梅裡 明

かよひ盆出して受るやちるさくら、我責 大

とりまぜた挨拶もなし花ざかり、金樵 明

すつくりと脱だ着物やはつぎくら、素汀 大

一道者とほしてあげるひばり哉、李曠 明 (八ウ)

龜朶一把おこしてとるや露の臺、市雪 大

先へ来た人のあしらふ礼者哉、雨鳥 明

貰ふて来た根もほどかぬにおち椿、思文 大

しつたかほばかり残りぬくれの花、烏津 明

横町に擔桶ならべるや花ぐもり、丹青 大

乗もの、まはらぬ庭やはなの雨、桃鳥 明

かくれ場も見えぬ河原や走る雉、青可 大

はる雨や泊た寺で好みくひ、夙也 明

麦一穂のびた小坂やはつぎくら、一雄 大 (九オ)

方角のさまらぬかぜや花のなか ヲハリ 秀外

はつ花や埃りおさへによきしめり、蓬陽 明

見たうちの一番木なり谷の花、路舟 大

出用意をして居る朝やはなのちる、箕風 明

生かえて答にするやうめの華、蘭皐 大

昼飯の済だ気で居る接木かな、可イ 明

子に先へ持たせて遣るやいかのほり、木儼 大

二度来ても留主でとられず露のとう ミカハ 卓池

喰つみの方く、にある宿屋かな、波文 明 (九ウ)

引て来てみれば皆よき小まつ哉、五蓼  
 潜る気とほればたかき柳かな、流芝  
 花の友町出はなれてそろひけり、ヨシダ 三岳  
 休むより歩行に眠し芽花時、蓬宇  
 戸をさして隣あそびやも、の花、玉養  
 くだびれて寝る日も華の日数哉、ミヤザキ 陽坡  
 ものいはぬ人の残りて花見かな、遠州原川 可月  
 えだのある箸で物くふ花見かな、呼卯  
 敷ものをふるはで戻るはな見哉、カタセ 竹里 (一〇オ)  
 更て子をすかす門ありおぼる月、渡瀬 友之  
 狩あたるさくらや急に腹のへる、  
 庭鳥も昼眠りするはるの雨、居風  
 あらいそのしづまるあとや春の月、飯田 且月  
 折かけて持てあましけり藤の花、イマキリ 一灯  
 日によつて梅は寒けしあた、かし、東草  
 朝の花雫の、ちにちりにけり、ヨコスカ 亀巢  
 花の山一日あるき余りけり、峻路  
 をりかねる手へ月のさすさくらかな、万年人 (一〇ウ)  
 都への文もとゞけよはるの雁、スルガ 巴明  
 魚町にうるここぼれてはるの月、漣山  
 さくらほどちる花はなくおもひけり、託堂  
 永き日をむざと眠るや供の者、御厨 黄山  
 狼を聞た夜もありはるのやま、沢先  
 蝶くくみちをとられて見て居たり、竹外  
 くさの戸にさだまる花のはなし哉、甲州市川 石郷  
 うぐひすやかほ見せた日は鳴かでゆく、ニラサキ 六垈  
 万歳のあふぎはまつ葉のし哉、相州江ノ島 扇風 (一一オ)  
 かりそめの夕月ならずうめの花、漣月  
 人ごみや花持てあます奥使、江戸 抱儀  
 不器用にみゆる長男の手まり哉、雨邨

気つかぬ処へもりけりはるの雨、のぶ女  
 普請中となりをかりる燕かな、てい女  
 かけ茶やの場処を見たる柳哉、桃機  
 見ておいた家のうれけり梅の花、霞兄  
 間違てはいる小路や木の芽垣、白起  
 うち外へおちてもへらぬつばき哉、壮賢 (一一ウ)  
 はるめいた料理のさぶし梅の花、一棲  
 鶏の眼のさめればゆるる柳かな、丁知  
 はたけまで出かけて来たりとまり雉、雪丸  
 しら雲と別になる日やちるさくら、詠婦  
 どう見ても柳は雨の木なりけり、梅峰  
 饅頭のふみ付てありはなの山、蘿齋  
 小座しきは花見た客の軒かな、仙骨  
 しのぶまの大きな声や猫の妻、五老  
 早う見に下戸をやりけり花の山、竹外 (一二オ)  
 まいら戸にかけさすうめのかほり哉、江戸 得蕪  
 おちあふてしづかになりぬ春の水、雨什  
 あやにくに訪ふ人のある接木哉、平出  
 うぐひすや窓を覗て人の訪ふ、鳥年  
 船頭の齋はやすやときはづれ、猶麻  
 用に出たなりで梅見にまじりけり、柳圃  
 並松や花のころのうつりゆく、ちかき  
 折までの慾とはしつて花貰ひ、怡兮  
 見る外に思案もつかず花の中、多希志 (一二ウ)  
 さし木してさてたのみある月日哉、兔玉  
 屋根替にかけた階子も霞けり、其笑  
 駕に居て露の芽見出す立場哉、松什  
 気つかぬ見どころ出来て花のひる、護物  
 下駄がけや花の近所の人らしき、小柯  
 行春や酒をまつまの空寝人、与翠

雪解やころぶなといふくちの下、八十女  
 おぼろ夜やつもりやうなき池の水、龍石  
 指をるやところくの花の順、何丸 (一三オ)  
 かたよらぬはなのくばりや垣の梅、江戸 英山  
 行灯で済ます客なり花ざかり、有月  
 木母寺の花にうかる、とまり哉、卓郎  
 出直して見ればさくらのちり支度、曉河  
 油断なくまはるや雨のあとの花、惟草  
 しぶくくとあがりて花の天気哉、雲山  
 下戸までが酔ふたふりする花見哉、完哉  
 ぬげがけの手柄みえけり朝ざくら、竹甫  
 ちる花のひとつふたつの夜明かな、粗文 (一三ウ)  
 花提て通ればせまき堤かな、来先  
 田のうへやさし出し花になく鴉、庚年  
 大かぜのあとやしづかにちるさくら、連管  
 見たやうなかほではあれど花の中、春路  
 雫したあとをさくらの匂ひかな、万久  
 水おとの遠くきこえてきじの声、来至  
 黄鳥やこ、も上野の山つゞき、大梅  
 猫の恋ひと夜添寝もせざりけり、由誓  
 境内のゆきどまり也梅一木、禾木 (一四オ)  
 養父入の土産そろひて宵寝哉、寿堂  
 日ぼこりの眼にたつ筋や梅の花、荷堂  
 柴の戸やうぐひす一羽むかしから、一具  
 田にすればなるか、え地に梅柳、梅室  
 翌は上野へ杖をひかんとおもふに  
 寝て居ても枕うごくや花ざかり、詠婦  
 くさめすぐるも蝶鳥の中、五老  
 公家衆のたばこのまる、はるかぜに、仙骨 (一四ウ)

障子あければ舟着てある

蘿齋

竹の火箸をおし曲ておく  
雨がちに春も過ゆく遅ざくら

齋

骨

月の雲皆遠山へた、まりし

竹外

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

たれがはらにも秋はいつばい

老

苗代せよとつ、鳥のなく

骨

嫩なるくさ、へ露はもちにける

外

竹の火箸をおし曲ておく

齋

袴などはく人は来ぬ庵

外

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

猪も念仏のこゑはき、たいか

骨

苗代せよとつ、鳥のなく

骨

まつ火ほそくかきおろす轡

骨

竹の火箸をおし曲ておく

骨

かぜにちり風にまたる、木の葉にて

齋

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

たがひに探りよれば侍

婦

苗代せよとつ、鳥のなく

骨

拝殿で月の出るまではなす也

外

竹の火箸をおし曲ておく

骨

そよぐもの皆す、きとぞしる

老

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

こ、ろさへ質にやりたき秋なれや

骨

竹の火箸をおし曲ておく

骨

嵯峨に居るうち酒をたしなむ

外

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

花見にと来る人をよく持てはやし

婦

苗代せよとつ、鳥のなく

骨

刀などはいらぬはるの夜

齋

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

造作なくとれた無尽に蛙なく

外

竹の火箸をおし曲ておく

骨

早稲田の町の西さかりなる

骨

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

兄弟でけふも一日くるまおす

外

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

重箱といふ娘かほ出す

婦

苗代せよとつ、鳥のなく

骨

ほと、ぎす雨のふらぬが恨にて

齋

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

通夜してもどる唐崎の神

老

竹の火箸をおし曲ておく

骨

世に合ぬ人としば、柴をもし

骨

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

はつ雪ぞとて牛もやすませ

齋

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

鎌倉のころの書ものかしてやり

老

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

あすからははや出家三昧

外

竹の火箸をおし曲ておく

骨

月を羽にのせてわたらぬ雁もなし

齋

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

吠のぬかをはかるあきかせ

骨

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

ごちや、と小菊咲たる宿とりて

外

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

山から出る水のうつくし

老

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

玄賓の死れたやうにしにたがり

婦

雨がちに春も過ゆく遅ざくら

骨

畑うちの口かりてすむ閑処哉、野巢

むかしからのくらみある野梅哉、上毛タカ分尾

さはがしや隣のはなにとしのよる、逸菱

宿引の大事気にもつつ、じ哉、惣社、醋古

真黒にわかくさ見ゆるくほみ哉、可布

かれ柴に雨具た、むや鳴ひばり、下毛足利、嵐齋

一枝は愛相にもをるさくらかな、トチギ、みち雄

蝶にあふてこ、ろ嬉しき峠かな、葛堂

提灯が先にもた、す花もどり、賦三

花のこと牛の来るたびたづねけり、平山

往還もせまし大かた花もどり、静堂

ちる花をかせの又せく水のうへ、董湖

春の夜や鼠のおちし桶の水、信州、鵬村

若猫や笹が吹ても飛で出る、叢

虫啼た縁もある野や董さく、四方丸

梅ほめて居ればくれけり真の火、飯田、素風

夕ぐれや梢にうごくいかのぼり、路橋

正月も月夜となりぬうめの花、素風

炭層にましりてあるや梅の花、ヨク福シマ、江三

はるかぜや男の笠の風ぐるま、桂裡

うぐひすやそつとはあかぬ蔵の鍵、大費

初ざくら来るや魚荷の小付にも、二本松、乙調

いち高い処に隙とる花見かな、杉田、英泉

灯ともせばはし近になるさくらかな、五戸、文喬

青柳の小家へもどる筵かな、会津坂下、再児

谷の間の闇をあつめて帰る雁、斗南

ふりかへる女ご、ろやしほひがた、茶三

蛙なく田を持たながら宵寝哉、五龍

草の戸や蝶にもならで古雛、南部、松岬

はつ音して黄鳥もうれしうな顔、吐屑

山門を明におりゆくかすみかな 越後水沢 ちから

長湯するくせの出来るようめの花 糸魚川 曳尾

うめさくやあた、かみある宿の下駄 保右

むだ歩行するや雪解の廻り道 宜雨

大事がる花のながめもおもくろし 三甫

万才の扇たづねる戸口かな 其誠

大きく苗に付て来てさく葦哉 ヨイタ 杜臯

沖鳴の下へまはるやかへる雁、ミツケ 宇弘

くれがたにひとかぜたちて初桜 北洋 (二〇オ)

夜ざくらや折にさはれば鳥のたつ 夕田 甫十

さしなくや陵守のあさけぶり ノ田 可得

物業もなくて余寒の唐がらし、六日町 伊松

なの花のはてや米つく水ぐるま シラ子 露村

むしりてもく出るつくし哉 一水

なの花にささはれさくや種大根 越前丸ヲカ 古眼

ともし灯を見つめて居れば鳴蛙 友圃

陽炎や尋て歩行料理ぐさ 三日市 恕兮

さし鳴やゆふ日のうつる浦の松 滑川 子光 (二〇ウ)

一処へふたつおちたるひばりかな 文和

鳥居から花見ころに成にけり 砂子坂 克亭

よく鶏のうたふ小藪のうめの花 戸出 渡江

打やつてもどる野梅の高さ哉 魚津 儼衣

巢だちして何処に寝るやら燕め、吉久 蛙悟

牛ひとりあるかせて居るうめの花 輅乗

黄鳥のはつ音に一座黙りけり 保久亭

使者の間の工合ほめけり梅の花 梅人

くれ残るものやしら帆と梅の花 白二 (二二オ)

ゆふかはづきいて親子の畑上り 岨雲

杉箸の捨てあるなり花の中 可暁

挨拶のことばふえけり庭の梅 禾芳

ちるにしてくらくらからゆく花見かな トヤマ 葦村

折たうめ窓から見せて去なれけり 丈水

ついその田から霞むや昼日中 如夢

陽炎のたつやつぐる壁の穴 木司

刃ものなど当たことなし庵の梅 凡丈

朝の間はあさのかぜふく柳かな 水原 乙郎 (二二ウ)

野のうめや瓢さげたる人のゆく フクラカ 尺童

うぐひすの東向くときはつ音哉 千束

鶴のなくかたを霞のはじめ哉 霞舟

松ばかりまだきさらぎのあらしかな 其嵐

手にとれば見たよりやさしすみれ草 一鼠

黄鳥の啼こゑ竹にひびきけり 雪風

青柳の吹しづまれば鐘が鳴 峨月

塗あげた畦に来て鳴つづめ哉 文里

みちばたの一本のまつに春の月 其汀 (二二オ)

町ばなれするより処ぐの椿哉 今石動 芦喬

うぐひすや水う聞だにまだ朝氣 加州金沢 棹江

鶯の急にはこさぬ大河かな 太甫

はらふ手に皆ひらつくやはるの雪 一雄

炊煙のつと広がるやきじの声 錦石

薄べりのかしぶりもよし里の梅 角丈

三日月と影さしあふや岸の花 月雄

日はうらになりてさくらの一けしき 如雪

松よりは西日てらつくも、ばたけ 疎蓼 (二二ウ)

這入らずにゆく足おとやはるの雨 曾魚

大枝に折て倦けり赤つばき 白樹

うぐひすや這入て見れば広い背戸 我龍

乞ふ人にまかせてをらす柳かな 海若

けふも又雪のけしきのうめの花 固来

うめさくや藪にもおかぬ掃溜り 超翠

気のつかぬ処から揚るひばり哉 一洞

おそろしきぬけ毛のたつや猫の恋 立介

うめさくや流れもはいる堀のうち 文章 (二三オ)

買ったしをせぬも自慢のわかな哉 カナザハ 可杏

日表を覗きまはるや赤つばき 素洞

乗初の舟したてるや遠柳 完和

かつぱりとかけて高みの椿かな 北州

歛間もなき菜の花のさかり哉 歩兵

酔ふてからた、きにまじる齋哉 春台

駕かきの立場も長しふぢの花 其水

はてしなき上戸ばかりや夜の花 淇亭

床几など馳走に出すやうめ日和、宮越 巨泉 (二三ウ)

田一枚のりこすはるのわたし哉 小マツ 里鮎

折うちにはかすのもある蕨かな 大聖寺 北園

かへる雁日ごろ見たとはおびたし 木雄

精進日に出たが不覚や山ざくら 丹嶺

生垣のはしにさしおく柳かな 可考

たれ過てもて余したる柳哉 能登飯田 柳衣

下駄はけははやうぐひすの立かまひ 路庵

山水や植た柳をまはりゆく トキ 松年 (二四オ)

伏かえる戸樋またぎけり梅貫ひ 花溪

遠山や雲とさくらの間ちかし 穴水 李之

戸をさすな畳のうへの春の月 七尾 桃幼

山おくや雪のはたから咲さくら 李下

寝ころんで詠て居るや月と花 北我

半分は堤にかくすやなぎ哉 樂齋

遣り羽子や無理言とほす男の子 ゆみ女

店先や茶を汲手にも春の雪 路逢

なの花に合羽のくさきひより哉 半江

蝶をまち蝶にまたる、径かな 可成 (二四ウ)

横雲の隙から見るやみねの花

植木見に舟橋こすやはるの雨

水のよい家かりたれば月とうめ

青柳に念の入たる掃除かな

あさ舟や黄鳥きいて横に行

折かねて花に恥たる皴手哉

うちの子は合点して居る接木哉

夜にあれば夜の花みせるさくらかな

たゞくれる紙の文庫やひなあそび

ちつとほどやりばいのする小鮎哉

楓提て出るや戸口の狭い家

ひくう来て背戸へぬけたる乙鳥哉

会釈して花の真向に居りけり

梅提て二人前とる夜舟哉

駒鳥のなくや格子にちる名札

余の木から鳥も出て来て朝桜

なの花やしきりにまはる水車

無理いふた男もまじる花見哉

小奇麗にして人まつやはるの雨

横町から見とほす寺のさくら哉

出代の庭で吞茶も名残哉

人おくる灯次手に見るつばき哉

ちよつと目をうけて日暮ぬ海苔筵

切干の筵のうへや鶏のこゑ

とび込でしばしながる、蛙かな

なの花や芋桶持出す門の口

入相のおそし小寺の花ざかり

素ばなしの夜もある庵のさくら哉

真下におちてあとひく雲雀哉

おそき日や磯の小石のころぶおと

竿にほす糸のもつれや鳴ひばり

椿見に来て見付たり山ざくら

せつかれて折にたちけり門の梅

鳴ひばり引ぬくくさもなかりけり

陽炎や草鞋のひもを結ぶ先

まつを曳先で出合や隣どし

山ざとや桃はさかずにうめの花

朝湯から子の日の供に成にけり

わら灰をかぶつて鳴や田の蛙

凧きれてかけに出るや店の人

あすの用までいひおいて花見哉

田隣の人の田をつむわかな哉

掘て来たまつ根にさく葦哉

ちつて来て瀧壺に舞ふ椿かな

ちる花もおもしろう成酒気哉

やどかりて花の置場にこまりけり

来た人におして頼むや花の留主

杖持た手のほかつくや鳴ひばり

口先のもてなしぶりやはつざくら

手に持てぬほど貫ひけりも、の花

花に来てきのふの場所を尋けり

跡じさりして咄きくさくらかな

花に出て遊べばながき刀かな

きじ鳴や水なき橋も二つ越す

買ふたほど駄賃とらる、わらび哉

献立は嫁の気ま、よひな祭り

しる人にあふて火をうつつ、じ哉

はるかぜや胡座かいたる馬のうへ

土堤ひとつ木瓜より外の花もなし

七草やた、かぬうちに一笑ひ

赤過て椿もさぶき小寺かな

夜に入て二たて、戻る花見かな

うぐひすの尾ばかりみゆる木の間哉

道者衆のくさにはらばふ日水かな

黄鳥や屋根一ぱいにはふけぶり

鶯のなくや笥にあまる水

あさの間は藪入がちのわたし哉

見どころのあるやぶ入の祝義哉

うぐひすやうしろから来て堂の前

駕に日の横からさすやきじの声

人送る序に拾ふつばきかな

言持て子供の来たる御慶哉

聾の入るくちも聞たり花の山

乙子から居りはじめて二日灸

歩行くものくふ旅の花見かな

灯ともして土産のさくら詠けり

かほごしに揃ふてたつや春の雁

大粒におもはる、なり花の雨

下駄の緒のゆるみ出しけり春の雪

連翹やまだおさまらぬ植処

ねはん会や生れの儘のきじの声

余所のかと見ておもひ出すひがん哉

牛率の小休処やうめの花

気咎のしてすてられず齒朶のちり

岸べりにちかくしだる、柳かな

一処はちるを見残すさくら哉

連翹を折やとがめる障子ごし

(二八ウ)

成虎

秀涛

秀江

三千春

竹世

仙峨

南峨

籟芳

秀堂

亮曠

芦青

一素

古谷

水月

竹逕

呼鷄

陸草

寸錦

平福

臥蝶

曾夢

布蘭

有口

春雄

又鹿

耕雲

六英

茄村

新しき橋か、りけりうめの花、倭一  
 出序に不沙汰すまずや花の空 備后ヲノミチ 虎道  
 明た夜もそしらぬふりや猫の恋、茂兮  
 ちることにころもつかず朝の花、笹兮  
 大空もおのがもの也揚ひばり、青樹  
 真直になればまばゆき雲雀哉、眠月  
 かは魚に味のつきけり花のかげ、東耕  
 ちる花にもと来たみちを忘れけり、石島  
 くる、ともしらで麓忽になく雲雀、トモ 青嶋 (三〇オ)  
 青海苔のながれか、るや鷺の足、春草  
 みちて来る汐やみつよつうめの花 蒼虬  
 真東風になれば吹たてるちり 青嶋  
 火序にからびし独活も茹上て 祖郷  
 舞羽と箆をとりかへてかす 虬  
 だれも居ぬ床几のうへの宵の月 嶋  
 袂のそこにのこる栗むし 郷  
 緒のゆるき温泉元の下駄のひや、かに 虬 (三〇ウ)  
 絵を見たなりでもどす借本 嶋  
 まだ少し訛る大家の娘分 郷  
 神轡のみちのかはるゆふだち 虬  
 小風呂敷さがさぬ処もなかりけり 嶋  
 さつぱり洗ふ猫の五器皿 郷  
 足代も一隅とれるあさの月 虬  
 かまはぬきくの早うから咲 嶋  
 引合ぬ錦の勸化の人やとひ 郷  
 神戸もやはり灘酒のうち 虬 (三二オ)  
 ちる花に世話しうきゆる苺の火 嶋  
 釣やめてから隙な春先 郷

花折てしばらく蝶につかれけり 作州江見 蟻道  
 春雨やぼろ／＼土のおちる岸 ヒロト 千鳥  
 老に手をひかれてもどる花見哉 土居 月琴  
 うめあるも栄耀がましや谷の家 アキ 田影  
 太箸やことにみやこの持ご、ろ、鶴居  
 出ざらひもしつて誘ふや花ざかり、芳中 (三一ウ)  
 ちる花にこゑかけて見る月夜かな、雪湖  
 霞日やかすまれながら野に遊ぶ、茂栽  
 枝をれどめだ、ぬはなのさかり哉、雪茶  
 藪入や着替たま、の水仕事、貴有  
 葉の邪魔になれども赤き椿哉、三蔦  
 人数だけ買ふや花見の藁草履、文衣  
 町のうへとは気のかぬひばり哉 周防山口 素兄  
 大船のだぶつきやむやはるのかぜ、百古  
 折うちには貫はる、也折たうめ、長瓢 (三二オ)  
 赤つばき気のへる程にちりにけり、好々  
 ひとしきり花ちりやむや汐だらひ、鱗和  
 きれ風につてはしるや畑主、夜白  
 獺好の手あきになりぬ赤つばき 筑前 斗丈  
 余の木から登つて折や梅の花、石外  
 ふみとめた足のとまらず露の臺、山鼓  
 鳥の巢や雨の中よりみえわたる、芳室  
 松の門日永くなりて来たりけり、一丸  
 山の手や大きな猫の鳴歩行、六合 (三二ウ)  
 あさごゑのうぐひすさぶし弥生辰、一甫  
 しばらくは見失ひたるひばり哉、柳舎  
 落つばきけちらしてゆく小僧哉、如帆  
 土ながら舟の中にも齊かな、買三  
 抱た子になぶらせておく柳かな、蛙遊  
 風買ふて雨の一日永き哉、先吾

花ぐもりはなちりかけてはれにけり、猪道  
 灯火のおかぬ夜もあり花の宿、午湖  
 としよりの皺手みせるや初ざくら、遅柳 (三三オ)  
 水近う黄鳥おるひよりかな 筑前 喜春  
 瀧筋は昼も小ぐらし遅ざくら、玄里  
 貫はれてあり所しるや露のとう、其歳  
 青柳やうちへ這入ば日のくる、時風  
 さとちかくなるや小まつと梅の花、梧栖  
 独見る華や去年の旅ご、ろ、蕪園  
 折込だ柴もぬかるや花のみち、野竹  
 瓦焼家のうしろの柳かな、籬月  
 わか竹や垣なき家の二三軒、梅鳥 (三三ウ)  
 永き日や曰ほる側にあそぶ鶏、五龍  
 うぐひすの来なれてけふも待れけり、里月女  
 小火入に両手かぶせて初ざくら、円竹  
 明る日もかけてあるなり涅槃像、和風  
 二日めに折て戻りしさくら哉、五春  
 折おとを寺子の告るさくらかな、待必  
 つい足も洗はで寝たり花の宿、宇逸  
 行先も極ず出るや小まつひき、  
 うぐひすや宿のあさ寝は法はづれ、月平 (三四オ)  
 下枝は垣にゆひこむ柳かな 筑前 壺天  
 摘だほど手にのせて来るわかな哉、雨角  
 かけすてし屋根のはしごや風、鼠雀  
 腰かけた膝近う来る胡蝶哉、円斎  
 灯ともして見るやさぐらの雨の音、ひな女  
 長閑さや乗ると火打を出す筏、午湖  
 おりたれば余処のうち也春の山、和風  
 日埃りの羽折はたくや花の中、蒲水  
 一声はまくらのうへやきじの声、五岳 (三四ウ)

しらうめや村をはなれて家二軒、以春  
うぐひすやひたものおりて白のうへ、  
され風をはづしおふせず戻りけり、  
垣越の藪入じたく見えにけり、  
おちてさへ其儘であるつばき哉、  
梅さくや囉ふてかざる菓子袋、  
やぶ入のはなしにもるや藪の月、  
庵の留主つばきの庭と成にけり、  
棚田から先鳴出すかはづかな、  
客に灯を持たせてとるや露の臺、  
爪上りするや花見のみちくだり、  
立惜しみてかぶりけり花の雨、  
戸一枚明た庵やはなの春、  
しほ売の声もかすむや屋敷町、  
木のもともさらでおちたるつばき哉、  
盃も下におきよしすみれ草、  
はしり来て籠のわか鮎のぞきけり、  
歯をみがきく見て居る接木哉、  
山ゆくや暈めされたる月のかげ、  
麓まで馬も来て居る花見かな、  
うめさくやこのごろ出来し畑みち、  
一雨に泥つくはなの筏かな、  
出がはりや馬にも草をあてがふて、  
皆花になりてはれゆく明の雲、  
二処におきし梅見の茶代哉、  
海少しみゆるところの花見哉、  
嗽するながれも花のたより哉、  
はつ花や豆ふも作る里酒屋、  
さく苗の礼いふときも泥手哉、  
指に息ふいて七草そろひけり、

臥山、  
如來、  
丹志、  
其川、  
野山、  
其風、  
龜笑、  
閑雫、  
呉鳥、  
月舟、  
梅粧、  
香木、  
野風、  
代翠、  
鶯友、  
野雀、  
兎川、  
如笛、  
由可、  
松月、  
若拙、  
自考、  
漁洋、  
月橋、  
呂舟、  
石居、  
素萍、  
石岱、  
甫六、  
慶五、  
与山、  
千鷲、  
米汝、  
文老、  
本郷、  
樽雲、  
吐雲、  
鉄舟、  
正焉、  
梅調、  
鷹也、  
竹老、  
伝、  
真砂、  
十寸穂、  
器水、  
文龜、  
葵、  
小挟也、  
大鱈、  
枝船、  
太素、  
巴南、  
悠々、  
有雨、  
寸長

寝どころの不足もいはず花のやど、  
雨あしに添ておち来るひばり哉、  
うぐひすや多くは居ねど道くらり、  
はや起し鳥屋のかどやはるの月、  
うめが、にいくたびふみぬ門の砂、  
筵帆も出るやかすみのはづれより、  
膳敷に盲も入てはな見かな、  
どつしりとはやしつゞきのさくら哉、  
なの花にまだ降しまぬ小雨哉、  
新みちの土橋普請や飛小蝶、  
わかくさや国のたよりを毎度きく、  
火繩火の燃しまひけり朝ぎくら、  
うぐひすやはつ音の竹をえらびゆく、  
はるの雨けふに楽寝の気あつかひ、  
はつかはづ寝まどひもある夜也けり、  
鳥かけにおきてさりけりはらみ鹿、  
波こして来た姿なりつばくらめ、  
雲の根をいざ見にゆかんはるの海、  
一日は傘もて歩行ひがん哉、  
人だけの杉のさし根や揚ひばり、  
きじなくや大門あけて立て居る、  
落つばきねぶりこけるとおなじとき、  
つ、がなく夜雨はれたるさくらかな、  
孕鹿小川わたりてふりかへる、  
はるの水人ありたけの影うつる、  
うぐひすの見忘れもせず垣の穴、  
鶯のかほさし出して磯の藪、  
摘で来てなぶりなくしぬ葦草、  
苔ある枝からも散さくらかな、

山かぜや花見のたまる窪だまり、文鷲  
花守の相手になるやおそぎくら 日向ミ、ツ 吟龍  
土産にせんこのむさし野の春の月 トミヲカ さらい

沖の帆にならんでゆくや天津雁 都城 馬琴  
百性の鯨もよごさずはつがすみ、琴二  
うめさくやあさく庵のあぶり餅、鳥秋

掃たてるほこりの先のかすみかな、路白  
ゆく雁の羽かぜおち来る野川かな、茶烟  
茶で済す客のみくるやうめの花、一流 (四〇オ)

馬わたる跡になにくふ小鮎かな、一風  
こしらへた隙ではたらぬ花見哉 本庄 習之  
水あつて柳名だかく成にけり、寿山

最そつとなつて這入らず窓の蝶、厚薄  
ちよつとした所にもあるや花の橋、南丸  
はるかぜや画たやうな水の面、文水

まつの花ちつとはかぜの吹もよし、梅左  
背戸みちの貰ひあがりや暮の桃、立己  
た、みこむ合羽の雨や揚ひばり、由吾 (四〇ウ)

水田が上手にくぐる柳かな、尚故  
海原も風のそら也日本ばれ、曳瓦  
さじに夜の明て鐘つく野寺哉、連雀

珍しう乙鳥かげさす手桶かな、阿波 万像  
西行庵にて  
声あらばこ、で囀れはるの鳥、サコ 梅双

有がたやさくらちり込南禅寺、  
あしもとに見えてかすむやわかぬ浦 大モリ 騏郷 (四一オ)

猿曳と馬とわかる、堤かな トクシマ 鸞巢  
あた、かな日はみず梅のちり仕舞 白地 一秀  
波よけのくさ木にうれしはるの月 サスキ 其岳

宿引に笠わたしけりふちの花、今は

橋詰の灯籠くらき柳かな トムヲ 楠谷  
かすむ日や駕をおりれば気草臥ヒキタ 芦溪  
水くさき料理場のあるさくら哉 五蕉

鉄尻のせまき垣ねやも、の花、木兆  
散かたは人声多し山ざくら、松堂 (四一ウ)

ひとつ家のうしろにちかし春の海、杜麦  
山焼た夜からみゆるや月の暈、啄之  
鳥の来て踏ぬつばさもおちにけり 馬宿 椿谷

片隅に木履のあとやうめの花 白鳥 李上  
蝶の来て舞けり糊の遣ひさし ツ田 哦月  
よい町も眼のしたにあり花の山イヨ小マツ 石漁

うぐひすの呑だやうすや木の雫、一行  
どう持て見ても砂引柳かな、樗風  
洗濯のたらいのうへのひばり哉、茶隣 (四二オ)

一筋は浦のけぶりや夕がすみ、映門  
ふるい木と誉てとほるや梅の花、女 菊圃  
近みちを廻れば花のうしろかな 郡中 海屋

うぐひすの足るほど鳴し春はなし、蓼村  
寺のまつ風のか、らぬはるもなし ウハジマ 素亭  
一日は埃りしづめや御忌の雨 銅山 柴人

うぐひすの高くもとばぬ木の間哉 天満 孤龍  
はるかぜにゆらる、鮭の天窓かな 土佐 董屋  
土ながらお文箱に入るすみれ哉、一底 (四二ウ)

見るうちに遠くなりけりはるの海 淡スモト 玄駒  
どのえだを見てもみちかち赤椿、  
いけかへて見てもうつむくつばき哉、文虫

あけ行や花に戻りし雲の色、奔獅  
桃さくやうかくと来し天王寺、蝶弟  
手のひらの巨細にみえて花のかげ、呂川

出した箱うつむせにして雛かな、一棹

昼飯をくはぬやう也ふちの花、雲耕  
来る人にすれあふて出るつばめ哉 小榎並 梅長 (四三オ)

うぐひすも来よとはくなり朝の門 西川 梅堂  
髭剃に出たれば桃のさく日哉、如朝  
来るたびに朝の様子や陰のうめ 鳥飼 回風

梅が香のもれ入にけり窓のやれ、大夢  
人の日や馬も見て居るくさの色、よし彦  
うぐひすに耳の肥たる山家哉 ヤナカ 杜来

舟の灯の横明りさす柳かな サノ 素尤  
さくら見てさびしき町も通りけり、梧園  
なの花や高いところに家のたつ、樹々女 (四三ウ)

うぐひすにたつてみせたる琴柱哉 マツヲ 富子  
纏さげて人の出て来る柳かな 社家村 桂外  
夜の更て風におどろく柱哉 スモト 花由

灰ふきの筈ひきてあさぐくら 大坂 眉岳  
散花の空にきゆるやあらし山、一肖  
咲日より我はちるまで花乞食、吐屑

大家の余計もかわぬ齋かな、鼎左  
おもはずもさくらうへの朝の月、青衣  
あたらしき垣ねめぐるや春の水、白龍 (四四オ)

花提し人が小足に下駄のあと、草方  
手分しておれ柴さがす花見哉、月桂  
飛付て折れるまでをる野梅哉、菓翁

梢までおなじ蒼やも、の花 兵庫 九梁  
けし炭の徳おほえけり花見の座 サカイ 檐鶴  
大風の手伝へ多き日暮哉 大和 虹朗

旅立の相談きまる二月かな 下市 霞暁  
うち明た籠提てゆく田にし哉 ヨシノ 芦洲  
鏝をかけて摘さぬすみれかな、先鳴 (四四ウ)

雲雀なく最中野火の匂ひかな 高野 素水

吹上て幹までみせる柳かな 閑那

ぬくさうな家の並んでうめの花カハチ 蘭里

赤つばきひとつおとすやとまり鳥 イセ四疋田 宇栗

中戸まで霞のかゝる浦屋哉 江戸 蕉洞

来た跡の草より揚るひばりかな 古市 蕉洞

ひくまでにむだ足つかふ小松哉 花樵

永き日のおなじ姿や浜の松 山田 外松

うちかへす波よはくしゆふがすみ 鶯侶 (四五オ)

やつとたつ腰してきくの芽分哉 杉堂

掃た丈余寒のへるや庭まはり 四溪

常人のゆかざる山や花ざかり 蕉好

七草も一色はなのさきにけり 葵影

結たてのみな天窓也花げしき 潮花

かれ蔓のまきつきながら野梅哉 睡斎

かはづなく闇もありけり花のそと 在測

御符出す家かくれなし木瓜の花 津 団釈

花と影ひとつになつておちつばき 千町女 (四五ウ)

野に余り庵にもあまるさくらかな 春哉

背のたかきな花さくや芥の中 芳室

はなのあるところ見付て道工面 蟻扇

花ちるや外へはゆかぬ大やしき 照星

居どころの勝手にとれず花ざかり ひさ世

鶯の往たりきたりや一重垣 梅癩

ちるさくら薄着こらえる麓かな 一幽

結んだるまにさしおく柳かな 方汀

折気でもなくて引ばる柳かな 酒了 (四六オ)

うぐひすの青うしてゆく庭木哉 九穗

後架へも花のちりこむ泊り哉 竹外

おかれては走りまじるや花の坂 カメ山 李堂

みちくも花のはなしや花もどり、 如水

黄鳥の高音や谷の澄わたり 扇月

人まして草餅いはふことし哉 一笑

ほろ、うつきじや春田の土けぶり、 卜子

はるかぜや賑ふさとの這入ぐち、 里水

木の間なき程にさきけり山ざくら 里泉 (四六ウ)

なの花の中や一筋ぬかりみち イガ猪来

棟上のあふぎの側のおぼる月 ヨド 吟風

海棠や其場で直に眠う成 魚物

うはつらは別のやうなり春の水 鶯語

藪入の暮してはいる在処哉 太老

ちらく森をもる、山焼 可大

灰汁をぬく藤を川に漬置て 老

おふほど椽へあがる鶏 大 (四七オ)

朝の月市場の掃除いそぐ也 老

藁までおもき出来どしの稲 大

めつきりと橙きばむ南うけ 老

雑蔵ばかりたてる抱地 大

おなじこといふては酒の長たらし 老

なんでも人にくれる発心 大

あつき日は宮のわたしの思はる、 老

薄い手紙の皺は直らぬ 大

髪ゆひの往もどりにもおとづれて 老 (四七ウ)

つよき吹雪に用をこらえる 大

移り香のこたつぶとんを刳かへし 老

目のさめ次第遊ぶ温泉入衆 大

月花にちくく藪を伐ひらき 老

御扶持てたらではるの買喰 大

うぐひすを残して鳥は皆放し 大

井戸のぐるりへおろす植木荷 老

宿替にちよつと手伝ふ両隣 大

笑ひをつ、む顔のをかしき 老 (四八オ)

夏うちははやる葉師の朝まいり 大

金見せかけて値ぎる軸もの 老

結構な空に唯居るか、り船 大

本家の用は否をいはれぬ 老

ふさいだら明ぬつもりで窓を塗 大

ひとしめりまつきくの植替 老

入際に月さすのみの麓まち 大

まつりのすんで馬糞かく音 老

うつくと眠気のとれぬ旅もどり 大 (四八ウ)

膳をひつばる孫の可愛さ 老

普請中上下なしにはたらいて 大

不断はしごのかけてある松 老

花のちる日から天気つつく也 大

砂にこぼれてほせるわか鮎 老

きえもせずすみれ花さく柱の根 京月峰

是非翌日といふまでになるさくら哉 金葉

結ばる、程たれてある柳かな 正阿弥 (四九オ)

はつ花や皆ういてある池の魚 梅笠

雲雀見たま、つぎさます冷茶哉 若雅

何まつて居るぞ弥生に残る雁 羅浮

黄鳥のなまりとれたる天気かな 芳英

薄雲や花にまのなきあらし山 一喬

雫あるうちに日の出ではつぎくら 南溪

柿の葉の其ま、ありて露のとう 南溪社

舟先に山見え出して雉子の声 卓雄

紅梅の咲過てあり町はづれ 柳清

花笠 (四九ウ)

室引や負ふて居る子も数の内  
 不器用に銭つくさまも花見哉  
 梅どきはうめもある也あらし山  
 山吹や村をはなれて一構  
 水音の溝にもあるやおぼろ月  
 ちる処でわざとものくふさくらかな  
 うぐひすの踏や生干の小土器  
 一めぐりして田に入ぬはるの水  
 暮る日や一声かはす島の雉子  
 なの花に旭さしけり向ふ高  
 一しめり受て声よき蛙かな  
 うぐひすや雪などかまふりもなし  
 ちよひくと見て戻りけりふぢの花  
 明きらぬ山の麓やきじの声  
 ひとつ着になつて出直す桜哉  
 末白うなるやみどりの小松原  
 なの花や先薙ばかり日の暮る  
 一日は着替ずに出る花見かな  
 手をかけてそつとはなすや花の枝  
 花持た人におはる、小橋かな  
 草臥た顔で舟呼かすみ哉  
 一度ではおかれぬ花のあらし山  
 古寺やさくらありての池ざらへ  
 かたへらはあら壁なりやうめの花  
 畦みちをまはりて見るや春の水  
 鶺鴒ぐふ鴉のおとすつばきかな  
 煤くさき障子はづすや初ざくら  
 落付のしばらくさぶし花の山  
 手のあぶらふく鼻紙や花の陰  
 波先をかぶるやきじの出たはづみ

翁杖  
 瓶山  
 几乙  
 伴橘  
 醉露  
 魯齋  
 馬角  
 馬友  
 光影  
 衆芳  
 喜楓  
 玉叟  
 草鳥  
 枝月  
 梅價  
 梅通  
 芹舎  
 並隆  
 丈翠  
 黙池  
 杜蓼  
 借美  
 太老  
 碑士  
 梅一  
 杜鶯  
 蘇山  
 初六  
 祖郷  
 呉明

赤いとて立寄る茶やのつ、じ哉  
 間くによき畑あつて山ざくら  
 紅梅やことしへ入てぬくき雨  
 戸を明て皆島うちや一在処  
 日はみねにかくれて花の盛哉  
 うかくと深入したり夜の花  
 追加  
 雨雲のはれて夜明やきじの声  
 海一ぱいにわたるはるの日  
 はちくれる出代荷物へし付て  
 つ、むにあまる蛸のゆで立  
 しつかりと月を受たるまつの枝  
 丸木の橋をすかす虫の音  
 雪汁はたぶく来るに草の霜  
 掃跡の砂にのこるやまつの花  
 水汲に出て垣ごしの御慶哉  
 ふりあげた鎌にかゝるや風の糸  
 一色で七草すまます山家かな  
 腰のして見おろす谷のさくら哉  
 かへるとき揃ふて啼や春の雁  
 とくくとほるの落つく山家哉  
 大事になる折やうやふぢの花  
 ちつとづ、始終かげもつすみれ哉  
 朝の花見て又寝るや庵の客  
 出代の皆に言伝のこしけり  
 見て居ればあはるる、花の薄着哉  
 出てはるを惜しめば寒し垣の外  
 声やまし花のさく日の明がらす

可大  
 有節  
 朝陽  
 万籟  
 蒼虬  
 千崖  
 龜洞  
 良明  
 宇栗  
 洞  
 明  
 栗  
 岱年  
 分来  
 伊セ  
 宇栗  
 南明  
 北居  
 南居  
 久嶺  
 梅明  
 十墨  
 宇牧  
 青江  
 道等  
 雲里  
 節外

笠程に成て入日やきじの声  
 やどり木も添てめでたき子の日かな  
 滞なくながれけり春の水  
 見違ふて名をおぼえけり菊の苗  
 足袋の緒の解ておくる、礼者哉  
 ころがつた丸太の中やなく蛙  
 鐘近うきこゆる春のさぶさ哉  
 臘月おぼろはなれて入にけり  
 指折て遣るあてをするわかな哉  
 掃ざるも馳走やうめのちりか、り  
 それのみに出れど夜に入御慶かな  
 手に提てもどるみちにも梅の花  
 蓬菜やさすが童もよりそはず  
 少しおくにならべておくや母の雛  
 きじひとつ只居る門のはたけ哉  
 あさ、むに一際たちし野うめ哉  
 春の夜やいはれてからの寝こしらへ  
 つけ髪をおとしておくや花の中  
 道下手も人目にた、ず花もどり  
 断て畠とほるやはなざかり  
 借傘にこそつて花のもどり哉  
 ゆるがせな何処も暮しや花の空  
 わかな摘人みえそむる木の間かな  
 寝過して侘いふやどや春の鐘  
 鍋の炭かいた跡ある雪解かな  
 おれた枝なけれど梅のこぼれけり  
 あそこらは見付のそとか風  
 精進のうちにはひま也はるの雨  
 突張の高うてきかぬ柳かな  
 居押れて下戸側に入る花見かな

筑后 吐雲  
 イヨ 井峨  
 イセマツザカ 升山  
 出雲安来 秀然  
 近江八マン 桃谷  
 里雪  
 梅井  
 素白  
 菊陽  
 霞陵  
 可拙  
 東山  
 麻中  
 京 采桑女  
 麦菜  
 露泉  
 夜外  
 道雄  
 子屯  
 蒲丈  
 大講 一居  
 芦洲  
 土山 虚白  
 江戸 素撲  
 芳居  
 文外  
 ミカハ 水竹  
 ヨク二本松 文骨

春かぜや酔ふて戻るによい堤 イガ 春扉

新田にやがてうれしきかはづかな 、

はつ花や見る約束の出来ぬうち 、

鐘かすむ日やうろくと啼からず 、 梅雄

傘の不用になるや花もどり 、 梅旭

封きつてひらく扇やはつざくら 、 芦郷

藪入をのせてもどるや薪舟 、 金波

うぐひすの来て嫁も見るとなり哉 、 蕩州

鶏もよこれに出たりはるの雨 サヌキイゼキ 止柳

小流れの水とばしけり落つばき 、坂本 寿専

山焼や池に影さす仕舞口 イヨ 葵笠

いつ暮てともし灯ひとつ花の中 大坂 真起

かへる気のつけば小寒し夕ざくら 、 樵山

(五五オ)

(五五ウ)

○ 京東洞院仏光寺上ル  
御摺物所 菊屋平兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

底本 白鹿本  
校異 某家本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

としくにもし給ふはなくやうてふ  
卷のはし書してよと、のたまふうしは、  
去年の冬より東山に遊て、此くやう

をいとなみ給ふになむ。されば、みる  
めなきあふみの海士の筆とらむも  
いわけなけれど、うしのこと葉か  
たくして、比良の雪とけやらず、おび

えの霞、志賀山ざくらも時うつ  
りてやむことを得ざるも、此みちを  
したふからなりけり。万してやあ  
まねく四方久々の諸君、とし

くくに手向まつれる花鳥風  
月の吟は、祖翁一世の滑稽を  
はなれしきふる歳けしきも  
ことあたらしくものしけるは、

げに正風のはいかいなりけり、と高  
くあふぎて年くくに此供養を  
なし給ふは、いみじきわざ  
になむ有ける。

天保十亥年三月  
太室書

日は山に入りけり花に吹あらし

よせてはかへす春の川浪

出代りも場末の家は隙とりて

箕埃りたてる市の跡先

飛やうに追ふてあぶなきから車

けさから駕のおりる御留主居

月の邪魔しさうな雲の消残り

江尻とりこむ掛稲の間

医の道もまんざらでなき薬掘

見つきのこわき寮の筆頭

物書ぬうちに屏風の薄よごれ

夜明際だつ四月朔日

端近で酒煮のゆかた仕立けり

うつかり顔を上る初鉄漿

戻りにも泊りて宿の愛相よく

畑へおりる橋のかほそき

引出しの紙虫を掃出す暮の月

度々先をとめし舞

洪搗たとばしりかほく庇裏

近い頃まで揃ふ三夫婦

櫛を桃に未だ見る信濃道

めづらし過て売れぬむし蝶

夕東風に灘吉丸もうけるなり

どふもせぬのにかいな痛がる

かこわれのうちは使も人えらび

たとう紙へも紛れ込文

ふえ出してそこら中這ふ油虫

十夜の納豆ねさす日つもり

志可寿

朝陽

蒼虬

葛雨

俗年

丈翠

月峰

菊圪

箬風

樗堂

杜蓼

蟻州

石外

百仙

雨翠

麦浪

梅通

里居

豊丸

松歌

梅價

枝月

釜鳴

吾雀

由華

香雪

青葉

桃園

(序二ウ)

足踏もならぬ落葉の雨あけて

おもはくよりは広い多景島

道連の癩癩やみに気のもめて

歛でいらける普請場の炉

時つくる前かとさかをすへる鶏

おんぼり霧に隔つ朝月

寄つきも早稲のはしりに狂ふ也

二ウ

八朔角力地取間違ふ

守口でもの、言へるも親の顔

おもふばかりで精進もせぬ

蠟燭のしきりに匂ふともしさし

成だけ低ふ荷物仕立る

よしあしをきかいても済役を持

柄杓のあたまようぬけるなり

塩竈も普賢もみゆる花の中

羽を延し初て巢はなれる鳶

右四十四一順

人の見た跡やらしらず初ざくら

行灯をそむけて春の宵寝哉

戸を明て置いて留主なり春の雪

見表を人の定める野梅かな

芽柳の雫吹込二階かな

駕出してす、める門や桃の花

油断して入日うけるや花の中

朝々や反古掃出す花の宿

袴着て走る人ありいかのぼり

月影に枝からみ合ふ桜かな

来たほどは山にも居らず花の人

散花やふつと一ひら顔へ来る

五粒

栗哉

道僕

弥寿

九泉

太老

杜鷺

梅六

素玉

阿鳥

霞梢

村止

蓮居

勝錦

蓬陽

日夏

下総 貞斎

、 我雲

、 西湖

、 江月

、 楚南

、 之桂

、 梅曦

、 流芳

、 宇栗

、 外松

、 笠岡 淡亭

、 太六

(二ウ)

(三ウ)

(三ウ)

(四オ)

早人の足音ありてはつ桜

菜の花や村へ這入て眼の休む

今年まで見ぬ曙や花ざかり

葉も少し見えて静や遅桜

宿かりて又出歩行や夕桜

何喰ても味よき花の木陰哉

匂ひから引立色や草の餅

今戻る亭主に客の御慶かな

濡ながら持届るや雨の花

結構な道に労るかすみかな

旅人も交て居るや小松曳

舟からも手をさし出すや土筆

散て来る花を待合ふ木下哉

来か、つた人に火をかる野梅哉

陰持て間のある花の日暮哉

左義長の灰もか、るや岸の家

積藁の上から折るや梅の花

初夢や朝から好な小盃

花咲て昼寝始る庵かな

うつかりと出て沙汰するや月の梅

積藁に鳥のあそぶや春の雪

仰書子息にさすや花便

こ、ろよう水音聞や花の陰

子の行儀太箸持てば直りけり

漣に散ふり見へる桜かな

せちべんな藪の縄目や梅花

垣の梅今年も薄う知られけり

明きつて梅はそこらでなかりけり

ぼち／＼と花に近よる時計哉

、 養老

、 三千雄

、 遠州 可月

、 竹里 (四ウ)

、 たつ女

、 筑前 寄扇

、 亀笑

、 柏翠

、 艶雪

、 梅朝

、 月舟

、 対布 (五オ)

、 漁洋

、 石居

、 曲柳

、 嬰糸

、 野風

、 兎川

、 柳圃 (五ウ)

、 若拙

、 蕪城

、 蕪山

、 路月

、 明石 一香

、 漱石

、 而得

、 松月

、 陶寿

、 其日

鶯の眼た、きするや声の前

御降や横身で這入松の門

うぐひすの鳴度花の古ひけり

【校異】某家本、下五「ふるいけり」、作者名「維嶽」。

宿かれば窓ある家や梅の月

うか／＼と行やさくららの続く道

あからんだ竹にかまはぬ柳かな

撞鐘のゆれ込花の盛かな

氷る手を吹／＼若菜揃へけり

うつむいて眼た、く花の盛り哉

順礼に我宿やりて花の月

染色も人氣も揃ふ花見かな

降雨の勢や梅の荅がち

盃の作法なかばや初がらす

橋こへて間もなく橋や春の月

散さうな夜を持合や花と月

履物に奥窺ふや松の内

最一処見ねば去れず早い花

降止だ雨に騒がし花の宿

今飛だのに相違なし浮蛙

一木有桜に客の続きけり

落際の日をもちつめる桜かな

我が遣つた雛を先見る座敷哉

吹上てもとの木に降さくら哉

酔臥てさくら見る人哀なり

散花の押下したる筏かな

花掃も別の箒でなかりけり

摘分て両手ふさがる若菜哉

うつむけぬほど着重て御慶かな

、 壺中

、 学時

、 駟嶽

、 昇山

、 翠雨

、 木比

、 映門

、 菊圃女

、 茶隣

、 西月

、 兵庫 北棗

、 九梁

、 讚州 茂稚

、 木鳥

、 鶯居

、 葵笠

、 九虹

、 木長

、 蘭堂

、 笑道

、 松代女

、 赤鱗

、 慶五

、 伊丹 紫金

、 退歩

、 橘人

、 ヨド 吟風

、 凌雨

、 長崎 岱雲

畑の梅吹さらされて猶白し

松は葉をこぼさで花に交りけり

出代のよしと言けり水勝手

白浪も漣もあり春のかぜ

草山をすらぬく雉子の高音哉

蓬菜とならべて嬉し福寿草

折添るつ、じ色よき小樽かな

冷／＼と雪の山より初日かな

鳥井から続けてくる柳かな

長閑さに顔の揃ふや若菜摘

牛に乗る童も霞む広野哉

雁は未だ居るに啼出す蛙かな

明松焚たあとも有なり花吹雪

有明を持て咲合ふさくら哉

檜の葉に片枝かくれて初桜

戻る氣に成た所を初ざくら

つ、かけて泊る客あり松のうち

何の笠を見ても日永し美濃近江

鐘撞の中よき桜さきにけり

菜の花にとまりのつかぬ在所かな

宝引や下駄でふさぎし上り口

海山のまけずおとらぬかすみ哉

真直に雨の雫も柳かな

花守の空見て建る戸口かな

松山も続く青みやはるの海

奥有て夕空せまし花の雲

庭掃はいぶかしがりぬ梅貫ひ

梅さくといふて通るや垣の外

起／＼に宿の馳走や花吹雪

、 肥前 悠々

、 路芥

、 薩州 克昌

、 昌人

、 春逕

、 嘯虎

、 水玉

、 嵐翠

、 越来

、 几桂

、 草佳

、 虫二

、 馬駒

、 サガ 丈翠

、 ナニハ 土之

、 花植

、 越后 応泉

、 春庭

、 乙良

、 越中 幾遊

、 ナニハ 井資

、 眉山

、 枕江

、 為之

、 呉厓

、 城南 慈弓

、 クルメ 芋川

、 市博

、 松塙

(八オ)

(九オ)

(九ウ)

(六オ)

(五ウ)

(七オ)

(八ウ)

元日は呵る処をおしへけり	、	土言							
梅が香に度々むせる社内哉	、	兜岳							
見て後に断る寺のさくらかな	、	一峰	(一〇オ)	星の飛あたりが果か夜の花	河内	古鏡	戻るまで庚申知らぬ花見哉	大津	蕙逸
永き日の入まで通る堤かな	、	文月		踏置る橋に気づくや夜の花	越富山	嵐吹	高みから覗て見るや藤の花	、	嘯月
藪入や寝た跡丈の掃さうじ	、	石風		麗夜や稽古謡を垣覗き	、	斜梁	二三輪花もまぜてや松葉搔	、	春峰
畑うちの腰のす上や鳴雲雀	、	湖東 美水		莫にも引出す屠蘇の匂ひかな	、	凡丈	三日月や二樹の梅を懸はづれ	、	八マン 四明
籬の篁文見ぬ間から明たがる	、	千丈		見には来ぬ日に咲てあり山ざくら	若州	如頼	夜の明たやうなゆふべや春の月	、	桃谷
見果さぬ花の上より夕がらす	、	嵐月		日の入が美しくすぎて花の雨	、	菘園	三日月に未だしまりなき柳哉	、	可松
春雨や隣も同じ藁仕事	、	二笑		昼旅籠二へんも遣ふ霞哉	豊後	雪村	かう往たといひ置花の茶店哉	、	矢橋 流川
座の足しに風呂敷しいて花見哉	、	梅枝		草臥も心嬉しや花もどり	長門	樵斎	万歳の去しないやし米ぶくる	、	湖東 松巢
山畑の癖や打ても片低き	、	可陽	(一〇ウ)	花の中出ぬけて見るや花の雲	越丸岡	陸鷹	花少し散より起る曇かな	、	五朗
				散かゝる枝あり花の暮隣	、	路江	寝た家にかぶさる花の曇かな	、	日向 双鳥
				黄鳥の来たとはおろか今初音	アハ	鷗里	花と人あはひに何もなかりけり	、	駝岳
歌仙一折				庭中へ影さす梅の月夜哉	淡路	半谷	四五軒に暮れる日もある御慶哉	、	五木
葉を分て風の入れたき牡丹哉	、	朝陽		梅の月人を寝させぬ終夜	、	墨雨	釣台に折口残るさくらかな	、	土州 嵐夕
運ぶ円座について来る蠅	、	流芳		吹上て雨のあがるや桃の花	、	富草	礼受て居るにはたから御慶哉	、	葦屋
水浴る子の杭鼻につゝ立て	、	陽		正月の夜の底吹野風かな	、	希康	【参考】天保一一年『花供養』二二ウに再出。		
手の裏返すやうな空合	、	芳		ほつとして朝から午刻や花所	、	信業 楓下	内からも霞んで明る伽藍かな	、	ハリマ 曾夢
有ふれた下戸の料理にこまる月	、	陽		梅匂ふ寝覚くゝや灯のほしき	土山	凡鳥	山欠て田をこしらへる霞かな	、	古谷
垣の続の鳴子音よき	、	芳		我内の初鶏遠く聞にけり	撰三田	冬岐	花の雨低い所から降にけり	、	古溪
湖うけの山の白膠木の未だ染ず	、	陽	(二一オ)	摘過て隣へ分る齋かな	西湖	節外	雲とまがふ計になりぬ風	、	桃隠
桐油の匂ひの移る半てん	、	芳		貰ふても折ては呉れず花の枝	、	是来	花さきて来るや寺子の去ぬ時分	、	不秋
寝よとする人の枕をかくすなり	、	陽		我が庭のやうで隣の梅の花	、	タンバ 真澄	鶯やあと向たれば登り道	、	月亭
庚申棚の寒きあら菰	、	芳		山裾の霞し中や門の屋根	、	白燕	谷の外道のかたまる余寒哉	、	峰種
皿鉢の継れぬほどにけふもわれ	、	陽		花の香に松の雫や嵐山	、	桂眉	山ざくら鳥の遠音に曇りけり	、	蝶二
簪のまゝで突遣りし絹	、	芳		御無沙汰の断いふや花の中	、	呉梅	門松の陰にたちけり草履取	、	支鳴
出先まで来て物たらぬ鳥の月	、	陽		ちらかすが子の遊びなり五形花	丹後	龍山	谷を溪に出て集るや花戻	、	黄州
新酒の頭痛言ながら呑	、	芳		塵一つ負ふて流るゝ蛙かな	西湖	風外	行灯を提て若菜の差図哉	、	ノト 生化
羽つかひの遠くへゆかぬ放し鳥	、	陽	(二二ウ)	朝からの出雲離れて夕ざくら	、	漁村	溝筋の掃切である余寒かな	、	金沢 太甫
むさくさと枯木の中の花さきて	、	陽		隠居丈のこしてふさぐ巨燵哉	、	松月	一日はゆふべもなく初がらす	、	立介
							家殖て町中になる柳哉	、	林坡
							御問毎にあるや子日のこぼれ土	、	一雄

雪解の雫や庵の四方から

うめ提て出た家人にしられけり

枯木まで景色持けり梅の月

朧夜や壁ごし近き網のおと

夕陽や葦も少し日も少し

元日や寝た計では日の暮ぬ

福藁の長う下りぬ棚の端

人日や爰にも一つかんざまし

散花の消込池の小浪かな

瀧山の腰に盛りや石南花

万歳や舞て仕廻へば親子めく

花守が灯をかる花のもどり哉

会釈して子に廻しけり屠蘇の酒

元日や見馴ぬやうに思ふ空

気つかぬ処にあるなり露の臺

淡雪や飼鷺も鳴やどり

尻むけに舟も漕けり花盛

遠目にも今朝は紛れず島の梅

夜ざくらや皆年頃な人出入

山吹や梅の下道早くらき

松かぜの届かぬ空やなく蛙

温泉の肌のぬくもり覚す初鵜

暁を引かど松のけしきかな

ほつちりと麦踏男霞けり

人にまで摘せる垣の薺かな

草の戸によい日のさすや四代の春

軒摺て雲雀の下りる谷間哉

人ふとり細り出這入さくらかな

水引を添てわたすや桃の花

柳葉や青しきみよき鳩廻り

(二五ウ)

初蝶や影をそゆれば二番ひ

黄鳥や田一枚こす声のはり

はつ花や風さら／＼と吹わたし

飯焚の手に移らず手鞠歌

折て来た梅や下部とさし荷ひ

雪のけて見れば曳れず松の丈

二三人取てかへすや花のおく

花のある丈は見通す流かな

尋ね先きく人もなき霞かな

年玉や直に間に合ふ物計

雨水のきれてけぶるや夕柳

ふね通ふ町も朝寝や春の雪

帆柱の影しばしさす海苔簀哉

元日や藪はそよ／＼風のある

そこらから出て来た声ぞ初鵜

春の夜やゆり起されて客にゆく

門出るとよき鐘聞や梅花

力水吞で花見よ角力取

つい／＼と北へも延て梅の花

隈とつてさくら散けり汐の跡

黄昏や二日続けて初かはづ

山の灯の見へても暮す春の水

風の出で見失ひけり遠柳

正月の末のあるじや坪の内

何もかも咲けば猶さく椿かな

門々やむかしのさまを飴り竹

松に未だ寒き音あり梅花

此花のむかしをかたる小窓哉

外堀や古葉の中へ落椿

鋤あらふ流もありて遅ざくら

荷了

春路

晨支

菊守

禾木

素撲

山外

氷谷

白桂

芳午

得蕪

壮賢

助宣

黄山

不轉

我竟

月底

蓬陽

史千

遅流

阿鳥

卓池

秀外

沙鷗

而后

世行

東邸

蓬邸

(二七ウ)

晴る、日や盛りの花にいそがしき

散花を笠でうけるや雨の晴

散て来た花の続て流けり

こ、ろざす京には出ずに桜かな

寝た顔に挨拶するや花の主

鳴雉子と符の間や通り道

七草の揃ふばかりの小村かな

妻か男か分らず越すや屋根の猫

鳥井から人に別れて花見かな

初花にむかふて月のしづかなり

はつ夢や胸におく手のあた、まり

梅咲や庭のうへの針仕事

帯する間待てからいふ御慶哉

永日や戸のさしてある獵師町

こつそりと鶴料らすや春の雨

雲白し何所まで花のよしの山

樹の下を退けば桜のほひかな

よき家も見えて野に摘若菜哉

遠く見て歩行は近き柳かな

宿引の宿きめに出づ夜の花

門松や何所も日南に成てある

眩曲る道の勞れや花戻り

得手な事いふて来にけり花の人

行雲に添ふてうごくや遠柳

傘にひつ、く雨のさくら哉

一曇はれてちら／＼さくら哉

正月や雁の下りたる麦畑

寝ながらに仰ぐ薺ぞ匂はしき

雁鴨の尻の向ふや霞む山

ついに夢に見た年はなし宝舟

花屑

麻中

ヨド

蘭木

可推

(一九ウ)

ひとり明折戸や蝶は退もせず	、	丁知	(二二オ)	鶯の茨のおくに初音かな	青葉	古	中の弟を大鋸に仕たつる
船頭は廿年計や花筏	、	麻交		蝶々になりたし塀の内の花	鰯口	江	いつみても貂の皮の店晒し
御降にぬれて見歩行野山哉	、	氷狐		夕山や一段づゝに花の雲	吾雀	江	八坂の塔へつゝ小半町
梅折て置忘れけり梅の上	、	万頃			(二三オ)	古	ときの間に霽吹のけて月の澄
年のよる事はわすれて梅の花	、	幻芝				古	露にまけたかはちく桶の輪
我庭の花ほつといて花見かな	西コ	麦村		俳諧歌仙		江	辛抱で買ふた裕をまた借られ
山下りて離家までもさくら哉	、	香雪		うぐひすや以外の外の虫せり	駒童	古	連歌の会が延びて幸ひ
たらずほどつき上る子や二日灸	、	さと女		まだをりくは冴かへる春	喚古	古	たりさがる花にしつかり杖つかせ
声のして見へず焼野の夕鴉	、	湖郷	(二二ウ)	竈床の餅花柳芽をふいて	干江	江	酢売に習ふ鳥賊の丸むき
たて山といふ不二のあり今朝の春	、	都岐雄		下作までもみな律義なり	童	童	ぬくい日のつゞけば水もつかひよく
座しきとは違ふ風吹木の芽哉	備前	布国		汐留メの間もなく出来し宵の月	古	古	とろく下りて拾ふとんこつ
松かぜやしばらくありて春の月	、	涼呼		土鍋ぐるみに貰ふさや豆	江	江	右
樹に煙はなれぬ宵や春の月	ハリマ	霞村		秋中に刺る約束の俗納所	童	童	長崎社中
ちる花と顔吹風のちがひけり	アハ	凌岱		楊弓あたる音のさいく	古	古	花に来て皆花しらぬ花見かな
くさくの物年玉と成にけり	、	万像		振売が典葉寮の沙汰になり	江	江	来た人と出て見る月の柳哉
初花や生れかはつた朝ごゝろ	若州	葛山		いつもまつのに困る地飛脚	童	童	花の陰座ぶとん負ふて廻りけり
綱曳や考もなく日の暮て	、	時雨蓑	(二三オ)	挨拶も前垂かけの馴々し	古	古	風止んで散に眼のつく桜かな
癖付て梅にとまるや駅の馬	梅室			こつそり見せる裏の穴熊	江	江	戻りには暮て越けり春の水
夜がようて梅の蒼やうなかりけり	金沢	年風		とびと来た藪の跡の三日月	童	童	花の香に一声告る河鹿かな
きじの声唄に筋かふ日脚かな	、	素洞		眼をふさがるゝ髪置の供	古	古	雨一日しづ心あるさくらかな
朝雲の残る空よりきじの声	、	甫州		常不断紅がら色の番袴	江	江	余所の樹へ咲に登るや藤の花
寺の田といはぬ計の柳哉	、	素文		願解神楽のたへぬ春先	童	童	日表は葉ばかり見へて遅ざくら
朽処花にかくれて糸ざくら	ナニハ	一肖		川ひとつへだて、花の大さわぎ	古	古	拝するや賽銭箱に梅置て
接台も一枝伸てうめのはな	、	鼎左		巢をいらはれて蜂のちらかる	江	江	目出たしといふや雑煮の吹こぼれ
下したる荷鞍に休む乙鳥哉	、	林曹	(二三ウ)	上塗のじりく乾く抱へ曲突	童	童	手にとれば日の光ある桜かな
鶯や草履に替はる登り坂	、	蒿居		灸のあはけに妙薬もなし	古	古	今朝ふせた樋を早よごす蛙かな
うす墨の雁やおへうの上を行	、	樵山		江戸雖はかねのよいだけ折やすい	江	江	雀にも先起勝て花の春
空からも消て降りけり春の雪	鳥羽	如柳		御裏さがりて婚る後ちぞひ	童	童	小高みへ出ては蛙の小声かな
うき立や花ならぬ樹も嵐山	石外			きはまつた粽も出来ぬ気の毒さ	古	古	花らしき物は見へねど月と梅
氷りしも皆若水のこぼれかな	祖郷			ゑんぎ直しに登る祇園会	江	江	正月や年はよるともこゝろよき
				山田までかなり仕廻ふ二番草	童	童	

侘しきや月にも花も唯一人

蛙なく夜や明方のよき寒み

寝る時分人の出て来る睦月哉

折りたれば花のすくなき野梅哉

山吹やちよつと見込もよい小寺

長旅の土産ならべて松のうち

散上て気をつく谷の桜かな

軒一つ日の影さして余寒かな

俳諧歌仙

植はて、ひとの田植に交りけり

口にもはいる蛎の出盛

暮しよき夏の故にか駕もなし

巻ぐせ付ていざる上敷

折角と昇た月の俄雨

剥には菱も茹頃のある

去ぬ前になるに燕の子を孕み

入人の多き邇の朝風呂

忘れなと小ゆびく、つて遣りにけり

粉雪をはやす声の美し

常住に見ればゆたかな牢屋敷

腐れ縄でも拾ふ商売

しみくくと月さへもらぬ孟宗藪

灯籠引ケて犬の長吼

小手前な地藏祭の銭廻り

ひと走り遣る使ひまどる

朝飯の昼と間ちがふ花の宿

詠めのためにぬつた畦畔

京真似たやうな稲荷の御出振

結だなりで帯のぬけ、り

雨翠

南溪

杜鷺

枝月

蟻州

斜月

栗哉

菊圪

九華

朝陽

鳳朗

華

陽

朗

華

陽

朗

華

陽

華

朗

華

陽

華

朗

陽

朗

、

陽

乳のはる時は子守の居合せず

つよい虫丸になつた一吹

顔見世の積物屋根をすれくりに

空植ばかり鳴らす天秤

底までが岩で入江の役た、ず

片木の案につくる十ウ面

高椽の下はきす飛月夜さし

遅れた蓮の白もちらほら

風呂鋪に巻てもしれる釣道具

大人なぶりもことによる也

世間者の格を離れた笑ひ声

蠟燭で切るらうそくの真

どすくくと前かく馬の気短き

一寸松魚もつかふ芋植

星のある内に広がる花の雲

茜蒔たつ春の鈴の緒

華

朗

陽

華

朗

陽

華

朗

陽

華

朗

陽

華

筆

白梅や濁り片寄る池の水

春の日や車にあそぶ白鼠

紅梅やたまに降てもはした雨

み拵して来て誘ふ花見哉

鶯の道さだまるや藪二つ

気ゆるみのする夜や遠く鳴蛙

たぎる湯は茶にする当か庭桜

藁膏はわざとがましやはつ桜

菜の花や里のかたより暮てくる

只の日になる朝からの霞かな

眼の下になりけりもとの山桜

船橋の垢飛びわたる余寒哉

水は未だ冷たし花のはしり咲

大筏曳出す上やはるの月

松の月心とめれば猶おほろ

あここ、とかすみたてけり海の上

めぐましき花の影さす柵田哉

転んでも腹はた、ぬや梅の元

覗かれてのぞく夕日や花の幕

手伝のうしろあかりや梅の花

初午のさはりにならず夜半の雨

初ざくら見えて気のはる殿居哉

胸からは水をはなれて鳴蛙

境内はさくら計や山の寺

宵月や破風に柳のさはる音

山道の便りになるや蝶一つ

又元の山家となるか散さくら

着せらる、布団に起て春の雨

一しきりづ、風の来てはなの雲

苗代の仕切と見えて足の跡

米石

千尋

備前蕙風

素玉

日向習之

、厚薄

エト春香

、和翠

長崎芦淵

筑前宇逸

、往我

、宇甲

、席睡

能州鳳兮

サド周斉

、蜀水

トバ梅南

サ山可雪

城南瀧水

ノムラ西枝

ヤハタ一百

ヨド白水

、一帆

、美煙

、里暁

、金羽

、鯉兆

、素友

、笑鯉

、凡池



30 天保十一年『花供養』

底本 立教本  
校異 白鹿本

風に囃子のもれる青山  
衣桁から落た着物の広がりに  
てりふり多き継母の顔  
留主事と月見を兼て奢らる、  
火皿に虫の秋もうるさき  
持てもついうめ合ぬ野分損  
湯浅の一家今に摺れく  
午の日の講中揃ふ花の奥  
石叟ただけわかる青芝  
つながらずに有し汐干の船の綱  
鎧合羽をかはくまで着る  
道連はどちらも心置ける也  
苧をうみながら店の眼をはる  
昼少しにじるに氷柱落切らず  
不意に御輿の通る御火焼  
うつかりと口紅撫て手をよごし  
姉に苦勞をかける宿下り  
名灸の所をしかと留メわすれ  
焙炉仕舞へば蚊帳の穿鑿  
夕月に鮎のとれく煎付て  
碁にはうつ、になれど赤下手  
ついはせぬ勤番部屋の表がへ  
紛失物の程を経て出る  
上り温泉の日とて肴を買廻し  
雲はおかねどかすかなる峰  
結牆のうちの鶏むつまじき  
釘さへきかぬ神主の家  
又貸の提灯はつと焦しけり  
堤の切処今になをらぬ  
帰り来て三十歳ぶりの花供養

(一ウ)

春は猶更多き出這入  
右四十四一順

(三ウ)

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

筆端有靈

言興花芬

世維欽仰

其徒如雲

備陽 一亭改 志郎 (印)

(序ウ)

松檉の中にも見ゆる桜かな

古草浸す春の水先

日永さに鳩の糞掃鬮引て

搗屋の錠に付る封印

手ばなれのいつとも知れぬ堀普請

藁火の埃り人の上散る

衿もとの剃毛をふるふ朝の月

ぼちく鳴てはぜる櫛の実

鶴鴿の柵つたふきざみあし

ころりと欠る古鍋の耳

刻限の一日しれぬ鬱としさ

傷寒論に並ぶ書生衆

打水について上りし井戸の鮒

香雪

朝陽

蒼虬

杜蓼

芳英

葛雨

梅通

箬風

里居

杜鷺

九華

樗堂

芹舎

名灸の所をしかと留メわすれ

焙炉仕舞へば蚊帳の穿鑿

夕月に鮎のとれく煎付て

碁にはうつ、になれど赤下手

ついはせぬ勤番部屋の表がへ

紛失物の程を経て出る

上り温泉の日とて肴を買廻し

雲はおかねどかすかなる峰

結牆のうちの鶏むつまじき

釘さへきかぬ神主の家

又貸の提灯はつと焦しけり

堤の切処今になをらぬ

帰り来て三十歳ぶりの花供養

鹿月

かうち

太老

古山

唯叟

麦浪

馬朝

冬岐

梅雅

竹叟

青葉

明良

梅室

(二ウ)

髻から廻るや雪の若菜摘

高い木の央に出けり春の月

戸に鎖をさせば花見といはれけり

埋土の井形にしめる柳かな

切れ風や目当の松をさして行 肥前大村 静々

陽炎や扇乗せたる草の縁

見て居れば手伝ひしたき接木哉

鶯やものに心のちらぬ声

気がりの梢も見えず舞雲雀

灯の影や飯どき見ゆる柳ごし

歩行だけ汐の引けり春の風

風提てわたり澄すや丸木ばし

蝶々や垣根をこえて池のうへ

(四ウ)

春は猶更多き出這入  
重泰

蓬菜をかざればしらむ障子哉 筑后クルメ 苧川  
【校異】白鹿本にこの一句なし。  
霞まずに済だ日はなし草履旅 東鶴  
【校異】白鹿本、肩書「筑后クルメ」。

(三ウ)

藪入や近いにしては多ひ供

身について三日もあれや花埃り

さし向ひた勝手普請や花の寺

殻で来た駕も花見の道具かな

片咀は舟で見廻るさくらかな

花洩て来た日の当る寝顔かな

眼に付や花に出ぬ日の人通り

世間沙汰きけば気のはる雛哉

降さうで人は出ぬ日を花の中

艸から廻るや雪の若菜摘

高い木の央に出けり春の月

戸に鎖をさせば花見といはれけり

埋土の井形にしめる柳かな

切れ風や目当の松をさして行 肥前大村 静々

陽炎や扇乗せたる草の縁

見て居れば手伝ひしたき接木哉

鶯やものに心のちらぬ声

気がりの梢も見えず舞雲雀

灯の影や飯どき見ゆる柳ごし

歩行だけ汐の引けり春の風

風提てわたり澄すや丸木ばし

蝶々や垣根をこえて池のうへ

、 松代女

、 麦映

、 関芝

、 笑道

、 五明

、 蘭堂

、 木屑

水に浮く竹の青葉や冴かへる、赤彦  
 冴かへる夜や陸近き舟の音、禾堂  
 接木する側に冷るや煎じ菓、巴南  
 船からも廻る処や梅の花、樗山  
 見合もなくて開くや最合井戸、寸長  
 佛にたつや昨日のはつぎくら、眉山  
 黄鳥に逢も縁なり詣先、悠々  
 きじ鳴た跡やら草のかむり砂、湖東 可陽  
 咲たのは算るほどや初ざくら、嵐月  
 梅が、に一足もどる垣根かな、千丈  
 川水にうけて揃へる若菜哉、美水  
 鶯や木ぶり枝ぶり見てとまる、備都羅島 桑坡  
 かね霞む日やゆれて居る笹の鳥、嫩緑  
 来る度に小一倍さくすみれかな、繁緑  
 女では追ひ力なし猫の恋、芦州  
 気にはりのぬけて雛の撰かな、相場  
 一切衆生輪廻六道猶車輪無始終

(五ウ) (六オ)

折枝の花は短き椿かな、玉雄  
 花の下水むら／＼と流れり、梅筈  
 溝川も泡立ほどやはるの水、鶴邑  
 鶯の巢を取まく花の吹雪哉、正院 鳳兮  
 釜かけて春風をまつ日和かな、薩州加治木 克昌  
 切風のか、るも楽し庭の松、越来  
 処々入日にけふるさくらかな、嘯虎  
 月出ても向のかはらぬ桜かな、昌人  
 咲初る花に踏出す草鞋哉、嵐翠  
 聞馴た声のみなれど初がらす、几桂  
 夕汐のそこまで来たり花むしろ、春選  
 草木もはなれ切けり揚雲雀、水玉  
 長閑や花にうかる、夕日あし、草佳  
 散さうにしてたもちけり夕ざくら、虫二

(七ウ) (八オ)

夜ざくらや寝ながら習ふ扇の手、霞橋  
 雨晴のこずゑあかりや夏ちかき、芦分  
 かげろふやあし元にさす鳥の影、竹雨  
 巢の見えぬ蜂の出這る朽木かな、梅里  
 一趣向して人誘ふ柳かな、喜昌  
 夜に入て一木に見える桜かな、淇雪  
 切風に鳥つき行日ぐれかな、反化  
 降出して出入せわしき燕かな、花丸  
 勝負の沙汰がならねど鶏合、良雪  
 咲足らぬ花を主の馳走哉、青素  
 元日や勿体のつく杵と臼、木枕  
 きじ鳴や知て踏込水溜り、廬月  
 一日延二日のびけり雛仕舞、桂女  
 柴舟に便して戻る茶摘哉、立女  
 ふり向もせずまた飛ぶ蛙哉、処曉  
 山吹や夜も明るき細ながれ、芝仙  
 寝た人にあびせかけるや散桜、宇律  
 持飽て首にかけるや藤の花、岱雲

(九ウ) (一〇オ)

俳諧歌仙

古う来るやうに早立鹿の子哉

朝陽

寛の水のつたふ紫陽花

流芳

焚つける間たばこの火を待て

蒼虬

柎の下へはさむ手ぬぐひ

陽

月代の邪魔にもならぬ通り雨

芳

そろく鏝る股川の鮎

虬

土器の欠屑おほき施餓鬼跡

陽

子供にしてはきついいさかひ

芳

さし繩に荷鞍の茜すれる也

虬

市日春めく榧やかち栗

陽

どふしても手の皸はかくされず

芳

ちよつくと来ては壁訴訟する

虬

猫の飛しのびがへしに居る月

陽

毛見を済して酒の一チ段

芳

小早うに干物入るうそ寒さ

虬

まんよう着し飯の浦船

陽

開帳も花を四五分の人通り

芳

足爪立て覗く鳩の巢

虬

雇れて自身番する日の永さ

陽

どこの家越か道具きたなき

芳

有がたき髭題目を吹ちらし

虬

干潟くに見える口蝦夷

陽

板葺のおさへの石の気味悪く

芳

夏はふさはぬ顔の色艶

虬

横さけのして心なき葛ばかま

陽

甲州金を皆がほしがる

芳

近頃は所化もへりたる竹の寮

虬

鹿末にしては置ぬ山の井

陽

ナウ

入月のしばらく宿る蕎麦の茎

芳

遠ひ砧の根づよう打

虬

売余る祭の鱈舌のさし

陽

居りなれねばいたき板間

芳

漸々とおちたる針を撫当り

虬

ときつくるやう時の羽た、き

陽

都合よく花に応じたあた、かみ

虬

大の統てゆたかなる春

芳

俳諧歌仙

注連退て先如月の榊かな

長崎 駒童

内外かすみのつゝくわら茸

干江

橋越せばいまのはこ鳥鳴止みて

童

望仕第に出来るのみ喰

江

豊まで麦のほてりのさめぬ月

童

一しきりづゝたるむ船風

江

河岸筋に出て馬仕込草履取

童

折ふし鶴もおりる境内

江

さげて来る初孟宗のむすび文

童

うすくきけば素人でなし

江

見隠しにかけた暖簾の片さがり

童

弁理よすぎててもろい唐焼

江

のほり月船が出るとして矢の使

童

願で石榴はくはぬ講中

江

何なりと投てくれねば去ぬ鹿

童

雲はすいても矢張はりつく

江

居風呂の赤土くさき花の茶や

童

古名ばかりで済だ出代

江

へつそりと碓井の雪も夏近し

江

猿をとらせてさはぐ穢多村

童

つゝがなき漂流人の口しまり

江

山伏ひとりむくくと肥へ

童

めざはりに成た柳も散じまひ

江

鈍屑燃す池の真中

童

寝起から魚膏たゝくわたましに

江

御裏の紋の見ゆる長持

童

江の島で丸一日も遅なはり

江

毒断もせぬむかひ湯の月

童

見かけには似ぬ小鶉が関にたち

江

かつちり石に落る団栗

童

夜ふかしをいひく膳をふき並べ

江

酒の役にはたゝぬ客僧

童

風もなきにじり明りのうつとしく

江

二つ三つ啼蛙かしこし

童

おもふ凶に鞠場の花も咲揃ひ

江

内に居る気のさへるあたゝか

童

歌僊一折

江

鳴といふ丹波だよりやほとゝぎす

門

若葉にまじる花も上京

門

楽焼の土ごしらへに手のあれて

門

よき日よりなり袖に入かせ

起

浦船の篷とりかける月あかり

門

損したあとの儲ある秋

起

齒のぬけてから黒漬を喰覚へ

門

国の朝日に手をさげて立

起

するくと袈裟のはづるゝ絹衣

門

しめりを蟹のめぐる垣の根

起

青東風のりんと涼しき湯上りに

門

傍輩たけて口説かれもせず

起

浅猿とおもひながらの物おもひ

寝たうち降た軒の玉水

門起 (一六オ)

鶯の藪のぐるりに声立て

新造りのふるき梁

右六

宵月のじりくめぐる松の間

程なふ落す水のすさまじ

種陽 (一九ウ)

先のみで呼でとらせる報謝銭

をりくしるき砂に浜ゆふ

門起

約束の月見の客のみえる沙汰

しらの他人に囉ふ焼沙魚

右六

鳥渡るころは雀の小淋しく

声しはがれし寺の御勤

種陽

海こえておぼろに見ゆる月の不二

新茶に菓子もかへて出さる、

門起

大沙の薄に埃みを引残し

とろく音の近き廻廊

右六

古う来る城下の八百や気の若き

たちはだかつて鏡台の邪魔

種陽

歌仙一折

肥前大村

抜かけて子に曳せたる小松かな

くほみくみみえる雪汁

眉山初六 (一六ウ)

辛抱をする程もの、大やうさ

鉢僧よんで齋を振舞ふ

右六

川尻は網打ふねにせばめられ

一膳飯のよふ売るなり

種陽

出代の荷物一駄にかさばりて

曇りて店のくらき暖簾

山六

蓮の葉を市へ出す間に月消えて

強ふなりたる赤き蜻蛉

右六

岡人の金棒間もいやらしく

禿た箒で掃たうへ掃

種陽

口上で月の案内をしらせ行

通すす、きにつたふ魚の血

山六

江に落す水の濁りの筋立し

日和の虹につぐく夕焼

右六

鬼門むく末社の花も咲か、り

蛇の衣にも続く蟻道

種陽

綿代に今とし煙草を遣る思案

歛つかふても襦袢と呼ぶ、

山六

イむで居る間に花のちり敷て

小草の上に風のふはつく

右六

傘干た当りに梅の匂ひかな

菜の花を鉢に植たる庵かな

種陽

虫干も蒔絵の残る鞍鐙

ふとき鼠の昼も出歩行

山六 (一七オ)

歌仙表

気色持間もなく消し春の雪

香ばかりもる、藪中の梅

淡亭

しりにまだ寒さひかへて初がすみ

午時からの雨に啼けり初蛙

種陽

枝ながら豆煮る月も過にけり

崩れし築に水の渦まく

山六

新風呂へ入ば蛙の啼立て

非番になると人の世話やく

亭

罪もなき吹散やうや山桜

驚し弓残る木煉の木のめ哉

種陽

鳴突に貸たる傘の返り来ず

台所番に直る庭掃

山六

月に打きぬたを聞ば身のほそき

川連かくす材木の秋

亭

足袋の砂ふるひ捨るや夕桜

戸明るかいなや一度に花吹雪

種陽

賓頭盧の膝にも溜る花の塵

ただ美しき春の日の色

山六 (一七ウ)

引捨た車のうへの柳哉

昼まで降ばあがる春雨

古谷

見るうちに雨となりけり春の雪

海まではゆかぬ曇りやきじの声

種陽

遊ぶ児の中を陽炎登りけり

肥前大村

桃右

出代の宿する家の賑やかに

あづかりものをしるす紙札

朝陽

御降は土器まはす間かな

行灯のあかり塀越すさくら哉

種陽

歌仙一折

肥前大村

土手の土筆のすくくと出る

初六

あづかりものをしるす紙札

谷

野竹

午潮

江にはまだ下りぬ鳥や梅の花、

葵園

藪ひとつはさむで梅のうら表、

梧栖更 紫石

弓を引手に吹つけて春の雪、

宇甲

引ふりの見えて一日門の雁、

尺歩

田にはまだか、はらぬ日や初霞、

牛歩

枯あしのかるき火花や初ざくら、

宇逸

蓬萊のおき処ひろき二日哉、

ハリマ 古谷

凍どけや手でも拾へぬ盈れ米、

支鳴

家ありと木の間に見えて朧月、

古溪

北うけに月をのこして初がすみ、

春朗

暮切た庭の見込や花明り、

黄州

座に付て気の落付ぬ花見哉、

梅曉更 千嵐

夜ざくらや物かずいはぬ人出入、

季風

山ざとや花のちり込台処、

伍柳

宝引や仕まへば勝た人のなき、

峰種

礼うけて居るにはたから御慶哉、

土佐 葦崖

【参考】天保一〇年『花供養』一四ウに既出。

鶏なくや屋根から花のうち向て、

帯朝

吹つけて一島白し梅の花、

齋空

花と雨半分づゝの弥生かな、

梨園

によきくゝと鳥の重る霞かな、

配昇

来てもくゝ開かゝりのさくらかな、

日然

鶯を上からも聞く茶畑かな、

土州 嵐夕

笹そよりくゝ鶯見えかくれ、

因州 野屋

むら雪の群を捜すや若な摘、

伯州 観渾

鬼業に母をわすれて日永の子、

雲州 馬得

春立やおくれ礼者の泊りがけ、

雲州 馬得

つきかけて誘ひ人のくる花見哉、

ナニハ 為之

今鳴た鶯歩行祠堂畑、

但馬村岡 一橋

山吹や廻り道する崖の上、

左和蟻

道法はどちへも遠し遅ざくら

遠州 呼卯

関よけて通る谷間のさくら哉

、 たつ女

宮近う木の問出ぬけて桜かな

、 竹里

ひたくゝと傘にうれしや雨の花

西湖 湖郷

炭焼の在所も白しうめのはな

、 湖村

永日やあかき椿の咲のこり

、 日爪 舞雪

雨ばれや遠く聞える御忌の鐘

、 川島 湖月

精進日を引上げて待つ花見哉

、 大溝 里女

塗たての塀の見事や雑祭

越中 不言

活てから豊の濡る柳哉

ト山 守胤

海苔搔や照降なしの身の廻り

、 斜梁

外の木は花にかくれてあらし山

、 蘭吹

真にも引出す屠蘇の匂ひ哉

、 凡丈

鶯の輪の外まで余る花見哉

相模 連美

花の雲出這入もなく消にけり

、 一猪

鳥井までひけば風有汐干哉

、 兎角

海苔の香や骨柳の蓋とる灯さき

会津若松 可応

日々に来た人の噂や松のうち

、 梅二

ふとの、は辻から戻る乙鳥哉

、 双六

世話しなう見ても花見は花見哉

、 柳眉

越にして先谷ごしの花見かな

坂本 蔵六

風を待てもなし春のかゝり船

、 桑室

かぶるには手拭ふるし花歩行

江戸 鳳朗

初花にくる日十しもなかりけり

、 樹村

花案内らしや袴の前下り

、 冬映

花の香のほとびるやうな月夜哉

、 永久

はなほこりより外はなし四畳半

、 笑直

寝て見てもたゞ花の夜で有にけり

、 晨支

口明る貝やぬるんだ昼の水

西湖ワラノ 喜田雄

釣鐘の売れる日も有さくら哉

、 漁村

水垢の岩に干上る霞かな

、 末引

断て摘せて貰ふわかなかな

、 千融

灯もせば一際見ゆるさくら哉

、 一化

沖西にあまる気色や花の雲

、 玉芝

蝶飛や江戸に置児のなつかしき

、 紫月

替地してこゝろの残るさくら哉

西湖太田 梅父

われがちな声と成けり夕桜

、 清泉

日のうつる処もあるや雨の花

、 錦水

散花や風の出てよし止でまし

、 麦村

花に風しるやともし灯戦ぐ夜る

霜降 楚蕉

山主へしらせて戻るさくらかな

西湖五十川 節外

夜桜と名付て出るも遊さん哉

ツルガ 春月

日永さに忘れて居るや船便

矢バシ 流川

時雨蓑の名を愚息にゆづりて

花ふゞぎ花しぐれして嵐山

ワカサ北方 居成

散だだま、汲で行池の花

、 ニシツ 刀自壳

しづかさの花にもちたる流かな

、 淡水

花時候をあてに都へ立日かな

、 小バマ 如頼

折まてにして見て居るや梅の花

ノト七尾 玉雄

鶯や出て聞たびに人の藪

、 語水

岨水のぬくみかゝるや啼蛙

湖東町屋 不捨

藪中へ降込雨や啼蛙

、 湖陽

紅梅や鴉のぬぐふ贅の土

、 素竹

盛から葉勝になるや山桜

、 士韻

底水の有石原や啼蛙

、 半丈

そうといへば霞やう也垣の梅

ハマン 可松

倒木や花見間の人やすめ

、 桃谷

夕月も又一しほの子の日哉

、 太室

夜明るに添へてしだる、柳哉

、 麻中

一日は家に留主して三ヶ日

、 花屑

樹の雫計かぶりて椿さく

越中魚津 楽水

道草に曳々歩行柳かな

越后亀田 応泉

松が枝に稲つむ人の灯かげ哉

、友徳

花よりもうしろにたかし夜の山

撰州三田 冬岐 (二七〇)

けふはまだ嬉しや花の散小口

イタミ 退歩

雲にして帰る期にせん花の山

、紫金

空耳に雁さく夜なり花の宿

大坂 里柳

置綿に土地がら見ゆる桜哉

、枕江

朝戸出の眼先にたかし花の雲

貝ヅカ 五眺

隣からをしむほど散る桜かな

、吾鶴

暮遠し日は入相の花の鐘

、西准

手折たる花に月添ふ戸口かな

備前西大寺 梅枝 (二七ウ)

花の客仕舞てふさぐ火燧哉

雲州島田 完穂

足とめて見処まよふ桜かな

、打江 茶窓

初花や麓は寒き雨の音

、シマ田 慈光

川越へてまた垣越しや初桜

イセツ 狐穴

はつ花や力の見ゆる雨の後

、梅曦

燕や蔵持多き湊町

サスキ 木長

鶯やちらりとしたを見失ひ

ヒゼン 霞林

目に痒の付とき草の萌にけり

、素羅 (二八〇)

藪陰の茶摘やひとり頬かぶり

予州小松 映門

降よりも曇間多し春の雨

、菊圃女

菜の花や池より奥に五六軒

讃高松 砂月

初午や埃りに酔て気草臥

、光山

養父入や京の言葉を早覚へ

、良峰

戸の透のあからむとはや揚雲雀

、良岫

引鳥や一群くろむ舟のうへ

行脚 素六

雲陰はまだ冷くくと山ざくら

阿州徳シマ 調風 (二八ウ)

松原を黙て越て花ざかり

加金沢 芹齋

昼までは雫のたへぬ野梅哉

、磨弥

一がすみ乗せた様なりか、り船

、如竹

七草や先一品は庭の畑

、一亀

大寺やつ、じ見るさへ時うつる

、素蓼

一雨につき出す花の筏かな

、柳架

川風に身をもすばめず飛乙鳥

、柿丸

散かゝる花やひかへるもどり足

会津坂下 茶三 (二九〇)

梅の花咲や塀より外の枝

、斗南

途中にて問ふや余寒の人の無事

、慶徳 而來

柳から裾は淋しき町家かな

、上林 天美

何咄してか向合ふ田打哉

、其骨

歌仙一折

咲いそぎして中絶や鳥の梅

朝陽

処へに左義長の跡

里居

穴一の筋を牛馬に書かへて

吾雀 (二九ウ)

まくつて見せる湯上りの足

陽

宵月は隣の屋根で拝まれず

居

うつすり柿も底色のつく

雀

まし水に運ようまはる鱧築

陽

小村なれども嵩む油荷

居

悪ひのも承知で頼む下し銀

雀

膳にまぶいとさ、す窓の日

陽

気は勝てあれど腰膝た、ぬ也

居 (三〇オ)

子を見て直す夫婦いさかひ

雀

有明の寒きありの実枝さ、げ

陽

浜へ太鼓の響く六齋

居

すかさされて瀆へこけ込辻角力

雀

夜なきの蕎麦荷つうと上ゆく

陽

野から吹風にほかへにほふ花

居

座敷になれて逃ぬ雀子

雀

○ やどり木は今初花や花の中 イセ四日市 流芳 (三〇ウ)

紅梅や老木と見へて花配り 葎橋吏 都岐雄

立登る煙の中や小松曳 イセ 宇栗

凧なるや春は空さへ只おかず 虚白

暖や枝から落る木がらほし 楓下

広過て場のきまらぬや花の中 カハチ 古鏡

降雨をこらへて居たり花の下 此植

酒呑ぬ人は不足に春の雪 ナニハ 蘭秀 (三一オ)

つ、かけて来てためらふや春の水 鼎左

手に余る根松を提て春の雨 林曹

つい四丁五町入込さくらかな 佳峰

花曇かけぬ松なし嵐山 一肖

後まで見せて手を打雛かな ヨド 素友

見て居れば帆にかくさる、柳哉 青祇

根の先を揃へて提る齋かな 蘭舟

裸木に伝ふ光りや春の雨 鶯語 (三一ウ)

ちらと見て小足になりぬ藪の梅 梅價

竹の子も最掘沙汰や梅の花 金葉

場をかえる田にし転げて流けり 柳絲

峰だけは靄に隠して夕ざくら 丈翠

黄鳥やはづかしからぬ門がまへ 杜鶯

かざし葉を見せて夫より初桜 箬風

草履はく所もありて梅の花 寿堂

夢にまで酒の客して梅の花 岱年 (三一オ)

椽下や息災で居てなく蛙 長サキ 甫旧

夜舟のる都合ふて来たり桃の花 ト山 草村

万歳に荷あしの入るや渡し舟 スハフ 二秀

毎日や返事もほし、梅の花 宝仙 臥鵬

来か、つた下部と客の年酒哉 南山シロ 慈弓

雉子鳴や門より奥ものぼり坂  
改て一枝折るや畑のうめ

伏見 丘鳳  
ヒノ 五風

風呂敷に並べて置や土筆

、 和月

一谷はさくらに早き夜明かな

越丸岡 路江

呉服屋のあかり引けり猫の恋

エド 水谷

見へて居て通れぬ道や春の草

、 惟草

浮足に成て花見る麓かな

、 鬼仙

水底の見えぬ程寄る白魚哉

、 禾柴

苔みしは去年のいつやら椿咲

、 護物

鶯や峠か、えて昼旅籠

、 五株

ほつちりと麦踏男霞けり

、 大梅

水口の幣も巢に引鴉かな

、 一具

降やみて又夜さくらと成にけり

浅草 音人

大池にこぼく〜と浮く手鞠かな

、 春香

道にして並樹へ抜る春田哉

エド 梅巢

春雨や晴る、も樂し降もよし

莫父丸

有所を常は見かけず福寿草

石外

春の夜や出か、る所へ人の来る

鳥谷

笑ふ子となく児とあるよ御忌の鐘

凡鳥

如月や心もおけぬ泊り客

ビゼン 涼呼

鶯や早いながれに添ひし蕨

、 茄村

松風の落て朧や須磨の月

、 廬風

彼岸から二人に成るや涉し守

、 岡山 晋水

葉がくれの椿見出すや藪の中

ハリマ 霞村

手の笠も片なくさみや花曇

越丸岡 三巴

啼て行方へ明るや初がらす

、 陸鷹

なつかしや海苔の香もするいせ曆

大ッ 蕙逸

我梅を折るに隣へまはりけり

大聖寺 丹嶺

ゆれのこる撞木の上や啼乙鳥

、 豊収

揚雲雀愛宕の神とならびけり

大ッ 九齋

建やうでぬくい家あり春の風  
犬の道狩ても出たり藪の雉子

、 砺山  
沙鷗

【校異】白鹿本、肩書「、」。

山冷に曳わかれけり花と雲

卓池

【校異】白鹿本、肩書「、」。

雛の膳子の手を添て運びけり

イヨ 郊馬

なの花やまかぬ種まで一ト盛り

、 鶯居

豆腐挽く音も若やぐ二日哉

曾夢

【校異】白鹿本、肩書「、」。

幹までも花に気のつく桜哉

トバ 如柳

あら海や行どもきたる春の月

サド 蜀水

うめ咲や結直したる路次箒

、 周斉

牛馬の通りて嗅や春の雨

丹クロ井 白燕

梅のみによける空地や蔵の前

サ、山 百可

枝先の揃はぬでよき柳かな

ナニハ 井資

万歳や雪踏ばかりの新らしき

、 眉山

残る雪さぞ有さうや鈴鹿山

金沢 太甫

はる雨や早行灯に虫のつく

、 一雄

雪と見えた花やさすがに雪吹散ル、

柳壺

何の木とわかぬ中にも柳かな

、 林坡

室引の浮網とるや行灯ごし

、 素父

梅咲やひとつの窓の用不用

、 年風

うめ早し落温泉の行くも畔一重

、 立介

念の入る夕日となりぬ梅林

、 棹江

木戸入て暫しうつ、や人と花 丹ミヤツ

本道

【校異】白鹿本、作者名「本堂」。

堤からだら〜下りの野梅哉

、 雨新

日交りに降〜消ぬ春の雪

、 サ、山 風所

馬駕を下りて潜らす柳哉

ヌカタ 桂眉

梅に吹風のもどりや顔寒し 丹ナリマツ

不酔

遊ぶ手の水にあやかし初蛙  
漣の水田に絶えず月と梅

、 日葵  
、 呉秀

広過て香のと、まらず原の梅

、 青巴

胤止の池や水もとげにくき

、 素来

一声は垣のうちに初がらす

、 楓里更 珍蛙

出た山を棹尻にして帰る雁

、 宜州

同じ事いふて過けり三ケ日

西湖川シマ 松月

まだ雪のふかい便りや春の山

太田 政雄

花の山吹雪かぬ間はなかりけり

、 氷谷

梅が香やちがひ棚から紙のちる

ナニハ 里居

一風持て出にけり春の水

初六

華屑を箒で落す椿かな

カタ、 世岐

鶯や飼たやうなる鞠が、り

大ッ 米友

うつかりと来て退てみる柳かな

ブンコ 碧山

夕影の花よりもる、手元哉

奥朝香笹川 如水

元日や供の膳部も旦那なみ

、 可得

宮などがありたき梅の地面哉

、 可申

起がけに花曇りする流かな

、 半両

ゆられ来て散花淀にたまりけり、杉田

英泉

人のちる程にはちらす夕ざくら

梅室

神棚や畳の上の落つばき

卓丈

降と見てのばれば花の曇りかな

カメ山 花睦

溝川や水も通らで咲五形花

カハチ 稲海

鶯や人声聞て遠くなる

春秋庵 香雪

暖な処や土の取たあと

ヲハリ 青白

起さずば花にうづまん樽枕

、 呉崖

野の雲雀聞えて寒き二階哉

黙池

福寿草貫ふた儘のひねりのし

、 太老

ひとりでに大きうなりし柳哉

、 杜蓼

小溝だけはづみにこゆる手鞠哉

斜月

初蝶やゑぼし着た日に逢初る 江戸 詠婦  
 門河に流す筏も霞けり ナリマツ 得之  
 門まつぐるり丈掃深雪かな 可大  
 きじ鳴や野はさまぐくに眼も明ず 有節  
 かれ枝を梢に持て梅の華 尾陽 秀外 (三八オ)  
 日の筋や音のして浮く田の水 江戸 丁知  
 天地へひらけ扇の太郎月 麻交  
 今宵から軒に月ある子の日哉 山外  
 元日やまだ地をふまぬ鳥の声 逸瀨  
 一夜さの東風に火桶のしめり哉 由誓  
 朝に取朝にとりしく露の臺 得蕪  
 夜は闇にせよ月にせよ梅薫る 是水  
 しとくとよい春雨や雪の上 抱儀 (三八ウ)  
 梅が香や軒に揃はぬ片山家 明良  
 少しづ、雪解のこる畑かな アハチ 半谷  
 はつぎくら短ひ枝に咲にけり 越後見付 北洋  
 提灯の越へて来にけり春の山 茶三  
 啼蛙雉子とへだてる大川哉 水原 春室  
 葉より花多し椿のはさみ屑 イタミ 曲阜  
 鶏鳴や早あらたまる松の声 伯州 有隣  
 雨の日や天井低き羽子の音 雲州 東溟 (三九オ)  
 夜ざくらに履物しれぬ垣根哉 蒼虬  
 一推になるや深間の夕ざくら 来青  
 夕暮につままる鳥のかすみかな 梅通  
 梅折ばしかりさうなり鬼瓦 不染  
 松原や家さへあれば梅の花 芹舎  
 暮る日や袷元寒き花戻り 枝月  
 雪ちるや逃てもいなぬ若な摘 芳英  
 かいしよなく供の引ずる柳かな 南溪  
 子供にも出来て嬉しき御慶かな 江戸 松什 (三九ウ)

ずらくと咲だす梅の木ぶり哉 万頂  
 まぼしさや空は雲雀の声計 幻芝  
 元日や炬に炭次で昼になる 祖郷  
 乙鳥や雲雀の空へ高あがり 尾陽 而后  
 むだ食につい無くしけり海苔一把 黄山  
 ぬけ駝を仕たに間もなふ夕桜 蟻州  
 出代りの道をはなれぬ流かな 天遊 (四〇オ)  
 鶯の声にうすらぐ曇りかな カメ山 月樵  
 うめ咲や早ふかはいたあらひ炭 南涯  
 番禰宜が出て教るや仏の座 ヲハリ 蓬陽  
 出た人の膳のしてある日永かな 阿鳥  
 樋の音を歩けて聞やうめ明り 梅石  
 戸をさいた音に連翹つきけり 大ミヅ 麦洋  
 猫の出で鹿相になるや梅の下 イヨ 葵笠  
 去年から月夜まはりや梅の花 平山 (四〇ウ)  
 青むとてつよい雨ふる柳かな 筑后 市埒  
 注連はつた内は曳れぬ小松哉 松塙  
 曲り途も覚えず行や春の月 文月  
 出し入にかゝり切たり屠蘇の酌 士言  
 井戸ばたに土ながらある若菜哉 吐雲  
 大井川の西岸に飲して 唯叟  
 狼の道とは知らず華の影 梅雅 (四一オ)  
 行灯の影でそろへし逢かな ミノ旦鳥

高瀬四五艘春を待けり 坡  
 うしろ手の親父も雨に追れ足 起 (四一ウ)  
 空になるほどありがたき宮 坡  
 けふの日の俄にながき麦の秋 起  
 岩に砕る浪の真白 坡  
 常にして用なき枴持通し 起  
 知恵の有たけ人のせはする 坡  
 男なら月の明石も更科も 起  
 寝ごとの枕たぐつと入 坡  
 精霊は心づかひのない祭 起 (四二オ)  
 よはくともる昼の蠟燭 坡  
 花の香に藪はほちと雪たり 起  
 菜摘大勢かすまれて行 坡  
 同一折 朝陽  
 ぼつくと人なくなりし潮干哉 かうち  
 並び場のよき柳四五本 陽  
 元村も出むらも春は門下殖て 陽  
 どうやらすると鉄気うく鍋 ち (四二ウ)  
 有明に残暑の体は見へぬ也 陽  
 へちまの蔓を閉る蜘蛛の囲 ち  
 ふさがらぬ明家で祭る大日会 陽  
 削れど間には合ぬ古板 ち  
 女房に養れた亭主病ほおけ 陽  
 おもひ有げにまはす行灯 ち  
 虚空にも声の広がる年の市 陽  
 霰に道をやくたいにする ち (四三オ)  
 追入た猪の出て来ぬ二尊院 陽  
 揃ふて顔のこわき侍 ち  
 月花に金掘どもの酔つぶれ 陽

ちよろ／＼川のあた、かき音

雉子は啼蝶は眠てくらしけり

講手拭を南側の屋根

ち 陽 ち

○

いつまでも雅ご、ろや梅柳

城南下駒古稀翁

二由 (四三ウ)

山門に煮売ゆるすや花盛り

葛雨

ちる花と盛の花のゆふべかな

樗堂

是ほどに降覚悟なし春の雪

倍美

一人来て折れば音あり朝ざくら

馬朝

日づもりの雨気にまはる花見かな

吾雀

雨の日はたぐり置たし糸ざくら

重泰

古社見越して奥のさくらかな

道僕

つぎの間に扇ぬかれて生ざくら

深翠

押よせて有夕雲やのぼり籜

梅六

洩る月の光りや春の物笑ひ

百仙

おもひきや一夜の雨に初ざくら

久麻女

面白しあなたこなたへちる桜

荻田

浪音もなくて盛や梅の花

かうち

咲中にちるもまばゆき桜かな

桃園

鶯に借た二階を見上げけり

十代丸

戻る気にならずさくらのちりかけて

松頭

最早子の門にあそぶや春の月

麦浪

まだ月の明りも消へず花の山

青葉

鴨の喰さしもあり赤つばき

鹿月

二品は買って七草揃ひけり

霞梢

うめ咲や喰ものあまる宮の猿

里遊

うぐひすの陰置直す道の畑

勝錦

春も未だ女は出ず小雪降

九起

願ひあるやうにむかふや朝の花

朝陽

俳諧歌仙

朝顔や瑠璃紺一つ白の中

まくる簾に飛かへる虫

船で見る月に羹あつらえて

なんぼ有てもたらぬ風呂敷

する程の事が武家めく初端午

たばねて納家へ運ぶ麦藁

着たなりで川へ飛込ひる休

山を離れてちさうなる虹

駕に顔いれて別をくどく也

神棚の灯で探る履物

書出しの数も八百屋は八百やほど

中高にはく橋筋の雪

朝月にしほらしう聞く鷹の鈴

馴て持葉もヒのまはらぬ

仏学に入て仏もこぼたれず

庇のうらへ苔のはえこむ

連翹に巻れし花の咲立て

夜なべ／＼に削る馬刀串

書付て置て忘れし三の午

博田の帯のメゴ、ろよき

男気に遣ふた金も水の泡

笠着て夢をむすぶ辻堂

帆柱をこかす間もなき俄雨

鏡岩から雲のわき出る

近すぎてつい見そこなふ郭公

よい座しきもつ在の植木師

吸物もうす口にする膳の、ち

御筒さらへの日も極る也

朝陽

嵐夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

全

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

夕

陽

糠星の中に居りし月の照

そよ／＼北の下る畦豆

秋先は便りすくなき木幡脇

身内のよつて葬具と、のふ

押入に張重ねたる古ごよみ

常はごた／＼邪魔な旅指

鮎はまだ焼ほどとれぬ初花に

師走ご、ろのうめ合し春

【校異】白鹿本は、奥付がこの位置に「天保十一歳庚子

春」とあり、本文はここ迄で、柱も「四十七了」

とある。

追吟 (四七ウ)

横着に花の枝ふむ鳥かな 豊後日田 雪村

片里や鶏啼替す朝がすみ 寄井

大寺の構に余るさくらかな 寄井

雛ふたつ毎日飴り直しけり 南山 石露

迂るほどたまる小坂の椿かな 五溪

三ヶ日たつても長し櫓の尻 李暁

往に見た木の接で有御寺哉 榎月 (終一オ)

御降やつもりの違ふ女客 与園

梅さきて藪賑やかに成にけり 如々

大川で水吞花の戻りかな 五柳

つきやめて姫を通ふすや羽子の中 越後三日市 三桃

けして来た火のもえ立や春の山 花芳

あし跡はかならずよ所の男猫哉 文帯

宿下りにす、める二日灸かな 文鬼

春雨や松の葉さきにうづらむし、 ちから (終一ウ)

苔にて一樹めづらし花の中 丹カメ山 九華

割木わる音や小淋し花の奥 、 螺溪

松からも花の散けり波の音 、 松露

庭戸も寒からぬ日や桃の花 関 月岡斎

駕からも酒の間するさくらかな 、 一虎

屋根丈の雫落けり梅の花 ハマン 之広

柳まで来て落合ふや田の流 、 夜有

折てから心かはるや野路の梅 、 花鳥 (終一オ)

流れよる土にはこるや葦草 アハチアハチ 鶯友

雪すりに煙のそれる戸口かな 伯州 乙美

松の根にくゝりてあるやひたし種 予州柏 其嵐

暮てからつかれの出るや花の春 、 馬槿

菜の花の匂ふや雨のはれてから 、 野雄

万歳やしさいらし氣に袖几帳 鳥羽 梅南

天保十一歳庚子春

【校異】白鹿本の奥付は、同日付で「四七了ウ」にある。

(終一ウ)

○ 京東洞院仏光寺上ル  
御摺物所菊屋平兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

双林寺
花供養集
芭蕉堂

(袋)

蒼虬(2) 千崖 朝陽の時代 俳号索引

凡例

- 一 本索引は、本冊に収める作者を俳号から検索するものである。なお、刊記の人名はとらない。
- 一 俳号は音読みを原則とし、漢音を優先する。ただし、習慣によったものがある。
  - かな、変体仮名を含むもの、「磨」を含むものは訓読みとする。また、次のものは特に習慣によって読む。
    - 葵(あおい) 五十二(いそじ) 五百衛(いおえ) 乙鶴・乙都留(おとつる) 梶彦(かじひこ)
    - 十代丸(とよまる) 春岑(はるみ) 春躬(はるみ) 春峰(はるみ) 十寸穂(ますほ) 茂権(もつい)
    - 米友(よねとも) 四方丸(よもまる) 八十女(やそめ)
- 一 音訓のどちらか一方しかない字、国字については、それに従う。
- 一 配列は五十音順、現代仮名遣いによる。
- 一 別号、別表記のあるものは、代表する表記に加えて( )にも記し、傍線等を付し、所在に対応する。なお、別号は捨て見出しを付けるが、別号のみで出句しない場合は捨て見出しを付けない。
  - なお、次のような俳号併記の場合は、二重傍線で示す。
    - ・ 蠢々舎曳尾 ↓ 保一22オ
    - ・ 一貫更梅磨 ↓ 政十一9ウ
- 一 俳号等の「坊」「女」「亭」「齋」は省くことがある。
- 一 同一人の所の相違は、傍線等で区別し、所在に対応する。
- 一 本文にある肩書、所書きは可能な限り「 」に記す。旧国名を付すが、山城は「京」「南山城」、武蔵は「江戸」「武蔵」、摂津は「摂津」「浪花」「大坂」等とする。また、「行脚」「雲水」などのみで住所未詳の場合は、所を記さない。
- 一 連句における重複分は取らない。その他、同頁に複数ある場合も、同様とする。
- 一 「作者不知」「執筆」は取らない。
- 一 俳号の所在は、次のように略記する。
  - 文政十一年序文表 ↓ 政十一序オ
  - 天保元年二丁裏 ↓ 保一2ウ

あ

葵〔肥前唐津〕 保五37ウ  
蛙悟〔越中吉久〕 保五21才  
阿斎〔丹波古人〕 保三32ウ  
亞草〔出雲松江〕 保五28才  
阿鳥〔山城京〕 保十3才 保十18ウ  
保十一40ウ

阿道〔周防岐波〕 保一27才  
蛙堂〔筑前福岡〕 保一30ウ  
あふむ〔越中富山〕 政十一11才  
保一1才 保一19才 保三30ウ

あや輔〔備後三原〕 保一26ウ

綾彦〔近江〕 保三18ウ

蛙遊〔筑前〕 保五33才

蛙籟〔筑前〕 保三44才

庵月〔丹後〕 保三35ウ

庵女〔摂津浪花〕 政十一20ウ 保一3才  
保三5才 保四29ウ

い

為一〔播磨姫路〕 政十一14才

五百衛 ↓ 達夫

以兮〔怡兮〕〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
保五12ウ

渭川〔丹後〕 保四3ウ

いし風〔筑後久留米〕 保十一4ウ

為之〔摂津浪花〕 保十9ウ

保十一23才

葦州〔豊後日田〕 保一32才

以春〔筑前〕 保五35才

伊松〔越後六日町〕 保五20ウ

意水〔越前〕 保三23ウ

惟草〔武蔵江戸〕 保五13ウ 保十17才  
保十一33才

五十二〔武蔵熊谷宿〕 保十一20ウ

葦村〔越中富山〕 政十一11才 保一18ウ  
保三30才 保四40ウ 保五21ウ

一影〔陸奥〕 保三22ウ

逸湖〔武蔵江戸〕 保十21才 保十一38ウ

一応〔三河〕 保三11才

一化〔近江西湖薬園〕 保五5ウ  
保十一25ウ

一香〔播磨明石〕 保十6才

一楽〔山城嵯峨〕 保一37才

一貫〔伊予広田〕 政十一17ウ

一丸〔筑前〕 保五32ウ

逸丸〔越後〕 保三31ウ

逸亀〔加賀金沢〕 保一15ウ 保三24才

一婦〔出雲〕 保四7ウ

逸菱〔上野〕 保五18才

一亀〔加賀金沢〕 保十一29才

一居〔近江大溝〕 政十一4才  
保一8才 保三17ウ 保四45ウ  
保五54ウ

一喬〔山城〕 保五49ウ

一橋〔但馬村岡〕 保十一23才

一駒〔近江舟木〕 保三18才 保四44ウ

一具〔武蔵江戸〕 保五14ウ 保十21才  
保十一33ウ

一桂〔肥前田代〕 保一40ウ 保三46ウ  
保四16才

一徑〔出雲〕 保四7ウ

一兮〔肥前〕 保四17才

一虎〔美濃関〕 保十一終2才

一行〔伊予大洲〕 保一29才 保三40ウ  
保四28才

一行〔加賀串〕 保三27ウ

一行〔伊予小松〕 保五42才

一山〔丹後〕 保三34ウ

一之〔但馬二方千原〕 保一23ウ  
保三36才

一秀〔阿波白地〕 政十一18ウ 保一27才  
保四21ウ 保五41ウ

一嘯〔近江日野仁正寺〕 政十一5ウ  
保一10ウ 保三19才 保四1ウ  
保四42才 保五5ウ

一樵〔豊後日田〕 政十一16才 保一32才  
保四29ウ 保五44才 保十22ウ  
保十一31ウ

一肖〔摂津浪花〕 政十一21才 保一3才

一蕉〔備後鞆〕 保一26才

一松〔因幡所子〕 保四7ウ

一松〔出雲松江〕 保五28才

一笑〔伊勢龜山〕 保五46ウ

一常〔越後糸魚川〕 保一21才  
保四37才

一身〔加賀〕 保四37才

一翠〔伊勢山田〕 政十一7才

一水〔越後白子〕 保五20ウ

一水〔筑前〕 保十一21才

一石〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才

一川〔加賀金沢〕 政十一12才

逸仙〔紀伊田辺〕 保一27才

一鼠〔越後福岡〕 保五22才

一素〔播磨野村〕 保五28ウ

一操〔筑前〕 保四14才

一琢〔信濃長沼〕 保四36才

一棹〔淡路須本〕 保五43才

一知〔丹波天引〕 保四4才

一柱〔肥前神代〕 保四20才 保五38才

一猪〔相模〕 保十一24才

一晁〔上総勝浦町〕 保三12ウ  
保四35才

一晁〔下総〕 保四35才

一兆〔常陸安久良〕 保四35才 保五18才

一朝〔近江〕 保四44才

一提〔伊勢〕 保四31ウ

一底〔土佐〕 保五42ウ

一斗〔加賀〕 保一12ウ

一東〔摂津伊丹〕 政十一20才

一涛〔越中伏木〕 保一20才

一橙〔出雲〕 保四7ウ

一洞〔加賀金沢〕 保三25才 保四38才  
保五23才 保十15ウ

一坡〔山城淀〕 保四46ウ

一馬〔肥前大村〕 保十一5才

一帆〔山城淀〕 保十32才

一百〔山城八幡〕 保十31ウ

一瓢〔伊勢弟国〕 政十一 7ウ  
 一瓢〔肥後熊本〕 保一 34ウ  
 一斧〔讃岐〕 保三 40才  
 一風〔山城〕 保三 2ウ  
 一風〔日向都城〕 保五 40ウ  
 一甫〔筑前〕 保五 33才  
 一峰〔近江浅小井〕 政十一 5才  
 保三 20ウ 保四 53才  
 一峰〔筑後久留米〕 保十 10才  
 一木〔陸奥会津〕 保三 21ウ  
 以都美〔山城京〕 政十一 3才  
 一毛〔陸奥南部田名部〕 保一 11ウ  
 保三 21才  
 一雄〔加賀金沢〕 保一 12ウ 保一 16才  
 保三 25才 保四 37ウ 保五 22ウ  
 保十 15ウ 保十一 35ウ  
 一雄〔尾張〕 保五 9才  
 一遊〔陸奥脇ノ沢〕 保三 21才  
 一幽〔伊勢津〕 保五 46才  
 一予〔筑前〕 保三 43才 保四 13ウ  
 一葉〔丹後〕 保三 34才 保四 5ウ  
 一流〔日向都城〕 保五 40才  
 一路〔山城宇治〕 政十一 21ウ  
 一芦〔石見浅利〕 保一 39ウ  
 一炉〔遠江今切〕 保五 10ウ  
 一樓〔武蔵江戸〕 保四 33ウ 保五 12才  
 夷白〔丹後宮津〕 保三 34ウ 保四 5才  
 保五 26ウ

いはほ〔伊勢松阪／市場〕 保一 4ウ  
 保三 9才 保四 30ウ 保四 52ウ  
 以文〔出羽米沢〕 保三 23才  
 以文〔播磨網干〕 保三 38才  
 寅石〔讃岐金毘羅〕 政十一 17ウ  
 印南〔撰津兵庫〕 保一 42ウ 保三 6ウ  
 院白〔出雲〕 保四 8才  
 因来〔加賀〕 保三 24ウ

う

宇逸〔筑前福岡〕 保一 30ウ 保三 43才  
 保四 12才 保五 34才 保十 31才  
 保十一 22才  
 雨奥〔讃岐金毘羅在京〕 政十一 22ウ  
 羽黄〔加賀大聖寺〕 保一 16ウ  
 烏翁〔越中高岡〕 保一 18ウ  
 卯角〔伊予西条〕 保四 28才  
 卯角〔筑後久留米〕 保十一 4ウ  
 雨角〔筑前〕 保五 34ウ  
 羽客〔出雲〕 保四 8才  
 羽玉〔肥前〕 保三 46才  
 右溪〔近江町屋〕 政十一 5才  
 羽寛〔備中松山〕 保一 26才  
 宇玄〔越中〕 保三 31才  
 宇弘〔越後見附〕 保五 20才  
 宇甲〔筑前〕 保十 31才 保十一 21ウ  
 烏谷〔武蔵江戸〕 保十一 33ウ  
 烏舟〔丹波保津〕 保一 22ウ 保三 33才  
 烏秋〔淡路下八夕〕 保四 25ウ

烏秋〔日向都城〕 保五 40才  
 雨新〔丹後宮津〕 保十一 36才  
 雨什〔下総沢／江戸〕 保三 51才  
 保四 30才 保四 34ウ 保五 12ウ  
 雨翠〔山城京〕 保十一 1ウ 保十 27才  
 雨翠〔筑前〕 保十一 21才  
 宇井〔越中富山〕 保一 19才  
 烏静〔丹後田辺〕 保五 26才  
 芋川〔筑後久留米〕 保十 10才  
 保十一 4才  
 雨巢〔伊予喜木〕 保一 29ウ  
 雨邨〔武蔵江戸〕 保五 11ウ  
 烏朝〔伊予今治大井〕 保一 39ウ  
 保三 41才  
 羽長〔但馬浜坂〕 保三 36ウ  
 雨鳥〔尾張〕 保五 9才  
 烏津〔尾張〕 保五 9才  
 烏都雄〔近江浅小井〕 保一 10才  
 保三 3才 保三 13才 保三 20ウ  
 保四 44ウ 保五 3才 保五 4ウ  
 宇都み〔若狭女〕 保三 23才  
 于當〔近江坂本〕 政十一 4才  
 烏島〔能登〕 保十一 7才  
 雨堂〔筑前〕 保三 41ウ  
 雨芳〔豊後日田〕 保一 32才 保三 45才  
 宇牧〔加賀金沢〕 政十一 12才 保一 16才  
 保三 26ウ 保四 37才 保五 53才  
 梅磨〔一貫〕〔下野真岡〕 政十一 9ウ  
 宇洋〔近江大津〕 政十一 3ウ

え

宇栗〔伊勢四疋田〕 保三 9ウ 保四 53才  
 保四 53ウ 保五 45才 保五 52才  
 保五 52ウ 保十 4ウ 保十一 31才  
 宇葎〔肥前長崎〕 保十一 10才  
 雨凌〔筑後久留米〕 保十一 4ウ  
 云界〔行脚〕 保三 47才  
 雲厓〔備中倉敷〕 保五 29ウ  
 雲耕〔淡路須本〕 保五 43才  
 雲山〔武蔵江戸〕 保五 13ウ  
 雲布〔越中富山〕 政十一 11才  
 雲峰〔山城淀〕 保四 46才  
 雲里〔甲斐〕 保五 53才

曳瓦〔日向本庄〕 保五 41才  
 詠婦〔肥前諫早〕 保一 33ウ  
 詠婦〔武蔵江戸〕 保五 12才 保五 14ウ  
 保十一 38才  
 永久〔武蔵江戸〕 保十一 25才  
 英山〔武蔵江戸〕 保五 13ウ  
 英芝〔周防白松〕 保三 39才  
 嬰糸〔筑前〕 保十五 5ウ  
 英泉〔陸奥杉田〕 保三 22ウ 保四 36才  
 保五 19ウ 保十一 37才  
 曳尾〔蠢々舎〕〔越後糸魚川〕 保一 22才  
 保三 32ウ 保四 41才 保五 20才  
 曳尾〔日向〕 保三 46ウ 保四 21才  
 曳尾〔伊勢〕 保四 30ウ  
 英父丸〔武蔵江戸〕 保十 17ウ

えい〜かく

映門〔伊予小松〕 保五42ウ 保十七才  
 保十一15ウ 保十一28ウ  
 益三〔長門下関〕 保一43ウ 保三39才  
 越來〔薩摩加治木〕 保十九才  
 保十一7ウ  
 遠花〔丹後中浜〕 保三35才  
 円外〔伊予大洲〕 保一29才 保三40ウ  
 檐鷗〔和泉堺〕 政十一序1ウ  
 政十一19才 保一4才 保四30才  
 保五44ウ  
 円月〔伊予今治〕 保一39ウ  
 円斎〔円齊〕〔筑前〕 保四13才  
 保五34ウ  
 円山〔播磨〕 保三37ウ  
 燕子〔摂津浪花〕 保一3ウ  
 燕市〔伊賀上野〕 保一4才  
 延子〔筑前〕 保四14才  
 艶雪〔筑前〕 保十五才  
 円竹〔筑前〕 保五34才

お

鷺々〔能登穴水〕 保一17才  
 鷺柯〔加賀〕 保三26ウ  
 応雅〔備後鞆〕 政十一14ウ 保一26ウ  
 保三38才  
 往我〔筑前〕 保三31才 保十一21才  
 黄貫〔但馬出石〕 保三35ウ  
 鷺丘〔伊勢山田〕 保一5才  
 黄居〔越中〕 保三30才

鷺居〔肥前長崎 芭蕉館社中〕  
 保四18才 保十一9才  
 鷺居〔伊予〕 保十七ウ 保十一34ウ  
 鷺溪女〔武蔵江戸〕 保一6才  
 鷺語〔山城淀〕 保五47才 保十32ウ  
 保十一1ウ 保十一31ウ  
 黄山〔尾張名古屋〕 保一5ウ 保四32才  
 保五8ウ 保十18ウ 保十一40才  
 黄山〔駿河御厨〕 保五11才  
 黄州〔播磨〕 保十五才 保十一22才  
 翁杖〔山城京〕 保三4才 保三48ウ  
 保四3才 保四49ウ 保五3ウ  
 保五50才  
 鷗水〔近江〕 保四44才  
 応声〔武蔵東都〕 政十一9才 保一6ウ  
 応泉〔越後亀田〕 保十九ウ 保十一27才  
 鷺遷〔近江坂本〕 保十30才  
 鷗池〔加賀〕 保三25ウ 保四38才  
 鷗池〔淡路カウ〕 保四25ウ  
 黄年〔加賀金沢〕 保一15才 保三26ウ  
 鷺友〔淡路〕 保十一終2ウ  
 鷺里〔讃岐女〕 保四24ウ  
 鷗里〔阿波〕 保十12ウ  
 鷺律〔出雲〕 保四9才  
 黄龍〔日向都城〕 政十一17才  
 鷺侶〔伊勢山田〕 保五45才  
 乙雅〔近江〕 政十一3才 政十一22才  
 保一42ウ 保三3ウ 保四43ウ  
 保四51ウ 保五2ウ  
 乙牛〔筑前福岡〕 保一30ウ 保四13ウ

乙彦〔山城京〕 政十一2才 保一38ウ  
 乙人〔肥前諫早〕 保一34才 保四26才  
 乙調〔陸奥二本松〕 保三51才 保五19ウ  
 乙美〔伯耆〕 保十一終2ウ  
 乙峰〔越中富山〕 保四40才  
 乙雄〔越中魚津〕 保三30ウ 保四39ウ  
 乙龍〔山城〕 保三3ウ  
 乙良〔越後〕 保十九ウ  
 乙郎〔越後水原〕 保五21ウ  
 乙鶴〔乙都留〕〔近江太田〕 政十一4ウ  
 保一8ウ  
 恩古〔山城京〕 政十一22ウ 保一38才  
 保四3才 保四51才 保五3才  
 温故〔筑前〕 保四14ウ  
 音人〔武蔵浅草〕 保十一33ウ

か

槐庵〔伊予宇和島〕 保一28才  
 海屋〔伊予郡中〕 保五42ウ  
 海若〔加賀金沢〕 保五23才  
 槐雪〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 可逸〔下総作宮〕 保五17ウ  
 回風〔淡路鳥飼〕 保五43ウ  
 卦龍〔山城京〕 政十一1才 政十一21ウ  
 卦龍〔武蔵江戸〕 保四33ウ  
 外松〔伊勢山田〕 政十一6才 保一42才  
 保四31才 保五45才 保十4ウ  
 かうち〔山城〕 保十一2ウ 保十一42ウ  
 保十一44ウ

臥雲〔丹波〕 保三33才  
 莪雲〔下総〕 保十4才  
 花園〔近江堅田〕 保五4才  
 菓翁〔摂津浪花〕 保三5ウ 保四29ウ  
 保五44ウ  
 可応〔陸奥会津若松〕 保十一24ウ  
 蝸角〔丹波山国〕 保四4才 保五25ウ  
 霞涯〔淡路〕 保四27ウ  
 可楽〔若狭〕 保三23ウ  
 何丸〔武蔵東都〕 政十一8ウ  
 保一5ウ 保三12才 保四33才  
 保五13才  
 花丸〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 花橘〔淡路鳥井〕 保四25ウ  
 可杏〔加賀金沢〕 保一15才 保三24才  
 保四38才 保五23ウ  
 茄醜〔肥前〕 保四18才  
 葭橋↓都岐雄  
 霞橋〔肥前長崎〕 保十一9才  
 稼暁〔伊予大洲〕 保一29才 保三41才  
 保四28才  
 可暁〔越中吉久〕 保三31才 保五21ウ  
 禾暁〔加賀〕 保三24ウ 保四37ウ  
 霞暁〔山城京〕 保四54ウ  
 霞暁〔大和下市〕 保五44ウ  
 我竟〔尾張〕 保十18ウ  
 鶴衛〔越中今石動〕 保一20ウ  
 鶴居〔安芸広島〕 政十一14ウ 保五31ウ  
 鶴郊〔伊勢山田〕 政十一7才 保一5才

螻齋〔安芸広島〕 保一27才  
 鶴史〔筑前秋月〕 保一41才 保三44才  
 鶴二〔杵岐〕 保三47才  
 鶴丈〔近江五十川〕 保四46才 保五4ウ  
 角丈〔加賀金沢〕 保五22ウ  
 鶴仙〔出雲安来〕 保五27才  
 草村〔越中富山〕 保十一32ウ  
 鶴池〔筑前〕 保一29ウ  
 鶴頂 保四26才  
 鶴歩〔豊後日出〕 保五39才  
 鶴雄〔伊予吉田〕 保一28才 保三41ウ  
 保四28才  
 鶴邑〔能登〕 保十一7ウ  
 花君〔近江江頭〕 保三20ウ  
 楽嵩〔但馬日下部〕 保三36ウ  
 鰐口〔山城〕 保十23才  
 楽斎〔楽斎／歩鶴〕〔能登七尾〕  
 政十一11ウ 保一序1ウ 保一17ウ  
 保三30才 保四38ウ 保五24ウ  
 楽之〔肥前〕 保三46才  
 学二〔越後糸魚川〕 保一21ウ  
 学时〔播磨明石〕 保十6ウ  
 楽水〔越中魚津〕 保四39ウ  
 保十一2ウ 保十一27才  
 岳龍〔淡路〕 保四25才  
 花溪〔能登八幡トキ〕 保一18ウ  
 保三29才 保五24才  
 霞兄〔武蔵江戸〕 保五11ウ  
 佳景〔能登〕 保十一7才  
 可権〔淡路志筑〕 保四25ウ

花月〔丹波〕 保四4才  
 可月〔遠江原川〕 保五10才 保十4ウ  
 榎月〔豊後南山〕 保十一終1才  
 峨月〔讃岐白鳥〕 保一27ウ 保四25才  
 峨月〔越後福岡〕 保五22才  
 蛾月〔讃岐津田〕 保三40才 保五42才  
 夏口〔撰津浪花〕 政十一21才 保一3ウ  
 可考〔加賀大聖寺〕 保三28才 保五24才  
 稼耕〔讃岐〕 保三39ウ  
 花考〔出雲〕 保四8ウ  
 禾郷〔近江堅田〕 政十一4才 保三17ウ  
 保四44ウ  
 鴉郷〔筑前〕 保三42才  
 禾柴〔武蔵江戸〕 保十一33才  
 賈三〔筑前〕 保五33才  
 霞山〔筑前〕 保四14ウ  
 臥山〔筑前福岡〕 政十一15才 保一30ウ  
 保三43才 保四13ウ 保五35才  
 梶彦〔近江高島〕 保一9才  
 加尺〔肥前〕 保四18才  
 霞舟〔越後福岡〕 保五22才  
 可笑〔伊勢山田〕 政十一6ウ  
 可笑〔近江〕 保四41ウ  
 可章〔紀伊田辺〕 保一27才  
 歌樵〔肥前〕 保四18才  
 荷少〔武蔵新川〕 保四33才  
 花樵〔伊勢古市〕 保五45才  
 霞梢〔山城〕 保十3才 保十33ウ  
 保十一45才  
 可松〔近江八幡〕 保十14才 保十一26ウ

花植〔撰津浪花〕 保十9才  
 可申〔陸奥朝香笹川〕 保十一37才  
 花実〔和泉堺〕 政十一19ウ  
 可杖〔加賀〕 保三25ウ  
 可丈〔丹後〕 保四5ウ  
 霞城〔但馬〕 保三36才  
 佳城〔淡路〕 保四27才  
 可推〔豊前小倉〕 保一31ウ 保三44才  
 保四55才 保五39才 保十19ウ  
 保十一20ウ  
 花醉〔因幡〕 保四7ウ  
 霞醉〔肥前大村〕 保五38才  
 可成〔能登七尾〕 保一18才 保五24ウ  
 瓜青〔丹後田辺〕 保一23才  
 可拙〔近江八幡〕 保五53ウ  
 花屑〔近江八幡〕 保十19ウ 保十一27才  
 可雪〔河内狭山〕 保十31ウ  
 貨泉〔陸奥脇ノ沢〕 保三21才  
 夏扇〔越前〕 保四41才  
 我責〔尾張〕 保五8ウ  
 鷺雪〔撰津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3才 保三3ウ 保三5才  
 保四54ウ  
 茄村〔備前西大寺〕 保五29ウ 保十16才  
 保十一34才  
 霞村〔播磨〕 保十22才 保十一34才  
 可大〔山城〕 保四52才 保五6才  
 保五47才 保五51ウ 保十17才  
 保十一38才  
 歌長〔陸奥〕 保三22ウ

花鳥〔近江八幡〕 保十一終2才  
 臥蝶〔播磨平福〕 保五29才  
 夏椎〔筑前〕 保一29ウ  
 葛山〔若狭〕 保十22才  
 葛堂〔下野栃木〕 保五18ウ  
 可都彦〔讃岐〕 保三39ウ 保四24ウ  
 可都美〔陸奥安積山下〕 保三21ウ  
 葛老〔ニシ川〕 保四27才  
 霞堤〔加賀〕 保三26ウ  
 荷亭〔伊勢川崎〕 保四31才  
 蚊亭〔伊勢〕 保四31ウ  
 可彳〔尾張〕 保五9ウ  
 鷺汀〔備後尾道〕 政十一14ウ  
 霞塘〔伊勢〕 保四30ウ  
 霞島〔播磨〕 保十30ウ  
 可得〔越後野田〕 保五20ウ  
 可得〔陸奥朝香笹川〕 保十一37才  
 蝸堂〔近江〕 保三20才  
 荷堂〔武蔵江戸〕 保五14ウ  
 禾堂〔肥前大村〕 保十一5ウ  
 可布〔武蔵八幡山〕 政十一8ウ  
 保五18ウ  
 加芳〔伊勢〕 保四53才  
 禾芳〔越中吉久〕 保五21ウ  
 佳峰〔撰津浪花〕 保十一31ウ  
 花芳〔越後三日市〕 保十一終1ウ  
 貨僕〔山城京〕 政十一1ウ  
 政十一21ウ 保一2才 保一2ウ  
 保一36才 保三3才 保三48才  
 保四2ウ 保四49才 保五1才

霞下〔安芸〕 保四10ウ  
禾木〔武蔵江戸〕 保五14才 保十17ウ  
花睦〔丹波亀山〕 保十一37ウ  
臥鵬〔宝仙〕 保十一32ウ  
亀磨〔丹波〕 保三33ウ

可也〔丹後田辺〕 保五26才  
可雄〔山城京〕 政十一21ウ  
花遊〔近江豊浦〕 保一10才  
可遊〔伊勢井内〕 保三9ウ

花夕女〔肥前〕 保三46才  
花夕〔筑前〕 保十一21才  
可由〔豊前小倉〕 保五39才

花由〔淡路須本〕 保五44才  
鷺友〔筑前〕 保三42ウ 保四15ウ  
保五36才

禾葉〔武蔵東都〕 政十一9才  
保三12才  
可陽〔近江湖東〕 保十10ウ  
保十一5ウ

可陽〔備中〕 保十30才  
何頼〔信濃飯田〕 政十一10ウ  
瓜来〔讃岐〕 保四24才

霞柳〔丹波吉丘〕 保四3ウ 保五1才  
可陸〔加賀金沢〕 保一16才 保三25才  
花六〔豊後国東杵築領〕 保一32ウ  
保一42才 保四16ウ 保五39才

葎流〔加賀大聖寺〕 保一16ウ 保三27ウ  
保三28ウ 保四38ウ  
花笠〔山城南溪社〕 保五49ウ

嘉涼〔近江八幡〕 保一42ウ 保三20才  
保四42才 保四43才  
瓜涼〔丹後〕 保三34ウ  
霞陵〔近江八幡〕 保五53ウ  
荷了〔武蔵江戸〕 保十17ウ

霞林〔肥前諫早〕 政十一16ウ 保一33ウ  
保三45ウ 保四19才 保五38ウ  
保十一28才  
我龍〔加賀金沢〕 保五23才

歌和〔山城京〕 政十一23才  
幹岳〔伊予坂本〕 政十一18才  
貫魚〔越中福町〕 保一20ウ

閑月尼〔能登七尾〕 保四39才 保五25才  
幹古〔越中福光〕 保三30ウ  
甘古〔安芸広島〕 保四10才

酣古〔上野惣社〕 保五18ウ  
喚古〔肥前長崎社中〕 保十23ウ  
干江〔肥前長崎社中〕 保十23ウ  
保十一6ウ 保十一13才

観渾〔伯耆〕 保十一23才  
完哉〔武蔵江戸〕 保五13ウ  
閑斎〔近江大津〕 政十一4才

閑山〔筑前〕 保十一21才  
飲之〔丹波古佐〕 保一22ウ  
貫士〔筑前姪浜〕 保一31才  
完史〔加賀〕 保三24ウ

観之〔丹波篠山〕 保三33ウ 保四4才  
保五25ウ  
関芝〔筑後久留米〕 保十一4才  
環翠〔筑前〕 保四14ウ

完穂〔出雲島田〕 保十16ウ 保十一28才  
冠雪〔丹波篠山〕 保一22ウ 保三33ウ  
保四4ウ  
肝洗〔信濃〕 保一11才

閑那〔紀伊高野〕 政十一19才 保五45才  
完眉〔伯耆〕 保四7才  
寛楊〔近江八幡〕 保一9ウ 保三19ウ

冠季〔能登〕 保三29ウ  
貫呂〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
完和〔山城〕 保一38ウ 保三49ウ

完和〔加賀金沢〕 保五23ウ 保十15ウ  
蒼雨〔近江坂本〕 保十30才  
巖松〔信濃〕 保一11才

宜雨〔越後糸魚川〕 保一21才 保三32才  
保五20才  
其映〔肥前長崎〕 政十一16才 保一34ウ  
保三45ウ

龜詠〔肥前〕 保三45才 保四20才  
稻采〔筑前〕 保四13才  
葵影〔伊勢山田〕 保五45ウ

奇測〔摂津浪花〕 保一4才  
綺園〔筑前〕 保四11ウ  
葵園〔筑前〕 保十一21ウ  
几乙〔山城京〕 政十一1ウ

政十一22才 保一2才 保一37ウ  
保三4才 保三48ウ 保五50才

磯海〔近江舟木〕 保一42才 保三18才  
龜稗〔武蔵江戸〕 保四33ウ  
其岳〔讃岐河内村〕 政十一18才  
保一27ウ 保三39ウ 保四25才  
保五41ウ

龜楽〔近江コボシ〕 保一10ウ  
樹々女〔淡路佐野〕 保五43ウ  
帰橘〔筑前〕 保四14ウ

其橋〔摂津〕 保四28ウ  
其暁〔近江堅田〕 政十一2ウ  
政十一4才 保一8才  
其暁↓陸草

其玉〔安芸木谷〕 保一26ウ  
龜玉〔大和〕 保四54才  
菊守〔武蔵江戸〕 保十17ウ

菊住〔近江大津〕 政十一3ウ  
菊所〔伊勢山田〕 保一5才  
掬水〔山城淀〕 保四46ウ

菊圪〔山城京〕 保十1才 保十27才  
菊圃〔伊予小松女〕 保五42ウ  
保十七才 保十一28ウ

菊雄〔石見矢上〕 保一25才  
菊有〔伊勢〕 保四31才  
菊陽〔近江八幡〕 保五53ウ

几桂〔薩摩加治木〕 保十9才  
保十一7ウ  
其月〔安芸木谷〕 保一26ウ  
其巖〔越中マシマ〕 保三31才

蟻兄〔摂津浪花〕 政十一21才  
保一3ウ 保三5ウ

- 宜彦〔尾張沓掛〕 政十一 7ウ 保三10ウ  
 亀甲〔近江平津〕 保五 6才  
 希康〔淡路〕 保十13才  
 鬼哭〔越後糸魚川〕 保一 21才  
 其骨〔陸奥 会津上林〕 保十二 29ウ  
 騏郷〔阿波大モリ〕 保五41才  
 其歳〔筑前〕 保五33ウ  
 龜三〔越中今石動〕 保一 20才  
 寄三〔武蔵中瀬〕 保四33才  
 其笑〔武蔵 江戸〕 保五13才  
 其種〔能登能登部〕 政十一 11才  
 喜春〔筑前〕 保五33ウ  
 龜笑〔筑前〕 保三42才 保四15才  
 保五35ウ 保十5才  
 喜昌〔肥前長崎〕 保十一 9才  
 其日〔播磨明石〕 保十 6ウ  
 几雀〔丹後〕 保四 5才  
 其丈〔能登〕 保三29ウ  
 蟻州〔山城京〕 保十一 1ウ 保十27才  
 保十一 2才 保十一 40才  
 宜州〔丹波成松〕 保十21才 保十一 36ウ  
 宜春〔越後糸魚川〕 保一 21ウ 保三32才  
 淇翠〔加賀金沢〕 保一 14ウ 保三25ウ  
 器水〔上野倉カノ〕 保三21才  
 器水〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 既醉〔丹波〕 保四 4ウ  
 既睡〔筑前〕 保四13才  
 淇水〔肥前大村〕 保四17才 保十一 5才  
 其水〔加賀金沢〕 保五23ウ  
 其誠〔越後糸魚川〕 保一 21ウ 保三32才  
 保五20才  
 其青〔肥前大村〕 保一 33才 保四17ウ  
 保五38才  
 其成〔山城〕 保一 38ウ 保三1ウ  
 保三5才  
 弄青〔尾張〕 保五 9才  
 寄井〔豊後日田〕 保十一 終1才  
 岐石〔山城〕 保一 1ウ  
 龜石〔越後岡野町〕 保一 22才  
 希石〔肥前田代〕 保一 40ウ 保三46才  
 龜碩〔近江〕 保三18才  
 龜跡〔淡路〕 保四27ウ  
 淇石〔伊勢〕 保四31ウ  
 其碩〔豊後日田石井〕 保五39ウ  
 淇雪〔肥前長崎〕 保十一 9ウ  
 其川〔筑前〕 保五35才  
 寄扇〔筑前〕 保十 5才  
 鬼仙〔武蔵 江戸〕 保十一 33才  
 其然〔但馬〕 保四 6ウ  
 蟻扇〔伊勢津〕 保四54ウ 保五46才  
 龜巢〔加賀官腰〕 保一 16才 保三27才  
 龜巢〔遠江横須賀〕 保五10ウ  
 其叟〔筑前〕 保十一 21才  
 喜田雄〔近江 西湖藁園〕 保十一 25才  
 猗竹〔讃岐〕 保四24ウ  
 起蝶〔近江〕 保四43ウ  
 橋子〔撰津浪花〕 保三 5才  
 橋枝〔大和 南都〕 保三47ウ  
 橋人〔撰津伊丹〕 保十 8才  
 橘茶〔阿波徳島〕 政十一 18才  
 保四21才  
 淇亭〔加賀金沢〕 保三25才 保四37ウ  
 保五23ウ  
 淇汀〔加賀〕 保四36ウ  
 其汀〔越後福岡〕 保五22才  
 龜島 保四26ウ  
 枳堂〔撰津〕 保四28ウ  
 龜洞〔伊勢〕 保五52才  
 穀道〔備中笠岡〕 保十一 6ウ  
 其独〔山城〕 保三 4ウ  
 宜得〔上野〕 保四35ウ  
 義道〔山城京〕 政十一 1ウ  
 政十一 22ウ 保一 1才  
 蟻道〔美作江見〕 保五31ウ  
 きぬ女〔河内〕 保三47ウ  
 龜年〔肥前平戸〕 政十一 16才 保一 33ウ  
 龜年〔出雲松江〕 保四 8ウ 保五27才  
 其半〔近江ライソ〕 保五 5才  
 其麦〔加賀金沢〕 保一 12ウ 保一 14ウ  
 保三25才 保四37ウ  
 祇白〔撰津浪花〕 保三 6才  
 喜楓〔喜風〕〔山城京〕 政十一 2ウ  
 政十一 23才 保三1才 保三 4才  
 保三48ウ 保四2ウ 保四50才  
 保五 2才 保五50ウ  
 其風〔筑前〕 保四11ウ 保五35才  
 箕風〔尾張〕 保五 9ウ  
 季風〔播磨〕 保十一 22才  
 龜文 保四27才  
 奇峰〔寄峰〕〔播磨千本〕 政十一 14才  
 保一 25ウ  
 其峰〔播磨明石僧〕 保十 6ウ  
 其朴〔丹波山本〕 保一 22才 保三33才  
 寄卜〔豊後日田〕 保十一 終1才  
 龜毛〔越中殖生〕 保一 20才  
 貴有〔安芸〕 保五32才  
 幾遊〔越中〕 保十 9ウ  
 九華〔丹波龜山〕 保十20ウ 保十27ウ  
 保十一 1ウ 保十一 終2才  
 駢嶽〔某家本 維嶽〕〔播磨明石〕  
 保十 6ウ  
 九起〔山城〕 保十33ウ 保十一 15ウ  
 保十一 41ウ 保十一 45才  
 汲古〔伊勢三疋田〕 保三 9ウ 保四53才  
 九臯〔近江大津〕 政十一 3才 保三17才  
 九臯〔能登〕 保三 29ウ  
 九臯〔撰津〕 保四28ウ  
 九玦〔筑前〕 保四13ウ  
 九虹〔伊予〕 保十 7ウ  
 丘齋〔山城京〕 政十一 3才  
 九齋〔近江大津〕 保十一 34ウ  
 九山〔美陽〕〔長門〕 保十一 10ウ  
 九思〔肥前〕 保四19才  
 九如〔伊勢山田〕 政十一 7才  
 九穗〔伊勢津〕 保五46ウ  
 久世〔伊勢津〕 保一 4ウ  
 九泉〔山城京〕 保十 3才  
 鳩台〔伊予新谷〕 保一 29ウ  
 丘鳳〔山城伏見〕 保十一 32ウ

きゅ〜きん

其友〔尾張逆川〕 政十一 7ウ  
 其友〔山城淀〕 保四46才  
 其夕〔丹後〕 保三35ウ  
 其夕〔長門〕 保十一10ウ  
 淇悠〔伊勢山田〕 政十一 6ウ  
 淇園〔対馬〕 保四20ウ  
 淇園〔能登七尾〕 保四39才 保五25才  
 鶴又〔近江大津〕 保十20才  
 九梁〔摂津兵庫〕 保四29才 保五44ウ  
 保十七才  
 久嶺〔近江 西湖〕 保五52ウ  
 義雄〔山城伏見〕 政十一 21ウ  
 牛父〔大和芝村〕 保三47才  
 牛歩〔筑前〕 保十一 21ウ  
 器洋〔筑前〕 保一30才 保四14才  
 杏園〔能登〕 保三29才  
 銚山〔丹後〕 保四5ウ  
 杏堂〔讃岐よしはら〕 政十一 17ウ  
 保三40才  
 恭羅〔出雲松江〕 保五27ウ  
 居易〔播磨〕 保三51才  
 虚雅〔備後鞆〕 保四52ウ  
 旭湖〔尾張岩倉〕 保三10才  
 旭松〔尾張名古屋〕 保一5ウ  
 旭扇〔肥後熊本〕 保一35ウ  
 曲阜〔摂津伊丹〕 保十一 39才  
 曲柳〔筑前〕 保十五ウ  
 去高〔讃岐〕 保四24才  
 巨山〔加賀〕 保三27才  
 居成〔若狭北方〕 保十一 26才

巨泉〔加賀宮越〕 保三27才 保五23ウ  
 虚船〔肥前大村〕 保十一 5才  
 居童〔加賀〕 保三25ウ  
 巨童〔越後堀之内〕 保四40ウ  
 去年〔加賀〕 保三25ウ  
 虚白〔近江土山〕 政十一 5ウ 保一41ウ  
 保三19才 保四41ウ 保五54ウ  
 居風〔遠江渡瀬〕 保五10ウ  
 居眠〔陸奥〕 保三22ウ  
 許友〔上野〕 保四35ウ  
 巨流〔摂津浪花〕 保一3ウ  
 晓河〔武蔵江戸〕 保五13ウ  
 晓求〔大和南都〕 政十一 18ウ  
 晓梅〔伊勢中村女〕 保四25ウ  
 晓夢〔飛騨高山〕 政十一 10ウ 保一10ウ  
 玉骨〔豊後国東〕 保一32ウ  
 玉山〔近江〕 保三18ウ 保四45才  
 玉脂〔越中福野〕 政十一 2ウ  
 政十一 11才  
 玉芝〔丹後河辺〕 保三35才  
 玉芝〔近江 西湖藁園〕 保十一 25ウ  
 玉卮〔筑前〕 保四14才  
 玉子〔下総〕 保四35才  
 玉雪〔肥後〕 政十一 16ウ  
 玉扇〔陸奥秋田ノ扇田〕 保三22ウ  
 玉洗〔出雲〕 保四9才  
 玉泉〔淡路江井〕 保四25才  
 玉叟〔山城京〕 保四2才 保四51才  
 保五50ウ

玉双〔山城〕 保五2ウ  
 玉池〔大和〕 保四54才  
 玉汀〔加賀島崎〕 保四36ウ  
 玉桐〔安芸広島〕 保一26ウ 保三38ウ  
 玉梅〔伊勢中村女〕 保四25ウ  
 保四32才  
 玉雄〔能登七尾〕 保十一 7才  
 保十一 26ウ  
 玉養〔三河吉田〕 保四32才 保五10才  
 玉瀾〔讃岐河内村〕 政十一 18才  
 保三39ウ  
 魚守〔陸奥会津〕 保一12才 保三21ウ  
 魚舟〔丹波須知〕 政十一 13才  
 漁村〔近江 西湖藁園〕 保四45ウ  
 保五4ウ 保十13ウ 保十一 25才  
 魚道〔丹後宮津〕 保四5才 保五26ウ  
 御風〔出羽秋田〕 政十一 10才 保一12才  
 保四36才  
 魚物〔山城淀〕 保四47才 保五47才  
 漁洋〔筑前〕 保三42才 保四15ウ  
 保五36才 保十5ウ  
 其雷〔対馬〕 保一36才 保四20才  
 其嵐〔越後福岡〕 保五22才  
 其嵐〔豊前中津〕 保五38ウ  
 其嵐〔伊予柏〕 保十一 終2ウ  
 蟻来〔伊勢山田〕 政十一 6ウ  
 騎龍〔備前西大寺〕 保一26才  
 几龍〔能登中嶋〕 保三29ウ  
 葵笠〔伊予〕 保五55ウ 保十七ウ  
 保十一 40ウ

亀梁〔肥後熊本〕 保一34ウ  
 金羽〔山城淀〕 保十32才  
 金英〔丹後〕 保三35ウ  
 董崖〔董厓〕〔土佐高知〕 保一29ウ  
 保十14ウ 保十一 22ウ  
 金月〔但馬〕 保三36才  
 金蚯〔近江〕 保三17才  
 金菜〔山城京〕 政十一 21ウ 保一1ウ  
 保一36才 保三48才 保四1才  
 保四49才 保五1才 保五49才  
 保十26才 保十一 32才  
 芹斎〔加賀金沢〕 保十一 29才  
 琴止〔播磨千本〕 政十一 14才 保一25ウ  
 琴糸〔讃岐高松〕 保四24才  
 琴二〔日向都城〕 保五40才  
 芹舎〔山城〕 保一38才 保三1才  
 保三3才 保三48才 保四1才  
 保四47ウ 保四49ウ 保五1才  
 保五50ウ 保十26ウ 保十一 1ウ  
 保十一 39ウ  
 琴洲〔播磨今市〕 政十一 13ウ 保四10才  
 琴松〔三河宮崎〕 政十一 8才  
 金樵〔尾張〕 保五8ウ  
 錦水〔近江高島太田〕 保一9才  
 保十一 25ウ  
 董水〔越後岡野町〕 保一22才  
 今是〔讃岐和田浜〕 保一27ウ 保三40才  
 保四21ウ 保四25才 保五41ウ  
 錦石〔加賀金沢〕 保一15才 保四37才  
 保五22ウ

金塘〔陸奥会津〕 保一11ウ  
 金波〔伊賀〕 保五55才  
 金風〔出雲〕 保四8才  
 董圃〔伊予大洲〕 保一28ウ  
 錦羅〔出雲松江〕 保五27ウ  
 琴柳〔能登女〕 保十一7才  
 吟風〔山城淀〕 保四46才 保五47才  
 保十8才  
 吟龍〔日向美々津〕 保一35ウ 保三46ウ  
 保五40才

く

隅井〔近江〕 保三18ウ 保四45才  
 久麻女〔山城〕 保十33才 保十一44ウ  
 君波〔山城宇治〕 保一42才  
 君友〔丹後〕 保三35才  
 君齡〔摂津浪花〕 政十一20ウ

け

蕙逸〔近江大津〕 保十14才 保十一34才  
 桂外〔淡路社家村〕 保五44才  
 景丸〔丹後宮津〕 保五26ウ  
 慶々〔陸奥会津〕 保一42才  
 慶五〔慶吾〕〔筑後久留米〕 政十一15ウ  
 保五36ウ 保十8才 保十一4ウ  
 馨斎〔紀伊高野〕 政十一19才  
 溪斎〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
 敬之〔近江日野〕 保五5ウ

桂枝〔近江坂本〕 保十30才  
 桂洲〔加賀〕 保三24才  
 軽舟〔山城淀〕 保四46ウ  
 慶寿〔下総水海道〕 保五18才  
 桂女〔筑前〕 保四14才  
 桂女〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 景中 保四26ウ  
 桂堂〔肥前長崎芭蕉館社中〕  
 保十一9才

桂眉〔丹波額田〕 保十13ウ 保十一36才  
 蕙布〔近江大津〕 政十一3ウ 保一42才  
 保三17才 保四41ウ 保五4ウ

桂草〔越中〕 保一20才  
 蕙風〔備前〕 保十30ウ  
 敬甫〔越後〕 保三32才  
 桂裡〔陸奥福島〕 保五19才  
 迎月〔能登武部〕 保一18ウ  
 月貨〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 月踞〔山城〕 保一1ウ

月虚〔豊前水崎〕 保一32才  
 月橋〔筑前シチ川〕 保四26ウ 保五36ウ  
 月琴〔美作土居〕 保五31ウ  
 月桂〔摂津大坂〕 政十一20ウ  
 保三5ウ 保五44ウ  
 月扇〔月扇〕〔近江〕 保三19才  
 保四41ウ  
 月彦〔近江高島〕 保一9才  
 月敲〔山城京〕 政十一3才  
 政十一23才  
 月江〔肥前〕 保四19ウ

月岡斎〔美濃関〕 保十一終2才  
 月谷〔出雲下ノ河内〕 保四8才  
 月砂〔越前敦賀〕 保一12才  
 月斎〔越後糸魚川〕 保三32才  
 月枝〔豊後彦山〕 保五39ウ  
 月秋〔筑前〕 保四14ウ  
 月舟〔筑前〕 保四15ウ 保五35ウ  
 保十5才

月樵〔丹波亀山〕 保十20才 保十一40ウ  
 月洗〔近江湖東〕 保五5才  
 月叟〔伊予宇和島〕 保一28才  
 月村〔讃岐金毘羅〕 政十一17ウ  
 月村〔伊予大洲〕 保一28ウ  
 月亭〔但馬二方千原〕 保一23ウ  
 保三36ウ 保五26ウ

月亭〔淡路桃川〕 保四25ウ  
 月亭〔播磨〕 保十15才  
 月底〔尾張〕 保十18ウ  
 月坡〔近江大野〕 政十一5ウ 保一41ウ  
 保三3ウ 保三19才  
 月波〔但馬二方千原〕 保一23才  
 保五26ウ

月仏〔摂津〕 保三7才  
 月平〔筑前福岡〕 保一30才 保三41ウ  
 保四11ウ 保五34才 保十一21才  
 月峰〔山城京〕 政十一1才  
 政十一21ウ 保一1才 保一36ウ  
 保三1ウ 保三3才 保三47ウ  
 保四1才 保四51ウ 保五1ウ  
 保五49才 保十1才 保十26才

月雄〔加賀金沢〕 保一16才 保五22ウ  
 懸壺〔豊後日出〕 保三44ウ 保五39ウ  
 見推〔越中今石動〕 保一20ウ  
 硯水〔肥後熊本〕 保一35才  
 鵬村〔信濃〕 保四36才 保五19才  
 見盃〔能登七尾〕 保一18才  
 誼老〔越後庭月〕 保一40ウ  
 源〔肥後熊本女〕 保一35才

幻化〔筑後久留米〕 政十一15ウ  
 保一31ウ 保三44才 保四16ウ  
 彦崎〔加賀宮腰〕 保三26ウ  
 玄駒〔淡路須本〕 保五43才  
 玄々〔大和〕 保四54才  
 幻芝〔武蔵江戸江口ノ里〕  
 保一43才 保三11ウ 保四35才

玄峰〔播磨〕 保十30ウ  
 幻夢〔下総水海道〕 保一7才  
 言来〔山城京〕 政十一2ウ  
 政十一22ウ 保一2才 保一38才  
 天三4ウ

玄里〔筑前〕 保五33ウ  
 源良〔山城淀〕 保四46才  
 乙  
 耕雲〔播磨〕 保四9ウ 保五29ウ  
 向栄〔阿波〕 保三39ウ 保四21ウ  
 光影〔山城〕 保四2ウ 保四50才  
 保五2ウ 保五50才

荒永〔越後島倉〕 保四40ウ  
 紅袁〔肥前平戸〕 保一33ウ  
 広居〔但馬二方千原〕 保一23オ  
 保三36オ 保四6ウ 保五26ウ  
 江居〔摂津〕 保四28ウ  
 蒿居〔摂津浪花〕 保一23オ  
 江月〔伊勢四疋田〕 保三9ウ 保五45オ  
 江月〔下総〕 保一4オ  
 香月〔下総〕 保四35オ  
 校古〔越中今石動〕 保一20ウ  
 好耕〔但馬天王〕 保三38オ  
 好々〔周防山口〕 保五32ウ  
 江三〔陸奥福島〕 保五19オ  
 光山〔山城伏水〕 保三47ウ  
 光山〔讃岐高松〕 保一128ウ  
 鴻洲〔山城〕 保三5オ  
 眩睡〔筑前〕 保五35オ  
 公石〔武蔵江戸〕 保一6オ  
 紅碩〔上野伊勢崎〕 保一11オ  
 香雪〔陸奥会津〕 保一11ウ 保三21ウ  
 香雪〔春秋庵〕〔近江西湖〕 保一2ウ  
 保一21ウ 保一1オ 保一11ウ 保一37ウ  
 江亭〔近江真野〕 保五4ウ  
 庚年〔武蔵江戸〕 保五14オ  
 郊馬〔伊予今治高郡〕 保一39ウ  
 保三41オ 保一11ウ 保一34ウ  
 厚薄〔日向本庄〕 保三46ウ 保四21オ  
 保五40ウ 保一31オ 保一18ウ  
 苟美〔三河〕 保四32オ  
 公氷〔摂津浪花〕 政一19ウ 政一21オ

耕文〔出雲〕 保四8オ  
 孝平〔山城〕 保三49オ  
 香輔〔筑後木屋瀬〕 政一15ウ  
 香輔〔筑前赤間〕 天一31オ 天三42ウ  
 香木〔筑前〕 保五35ウ  
 耕六〔大和〕 政一18ウ  
 公路〔摂津浪花〕 保一3ウ  
 古猿〔近江大津〕 政一13ウ  
 古園〔石見銀山〕 保一23ウ  
 菰猿〔伊勢〕 保四52ウ  
 梧園〔淡路佐野〕 保五43ウ  
 湖華〔長門伊佐〕 保一10ウ  
 古岸〔但馬〕 保三36オ 保四6ウ  
 古眼〔越前丸岡〕 保五20ウ  
 吾鶴〔和泉貝塚〕 保一27ウ  
 呉厓〔摂津浪花〕 保一10オ  
 呉崖〔山城〕 保一37ウ  
 五楽〔陸奥八ノ戸〕 保三22オ  
 五岳〔筑前〕 保三43ウ 保四11オ  
 保五34ウ  
 古鏡〔河内〕 保一12オ 保一31オ  
 五曉〔和泉貝塚〕 保一27ウ  
 国彦〔出羽秋田〕 政一10オ 保四36オ  
 克昌〔薩摩加治木〕 保一8ウ  
 保一17ウ  
 克亭〔越中砂子坂〕 保五21オ  
 克雄〔山城〕 保三3オ  
 呼鷄〔播磨比延〕 保五29オ  
 古溪〔播磨〕 保一15オ 保一22オ

狐穴〔伊勢津〕 保一28オ  
 古硯〔肥前諫早〕 保一34オ  
 湖月〔山城美豆〕 保三47ウ  
 湖月〔近江川島〕 保一23ウ  
 狐月〔山城京〕 保四50オ  
 狐巖〔対馬〕 保四20ウ  
 五溪〔豊後南山〕 保一1終1オ  
 古谷〔播磨比延〕 政一14オ 保一25ウ  
 保三37ウ 保五29オ 保一14ウ  
 保一19ウ 保一22オ  
 湖郷〔近江西湖高島〕 保五4オ  
 保一21ウ 保一23ウ  
 午湖〔午潮〕〔筑前〕 保五33オ  
 保五34ウ 保一21ウ  
 呉郷〔下総〕 保四34ウ  
 呉剛〔下総〕 保四35オ  
 孤山〔越中魚津〕 保三30ウ  
 古山〔山城〕 保一3オ  
 孤朱〔常陸〕 保五18オ  
 虎嘯〔冬山〕〔出雲〕 保四7ウ  
 孤松〔山城〕 保一26オ  
 古雀〔能登七尾〕 保一18オ 保四39オ  
 保五25オ  
 虎十〔越中福町〕 保一20ウ  
 古情〔丹波小野〕 保四4オ  
 五車〔近江高島〕 保五4オ  
 五株〔武蔵江戸〕 保一33オ  
 呉秀〔丹波成松〕 保一20ウ 保一36オ  
 五春〔筑前〕 保四12オ 保五34オ  
 五蕉〔讃岐〕 保五41ウ

伍省〔筑前〕 保五35オ  
 吾雀〔山城京〕 保一2オ 保一23オ  
 保一2オ 保一29ウ  
 保一14オ  
 五丈〔越中福光〕 保一20オ  
 梧丈〔筑前〕 保四16オ  
 虎睡〔肥前長崎〕 政一16オ  
 壺睡〔讃岐丸亀〕 政一17ウ  
 鼓吹〔周防白松〕 保一41オ 保三39オ  
 保四10ウ  
 鼓吹〔播磨新宮〕 保一41オ 保三37ウ  
 保四9ウ  
 吾水〔対馬〕 保四20オ  
 梧青〔伊勢山田〕 政一6ウ 保一5オ  
 梧栖〔紫石〕〔筑前〕 保四12オ  
 保五33ウ 保一21ウ  
 梧井〔肥前〕 保四19ウ  
 梧雪〔丹波須知〕 政一13オ  
 弧村〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
 湖村〔近江西湖〕 保一23ウ  
 壺中〔越前〕 保三23ウ  
 壺中〔播磨明石〕 保四9ウ 保一6ウ  
 五竹〔尾張逆川〕 政一7ウ  
 呉鳶〔莫鳶／呉鳥〕〔筑前〕 保三42オ  
 保四15ウ 保五35ウ  
 兀山〔播磨三木〕 政一13ウ  
 兀人〔武蔵江戸〕 保一17オ  
 呼亭〔加賀大聖寺〕 政一11ウ  
 保一16オ 保三27ウ 保三28ウ  
 保四38ウ

壺亭〔但馬〕 保三36才  
 壺天〔筑前〕 保四12才 保五34才  
 呉天〔伊予〕 保三41才  
 壺堂〔伊予大洲〕 保一29才  
 虎道〔備後尾道〕 保五30才  
 呉堂〔出雲〕 保三37才 保四9才  
 梧堂〔豊前〕 保四55ウ  
 湖帆〔出雲松江〕 保五27才  
 呉梅〔丹波〕 保三13ウ  
 語氷〔能登七尾〕 保三11 26ウ  
 湖風〔筑前〕 保四16才  
 五風〔近江日野〕 保三11 2ウ  
 保三11 32ウ  
 護物〔武蔵江戸〕 保五13才  
 保三11 33才  
 呼卯〔遠江原川〕 保三11 23ウ 保五10才  
 五芳〔播磨宇佐崎〕 政三11 13ウ  
 保一25才 保三37ウ 保四10才  
 五木〔日向〕 保三14ウ  
 呉明〔山城〕 保一38ウ 保三3才  
 保三49ウ 保四51ウ 保五51ウ  
 五明〔筑後久留米〕 保三11 4才  
 虎遊〔大和吉野〕 保三47ウ 保四54才  
 湖陽〔近江湖東町家〕 保三11 26ウ  
 固来〔加賀金沢〕 政三11 12才 保一15ウ  
 保五23才  
 后来〔伊予大洲〕 保一28ウ  
 湖柳〔陸奥盛岡〕 政三11 10才  
 孤龍〔伊予天満〕 保五42ウ  
 湖嶺〔近江〕 保四45才

呉流〔因幡鳥取〕 政三11 13才  
 呉柳〔加賀〕 保三27才  
 五流〔豊後日田〕 保四54才  
 五龍〔陸奥会津坂下〕 保五19ウ  
 五龍〔筑前〕 保五34才  
 五粒〔山城京〕 保三12ウ  
 伍柳〔播磨〕 保三11 22ウ  
 五柳〔豊後南山〕 保三11 終1ウ  
 五涼〔筑前〕 保一29ウ 保四16才  
 五陵〔陸奥〕 保三22ウ  
 五蓼〔三河〕 保四32ウ 保五10才  
 五嶺〔豊後日田〕 保五39ウ  
 五嶺〔備中笠岡〕 保三30才 保三11 6ウ  
 瑚璉〔肥後熊本〕 保一35ウ  
 五老〔武蔵江戸〕 保五12才 保五14ウ  
 五朗〔近江湖東〕 保三14ウ  
 一山〔山城京〕 政三11 23才  
 鯤明〔摂津大坂〕 保一41ウ

さ

再可〔筑前〕 保四15ウ  
 西月〔摂津浪花〕 政三11 20才  
 保三17才  
 西湖〔下総〕 保三14才  
 再児〔陸奥会津坂下〕 保五19ウ  
 柴人〔伊予銅山〕 保五3ウ 保五42ウ  
 采桑女〔山城京〕 保五54才  
 塞馬〔三河足助〕 政三11 8才 保三11才  
 保四32ウ

柴扉〔筑前〕 保三43ウ 保四12ウ  
 在淵〔伊勢山田〕 政三11 6ウ 保一4ウ  
 保一5才 保四31才 保五45ウ  
 沙鷗〔尾張名古屋〕 保三10才 保五8ウ  
 保三19才 保三11 34ウ  
 左葉〔播磨〕 保三37ウ  
 砂楽〔肥前田代〕 保一40ウ 保三45ウ  
 沙芹〔三河〕 保三11ウ  
 坐魚〔山城京〕 保四2才 50ウ  
 砂月〔讃岐高松〕 保三11 28ウ  
 笹雄〔丹後田辺〕 保一23才  
 笹兮〔備後尾道〕 保五30才  
 沙升〔越中富山〕 保三30才  
 左翠〔加賀金沢〕 保一15才  
 砂水〔豊前添田〕 保三44ウ  
 さちか〔越中本郷〕 保一19ウ  
 里女〔近江西湖大溝〕 保三21ウ  
 保三11 23ウ  
 砂童〔筑前〕 保四15才  
 砂北〔筑前〕 保三43ウ 保四12ウ  
 左来〔安芸三津〕 保一26ウ  
 沙来〔上野福島〕 保三21才  
 さらい〔日向富岡〕 保五40才  
 左流〔武蔵八幡山〕 政三11 8ウ  
 坐麓〔伊勢高座原〕 政三11 6才  
 保三9ウ  
 左和蟻〔但馬村岡〕 保三11 23才  
 山外〔武蔵江戸〕 保三18才  
 保三11 38ウ

三岳〔三河吉田〕 保三10ウ 保四32才  
 保五10才  
 杉月〔美濃〕 保三20ウ  
 山狐〔山城京〕 保四50才  
 山鼓〔筑前〕 保五32ウ  
 三更〔豊前猪膝〕 保一32才  
 三考〔肥後〕 保四17才  
 三志〔加賀〕 保三25才 保四1ウ  
 保四37ウ  
 三石〔甲斐〕 保一39才  
 杉雪〔山城京〕 保四50ウ  
 三薦〔安芸〕 保三38ウ 保五32才  
 三桃〔越後三日市〕 保三11 終1ウ  
 杉堂〔伊勢山田〕 政三11 6才 保三10才  
 保四31才 保五45ウ  
 杉堂〔播磨〕 保三50ウ  
 三巴〔越前丸岡〕 保四41才 保三11 34才  
 山馬〔下総水海道〕 保五18才  
 三甫〔越後糸魚川〕 保一21才 保三32才  
 保五20才  
 三眠〔伯耆〕 保四7才  
 三友〔飛騨高山〕 政三11 10才 保一11才  
 三有〔越中〕 保四40才  
 杉里〔肥後熊本〕 保一35ウ  
 三李〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 山齡〔出雲松江〕 保五28才  
 山路〔肥後熊本〕 保一35才  
 杉露〔筑前〕 保四13才

し

しい～しゃ

市隠〔能登七尾〕 保五25才  
 士韻〔近江湖東町家〕 保十一26ウ  
 士鳥〔筑前福岡〕 保一30才  
 思雲〔出雲〕 保四9才  
 子寅〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
 子栄〔肥前長崎〕 保十一8ウ  
 市猿〔越後〕 保三32才  
 士焉〔筑前福岡〕 政十一15才 保三41ウ  
 保四10ウ  
 芝角〔尾張〕 保三50才  
 志可寿〔出雲〕 保十一1才 保十16ウ  
 志賀〔伊勢〕 保四53才  
 自楽〔撰津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3才 保三5ウ 保三7才  
 保四54ウ  
 柿丸〔加賀金沢〕 保十15ウ 保十一29才  
 始丘〔淡路須本〕 政十一18ウ  
 芝丘〔越中福町〕 保一21才  
 止休〔肥前〕 保四19才  
 市橋〔伊予宇和島〕 保一28才  
 紫金〔撰津伊丹〕 保十8才 保十一27ウ  
 慈弓〔山城城南〕 保十10才 保十一32ウ  
 時雨蓑〔若狭〕 保十22才  
 四溪〔伊勢山田〕 政十一7才 保一4ウ  
 保一5才 保三50ウ 保五45ウ  
 史敬〔肥前諫早〕 政十一16ウ 保一34才  
 保四18ウ

之桂〔下総多古〕 保四34ウ 保五17ウ  
 保十4才  
 芝月〔肥前女〕 保三46才  
 枝月〔山城〕 保五50ウ 保十二2才  
 保十27才 保十一39ウ  
 紫月〔近江湖葉園〕 保十一25ウ  
 士言〔筑後久留米〕 保十10才  
 保十一41才  
 之厚〔上野高崎〕 保三21才  
 子岬〔陸奥〕 保三22才  
 志厚〔陸奥〕 保三22ウ  
 子行〔下総上三島〕 保四34ウ  
 子光〔越中滑川〕 保四40才 保五20ウ  
 保十19才  
 之広〔近江八幡〕 保十一終2才  
 而后〔尾張〕 保三10才 保五8ウ  
 保十19才 保十一40才  
 自考〔筑前〕 保三42ウ 保四15ウ  
 保五36才  
 二江〔近江牧〕 保五5才  
 慈光〔しるす〕〔出雲島田〕 保十一28才  
 師三〔越後糸魚川〕 保一21ウ  
 子竺〔山城京〕 政十一3才  
 政十一22ウ 保一38才  
 時習〔肥前〕 保四19才  
 二秀〔周防〕 保十一32ウ  
 自笑〔近江白鬚〕 保一9ウ  
 二笑〔近江湖東〕 保十10ウ  
 此水〔加賀〕 保三26才  
 似翠〔能登穴水〕 保一17才

支雪〔山城淀〕 保四46ウ  
 市雪〔尾張〕 保五9才  
 紫川〔豊前猪膝〕 政十一16才 保一32才  
 史千〔武蔵江戸〕 保四33才 保十18ウ  
 枝船〔肥前唐津〕 保五38才  
 芝仙〔肥前長崎〕 保十一10才  
 二石〔肥前長崎〕 保十一8ウ  
 二泉〔丹波〕 保四4ウ  
 似藻〔丹後田辺〕 保三33ウ 保四5ウ  
 巳兆〔近江七里〕 保一10ウ 保三19ウ  
 止鳥〔撰津〕 保三6ウ 保四29才  
 二蝶〔筑前〕 保四13才  
 此植〔河内〕 保十一31才  
 日夏〔山城京〕 保十3ウ 保十33才  
 日葵〔丹波成松〕 保十20ウ 保十一36才  
 日然〔土佐〕 保十一22ウ  
 紫亭〔肥前長崎〕 保五38ウ  
 紫藤〔近江〕 保三18ウ  
 子屯〔近江八幡〕 保五54才  
 之道〔若狭〕 保三23才  
 士堂〔近江〕 保四26才  
 二島〔伊予川ノ江〕 保三41ウ  
 而得〔播磨明石〕 保十6才  
 市博〔筑後久留米〕 保十10才  
 子梅〔能登〕 保三29才  
 思文〔能登ヲキノ谷〕 保三29才  
 思文〔尾張〕 保五9才  
 時風〔筑前〕 保五33ウ  
 此方〔和泉堺〕 保一4才  
 士宝〔越後糸魚川〕 保一21ウ 保三32才

紫峰〔下総水海道〕 保五18才  
 之下〔肥前諫早〕 保一34才  
 二芳〔能登〕 保三29才  
 士明〔近江日野〕 政十一2ウ  
 政十一5ウ 保一10ウ 保三19才  
 至明〔播磨姫路〕 政十一14才  
 四明〔近江八幡／湖東辻村在下総〕  
 保一7才 保三15才 保三19ウ  
 保四43ウ 保五5ウ 保五6才  
 保十14才  
 史鳴〔周防〕 保三39才  
 支鳴〔雲水〕 保四44ウ  
 支鳴〔播磨〕 保十15才 保十一22才  
 車乙〔讃岐〕 保四24才  
 車外〔讃岐〕 保四24才  
 車軌〔丹後サンジヨ〕 保五26才  
 尺花〔能登能登部〕 政十一11ウ  
 尺童〔越後福岡〕 保五22才  
 尺莆〔越中〕 保三30才  
 尺歩〔筑前／在京〕 保三43ウ  
 保四11ウ 保十一21ウ  
 且月〔遠江飯田〕 保五10ウ  
 斜月〔山城〕 保十27才 保十一38才  
 且斎〔山城京〕 政十一23ウ 保一37才  
 碑士〔山城〕 保五51才  
 車十〔越後加茂〕 政十一10ウ 保三31ウ  
 車文〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 保三22才  
 写水〔越中〕 保三30ウ 保四39ウ  
 斜道〔近江走井〕 政十一4才

舍羅〔近江高島〕 保一 9才  
 捨来〔播磨〕 保十 30ウ  
 車良〔讃岐〕 保四 24才  
 洒了〔伊勢津〕 保五 46才  
 斜梁〔越中富山〕 保十 12才 保十一 24才  
 若雅〔山城京〕 政十一 1ウ 政十一 22才  
 保一 37ウ 保三 2ウ 保三 4ウ  
 保三 48ウ 保四 2才 保四 49ウ  
 保五 1ウ 保五 49ウ  
 雀子〔但馬〕 保四 6ウ  
 若拙〔筑前木屋瀬〕 保一 31才 保三 42ウ  
 保四 15ウ 保五 36才 保五 15ウ  
 雀堂〔肥前長崎〕 政十一 16才  
 箬風〔山城京〕 保十一 1ウ 保十一 1才  
 保十一 32才  
 守一〔播磨〕 保三 37才  
 守胤〔越中富山〕 保十一 24才  
 修〔播磨古瀬〕 保三 37才  
 四友〔豊前〕 保三 44ウ  
 四友〔武蔵越ヶ谷〕 保五 17才  
 蠡雨〔讃岐金毘羅〕 政十一 17ウ  
 菘園〔若狭〕 保十 12ウ  
 秋心〔能登穴水〕 保一 17才  
 秋禾〔山城〕 保三 49才  
 秀外〔尾張宮〕 保三 10才 保五 9ウ  
 保十 19才 保十一 38才  
 秋橋〔近江愛知川〕 保四 27ウ  
 秋月〔近江安土〕 保一 10才  
 秀江〔出雲松江〕 保五 28才  
 秋斎〔近江〕 保三 18ウ

周斉〔佐渡〕 保十 31ウ 保十一 35才  
 秋山〔撰津浪花〕 政十一 21才  
 宗三〔出羽湊〕 保一 12才  
 習之〔日向本庄〕 保三 46ウ 保四 20ウ  
 保五 40ウ 保十 30ウ 保十一 8ウ  
 秋杵〔近江前野〕 保三 18ウ  
 秋助〔伊勢山田〕 政十一 6ウ  
 秋助〔撰津伊丹〕 政十一 20才  
 宗石〔近江高島〕 保一 9才  
 秋宣〔出雲松江〕 保四 8ウ 保五 27才  
 秋扇〔越前〕 保四 41才  
 周詮〔越後松村〕 保一 41才  
 秀然〔出雲安来〕 保五 28才 保五 53ウ  
 秋叟〔越中〕 保四 39ウ  
 周稚〔播磨姫路〕 政十一 14才  
 秀涛〔出雲松江〕 保五 28才  
 宗徳〔丹波梶原〕 保四 4ウ  
 秀堂〔出雲母里〕 保五 28ウ  
 秋萍〔筑前〕 保四 11才  
 秋平〔加賀金沢〕 保一 15才 保三 24ウ  
 衆芳〔山城京〕 保四 2ウ 保四 50ウ  
 保五 2才 保五 50ウ  
 萩埜〔伊勢山田〕 保一 4ウ 保一 5才  
 秀有〔肥前〕 保四 19才  
 秋芦〔尾張〕 保三 10才  
 酒丸〔筑前〕 保四 13才  
 夙也〔尾張〕 政十一 1才 政十一 24才  
 保一 2ウ 保一 7ウ 保一 39才  
 保三 2才 保三 3ウ 保三 49ウ  
 保四 52才 保四 55才 保五 9才

守中〔伊豆網代〕 保三 11ウ  
 守白〔越後上十日市〕 保一 22才  
 保三 32ウ 保四 40ウ  
 守平〔丹後〕 保三 35才  
 守豊〔丹波笹山〕 保一 41ウ  
 朱芳〔三河〕 保三 10ウ 保四 32ウ  
 種雄〔越後糸魚川〕 保一 21才  
 春香〔武蔵江戸浅草〕 保十 31才  
 保十一 33ウ  
 春涯〔加賀〕 保三 26ウ  
 春輝〔加賀本吉〕 政十一 12ウ  
 春暉〔豊後中津／豊前中津〕 保四 16ウ  
 保五 39才  
 春選〔薩摩加治木〕 保十 8ウ  
 保十一 8才  
 春月〔越前敦賀〕 保十一 26才  
 春哉〔伊勢津〕 保五 46才  
 春芝〔丹後峰山〕 保四 6才  
 春室〔越後水原〕 保十一 39ウ  
 春船〔出雲〕 保四 8ウ  
 春草〔備後鞆〕 保四 26ウ 保五 30ウ  
 春岱〔筑前〕 保四 11ウ  
 春台〔加賀金沢〕 保五 23ウ  
 春庭〔越後〕 保十 9ウ  
 春涛〔出雲完道〕 政十一 13才 保三 36ウ  
 保四 9才  
 春扉〔伊賀〕 保五 55才  
 春浦〔加賀〕 保一 13才  
 春圃〔肥前〕 保四 17ウ  
 春芳〔近江長浜〕 政十一 4ウ

春峰〔加賀〕 保四 37ウ  
 春峰 ↓ はる岑  
 春雄〔下総佐倉太田〕 政十一 9ウ  
 春雄〔播磨見土呂〕 保五 29ウ  
 春余〔伊勢〕 保四 31ウ  
 春来〔山城淀〕 保四 46ウ  
 春里〔肥前諫早〕 政十一 16ウ 保一 34才  
 春鯉〔能登〕 保三 29才  
 峻路〔遠江横須賀〕 保五 10ウ  
 春路〔武蔵江戸〕 保五 14才 保十 17ウ  
 春朗〔播磨〕 保十一 22才  
 二由〔山城城南下駒〕 保十一 43ウ  
 十海〔山城〕 保三 1ウ 保三 48ウ  
 十亀〔山城〕 保四 2才  
 十丈〔山城京〕 政十一 2才  
 政十一 23ウ 保一 36ウ 保三 4ウ  
 保三 28ウ  
 重泰〔山城〕 保十一 3ウ 保十一 44才  
 十墨〔安芸広島〕 保五 53才  
 寿鶴〔播磨〕 保四 9ウ  
 寿幸〔筑前〕 保三 42ウ  
 寿山〔日向本庄〕 保四 21才 保五 40ウ  
 寿山〔エジリ〕 保四 28才  
 寿扇〔筑前〕 保四 15才  
 寿専〔讃岐坂本〕 保五 55ウ  
 樹村〔武蔵江戸〕 保十一 24ウ  
 寿堂〔武蔵江戸〕 保五 14ウ  
 寿堂〔山城〕 保十一 32才  
 巡孝〔丹後田辺〕 保一 23才  
 筍莊〔伊勢榎柄浦〕 保四 30ウ

しょ〜じょ

四暢〔但馬〕 保四7才  
 松靄〔近江高島〕 保一9才  
 正阿弥〔山城京〕 保四2ウ 保四51才  
 保五2才 保五49才  
 松陰〔山城京〕 政十一2才  
 蕉雨〔備後宮内〕 保一26才 保三38才  
 保四10才  
 松雨〔肥後熊本〕 保一35才  
 松塙〔筑後久留米〕 保十10才  
 保十一41才  
 小柯〔武蔵江戸〕 保五13才  
 松岬〔陸奥南部〕 保五19ウ  
 松歌〔山城京〕 保十二2才 保十三3才  
 保十一2ウ  
 蕉雅〔近江〕 保四45才  
 松岳〔筑前〕 保四11才  
 小狭也〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 勝錦〔山城〕 保十三3ウ 保十三3ウ  
 保十一45才  
 処眺〔肥前長崎〕 保十一10才  
 松頭〔山城〕 保十一44ウ  
 松月〔近江 西湖川島〕 保三18ウ  
 保四45才 保五4ウ 保十三3ウ  
 保十一36ウ  
 松月〔丹後四ツ辻〕 保三35才  
 松月〔筑前〕 保五36才  
 松月〔播磨明石〕 保十六6才  
 嘯月〔近江大津〕 保十四4才  
 松呼〔加賀金沢〕 保一16才  
 尚古〔越後〕 保三32ウ

尚故〔日向〕 保四21才 保五41才  
 保十一8ウ  
 嘯虎〔薩摩加治木〕 保十8ウ  
 保十一7ウ  
 蕉好〔伊勢山田〕 保五45ウ  
 省吾〔伊勢山田〕 政十一6才  
 小左〔肥前大村〕 保一33才  
 小蓑〔下総〕 保一43才 保三12ウ  
 商齋〔商齋〕〔加賀金沢〕 政十一12才  
 保一15才 保三24ウ  
 昌作〔伊勢山田〕 政十一7才  
 梢山〔下総植房〕 保三12ウ 保四34ウ  
 保五17ウ  
 蕉山〔丹後田辺〕 保三34才 保四5ウ  
 保五26才  
 樵山〔筑前〕 保三42ウ 保四11才  
 樵山〔撰津大坂〕 保五55ウ 保二十3才  
 升山〔伊勢松坂〕 保四53才 保五53才  
 昇山〔播磨明石〕 保十六6ウ  
 松子〔撰津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3才 保三5ウ  
 松舎〔越後〕 保四40ウ  
 蕉秀〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 保三22才 保四35ウ  
 松二〔筑前博多〕 政十一15才 保一31才  
 保三43才 保四13ウ  
 松什〔武蔵江戸葛西〕 保三51才  
 保四34才 保五13才 保十一40才  
 昌人〔薩摩加治木〕 保十8ウ  
 保十一7ウ

松翠〔丹後〕 保四5ウ  
 小翠〔筑前〕 保四16才  
 照星〔伊勢津〕 保四54ウ 保五46才  
 松扇〔伊勢山田〕 政十一7才  
 松鼠〔筑前〕 保三43ウ 保四12ウ  
 松巢〔近江湖東〕 保十14才  
 松代女〔筑後久留米〕 保十七7ウ  
 保十一4才  
 笑直〔武蔵江戸〕 保十一25才  
 松涛〔讃岐和田浜〕 保一27ウ  
 松東〔三河〕 保三11才  
 松堂〔讃岐正田〕 保四23ウ 保五41ウ  
 松堂〔能登七尾〕 保五25才  
 嘯洞〔上野前橋／厩橋〕 保三21才  
 保四35ウ  
 蕉洞〔伊勢古市〕 保五45才  
 笑道〔筑後久留米〕 保十七7ウ  
 保十一4才  
 松年〔能登トキ〕 保五24才  
 松扉〔伊勢〕 保四31ウ  
 松美〔能登〕 保四39才  
 樵風〔泥中〕〔播磨曾根〕 政十一13ウ  
 保一25才  
 松風〔豊前小倉林〕 政十一16才  
 保一31ウ 保三44ウ 保四55ウ  
 保五39才  
 昌風〔伊勢〕 保四31才  
 小圃〔武蔵江戸淀バシ〕 保三12才  
 保四33ウ  
 松甫〔出雲〕 保四9才

松圃〔伊勢〕 保四31ウ  
 松方〔越中〕 保三30ウ  
 梢鳳〔出雲母里〕 保四7ウ  
 蕉夢〔丹波篠村〕 保一1ウ 保一22才  
 保三32ウ 保四4ウ  
 升明〔近江八幡〕 政十一5才 保一9ウ  
 松雄〔能登ハナミ〕 保三29ウ  
 梢陽〔下総〕 保四34ウ  
 松羅〔出雲松江〕 保四8ウ 保五27ウ  
 笑鯉〔山城淀〕 保十三2才  
 松隣〔撰津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3ウ 保三5ウ 保四29才  
 松露〔丹波亀山〕 保三35才 保十20ウ  
 保十一終2才  
 蜀水〔佐渡〕 保三11ウ 保十一35才  
 坦然〔陸奥会津〕 保一12才  
 曙堂〔対馬〕 政十一16ウ  
 初六〔山城〕 保一2ウ 保一38ウ  
 保三2才 保三4才 保三49ウ  
 保四51ウ 保五51ウ 保十17才  
 保十一16ウ 保十一18才  
 保十一36ウ  
 常丸〔陸奥〕 保三22ウ  
 丈翠〔山城嵯峨〕 保一37才 保三5才  
 保三47ウ 保四1ウ 保四47ウ  
 保五51才 保十一1才 保十九9才  
 保十一1ウ 保十一32才  
 丈水〔越中富山〕 保四40才 保五21ウ  
 丈李〔伊勢山田〕 政十一7才  
 如芥〔伊勢山田〕 政十一6ウ

じょ～せい

恕兮〔越中三日市〕 保五20ウ  
 序哉〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 如松〔飛騨高山〕 政十一10才 保一11才  
 如松〔能登穴水〕 保一17ウ  
 汝省〔伊予今治〕 保一39ウ  
 徐松〔武蔵百間〕 保五17ウ  
 如々〔豊後南山〕 保十一終1ウ  
 如水〔下総水海道〕 保一7才  
 如水〔淡路〕 保四25ウ  
 如水〔伊勢龜山〕 保五46ウ  
 如水〔山城〕 保十32ウ  
 如水〔陸奥朝香笹川〕 保十一37才  
 如翠〔加賀アハカサキ〕 保三25ウ  
 保四36ウ  
 如薺〔越中滑川〕 保十一10ウ  
 如積〔越前敦賀〕 保一12才  
 如雪〔肥前〕 保三46才  
 如雪〔加賀金沢〕 保五22ウ  
 助宣〔武蔵江戸〕 保十18才  
 如箭〔摂津兵庫〕 政十一19ウ  
 徐全〔摂津兵庫〕 保三6ウ 保四28ウ  
 如竹〔加賀金沢〕 保十一29才  
 如朝〔淡路西川〕 保五43ウ  
 如笛〔筑前〕 保五36才  
 如帆〔筑前〕 保五33才  
 如来〔筑前〕 保五35才  
 如頼〔若狭小浜〕 保十12ウ 保十一26才  
 茹来〔陸奥津軽黒石〕 保三51才  
 舒六〔近江大津〕 政十一3才 保一8才  
 保三17才 保四41ウ

如柳〔尾張〕 保三50才  
 如柳〔志摩鳥羽〕 保十23才  
 保十一35才  
 如蓼〔越中富山〕 保三30ウ 保四40才  
 保五21ウ  
 卮嵐〔山城京〕 政十一2才  
 政十一23才 保一1ウ  
 而来〔陸奥会津慶徳〕 保十一29ウ  
 止柳〔讃岐井関〕 保五55才  
 自龍〔摂津浪花〕 保四29ウ 保五44才  
 市埒〔筑後〕 保十一41才  
 志郎〔一亭〕〔備前笠岡〕 保十一序ウ  
 保十一6ウ 保十一19才  
 虹朗〔天和〕 保五44ウ  
 辛夷〔紀伊高野〕 政十一19才  
 真起〔摂津大坂〕 保五55ウ  
 真弓〔越中放生津〕 保三31才  
 神月〔近江越川〕 政十一5才  
 真砂〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 申齋〔近江大津〕 政十一4才  
 真齋〔山城〕 保三2才  
 樵齋〔長門〕 保十12ウ  
 晨支〔武蔵江戸〕 保十17ウ  
 保十一25才  
 真舟〔能登能登部〕 保一18才  
 森俊〔石見矢上〕 保一23ウ  
 振々〔越前〕 保四41才  
 振々〔山城〕 保五1ウ  
 晋水〔備前岡山〕 保十一34才  
 深翠〔山城〕 保十一44才

真澄〔丹波篠山〕 保四4ウ 保五25ウ  
 保十13ウ  
 深尾〔丹波〕 保三32ウ  
 唇嵐〔肥後熊本〕 保一35才  
 す  
 翠雨〔播磨明石〕 保十6ウ  
 翠屋〔能登〕 保三29ウ  
 水玉〔薩摩加治木〕 保十8ウ  
 保十一8才  
 水景〔近江〕 保四44才  
 水月〔播磨比延〕 保五29才  
 睡齋〔伊勢山田〕 保五45ウ  
 翠川〔伊勢松坂〕 政十一6才  
 水竹〔三河〕 保四32才 保五54ウ  
 翠流〔筑前〕 保四15才  
 醉露〔山城〕 保一42ウ 保三5才  
 保三49才 保四3才 保四51才  
 保五2才 保五50才  
 瑞斗〔山城京〕 保四54ウ  
 寸外〔播磨姫路〕 保四10才  
 寸楽〔山城嵯峨〕 保一37才  
 寸錦〔播磨平福〕 保五29才  
 寸長〔肥前大村〕 保四17ウ 保五38才  
 保十一5ウ  
 寸風〔因幡鳥取〕 保十16才

せ  
 青衣〔摂津大坂〕 保五44才  
 青隠〔河内堺〕 保四29ウ  
 静雨〔安芸広島〕 保四53ウ  
 正焉〔肥前天草大島子〕 政十一16ウ  
 保一33ウ 保三51才 保四17才  
 正焉〔肥後〕 保五37才  
 青塙〔備後鞆〕 保一26才 保三38ウ  
 保五30才 保五30ウ  
 青乙〔紀伊田辺〕 保一27才  
 青荷〔武蔵八幡山〕 政十一8才  
 青荷〔阿波〕 保三39才  
 青柯〔阿波徳島〕 政十一18才  
 保一27ウ  
 晴霞〔加賀〕 保一12ウ 保三25ウ  
 晴霞〔加賀金沢〕 保一16才  
 青可〔三河尾張〕 保三10ウ  
 保四32ウ 保五2才 保五9才  
 井花〔伊勢〕 保四53才  
 生化〔能登〕 保十15ウ 保十一7才  
 静花↓茂荊  
 井峨〔伊予樋ノ口〕 保三41才 保五53才  
 青鶯〔筑前〕 保三43才  
 菁莪〔下総松戸〕 保五17ウ  
 青介〔加賀山中〕 保一17才 保三27ウ  
 星介〔越前福井〕 保四26才  
 世外〔摂津浪花〕 政十一21才

せい～せつ

世岐〔近江堅田〕 保三17才 保四44ウ  
 保五4才 保十20才 保十一37才  
 青蟻〔出雲〕 保四7ウ  
 青祇〔山城淀〕 保十一31ウ  
 成菌〔下総水海道〕 保一7才  
 齋空〔土佐〕 保十一22ウ  
 星溪〔下総水海道〕 保一7才  
 西月〔摂津浪花〕 政十一20才  
 保十七才  
 星湖〔近江辻村〕 政十一5才  
 静湖〔肥前大村〕 保一32ウ  
 成虎〔出雲松江〕 保五28才  
 青郊〔肥前〕 保四19ウ  
 青江〔遠江掛塚〕 保五53才  
 世行〔遠江〕 保十19才  
 静山〔肥前大村〕 保十一5才  
 青芝〔丹後峰山〕 保三35ウ  
 井資〔摂津浪花〕 保十9ウ  
 保十一35才  
 西枝〔山城野村〕 保十31ウ  
 青樹〔備後尾道〕 保五30才  
 西准〔和泉貝塚〕 保十一27ウ  
 成章〔青樟〕〔近江堅田〕 政十一4才  
 保一8才 保三17ウ 保四44ウ  
 保五4才  
 静々〔肥前大村〕 保十一4ウ  
 正川〔加賀〕 保四37才  
 清泉〔近江西湖太田〕 保十一25ウ  
 青素〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 青草〔丹後田辺〕 保五26才

西垞〔能登七尾〕 保一17ウ  
 静堂〔下野栃木〕 保五18ウ  
 世南〔山城〕 政十一23ウ 保一36ウ  
 青年〔筑後久留米〕 保十一4ウ  
 正葩〔中ムラ〕 保四21才  
 正葩〔日向〕 保十一8才  
 青巴〔丹波成松〕 保十20ウ 保十一36才  
 生白〔筑前〕 保四12ウ  
 青白〔尾張〕 保十一37ウ  
 井眉〔摂津浪花〕 保一4才  
 成眉〔出雲〕 保四7ウ  
 青尾〔安芸〕 保四10才  
 青珠〔陸奥盛岡五戸〕 保一40ウ  
 保三21ウ  
 清風〔和泉堺〕 政十一19才  
 青圃〔筑前〕 保四12ウ  
 正朋〔摂津浪花〕 保四29才  
 井畝〔肥前唐津〕 保一33ウ  
 青也〔香岐勝本〕 保三47才  
 静也〔丹後松尾寺〕 保四6才  
 清由〔加賀金沢〕 保一15ウ  
 政雄〔近江太田〕 保十一36ウ  
 青葉〔山城京〕 保十二2ウ 保十三2才  
 保十一3ウ 保十一45才  
 青羅〔筑前〕 保四12ウ  
 青栗〔上ハタ〕 保四28才  
 青柳 保四26ウ  
 青蓼〔青黎〕〔常陸下館〕 政十一9ウ  
 保一7才  
 世涼〔摂津浪花〕 保一3ウ

星嶺〔近江辻村〕 政十一5才 保一10才  
 惜花〔筑前女〕 保三43才 保四13ウ  
 石外〔筑前〕 保五32ウ 保十一1ウ  
 保十三才  
 石外〔武蔵江戸〕 保十一33ウ  
 赤楽〔山城京〕 保四50ウ  
 石居〔筑前〕 保三42ウ 保四15才  
 保五36ウ 保十五5ウ  
 石狂〔肥前長崎〕 保十一8ウ  
 石漁〔伊予小松〕 保三41ウ 保五42才  
 石兄〔能登穴水〕 政十一11ウ 保一17才  
 石慶〔肥前諫早〕 保四18ウ 保五38ウ  
 赤彦〔肥前大村〕 保十一5ウ  
 石鼓〔近江土山〕 政十一5ウ 保三19才  
 保四41ウ  
 石甲〔肥前諫早〕 保四18ウ 保五38ウ  
 石郷〔甲斐市川〕 政十一10ウ 保五11才  
 赤守〔三河吉田〕 政十一8才 保三10ウ  
 积水〔安芸木谷〕 保一26ウ  
 石水〔出雲〕 保四9才  
 赤水〔山城淀〕 保四47才  
 席睡〔筑前〕 保十一3才  
 石岱〔筑前〕 保三43才 保四13ウ  
 保五36ウ  
 石島〔備後尾道〕 保五30才  
 石風〔筑後久留米〕 保十10ウ  
 石甫〔越中富山〕 保一19才  
 石鳴〔信濃木ノ下〕 保四36才  
 石羊〔加賀大聖寺〕 保一16ウ 保三27ウ  
 赤鱗〔筑後久留米〕 保十七7ウ 保十一4ウ

石嶺〔越後長岡在〕 保三31ウ  
 石露〔豊後日田石井〕 保五39ウ  
 石露〔豊後南山〕 保十一終1才  
 是水〔武蔵江戸〕 保十一38ウ  
 雪塙〔備後福山〕 政十一14ウ  
 雪下〔大和〕 政十一18ウ  
 雪化〔大和〕 政十一18ウ  
 雪荷〔美濃大垣〕 保五8才  
 雪峨〔肥前田代曙庵社中〕 保三45ウ  
 雪涯〔讃岐丸亀〕 政十一17才  
 節外〔近江西湖五十川〕 保三18才  
 保四45ウ 保五53才 保十三才  
 保十一26才  
 雪丸〔山城京〕 政十一1ウ 保一37才  
 雪丸〔行脚〕 保四15才  
 雪丸〔武蔵江戸〕 保五12才  
 雪居〔尾張名古屋〕 保一39ウ  
 雪居〔近江〕 保四43ウ  
 雪橋 保四26ウ  
 雪湖〔安芸〕 保五32才  
 雪鴻〔能登七尾〕 政十一11才  
 雪香〔周防室津〕 保三39才  
 雪幸〔筑前〕 保四14ウ  
 雪江↓有隣  
 雪郷〔越後〕 保四41才  
 節斎〔加賀〕 保三24ウ  
 雪山〔近江高島〕 保四45ウ  
 節之〔播磨魚崎〕 政十一13ウ 保一25才  
 保三38才 保四9ウ 保五54ウ  
 雪薺〔丹後〕 保三34才

雪川〔山城淀〕 保四4ウ  
 雪筌〔行脚〕 保十一10才  
 雪鼠〔阿波白地〕 保一27ウ  
 雪村〔豊後日田〕 保十12ウ  
 保十一終1才  
 雪茶〔安芸〕 保五32才  
 雪頂〔安芸〕 保三38ウ  
 雪童〔丹波山本〕 保一22才  
 雪洞〔肥前五島〕 保四20才  
 雪瓢〔伊予〕 保四28才  
 雪風〔越後福岡〕 保五22才  
 雪満〔肥前大村〕 保一32ウ  
 雪笠〔肥後八代〕 保三46ウ  
 是来〔近江西湖〕 保十13才  
 僊衣〔僊衣〕〔越中魚津〕 保四39ウ  
 保五21才  
 仙羽〔陸奥会津〕 保一12才  
 蟬羽〔出雲松江〕 保五27ウ  
 千鳥〔美作ヒロト〕 保五31ウ  
 仙果〔越中和泉〕 保一20才  
 千鷺〔筑後久留米〕 政十一15ウ  
 保五36ウ  
 仙峨〔出雲松江〕 保五28ウ  
 扇海〔但馬〕 保三35ウ  
 千崖〔山城京〕 政十一24才  
 政十一25才 保一1ウ 保一4ウ  
 保一7ウ 保一39才 保三1才  
 保三28ウ 保三50才 保四21ウ  
 保四52才 保五51ウ  
 仙鶴〔肥後熊本〕 保一35才

蟾居〔伊予吉田〕 保一28ウ 保三41ウ  
 浅掲〔因幡〕 保一23ウ  
 仙景〔近江舟木〕 保三18才  
 扇月〔伊勢龜山〕 保五46ウ  
 蟬彦〔出雲松江〕 保五27ウ  
 先吾〔筑前〕 保五33才  
 仙骨〔武蔵江戸〕 保五12才 14ウ  
 蟬産〔出雲松江〕 保五27才  
 千山〔丹波須知〕 政十一12ウ  
 千之〔山城京〕 政十一2ウ  
 洗耳〔丹波〕 保四4才  
 芋丈〔千丈〕〔近江湖東町屋〕  
 政十一5才 保一10才 保三19ウ  
 保四42才 保五5ウ 保十10ウ  
 保十一6才 保十一26ウ  
 仙杖〔肥前平戸〕 保一33ウ  
 千丈〔肥前〕 保三45才  
 千丈〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 千尋〔播磨中尾〕 保一25ウ 保三38才  
 保十30ウ  
 千尋〔撰津浪花〕 保四29ウ  
 千雪〔山城〕 保十一2ウ  
 僊草〔山城京〕 政十一1才  
 千束〔越後福岡〕 保五22才  
 千町〔伊勢津女〕 保四30ウ 保五45ウ  
 仙腸〔山城〕 保十32ウ  
 仙斧〔肥後熊本〕 保四17才  
 仙風〔出羽秋田〕 政十一9ウ  
 川風〔下総野巢〕 保四35才  
 扇風〔相模江ノ島〕 保五11才

蟬袍〔出雲松江〕 保五27ウ  
 先鳴〔大和吉野〕 保五44ウ  
 千融〔近江西湖藁園〕 保十一25才  
 蟬羅〔出雲松江〕 保四8ウ 保五27ウ  
 蟬来〔出雲松江〕 保五27ウ  
 千嵐〔梅曉〕〔播磨〕 保十一22才  
 仙李〔近江八幡〕 政十一5才 保三20才  
 保四44才  
 仙里〔豊前猪膝〕 保一32才  
 泉齡〔伊予〕 保三41才  
 扇路〔加賀金沢〕 保一41才 保三24才  
 千輅〔武蔵江戸〕 保四33ウ  
 川鹿〔近江辻沢〕 保一9才

そ

双〔丹後〕 保三34才  
 叢〔信濃〕 保五19才  
 双鳥〔日向延岡〕 保一35ウ 保十14ウ  
 草鳥〔山城〕 保三4才 保三48ウ  
 保四49ウ 保五3ウ 保五50ウ  
 相塙〔備中都羅島〕 保十一6才  
 蒼館〔伯耆〕 保四7才  
 蒼虬〔山城京〕 政十一1才 政十一24才  
 政十一25才 保一1才 保一4ウ  
 保一39才 保三2ウ 保三7才  
 保三12ウ 保三15才 保三28ウ  
 保三50才 保四1才 保四30才  
 保四47ウ 保四52才 保四53ウ  
 保五序1ウ 保五1才 保五30ウ  
 保五51ウ 保十1才 保十25ウ  
 保十34才 保十一1才  
 保十一11才 保十一39ウ  
 巢旭〔肥前〕 保三46才  
 双鱼〔武蔵江戸〕 保一6才  
 曾魚〔加賀金沢〕 保四36ウ 保五23才  
 曾慶〔飛騨高山〕 保一11才  
 桑戸〔伊予大洲〕 保一29才 保三40ウ  
 保四28才  
 桑湖〔伊勢〕 保四31ウ  
 草斎〔山城〕 保四3才  
 草紫〔加賀〕 保三27才  
 壮贄〔武蔵江戸〕 保五11ウ 保十18才  
 桑室〔近江坂本〕 保十30才 保十一24ウ  
 滄洲〔尾張逆川〕 政十一7ウ  
 滄洲〔伊勢サイキ〕 保三9ウ  
 藻真〔筑前〕 保一30才  
 滄水〔常陸真瀬〕 政十一9ウ 保五18才  
 双水〔越中新川〕 保三31才  
 草佳〔薩摩加治木〕 保十9才  
 保十一8才  
 嗽石〔近江川島〕 保三18ウ 保四44ウ  
 保五4ウ  
 嗽石〔筑前〕 保四11才  
 嗽石〔播磨明石〕 保十6才  
 巢雪〔逸中〕〔若狭〕 保三23才  
 草々〔播磨渡瀬〕 政十一13ウ 保一25才  
 蒼々〔丹波梶原〕 保四5才  
 草台〔伯耆米子〕 政十一13才 保三36ウ  
 保四7才 保五27才

蒼蝶〔伊予大洲〕 保一29才  
 蒼頂〔伊予〕 保三41才  
 桑坡〔備中都羅島〕 保十一6才 41ウ  
 雙眉〔伊勢山田〕 政十一6ウ  
 双鳧〔近江土山〕 政十一5ウ  
 蒼阜〔石見矢上〕 保一25才  
 巢夫〔近江〕 保三17ウ  
 草父〔近江〕 保四45ウ  
 蒼風〔山城〕 保十26ウ  
 草方〔撰津伊丹〕 政十一19ウ 保一41ウ  
 保三6才 保五44ウ  
 曾夢〔播磨姫路〕 政十一14才 保一25ウ  
 保三37才 保四9ウ 保五29ウ  
 保十14ウ 保十一35才  
 草萊〔美濃大垣〕 保五8才  
 双六〔陸奥会津若松〕 保十一24ウ  
 桑和〔伊勢山田〕 政十一6才  
 岨雲〔越中吉久〕 保五21ウ  
 素雲〔豊前国東〕 保五39才  
 蔵六〔近江坂本〕 保十30才 保十一24ウ  
 蘇永〔豊前猪熊〕 保一32才  
 素海〔加賀〕 保四37才  
 素橋〔伊予今治〕 保一29ウ  
 素亭〔伊予宇和島〕 保三41才  
 素琴〔肥前大村〕 保一32ウ  
 素琴〔山城淀〕 保四47ウ  
 素玉〔山城京〕 保十3才 保十30ウ  
 素桂〔加賀〕 保三26才  
 素兄〔周防山口〕 保五32才

楚江〔播磨西江井〕 政十一14才  
 素岡〔肥前諫早〕 政十一16ウ 保一34才  
 保四18ウ  
 素考〔越後糸魚川〕 保一21ウ  
 素考〔上野飛駒〕 保四35ウ  
 祖郷〔山城京/武蔵江戸〕  
 政十一23ウ 保一2才 保一38ウ  
 保三49ウ 保四52才 保五2才  
 保五30ウ 保五51ウ 保十23才  
 保十一40才  
 素彩〔伊予大洲〕 保一28ウ  
 蘇山〔山城京〕 政十一23ウ 保一38ウ  
 保四51ウ 保五3才 保五51才  
 素山〔山城〕 保一38才 保三4ウ  
 楚蕉〔近江高島霜降〕 保一9才  
 保十一25ウ  
 素芯〔武蔵東都〕 政十一9才  
 保一7才 保三11ウ 保三28ウ  
 楚雀〔美濃神戸〕 保一39ウ  
 保三3才 保三20ウ  
 鼠雀〔筑前〕 保五34ウ  
 楚丈〔近江高島〕 保一9ウ  
 素丈〔肥前長崎〕 保十一9才  
 素水〔紀伊高野〕 保五45才  
 素瀬〔豊前小倉〕 保一31ウ  
 素石〔長門下関〕 政十一15才  
 鼠舌〔山城〕 保一36才  
 楚竹〔アヒカ〕 保四27才  
 素竹〔近江湖東町家〕 保十一26ウ  
 素椿〔肥後八代〕 保四16ウ

素亭〔伊予宇和島〕 保一28才 保四28才  
 保五42ウ  
 素汀〔尾張〕 保五8ウ  
 素洞〔加賀金沢〕 保三23ウ 保四1ウ  
 保四37ウ 保五23ウ 保十22ウ  
 榛堂↓朝陽  
 楚南〔下総〕 保十4才  
 素琶〔肥前大村〕 保四17才  
 素白〔近江八幡〕 保四43才 保五5ウ  
 保五53ウ  
 素梅〔丹後〕 保三34ウ  
 素萍〔筑前〕 保三41ウ 保五36ウ  
 素父〔加賀金沢〕 保十一35ウ  
 素風〔信濃飯田/上清内路〕 保一11才  
 保三20ウ 保五19才  
 素文〔加賀金沢〕 保一15ウ 保三24才  
 保十22ウ  
 粗文〔武蔵江戸〕 保五13ウ  
 素撲〔武蔵江戸〕 保五54ウ 保十18才  
 素明〔撰津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3才  
 素遊〔肥前〕 保四17ウ  
 素尤〔淡路佐野〕 保五43ウ  
 素友〔山城淀〕 保十32才 保十一31ウ  
 素羅〔撰津浪花〕 政十一21才  
 保一3才  
 素羅〔肥前神代〕 保三45才 保四19ウ  
 保十一28才  
 素来〔丹波成松〕 保十20ウ 保十一36ウ  
 素嵐〔信濃飯田〕 保五19才

素六〔但馬浜坂〕 保一23ウ 保四7才  
 素六〔行脚〕 保十一28ウ  
 素律〔近江彦根〕 政十一4ウ  
 蕪栗〔撰津浪花〕 保四29才  
 疎蓼〔加賀金沢〕 保三26才 保四38才  
 保五22ウ  
 素寥〔加賀金沢〕 保十一29才  
 素蓮〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 村雨〔豊前〕 保三44ウ  
 村丸〔下総神崎〕 保四34ウ  
 遜思〔因幡鳥取〕 政十一13才  
 村子〔播磨女〕 保三37ウ  
 村止〔山城〕 保十3才

た

岱雨〔備後福山〕 政十一14ウ  
 岱雲〔肥前長崎〕 保十8才 保十一10才  
 太乙〔撰津伊丹〕 政十一19ウ 保三6才  
 待我〔筑前福岡〕 保一30ウ  
 大郭〔若狭小浜〕 保三23才 保四54才  
 大鱈〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 苔経〔陸奥会津〕 保一11ウ  
 待月〔讃岐〕 保四24ウ  
 対山〔筑前小竹〕 保一31才 保四11ウ  
 大之〔山城淀〕 保四46ウ  
 太尔〔武蔵八幡山〕 政十一8ウ  
 太室〔近江八幡〕 保十序2ウ 保十19ウ  
 保十一27才  
 代醉〔筑前〕 保三42ウ

だい〜ちま

代翠〔筑前〕 保五35ウ  
 太素〔肥前大村〕 保四17ウ 保五38オ  
 保十一5オ  
 帯朝〔土佐〕 保十一22ウ  
 倍年〔山城／讃岐〕 政十一17オ  
 保五1ウ 保五52ウ 保十一1オ  
 保十26オ 保十一32オ  
 大梅〔武蔵江戸〕 保三11ウ 保四34オ  
 保五14オ 保十17オ 保十一33オ  
 大費〔陸奥福島〕 保五19オ  
 倍美〔山城京〕 政十一1ウ  
 政十一23オ 保一1ウ 保一37ウ  
 保三2オ 保三3ウ 保三48ウ  
 保四3オ 保四51オ 保五2オ  
 保五51オ 保十26ウ 保十一44オ  
 待必〔筑前〕 保五34オ  
 大瓢〔丹波篠山〕 保五25ウ  
 倍布〔加賀〕 保三23ウ  
 対布〔筑前〕 保十5オ  
 太甫〔加賀金沢〕 政十一12オ 保一12ウ  
 保一14ウ 保三25オ 保四36ウ  
 保五22ウ 保十15ウ 保十一35ウ  
 退歩〔摂津伊丹〕 保三6オ 保十8オ  
 保十一27ウ  
 大夢〔淡路鳥飼〕 保五43ウ  
 倍李〔山城京〕 政十一21ウ 保一1ウ  
 保一37ウ 保四3オ  
 太六〔備中笠岡〕 保一26オ 保十4ウ  
 待亮〔三河〕 保三11オ

太令〔近江八幡〕 保一10オ 保一42ウ  
 保三19ウ 保四43ウ 保五5オ  
 大路〔能登ニシキ川〕 保三29ウ  
 太老〔竹酔〕〔山城京〕 政十一22ウ  
 保四49ウ 保五序1ウ 保五2ウ  
 保五47オ 保五51オ 保十3オ  
 保十26ウ 保十一3オ 保十一38オ  
 大麓〔ミナト〕 保四27オ  
 たを女〔近江仁正寺〕 保五5ウ  
 駝岳〔日向〕 保十14ウ  
 棹江〔加賀金沢〕 政十一12オ 保一16オ  
 保三23ウ 保四36ウ 保五22ウ  
 保十16オ 保十一35ウ  
 啄之〔讃岐疋田〕 保四24オ 保五42オ  
 卓尔〔備中笠岡〕 保十一6ウ  
 卓丈〔山城〕 保十一2ウ 保十一37ウ  
 沢先〔駿河御厨〕 保五11オ  
 卓池〔三河岡崎〕 政十一7ウ 保一5ウ  
 保三10ウ 保四32ウ 保五9ウ  
 保十19オ 保十一34ウ  
 卓堂〔陸奥南部盛岡〕 政十一10オ  
 保一11ウ  
 託堂〔駿河〕 保五11オ  
 卓雄〔山城南溪社〕 保五49ウ  
 卓良〔武蔵江戸〕 保十17オ  
 卓郎〔武蔵江戸〕 保五13ウ  
 多希志〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 たつ女〔遠江〕 保十5オ 保十一23ウ  
 達夫〔五百衛〕〔肥前田代〕 保一40ウ  
 保三45ウ

たとり〔丹後〕 保四6ウ  
 駄観〔丹後観音寺〕 保三35ウ 保四6オ  
 民磨〔淡路〕 保四25オ  
 兌籟〔因幡鳥取〕 政十一13オ  
 淡斎〔山城〕 保五3ウ  
 探斎〔伊勢〕 保十20オ  
 丹志〔筑前〕 保五35オ  
 淡如〔播磨〕 保三50ウ  
 淡水〔若狭西津〕 保十一26オ  
 探草〔近江長浜〕 政十一4ウ  
 丹頂〔上野赤堀〕 保一11オ  
 淡亭〔備中笠岡〕 保十4ウ 保十一19オ  
 丹嶺〔加賀大聖寺〕 政十一11ウ  
 保一17オ 保三27ウ 保四38ウ  
 保五24オ 保十一34ウ  
 湛路〔山城〕 政十一2ウ  
 楠谷〔讃岐戸村〕 保五41ウ  
 团积〔伊勢津〕 政十一5ウ 保一41ウ  
 保三9オ 保四30オ 保五45ウ  
 楠圃〔尾張〕 保三50ウ

ち

千賀雄〔山城京〕 政十一22オ  
 ちかき〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 ちから〔越後水沢〕 保五20オ  
 ちから〔越後三日市〕 保十一終1ウ  
 竹雨〔能登七尾〕 保五25オ  
 竹雨〔肥前長崎〕 保十一9オ  
 竹塙〔能登七尾〕 政十一11ウ 保一17ウ  
 保三30オ 保四39オ  
 竹鴉〔越中滑川〕 保四39ウ  
 竹瓦〔丹波篠山〕 保五25オ  
 竹外〔駿河御厨〕 保五11オ  
 竹外〔武蔵江戸〕 保五12オ 15オ  
 竹外〔伊勢津〕 保五46ウ  
 竹景〔近江堅田〕 保四26オ  
 竹逕〔播磨比延〕 保五29オ  
 竹言 保四26オ  
 竹公〔丹後〕 保三34ウ  
 竹子〔若狭西津〕 保四41オ  
 竹舍〔筑前〕 保三43オ  
 竹醉↓太老  
 竹薺〔筑前〕 保四11オ  
 竹世〔出雲〕 保五28ウ  
 竹叟〔山城〕 保十一3オ  
 竹堂〔摂津〕 保四28ウ  
 竹芭〔日向〕 保十一8オ  
 竹甫〔武蔵江戸〕 保五13ウ  
 竹雄〔加賀〕 保三25ウ  
 竹遊〔越中〕 保四39ウ  
 竹裏〔但馬〕 保三36オ  
 竹里〔遠江片瀬〕 保五10オ 保十4ウ  
 保十一23ウ  
 竹老〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 智水〔肥前〕 保四19オ  
 知雪〔加賀〕 保一13オ 保三24ウ  
 保四37ウ  
 知足〔丹波福住〕 保三33オ 保四3ウ

ちそ〜でん

秩草〔山城淀〕 保四46才  
 遅桃〔筑前〕 保四16才  
 遅梅〔筑前ケントウ〕 保一31才  
 茶烟〔日向都城〕 保五40才  
 茶三〔陸奥会津坂下〕 保五19ウ  
 保一129才 保一139ウ  
 茶城〔淡路竹谷〕 保四27ウ  
 茶静〔武蔵江戸〕 保三12才  
 茶栖〔伊勢〕 保四52ウ  
 茶窓〔出雲打江〕 保一128才  
 茶田〔周水〕〔播磨姫路〕 保一25ウ  
 保三37才  
 茶笠〔淡路柳沢〕 保四27才  
 茶隣〔伊予小松〕 保五42才 保一7才  
 仲秀〔山城〕 政一11ウ 保一36才  
 虫二〔薩摩加治木〕 保一9才  
 保一18才  
 葛雨〔近江坂本〕 保三17才 保四41ウ  
 保一1才 保一29ウ 保一34才  
 聴雨〔筑前〕 保四12ウ  
 保一1才 保一14才  
 潮花〔伊勢山田〕 保一5才 保三10才  
 保四53才 保五45ウ  
 丁癸〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
 葛居〔在尾張名古屋〕 保一5ウ  
 澄月〔美作津山〕 政一13ウ 保一25ウ  
 釣湖〔近江〕 保三17ウ  
 兆三〔山城〕 政一12才 政一22才  
 保一2才 保一37ウ 保三3才  
 龍山〔近江野田〕 保一8ウ

葛山〔筑前〕 保一6才  
 鳥周〔安房〕 保五17ウ  
 蝶章〔但馬〕 保四6ウ  
 蝶二〔播磨〕 保一15才  
 超翠〔加賀金沢〕 保一12ウ 保一15才  
 保三26才 保四37才 保五23才  
 保一16才  
 長成〔山城〕 政一23ウ  
 長成〔武蔵江戸〕 保一7才  
 丁知〔武蔵江戸〕 保一6ウ 保三11ウ  
 保五12才 保一21才 保一38ウ  
 蝶弟〔淡路須本〕 保五43才  
 鳥年〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 長瓢〔周防山口〕 保五32才  
 丁斧〔越中福町〕 保一20ウ  
 調風〔阿波徳島〕 保一28ウ  
 丁酉〔陸奥〕 保四36才  
 朝陽〔榛堂〕〔山城〕 政一11才  
 政一23ウ 政一25才  
 保一2ウ 保一39才 保三1才  
 保三4才 保三13才 保三15才  
 保三49ウ 保四2才 保四48才  
 保四52才 保五3才 保五51ウ  
 保一1才 保一11才 保一27ウ  
 保一33ウ 保一34才 保一11才  
 保一11才 保一19ウ  
 保一29ウ 保一42ウ  
 保一45才 保一45ウ  
 朝来〔豊後日田〕 保五39ウ  
 樗雲〔筑後本郷〕 保四16ウ 保五37才

直水〔淡路中村〕 保四25ウ  
 樗山〔肥前大村〕 保四17ウ 保一5ウ  
 樗秀〔淡路〕 保一27ウ  
 猪洲〔出雲〕 保四8ウ  
 樗叟〔陸奥〕 保三22才  
 猪道〔筑前〕 保五33才  
 樗堂〔山城京〕 保一1ウ 保一32ウ  
 保一1ウ 保一44才  
 樗風〔伊予小松〕 保五42才  
 猪来〔伊賀〕 保五47才  
 稚龍〔能登出村〕 保三29才  
 遅柳〔筑前〕 保三43ウ 保四11ウ  
 保五33才  
 遅流〔武蔵江戸〕 保一18ウ  
 珍蛙〔楓里〕〔丹波成松〕 保一21才  
 保一36ウ  
 枕江〔撰津浪花〕 保一9ウ  
 保一27ウ  
 椿谷〔讃岐馬宿〕 保五42才  
 椿才〔越中〕 保四39ウ  
 椿台〔伯耆〕 保四7才  
 つ  
 稚巳〔伊勢松坂〕 保四52ウ  
 稚山〔若狭〕 保三23才 保四54才  
 都岐雄〔近江西湖〕 保一22才  
 都岐雄〔葭橋〕〔伊勢四日市〕 保一20才  
 保一31才  
 常曆〔三河吉田〕 政一8才

て  
 鼎左〔撰津浪花〕 保四29才 保五44才  
 保一22ウ 保一31ウ  
 貞齋〔下総〕 保一4才  
 貞章〔能登七尾〕 保四39才  
 汀洲〔筑前〕 保四11才  
 貞女〔てい女〕〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
 保五11ウ  
 萩田〔山城〕 保一44ウ  
 鉄舟〔筑後アリ〕 保五37才  
 恬齋〔山城〕 政一2才  
 天美〔陸奥会津上林〕 保一29ウ  
 天由〔武蔵玉川〕 政一8ウ  
 天遊 保一40才  
 沾浪〔伯耆米子〕 保五27才 保一23才  
 伝〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 田影〔安芸広島〕 政一14ウ 保三38ウ  
 保五31ウ  
 田鴻〔加賀〕 保四38才  
 田子〔尾張名古屋〕 保三50才  
 田日〔伊勢〕 保四30ウ  
 田城〔丹波篠山〕 保一22ウ 保三33ウ  
 保五25才  
 田波〔伊予新谷〕 保一29ウ  
 田美〔近江音羽〕 政一4ウ 保一1才  
 保一8ウ 保三1ウ 保三18才  
 保四45ウ 保五3ウ

と

桃隠〔播磨〕 保十五才  
 桐雨〔下総佐原〕 政十一 9ウ 保一 42ウ  
 保三 12ウ 保四 34才 保五 17ウ  
 桐雨〔丹波福住〕 保四 3ウ  
 塘雨〔備後鞆〕 保一 26ウ  
 東鳥〔出雲大塚〕 保四 8才  
 桃右〔肥前大村〕 保十一 5才  
 保十一 18才  
 棠雨〔肥前諫早〕 政十一 16ウ 保一 34ウ  
 保四 18ウ  
 吐雲〔筑後本郷〕 保五 37才 保五 53才  
 保十一 41才  
 桃園〔加賀〕 保三 27才  
 桃園〔山城〕 保十二 2ウ 保十三 33才  
 保十一 2ウ 保十一 44ウ  
 桃塙〔出雲〕 保十 16ウ  
 桃屋〔近江〕 保三 18ウ  
 桃下〔筑前〕 保三 42才  
 桃夏〔加賀〕 保四 38ウ  
 塘芽〔丹後〕 保四 5才  
 稻海〔河内〕 保十一 37ウ  
 董厓〔土佐〕 保五 42ウ  
 東鶴〔筑後久留米〕 保十一 4才  
 兜岳〔筑後久留米〕 保十 10才  
 桃磯〔桃磯〕〔武蔵江戸〕 保一 6才  
 保五 11ウ  
 桐寄〔近江女〕 保三 19ウ

冬岐〔摂津三田〕 保十三才 保十一 3才  
 保十一 27才  
 冬蟻〔筑前〕 保四 14ウ  
 東菊〔丹後〕 保四 6才  
 東邸〔越中滑川〕 保十 19才 保十一 10才  
 稻居〔三河〕 保三 11才 保四 32ウ  
 簗居〔安芸〕 保四 10ウ  
 棠居〔筑前〕 保四 14才  
 東居〔伊勢〕 保四 32才  
 東畦〔加賀大聖寺〕 保一 16ウ  
 桃蹊〔加賀小松〕 保三 27才  
 桃月〔播磨比延〕 保三 37ウ  
 董湖〔下野栃木〕 保五 18ウ  
 韜光〔信濃蓼原〕 政十一 10ウ  
 桃紅〔豊後日田〕 保一 32才  
 冬耕〔肥前神代〕 保三 45才 保四 19ウ  
 棠功〔武蔵羽生〕 保五 17才  
 東耕〔備後尾道〕 保五 30才  
 桃谷〔近江八幡〕 保三 19ウ 保四 42才  
 保五 53ウ 保十 14才 保十一 27才  
 陶斎〔紀伊田辺〕 政十一 19才  
 東山〔近江八幡〕 保五 54才  
 東指〔対馬〕 保一 36才 保三 47才  
 保四 20ウ  
 桃之〔丹後〕 保三 34才 保四 6才  
 刀自売〔若狭西津〕 保十一 26才  
 冬秀〔能登二ノ宮〕 保三 30才  
 蕩州〔伊賀〕 保五 55才  
 陶寿〔笹竹〕〔播磨明石〕 保十 6才  
 東翠〔丹後〕 保三 35才

桃水〔沓岐〕 保一 35ウ 保三 47才  
 漆水〔摂津〕 保三 7才 保四 28ウ  
 桃翠〔筑前〕 保四 14才  
 東川〔越中和泉〕 保一 20才 保三 31才  
 保四 40才  
 嗒然〔塔然〕〔筑前秋月〕 政十一 15才  
 保一 30ウ 保三 44才 保四 16ウ  
 東蒼〔近江大津〕 政十一 3ウ 保四 41ウ  
 東草〔遠江イマキリ〕 保五 10ウ  
 桃鳥〔尾張〕 保五 9才  
 東堤〔加賀〕 保三 25才  
 東桃〔加賀〕 保三 27ウ  
 涛堂〔肥前〕 保三 45才 保四 19ウ  
 桐堂〔武蔵江戸〕 保十 17ウ  
 桃園〔伊勢〕 保四 31ウ  
 東溟〔出雲〕 保十 16ウ 保十一 39ウ  
 冬也〔丹波〕 保十 20ウ  
 東有〔飛騨高山〕 政十一 10才  
 桃由〔越中今石動〕 保一 20ウ  
 桃陽〔伊予住吉〕 政十一 17ウ  
 桃幼〔能登宇出津／七尾〕 保一 41才  
 保四 38ウ 保五 24ウ  
 冬映〔武蔵江戸〕 保十一 25才  
 登里〔山城〕 政十一 2才  
 登鯉〔日向都城〕 政十一 17才  
 東籬〔能登七尾〕 保一 18才  
 東六〔肥前〕 保三 45ウ  
 洞居〔近江江頭〕 保五 5ウ  
 洞睡〔山城〕 保一 38才  
 道沖〔山城〕 保三 4ウ

道等〔甲斐〕 保五 53才  
 道僕〔山城〕 保十二 2ウ 保十三 32ウ  
 保十一 1ウ 保十一 44才  
 道雄〔下野栃木〕 政十一 9ウ  
 道雄〔但馬轟〕 保三 36ウ  
 道雄〔近江八幡〕 保五 54才  
 道雄〔志摩イサハ〕 政十一 7ウ  
 兔園〔越中福町〕 保一 20ウ  
 兔角〔相模〕 保十一 24才  
 兔丸〔武蔵江戸〕 保一 6才  
 都牛〔大和〕 保三 47ウ  
 杜業 保四 27ウ  
 兔玉〔武蔵江戸〕 保五 13才  
 得之〔丹波成松〕 保十 21才 保十一 38才  
 篤治〔加賀〕 保四 36ウ  
 德順〔筑前女〕 保四 12才  
 篤風〔出雲〕 保四 8才  
 得蕪〔武蔵江戸〕 保一 43才 保三 12才  
 保四 33ウ 保五 12ウ 保十 18才  
 保十一 38ウ  
 吐月〔薩摩カセタ〕 保四 20ウ  
 斗行〔近江堅田〕 政十一 4才 保三 17ウ  
 杜厚〔豊後杵築〕 保一 41才  
 杜臯〔越後与板〕 保五 20才  
 渡江〔越中戸出〕 保五 21才  
 兔郷〔加賀〕 保四 36ウ  
 斗斎〔安芸広島〕 保三 38ウ  
 兔斎〔山城淀〕 保四 46ウ  
 杜山〔武蔵江戸〕 保四 33才  
 とし保〔丹後田辺〕 保五 26才

兔秋〔丹波古佐〕 保一22ウ 保三33ウ  
杜鷲〔山城〕 保三1才 保三4才

保三49ウ 保四51才 保五1ウ  
保五51才 保十3才 保十27才  
保十一1ウ 保十一32才

斗丈〔筑前福岡〕 政十一15ウ 保一30才  
保三1ウ 保三44才 保四16ウ  
保五32ウ 保十一21才

土之〔摂津浪花〕 保19才  
杜雪〔丹後田辺〕 保一23才

吐屑〔摂津浪花〕 保四29ウ 保五44才  
吐屑〔陸奥南部〕 保五19ウ

とせ女〔山城〕 保一38ウ 保三4才  
保三49才 保四3才

兎仙〔武蔵江戸〕 保一6才  
兎川〔筑前〕 保四15ウ 保五36才 保十5ウ

渡川〔筑前〕 保四16才  
茶腸〔丹波馬路〕 保三33才

土鳥〔山城〕 保一2才 保一39才  
斗南〔陸奥会津坂下〕 保五19ウ  
保十一29ウ

杜麦〔讃岐疋田〕 保五42才  
吐鳳〔対馬〕 保四20ウ

とみ女〔伯耆今津邑〕 保三36ウ  
保四7才 保五27才

斗圍〔下総馬橋〕 保一43才 保三12ウ  
保四34ウ

十代丸〔山城〕 保十一44ウ  
杜菜〔山城〕 保一36ウ

杜来〔淡路ヤナカ〕 保四27ウ 保五43ウ  
とし〜ばい

杜蓼〔山城京〕 政十一1才 政十一23ウ

保一1才 保一37ウ 保三1ウ  
保三3ウ 保三49ウ 保四1ウ

保四51才 保五1才 保五51才  
保十一1ウ 保十26ウ 保十一1才  
保十一38才

都蓼〔肥前田代〕 保一40ウ 保三45ウ  
沌々〔淡路津井〕 保四27ウ

嫩緑〔備中〕 保十一6才

### な

名栄美〔讃岐〕 保四24ウ  
なり女〔豊後日田石井〕 保五39ウ

南音 保四27才  
南岨〔近江〕 保三2ウ 保三20ウ

南峨〔行脚〕 保四8ウ  
南峨〔出雲〕 保五28ウ

南涯〔尾張逆川〕 政十一7ウ  
南涯〔丹波龜山〕 保十26才 保十一40ウ

南丸〔日向本庄〕 保三46ウ 保四20ウ  
保五40ウ

南弓〔美濃平尾〕 保五8ウ  
南居〔近江西湖〕 保五52ウ

南喬〔摂津〕 保三7才  
南溪〔山城〕 保一42ウ 保三2才

保三3ウ 保三48ウ 保四1才  
保四47ウ 保四49ウ 保五1才

保五49ウ 保十27才 保十一2才  
保十一39ウ

南溪〔下総松戸〕 保五17ウ

南高〔筑前〕 保一30才  
南岡〔伊勢〕 保四30ウ

南之〔讃岐宇多津〕 政十一18才  
南枝〔筑前〕 保四12才

南室〔筑前〕 保四12才  
南礎〔筑前博多〕 政十一15才 保一31才

保三43才 保四12才  
南調〔近江大津〕 政十一3ウ

南涛〔武蔵江戸〕 保四33ウ  
喃々〔肥後熊本〕 保一35才

南年〔越中滑川〕 保十一10ウ  
南飛虎〔近江湖東〕 保一43ウ

南鳳〔紀伊若山〕 政十一19才  
南畝〔三河東浦〕 保一5ウ 保三11才

保四32才  
南茂〔近江仁正寺〕 保五5ウ

南溟〔播磨〕 保三50ウ  
南明〔近江西湖〕 保五52ウ

ね

年緒〔加賀金沢〕 保一14ウ  
年風〔加賀金沢〕 政十一12才 保一15才

保三23ウ 保十22ウ 保十一35ウ

の

のぶ女〔武蔵江戸〕 保一6ウ  
保五11ウ

### は

配昇〔土佐〕 保十一22ウ  
梅庵〔丹波保津〕 保一41ウ 保三33才

梅逸〔肥前諫早〕 保四18ウ 保五38ウ  
梅一〔山城〕 保五51才

梅園〔伊勢山田〕 政十一7才  
梅塙〔伊勢〕 保四31才

梅鳥〔筑前〕 保五33ウ  
梅翁〔美濃大垣〕 保三20ウ 保五8才

梅乙〔肥前諫早〕 保四18ウ 保五38ウ  
梅價〔山城〕 保一36ウ 保三1ウ

保三4ウ 保三49ウ 保四2才  
保四51ウ 保五1ウ 保五50ウ

保十二才 保十26才 保十一1ウ  
保十一32才

梅花〔讃岐女〕 保四24才  
梅峨〔伊勢相可〕 保三9ウ

梅雅〔美濃且島〕 保十一3才  
保十一41ウ

梅岳〔三河〕 保三11才 保四32ウ  
梅間〔尾張名古屋〕 保一5ウ

梅曦〔伊勢津〕 保十4才 保十一28才  
梅筈〔能登〕 保十一7才

梅旭〔伊賀〕 保五55才  
梅溪〔近江ヲホミ〕 政十一18才

梅古〔河内守口〕 保三47ウ 保四29ウ  
梅光〔筑前〕 保一30才

ばい〜ばく

梅左〔肥前大村〕 保一32ウ 保四17ウ	梅朝〔筑前〕 保十5才	梅老〔榎老〕〔三河東浦〕 政十一8才	白水〔丹後田辺〕 保三34才 保四5ウ
梅左〔日向本庄〕 保五40ウ 保十一8ウ	梅通〔山城〕 政十一1ウ 保一1才	梅角〔山城京〕 保四1ウ 保四50ウ	白水〔山城淀〕 保十32才
梅三〔近江〕 保三20才 保四43ウ	保一2ウ 保一37ウ 保三1才	保五2ウ 保五50才	柏翠〔筑前〕 保三42才 保四15才
梅子〔阿波白地〕 保一27ウ	保三48才 保四1才 保四47ウ	馬槿〔筑前〕 保四16才	保五35ウ 保十5才
梅士〔肥後熊本〕 保一34ウ	保四49才 保五1ウ 保五50ウ	馬槿〔伊予柏〕 保十一終2ウ	白扇〔肥後在京〕 保三46ウ 保四50ウ
梅士〔肥前〕 保四19ウ	保十二才 保十26ウ 保十一1才	馬琴〔日向都城〕 保五40才	白朶〔近江〕 保三20才 保四43才
梅枝〔近江湖東〕 保十10ウ	保十一39ウ	白羽〔出雲完道〕 保四8ウ	白兔〔信濃六川〕 保一11才
梅枝〔備前西大寺〕 保十一27ウ	梅亭〔近江〕 保三19才	白燕〔丹波黒井〕 保十三ウ 保十一2才	柏年〔伊予大洲〕 保一29才 保三40ウ
梅二〔陸奥会津若松〕 保十一24ウ	梅堂〔淡路郡下／西川〕 保四27ウ	保十一35才	白甫〔武蔵越ヶ谷〕 保五16ウ
梅室〔武蔵／山城〕 保四34才	保五43ウ	白葵〔加賀大聖寺〕 保一16ウ	白梁〔伊勢〕 保三9ウ
保五14ウ 保十22ウ 保十一3ウ	梅南〔志摩鳥羽〕 保十31ウ	白亀〔肥前諫早〕 保一34才	白麟〔備後福山〕 保一26才
保十一37ウ	保十一2才 保十一終2ウ	白起〔武蔵江戸〕 保五11ウ	白令〔加賀大聖寺〕 保一16ウ 保三28才
梅舎〔山城〕 保三49才	梅々〔加賀〕 保四38才	柏奚〔加賀金沢〕 保一15ウ	栢浪〔越中福野〕 保一19才
梅守〔阿波〕 保三39ウ 保四21才	楳扉〔近江〕 保四45才	白桂〔武蔵江戸〕 保十18才	麦雨〔武蔵江戸〕 保一6才
梅舟〔杵岐勝本〕 保一36才 保三47才	梅父〔近江西湖太田〕 保十一25ウ	白乎〔越後糸魚川〕 保一21ウ	麦映〔筑後久留米〕 保十一4才
保四21才	梅圃〔撰津浪花〕 政十一21才	白砂〔白沙〕〔丹後〕 保三35ウ	麦菜〔山城京〕 保五54才
梅洲〔撰津〕 保三6ウ	保一3ウ	保四6才	麦車〔越中高岡〕 政十一11才 保一18ウ
梅十〔加賀金沢〕 保一15ウ	梅甫〔越中今石動〕 保一20才	白哉〔近江八幡〕 保一9ウ 保三20才	保三31才
梅粧〔筑前〕 保五35ウ	梅峰〔武蔵江戸〕 保五12才	保四43ウ	麦村〔伊勢津〕 政十一6才 保一41ウ
梅人〔越中吉久〕 保五21才	梅明〔能登七尾〕 保一18才 保三28ウ	伯芝〔越中福野〕 政十一11才 保一19才	保三9才
梅井〔近江八幡〕 保四43才 保五53ウ	保五52ウ	白試〔因幡鳥取〕 政十一13才	麦村〔近江西湖太田〕 保一8ウ
梅石〔山城〕 保十16ウ 保十一2ウ	梅雄〔伊賀〕 保五55才	白絲〔山城女〕 政十一22才 保一36ウ	保四45才 保五4ウ 保十21ウ
保十一40ウ	梅裡〔伊勢津〕 保五46才	白史〔山城女〕 政三29ウ	保十一25ウ
梅雪〔能登カサシ〕 保三29才	梅裡〔尾張〕 保三10才 保五8ウ	白司〔近江五十川〕 保四46才 保五4才	莫囷〔筑前大宰府〕 政十一15才
梅双〔阿波サコ〕 保一43ウ 保五41才	梅里〔肥前長崎〕 保十一9才	白二〔加賀金沢〕 政十一12才 保一41才	莫父丸〔武蔵江戸〕 保十一33ウ
梅窓〔山城京〕 保四2才 保四50才	保十一44ウ	保三24才	麦雄〔山城〕 保三48ウ
梅巢〔武蔵江戸〕 保十一33ウ	梅笠〔讚岐丸亀〕 政十一17才	白二〔越中吉久〕 保五21才	麦洋〔近江高島大溝〕 政十一4ウ
梅調〔肥前田代曙庵〕 政十一16才	梅笠〔山城〕 保一38才 保五49ウ	白尔〔安芸〕 保三38ウ	保一8才 保三1才 保四2ウ
保一40ウ 保三46ウ 保五37才	梅嶺〔能登川尻〕 保三29才	白樹〔加賀金沢〕 保四37才 保五23才	保五6才 保十16ウ 保十一40ウ

ぼく〜ふう

麦浪〔山城〕 保十一ウ 保十三才  
 保十一3才 保十一45才  
 馬塙〔薩摩〕 保十九才 保十一7才  
 巴山〔豊前〕 保三44才  
 はじめ〔丹後宮津〕 保五26ウ  
 馬丈〔加賀〕 保三24才  
 巴石〔摂津浪花〕 保一3ウ  
 破窓〔加賀〕 保三26才  
 八朶〔武蔵江戸〕 保一43才 保三12才  
 八木〔下総水海道〕 保一7才  
 馬朝〔山城〕 保十三才 保十一3才  
 保十一44才  
 馬亭〔陸奥〕 保三21ウ  
 馬得〔出雲〕 保十一23才  
 巴南〔肥前大村〕 保五38才 保十一5ウ  
 波文〔三河〕 保三11才 保四32ウ  
 保五9ウ  
 巴木〔能登八幡〕 保一18ウ  
 巴遊〔若狭〕 保三23才  
 巴明〔駿河〕 保五11才  
 馬友〔山城京〕 保四2ウ 保四50ウ  
 保五2才 保五50才  
 馬六〔薩摩加治木〕 保十一8才  
 馬良〔丹後宮津〕 政十一12ウ 保一23才  
 保四5ウ  
 はる岑〔春岑／春躬／春峰〕〔近江大津／  
 近江八幡〕 政十一3ウ 保一9ウ  
 保一42才 保三17才 保五37ウ  
 保十14才  
 半戈〔越中福野〕 政十一2ウ 保一19才

反化〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 泛湖〔肥前〕 保四19ウ  
 半江〔能登七尾〕 保一17ウ 保四39才  
 保五24ウ  
 半谷〔淡路〕 保十12ウ 保十一39才  
 半山〔丹波〕 保三33才  
 班鼻〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 保三21ウ  
 帆富〔陸奥田名部〕 保三21才  
 半来〔近江〕 保三17ウ  
 半両〔陸奥朝香笹川〕 保十一37才  
 繁緑〔備中都羅島〕 保十一6才  
 班和〔陸奥盛岡五戸〕 保一40才  
 万雅〔摂津〕 保三6ウ 保四29才  
 万丸〔石見矢上〕 保一25才  
 伴橘〔山城〕 保四2ウ 保四50ウ  
 保五1ウ 保五50才  
 万久〔武蔵江戸〕 保五14才  
 万頃〔武蔵江戸〕 保一43才 保三12才  
 保四33ウ 保十21ウ  
 伴慶〔丹後〕 保四6才  
 万月〔近江田中江〕 保四44才  
 万丈〔山城〕 保四1ウ 保四49ウ  
 万拙〔陸奥会津〕 保一11ウ  
 万素〔筑前吉木〕 政十一15才  
 万像〔阿波〕 保五41才 保十22才  
 万頂〔武蔵江戸〕 保十一40才  
 万堂〔丹波水上〕 保四4才  
 万年〔尾張〕 保三50才  
 万年〔肥前〕 保四18才

万年人〔遠江横須賀〕 保五10ウ  
 万籟〔丹後宮津／京〕 政十一12ウ  
 保一23才 保三34ウ 保四1才  
 保四47ウ 保四52才 保五51ウ  
 万里〔飛騨高山〕 保一11才  
 万里〔越後見附〕 保一40ウ 保三31ウ  
 保四40ウ  
 万里〔若狭西津〕 保三23才  
 ひ  
 眉英〔出雲〕 保四8才  
 美煙〔山城淀〕 保十32才  
 未化〔武蔵八幡山〕 政十一8ウ  
 眉岳〔摂津浪花〕 保三5ウ 保四29才  
 保五44才  
 比古〔下総津ノ宮〕 保三12ウ 保四34才  
 日佐世〔ひさ世〕〔伊勢津〕 保四54ウ  
 保五46才  
 尾山〔石見鳥越〕 政十一13才  
 眉山〔摂津浪花〕 保十9ウ  
 保十一35才  
 眉山〔肥前大村〕 保十一5ウ  
 保十一16ウ  
 弥寿〔山城〕 保十二ウ 保十33ウ  
 美水〔近江湖東〕 保十10ウ  
 保十一6才  
 ひな女〔筑前〕 保五34ウ  
 渭南〔近江江頭〕 保四44才 保五5ウ  
 美風〔肥前〕 保四19才

一三三〔筑前〕 保四16才  
 飛木〔飛水〕〔筑前〕 保四13ウ  
 保十一21ウ  
 百可〔丹波篠山〕 保十一35才  
 百古〔周防山口〕 保五32才  
 百枝女〔肥前〕 保三46才  
 百尺〔摂津〕 保三6ウ  
 百酒〔近江〕 保四43ウ  
 百尔〔越中滑川〕 保一19ウ  
 百泉〔讃岐観音寺〕 保四23ウ  
 百仙〔山城〕 保十一ウ 保十33才  
 保十一44ウ  
 百池〔山城〕 保一36ウ 保三2ウ  
 保三3ウ 保三48才 保四1ウ  
 保四51ウ 保五2ウ  
 俵瓜〔丹波須知〕 政十一12ウ  
 政十一25才 保一22ウ 保三33才  
 保四3ウ 保五25ウ  
 水佳〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 水角〔三河〕 保三11才  
 水狐〔武蔵江戸〕 保十21ウ  
 水谷〔武蔵江戸〕 保十18才  
 保十一33才  
 水谷〔近江太田〕 保十一36ウ  
 浜吉〔武蔵葛西少年〕 保三51才  
 保四34才  
 ふ  
 風阿〔周防山口〕 保四10ウ 保五3才

楓下〔近江信楽〕 保一42ウ 保三1ウ  
 保四15才 保五5才 保十13才  
 保十一31才  
 風外〔近江西湖〕 保13ウ  
 楓関〔山城京〕 保四51ウ  
 風戸〔加賀〕 保三24ウ  
 富子〔淡路松尾〕 保五44才  
 風実〔常陸筑波〕 保四35才  
 風所〔風処〕〔丹波篠山〕 保三33ウ  
 保四4才 保十一36才  
 風水〔若狭〕 保五25才  
 富草〔淡路〕 保十13才  
 風竹〔加賀〕 保四38才  
 楓里↓珍蛙  
 蕪園〔筑前〕 保一30才 保三43ウ  
 保四11才 保五33ウ  
 不凹〔丹波須知〕 政十一12ウ  
 無隔〔近江大津〕 政十一3ウ  
 無角〔丹後〕 保三34ウ  
 武貫〔尾張名古屋〕 政十一7ウ  
 布董〔近江仁正寺〕 保五5ウ  
 蕪九〔伊予大洲〕 保一28ウ 保三40ウ  
 福米〔摂津浪花〕 保三5ウ  
 不言〔越中〕 保十一24才  
 布国〔備前〕 保十22才  
 賦三〔下野栃木〕 保五18ウ  
 不山〔筑前黒崎〕 保一30ウ  
 不秋〔播磨〕 保十15才  
 不捨〔近江湖東町家〕 保十一26ウ  
 不十〔遠江浜松〕 政十一2ウ 政十一8才

撫松〔肥前〕 保四20才  
 武日〔信濃善光寺〕 保三20ウ  
 蕪城〔近江〕 保三17ウ 保四44ウ  
 蕪城〔筑前〕 保十6才  
 舞杖〔加賀〕 保三23ウ  
 不醉〔丹波成松〕 保十20ウ 保十一36才  
 浮席〔山城京〕 保四51才  
 布泉〔伊勢〕 保四52ウ  
 普泉〔能登〕 保十一7才  
 不染〔山城〕 保十一39ウ  
 舞雪〔近江日爪〕 保五4ウ 保十一23ウ  
 不調〔山城〕 保一37才  
 物外〔伊豆網代〕 保四33才  
 不転〔尾張〕 保十18ウ  
 普品〔伊勢松坂〕 政十一6才 保四30ウ  
 不朴〔安芸〕 保三38ウ  
 負米〔近江金堂〕 保一10才  
 釜鳴〔山城京〕 保十二才 保十三2ウ  
 布蘭〔播磨姫路〕 保三37才 保四10才  
 保五29ウ  
 武陵〔丹波大山〕 保一22ウ 保三33ウ  
 保四3ウ 保五25ウ  
 蕪良〔丹後〕 保三34ウ  
 分尾〔上野夕カ〕 保三21才 保五18才  
 分来〔伊勢〕 保五52ウ  
 文衣〔安芸〕 保四10ウ 保五32才  
 文鶯〔タナカ〕 保四26才  
 文鶯〔豊後日田〕 保五40才  
 文外〔伊勢山田〕 政十一6ウ 保一4ウ  
 保一5才 保四31才 保五54ウ

文鶴〔越後糸魚川〕 保一21ウ  
 文亀〔肥前唐津〕 保五37ウ  
 文鬼〔越後三日市〕 保十一終1ウ  
 文喬〔陸奥盛岡五戸南部〕 保一40才  
 保三22才 保四35ウ 保五19ウ  
 文月〔筑後久留米〕 保十10ウ  
 保十一41才  
 文耕〔老岐〕 保一35ウ 保三47才  
 文郷〔播磨三木〕 政十一13ウ 保四9ウ  
 文骨〔陸奥二本松〕 政十一10才  
 保一11ウ 保三22ウ 保五54ウ  
 文沙〔播磨魚崎〕 保三51才  
 文之〔丹後宮津〕 保四5才 保五26ウ  
 文似〔肥前〕 保四19才  
 文似〔淡路筒井〕 保四26才  
 文洲〔肥前諫早〕 政十一16ウ 保一34才  
 文昇〔伊予宇和島〕 保一28才  
 文水〔日向本庄〕 保五40ウ  
 文藻〔下野真岡〕 政十一9ウ  
 文章〔加賀金沢〕 保一12ウ 保一14ウ  
 保三26ウ 保四36ウ 保五23才  
 文帛〔紀伊田辺〕 保一27才  
 文帯〔越後三日市〕 保十一終1ウ  
 文虫〔淡路須本〕 保五43才  
 文甫〔越中〕 保四39ウ  
 文雄〔筑前〕 保三42才  
 文遊〔出雲〕 保十16ウ  
 文葉〔近江〕 保三17ウ 保四44ウ  
 文羅〔出雲松江〕 保五27才  
 文里〔筑前〕 保一30才

文里〔越後福岡〕 保五22才  
 文嶺〔近江〕 保四45ウ  
 文路〔安芸〕 保三38ウ  
 文老〔文枝〕〔筑後久留米〕 保三44才  
 保五37才  
 文和〔越中滑川〕 保四40才 保五21才  
 蚊和〔越中滑川〕 保十一10才  
 へ  
 柄花〔山城京〕 政十一23才  
 瓶山〔山城〕 保五3才 保五50才  
 平山〔下野栃木〕 保五18ウ 保十一40ウ  
 平山〔山城〕 保十17才  
 平二〔武蔵八幡山〕 政十一8ウ  
 平出〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 並翠〔近江南一〕 政十一4ウ 保一8ウ  
 平沖〔近江太田〕 政十一4ウ 保一8ウ  
 並隆〔山城京〕 政十一1ウ  
 政十一22ウ 保一37ウ 保三1才  
 保三3才 保三48才 保四3才  
 保四47才 保四49才 保五1才  
 保五50ウ  
 米五〔下野真岡〕 政十一9才  
 米石〔播磨〕 保十30ウ  
 米汝〔筑後久留米〕 政十一15ウ  
 保五37才  
 碧山〔加賀〕 保四37ウ  
 碧山〔豊後〕 保十一37才  
 碧水〔日向都城〕 政十一17才

ほ

方庵〔肥前大村〕 保一33才

蓬宇〔三河吉田〕 政十一8才 保三10ウ

保四32才 保五10才

芳英〔山城京〕 政十一1才

政十一23才 保一1才 保一37ウ

保三1ウ 保三48才 保四1才

保四49ウ 保五2ウ 保五49ウ

保十26ウ 保十一1才 保十一39ウ

保解〔丹波〕 保三32ウ

豊丸〔山城京〕 保十2才 保十33才

保十一2ウ

保久亭〔越中吉久〕 保一19ウ 保三31才

保五21才

抱儀〔武蔵江戸〕 政十一9才

保一6才 保三12才 保四34才

保五11ウ 保十21才 保十一38ウ

蓬邸〔越中〕 保十19才

方居〔肥前諫早〕 保四18ウ 保五38ウ

芳居〔武蔵江戸〕 保五54ウ

芳兮〔越後田沢〕 政十一10ウ

保慶〔丹後田辺〕 保五26才

鳳兮〔能登正院〕 保十31ウ 保十一7ウ

放古〔越中今石動〕 保三31ウ

方壺〔淡路須本〕 保三39才

芳午〔武蔵江戸〕 保十18才

葆光〔伊勢山田〕 政十一7才

鳳左〔豊前小倉〕 保一31ウ

芳三〔讃岐〕 保三40才

芳室〔筑前〕 保五32ウ

芳室〔伊勢津〕 保五46才

峰舍〔加賀大聖寺〕 保一16ウ 保三28才

峰種〔播磨〕 保十15才 保十一19ウ

保十一22ウ

豊収〔加賀大聖寺〕 保三28才 保四54才

保十一34ウ

芳洲〔播磨〕 保三37ウ

方舟〔下総植房〕 保四34ウ

呆人〔由キヒコ〕〔讃岐〕 保四24ウ

宝水〔武蔵玉川〕 政十一8ウ

鳳吹〔越後糸魚川〕 保一21ウ

豊栖〔丹波〕 保四3ウ

豊村〔豊前〕 保三44ウ

苞竹〔播磨〕 保四9ウ

鳳中〔加賀金沢〕 保一15ウ

芳中〔安芸〕 保五31ウ

蓬亭〔越後見附〕 保一41才 保三32才

保四40ウ

方汀〔伊勢津〕 保五46才

保右〔越後糸魚川〕 保五20才

蓬陽〔尾張〕 保五9ウ 保十3ウ

保十18ウ 保十一40ウ

蓬廬〔備後鞆〕 政十一14ウ

鳳朗〔武蔵江戸〕 保十17ウ 保十27ウ

保十一24ウ

茂荊〔静花〕〔陸奥会津〕 保一12才

保三21ウ

茂兮〔備後尾道〕 保五30才

畝古〔武蔵江戸〕 保三12才

茂栽〔安芸〕 保五32才

茂竹〔加賀少年〕 保三24才

茂蘭〔豊後日田石井〕 保五39ウ

茂陵〔阿波徳島〕 政十一18才

甫海〔越中〕 保一20ウ

甫旧〔肥前長崎〕 保一34ウ 保四18才

保五38ウ 保十8才 保十一32ウ

北園〔加賀大聖寺〕 保一16ウ 保三27ウ

保四38才 保五24才

北窠〔摂津兵庫〕 保三6ウ 保四28ウ

保十七才

北我〔能登七尾〕 保五24ウ

北居〔近江西湖〕 保五52ウ

北洲〔北州〕〔加賀金沢〕 保三51才

保五23ウ

北世〔能登〕 保三29ウ

北岱〔肥前諫早〕 保一33ウ 保四18ウ

北鼎〔能登武部〕 保一18ウ

北亭〔丹後〕 保三34才 保四5ウ

北馬〔近江万木〕 政十一4ウ 保一8ウ

保三18才 保四序1ウ 保四45ウ

北坡〔越後村松〕 保三31ウ 保四40ウ

北袖〔丹後〕 保三35才

北洋〔越後見附〕 保一22才 保三2才

保三31ウ 保五20才 保十一39ウ

北麟〔石見浜田〕 保一40才

北令〔筑前〕 保四13才

墨雨〔淡路〕 保十13才

墨鷲〔陸奥〕 保三21ウ

木牛〔讃岐〕 保四24才

木兄〔伊予大洲〕 保一28ウ 保三40ウ

木壺〔近江日野〕 保五5ウ

木斎〔木齊〕〔豊前小倉〕 政十一15ウ

保一31ウ 保三44ウ 保四55ウ

卜斎〔近江西湖〕 保五4才

朴山〔肥前平戸〕 保一33ウ

木司〔越中富山〕 保一19才 保三30ウ

保四40才 保五21ウ

卜子〔伊勢龜山〕 保五46ウ

卜二〔伊勢山田〕 政十一6才

木二〔肥前大村〕 保十一5才

木屑〔筑後久留米〕 保十一4ウ

木儼〔尾張〕 保五9ウ

墨巢〔播磨兵庫〕 保一4才 保三6ウ

木長〔讃岐丸龜〕 保三40才 保十一28才

木長〔伊予〕 保十七7ウ

木兆〔摂津〕 保四28ウ

木兆〔讃岐疋田〕 保五41ウ

木鳥〔讃岐〕 保十七7才

木枕〔肥前長崎〕 保十一9ウ

木比〔播磨明石〕 保十6ウ

木父〔豊前小倉〕 保一31ウ 保三44才

保四55才 保五39才 保十19ウ

木雄〔加賀大聖寺〕 政十一11ウ

保一16ウ 保三28才 保四38才

保五24才

木葉〔上総〕 保五17ウ

甫州〔加賀金沢〕 保十22ウ

甫十〔甫時雨〕〔越後高田〕保一22才  
保三32ウ 保五20ウ  
蒲丈〔近江八幡〕保五54才  
蒲水〔筑前〕保五34ウ  
暮白〔加賀〕保四37才  
歩兵〔加賀金沢〕保三25ウ 保五23ウ  
甫六〔筑前福岡〕政十一15ウ 保一30ウ  
保三41ウ 保四12ウ 保五36ウ  
甫列〔伊勢〕保四52ウ 保四53才  
奔獅〔淡路須本〕保五43才  
本道〔丹後宮津〕保四5才 保五26ウ  
保十一36才  
畚民〔伊勢〕保四30ウ  
凡丈〔越中富山〕政十一11才 保一18ウ  
保三30ウ 保四40才 保五21ウ  
凡池〔山城淀〕保十32ウ  
保十一24才  
凡中〔山城〕保三48才  
凡鳥〔山城京〕政十一2才  
政十一23ウ 保一36ウ 保五1ウ  
凡鳥〔近江土山〕保十13才  
凡鳥〔武蔵江戸〕保十一33ウ  
凡調〔加賀〕保三26ウ

ま

麻交〔武蔵江戸〕保一43才 保三11ウ  
保四34才 保十21ウ 保十一38ウ  
十寸穂〔肥前唐津〕保五37ウ

麻中〔近江八幡〕保五54才 保十19ウ  
保十一27才

末引〔近江西湖藁園〕保十一25才

真なか〔近江〕保四44才

磨弥〔加賀金沢〕保十一29才

満美〔加賀金沢〕保一14ウ 保三26才

み

未央〔筑前〕保四13ウ

みを〔山城女〕保一37才

三千雄〔備中笠岡〕保十4ウ

みち雄〔下野栃木〕保一11ウ 保四35ウ  
保五18ウ

三千香〔武蔵江戸〕保四33才

三千春〔出雲松江〕保五28ウ

三千丸〔山城淀〕保四46ウ

三千磨〔讃岐高松〕保三39ウ 保四24ウ

三千代〔出雲松江 女〕保五28才

みつを〔下野真岡〕政十一9ウ

岑磨〔峰磨〕〔長門下関〕政十一14ウ  
保一43ウ 保三39才

三保女〔山城〕保三49才 保四2才

みや〔彦岐女〕保一35ウ

三代彦〔越後糸魚川〕保一21才

眠月〔備後尾道〕保五30才

む

む

夢外〔山城〕保四2ウ 保四51才 保五2ウ

夢蝶〔讃岐丸亀〕政十一17才 保一28才  
保三40才

夢梅〔武蔵江戸〕保一6才

め

明文〔日向〕保十一8才

鳴々〔摂津伊丹〕政十一20才 保三6才

明良〔山城〕保十七才 保十一3ウ  
保十一39才

免三〔能登穴水〕保一17才

も

黙齋〔豊後日田〕保三45才 保五39ウ

黙池〔山城〕保五51才 保十26ウ  
保十一37ウ

黙々〔石見矢上〕保一23ウ

茂稚〔讃岐丸亀〕政十一17ウ 保一28才  
保三40ウ 保四25才 保十七7才

や

也亞〔大和吉野〕保三47才 保四54才

野雨〔安芸広島〕保一27才

野屋〔因幡鳥取〕保十16才 保十一23才

夜外〔近江八幡〕保一42才 保三19ウ  
保四44才 保五54才

野山〔筑前〕保五35才

野雀〔筑前〕保五36才

野巢〔常陸〕保五18才

八十女〔武蔵江戸〕保五13才

野竹〔筑前福岡〕保一30ウ 保三43ウ  
保四12才 保五33ウ 保十一21ウ

夜白〔尾張名古屋〕保一43ウ

夜白〔山城〕保三4才

夜白〔周防山口〕保五32ウ

夜白〔伊勢松坂〕保五53ウ

野風〔筑前〕保五35ウ 保十5ウ

也風流〔丹後〕保三34ウ

夜有〔近江八幡〕保十一終2才

野雄〔伊予柏〕保十一終2ウ

野楊〔丹波龜山〕保一22ウ 保三32ウ  
保五25ウ 保十20才

野卵〔丹波舟木〕保三50ウ 保四4才  
保五25ウ

ゆ

唯叟〔山城〕保十一3才 41才

有雨〔肥前大村〕保五38才

由可〔筑前〕保五36才

由華〔山城〕保十2ウ 保十33ウ

友董〔筑前香袋〕保一31才 保四11ウ

有慶〔近江町や〕保一10才

有月〔武蔵江戸〕保一43才 保三11ウ  
保四34才 保五13ウ

由吾〔日向本庄〕保四21才 保五40ウ

有口〔播磨姫路〕保五29ウ

遊斎〔山城〕保三4ウ

夕斉〔但馬〕 保四6ウ  
 友之〔武蔵東都〕 政十一9才  
 友之〔山城淀〕 保四46才  
 友之〔遠江渡瀬〕 保五10ウ  
 友樵〔阿波〕 保三39ウ 保四21ウ  
 由誓〔武蔵江戸〕 保五14才 保十21才  
 保十一38ウ  
 有節〔山城〕 保五51ウ 保十16ウ  
 保十一38才  
 幽草〔摂津浪花〕 保一3才 保三6才  
 保四29ウ  
 遊蝶〔山城〕 保三49才 保四50才  
 友徳〔越後亀田〕 保十一27才  
 猶麻〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 有美〔飛騨高山〕 政十一10才 保一10ウ  
 保四36才  
 友圃〔友甫〕〔越前丸岡〕 政十一12ウ  
 保一12才 保三23ウ 保五20ウ  
 有木〔越後新潟〕 保十一10ウ  
 悠々〔肥前大村〕 政十一16才 保一32ウ  
 保三45ウ 保四17ウ 保五38才  
 由雄〔出雲〕 保四9才  
 有来〔肥前〕 保四18才  
 有柳〔越後糸魚川〕 保一21才  
 雄柳〔越後〕 保三31ウ  
 有向〔肥前大村／在阪〕 政十一21才  
 保一33才  
 有隣〔丹波古佐〕 保一22ウ

有隣〔雪江〕〔伯耆澁江〕 保一23ウ  
 保三36ウ 保四7才 保十16才  
 保十一39ウ  
 湧瀧〔丹波〕 保十20才  
 悠鹿〔大和〕 政十一18ウ  
 又鹿〔播磨明石〕 保五29ウ  
 由喜彦〔讃岐〕 保三40才  
 ゆみ女〔ゆみ子／ゆみ〕〔能登七尾〕  
 政十一11ウ 保一17ウ 保三30才  
 保四38ウ 保五24ウ  
 よ  
 要鳥〔但馬出石〕 保四6ウ  
 葉久藻〔丹後〕 保三34才  
 楊后〔出雲松江〕 保五28才  
 陽樹〔摂津伊丹〕 保三6才  
 よう女〔山城京〕 政十一22才  
 保一42ウ 保三2ウ 保三49才  
 保四51ウ 保五2ウ  
 養素〔越後加茂〕 政十一10ウ 保三31ウ  
 葉重〔肥後熊本〕 保一34ウ  
 陽坡〔三河宮崎〕 政十一8才 保一5ウ  
 保五10才  
 鷹也〔肥前唐津〕 保五37才  
 葉羅〔出雲松江〕 保五27ウ  
 陽里〔備後福山〕 政十一14ウ  
 養老〔備中笠岡〕 保十4ウ  
 与園〔豊後南山〕 保十一終1ウ

与山〔筑後久留米〕 政十一15ウ  
 保一31ウ 保五36ウ  
 よし香〔常陸小川〕 保三50ウ 保四35ウ  
 よし彦〔淡路鳥飼〕 保五43ウ  
 与翠〔武蔵江戸〕 保五13才  
 米友〔近江大津〕 政十一3ウ 保一42才  
 保三17才 保四2才 保四41ウ  
 保十20才 保十一37才  
 四方丸〔信濃〕 保五19才  
 ら  
 来元〔山城〕 保三49才 保四50才  
 来五〔下野真岡〕 政十一9才  
 雷貢〔対馬〕 保四20才  
 懶侯〔備中〕 保十一6ウ  
 来志〔近江辻沢〕 保一8ウ 天三18才  
 来至〔武蔵江戸〕 保五14才  
 来青〔淡路須本〕 保四27ウ 保十26才  
 保十一39ウ  
 雷石〔甲斐〕 保三11ウ  
 来先〔武蔵江戸〕 保五14才  
 籟芳〔出雲井尻〕 保五28ウ  
 蘿閑〔羅閑〕〔山城京〕 政十一21ウ  
 保一1ウ 保一36才 保三2才  
 保三4ウ 保三48才  
 螺溪〔丹波亀山〕 保十一終2才  
 蘿月〔長門萩〕 保十一10ウ  
 蘿斎〔武蔵江戸〕 保五12才 保五15才  
 蘿山〔伊予大洲〕 保一29才 保三41才

羅浮〔山城京〕 政十一23才 保一36ウ  
 保五2才 保五49ウ  
 蘿文〔山城京〕 保四50才  
 蘿雄〔讃岐小豆島〕 保一27ウ  
 鸞雅〔伊予〕 保三40ウ  
 嵐堯〔筑前〕 保三42才  
 嵐溪〔能登穴水〕 保一17ウ  
 嵐月〔蘭月〕〔近江湖東〕 保三20才  
 保四43ウ 保十10ウ 保十一6才  
 蘭臯〔備前〕 保一39才  
 蘭臯〔尾張〕 保五9ウ  
 鸞斎〔鸞斎〕〔伊予大洲〕 保一29才  
 保三40ウ  
 嵐斎〔嵐斎〕〔下野足利〕 保四35ウ  
 保五18ウ  
 嵐山〔近江豊浦〕 保一10才  
 嵐山〔陸奥会津〕 保一11ウ  
 蘭枝〔加賀〕 保三26才  
 蘭秀〔能登二ノ宮〕 保一18才  
 蘭秀〔摂津浪花〕 保十一31才  
 蘭舟〔伊勢山田〕 保三10才  
 蘭舟〔山城淀〕 保十一31ウ  
 蘭州〔山城淀〕 保十19ウ  
 蘭笑〔加賀〕 保三26才  
 嵐翠〔薩摩加治木〕 保十8ウ 保十一7ウ  
 蘭吹〔嵐吹〕〔越中富山〕 保十12才  
 保十一24才  
 鸞石〔阿波〕 保四21ウ  
 嵐夕〔土佐〕 保十14ウ 保十一23才  
 保十一45ウ

らん〜り

蘭雪〔肥前〕 保四20才  
 鸞巢〔阿波徳島〕 政十一18才 保三39ウ  
 保四21ウ 保五41ウ  
 蘭窓〔加賀金沢〕 保一15才 保三26才  
 蘭叢〔肥後熊本〕 保一35ウ  
 嵐洞〔近江八幡〕 保一9ウ  
 蘭堂〔筑後久留米〕 保一7ウ  
 保一4才  
 嵐木〔近江高島〕 保一9才  
 蘭里〔河内〕 保五45才  
 卵龍〔加賀〕 保三26ウ  
 蘭陵〔播磨古川〕 保三37ウ

り

六我〔上野箕輪〕 政十一9才  
 六更〔能登七尾〕 保一17ウ  
 六岐〔能登〕 保三30才 保四39才  
 六合〔筑前〕 保五32ウ  
 陸草〔其曉〕〔播磨平津／姫路〕  
 政十一13ウ 保一25才 保一41ウ  
 保三38才 保五29才  
 蓼村〔伊予郡中〕 保五42ウ  
 蓼袋〔筑前〕 保一29ウ  
 陸鷹〔越前丸岡〕 保一12ウ 保一34才  
 李徑〔能登穴水〕 保一17才  
 李徑〔紀伊田辺〕 保一27才  
 李蹊〔讃岐〕 保四24ウ  
 六垌〔甲斐斐崎〕 保五11才  
 里月女〔筑前〕 保四13才 保五34才  
 籬月〔筑前〕 保五33ウ  
 李曠〔尾張〕 保五8ウ  
 里山〔豊前〕 保三44ウ  
 璃山〔加賀〕 保三27才  
 李之〔能登穴水〕 政十一11ウ 保一17才  
 保五24ウ  
 李裳〔尾張〕 保三50ウ  
 李上〔讃岐白鳥〕 保一28才 保三40才  
 保四25才 保五42才  
 里水〔豊前小倉〕 保一31ウ  
 里水〔伊勢亀山〕 保五46ウ  
 李井〔肥前〕 保四18才 保四19才  
 李夕〔近江日野女〕 政十一5ウ  
 梨雪〔石見矢上〕 保一23ウ 保三37才  
 里雪〔近江八幡〕 保五53ウ

里泉〔伊勢〕 保五46ウ  
 里鳥〔近江浅小井〕 政十一5才  
 李長〔淡路〕 保四25才  
 鯉兆〔山城淀〕 保一32才  
 裡竹〔加賀〕 保三28才  
 裡竹〔加賀〕 保四38ウ  
 立介〔加賀金沢〕 政十一12才 保一2ウ  
 保一12ウ 保一14ウ 保三24ウ  
 保四37才 保五23才 保一15ウ  
 保一35ウ  
 率彦〔肥後高橋〕 保四16ウ  
 立己〔立己〕〔日向本庄〕 保四20ウ  
 保五40ウ  
 立沙〔筑前小竹〕 政十一15才 保一31才  
 保三42ウ 保四11ウ  
 栗哉〔山城京〕 保四1ウ 保四47ウ  
 保四50ウ 保五3才 保一2ウ  
 保一27才  
 栗支〔武蔵八幡山〕 政十一8ウ  
 立女〔肥前長崎〕 保一10才  
 栗堂〔周防上ノ関〕 保三39才 保四10ウ  
 里童〔近江葛巻〕 保一7ウ 保一10ウ  
 保三序1ウ 保三19ウ 保五6才  
 李堂〔伊勢亀山〕 保四27才 保五46ウ  
 梨陌〔尾張〕 保三50才  
 里風〔信濃林〕 政十一10ウ  
 里風〔下総〕 保四35才  
 里楓〔讃岐丸亀〕 政十一17才  
 里魴〔加賀小松〕 保三27ウ 保四38ウ  
 保五24才

理芳〔山城京〕 保四54ウ  
 李明 保四26才  
 里遊〔山城〕 保一45才  
 柳阿〔肥前大村〕 保一33才  
 柳蛙〔長門〕 保一10ウ  
 柳衣〔能登飯田〕 保五24才  
 柳雨〔肥後熊本〕 保一35才  
 笠可〔越中本郷〕 保一19ウ  
 笠下〔若狭〕 保三23才  
 柳架〔加賀金沢〕 保一29才  
 柳橘 保四26ウ  
 柳月〔日向都城〕 政十一17才  
 柳壺〔加賀金沢〕 保一35ウ  
 柳更〔加賀金沢少年〕 保一15ウ  
 保三24才  
 龍山〔丹後〕 保一13ウ  
 柳之〔下野真岡〕 政十一9才  
 柳至〔常陸〕 保一7ウ  
 柳士〔加賀金沢〕 保一15ウ  
 柳枝〔能登七尾〕 保一17ウ  
 流芝〔三河〕 保三10ウ 保四33才  
 保五10才  
 柳志〔筑前〕 保四14才  
 柳思〔肥後〕 保四17才  
 柳絲〔山城〕 保一26才 保一32才  
 柳舍〔筑前〕 保五33才  
 柳絮〔丹後宮津〕 政十一12ウ 保一23才  
 流水〔肥前〕 保三46才  
 柳翠〔武蔵越ヶ谷〕 保五16ウ  
 柳清〔山城南溪社〕 保五49ウ

りゅ〜ろそ

龍石〔武蔵江戸〕 保五13才  
 流泉〔伊予土岐〕 政十一17ウ  
 流川〔近江矢橋〕 保十14才 保十一26才  
 柳眉〔陸奥会津若松〕 保十一24ウ  
 柳甫〔肥前〕 保三45ウ  
 柳圃〔柳甫〕〔丹後田辺〕 保三34才  
 保四6才 保五26才  
 柳圃〔筑前〕 保四12ウ 保十五5ウ  
 柳圃〔武蔵江戸〕 保五12ウ  
 流芳〔伊勢四日市〕 保十4才 保十一11才  
 保十一11才 保十一31才  
 柳眠〔但馬村岡〕 保三36才  
 涼宇〔阿波徳島〕 政十一18ウ  
 凌雨〔山城淀〕 保十8才  
 涼起〔讃岐〕 保四24ウ  
 涼呼〔備前〕 保十22才 保十一34才  
 亮曠〔出雲母里〕 保三36ウ 保四8才  
 保五28ウ  
 良岫〔讃岐高松〕 保十一28ウ  
 良雪〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 凌岱〔阿波〕 保十22才  
 良談〔佐渡小木〕 保四36才  
 了知〔武蔵江戸〕 保四33ウ  
 良峰〔讃岐高松〕 保十一28ウ  
 良明〔伊勢〕 保五52才  
 了々〔越後新発田〕 政十一10ウ  
 廬月〔肥前長崎〕 保十一9ウ  
 慮中〔摂津浪花〕 保三5ウ  
 廬風〔備前〕 保十一34才  
 吏龍〔山城京〕 保四54ウ

里龍〔近江高宮〕 保五6才  
 里柳〔摂津大坂〕 保十一27ウ  
 梨留女〔近江坂本〕 保十30才  
 理和〔陸奥〕 保三22才  
 林曹〔摂津浪花〕 保三2才 保十22ウ  
 保十一31ウ  
 麟定〔武蔵越ヶ谷〕 保五17才  
 麟年〔越中福野〕 保一19ウ  
 林坡〔加賀金沢〕 保十五5ウ 保十一35ウ  
 鱗和〔周防山口〕 保五32ウ  
 れ  
 嶺月〔近江高島〕 保一9ウ 保四45才  
 砺山〔越中福野〕 保一19ウ  
 砺山〔近江大津〕 保十19ウ 保十一34ウ  
 靈芝〔丹波八ツカメ〕 保四3ウ  
 靈満〔肥前〕 保四17才  
 連管〔武蔵江戸〕 保五14才  
 蓮居〔山城京〕 保十3ウ  
 漣月〔相模江ノ島〕 保五11ウ  
 漣山〔駿河〕 保五11才  
 連雀〔日向本庄〕 保五41才  
 帘丈〔伊予大洲〕 保一28ウ  
 連芙〔相模〕 保十一24才  
 ろ  
 露庵〔石見谷住江〕 保一25才  
 路庵〔能登飯田〕 保五24才

朗月〔近江高島〕 保五4才  
 廊哉〔陸奥〕 保三22才  
 瀧水〔山城城南〕 保十31ウ  
 芦淵〔肥前長崎〕 保十31才  
 芦屋〔丹波須知〕 政十一12ウ  
 呂乙〔近江海津〕 保三19才  
 路芥〔肥前〕 保十8ウ  
 芦角〔伊勢〕 保四31才  
 芦丸〔丹後〕 保四6才  
 路丸〔筑前〕 保四14才  
 魯狂〔播磨〕 保三37才  
 路橋〔信濃飯田〕 保五19才  
 芦喬〔越中今石動〕 保五22ウ  
 鹿月〔山城〕 保十一2ウ 保十一45才  
 鹿彦〔近江辻沢〕 保四46才  
 鹿志〔近江〕 保三18才  
 鹿雪〔越前〕 保四41才  
 鹿川〔山城京〕 政十一22才 保一37才  
 鹿雄〔近江薬園〕 保五5ウ  
 露桂〔肥後熊本〕 保一35才  
 露桂〔陸奥〕 保三22才  
 魯兮〔但馬〕 保三36才  
 芦溪〔讃岐疋田〕 保五41ウ  
 路月〔能登皆月〕 保一18ウ  
 路月〔丹波五月〕 保五25ウ  
 路月〔筑前〕 保十6才  
 露光〔丹波黒井〕 保三2才 保三33ウ  
 保四4ウ  
 路江〔越前丸岡〕 保十12ウ 保十一33才  
 芦郷〔伊賀〕 保五55才

魯斎〔若狭杵見/山城〕 保四41才  
 保五3才 保五50才  
 路三〔越中福町〕 保三31才  
 魯山〔近江〕 保四45才  
 魯紫〔越中福町〕 保一21才  
 露州〔摂津浪花〕 政十一20ウ  
 保一3才  
 魯秋〔河内星田〕 保一4才  
 芦洲〔芦州〕〔近江八幡〕 保一9ウ  
 保三20才 保四44才 保五54ウ  
 芦洲〔大和吉野〕 保五44ウ  
 芦州〔備中都羅島〕 保十一6才  
 呂舟〔筑前〕 保三42才 保四15才  
 保五36ウ  
 鷺洲〔肥前〕 保三45才 保四19ウ  
 芦舟〔筑前〕 保四14ウ  
 路舟〔尾張〕 保五9ウ  
 魯丈〔肥前〕 保四18才  
 輅乘〔越中吉久〕 保五21才  
 魯人〔播磨山田〕 保一25ウ  
 露水〔肥前大村〕 保四17才 保十一5才  
 鷺水〔出雲〕 保十16才  
 芦青〔石見浅利〕 保三37才 保三50ウ  
 保四9ウ 保五28ウ  
 魯石〔加賀〕 保三28才  
 魯川〔能登七尾〕 保一18才  
 呂川〔淡路須本〕 保五43才  
 露泉〔アハ〕 保五54才  
 露村〔越後白子〕 保五20ウ

ろち〜わ

盧中〔摂津浪花〕 保四29才

露頂〔淡路須本〕 政十一2才

政十一18ウ

路鳥〔山城京〕 政十一22才 保一37才

芦滴〔但馬〕 保四6ウ

魯童〔筑前〕 保四11才

駟童〔肥前長崎〕 保四17ウ

保十23ウ 保十一6ウ 保十一13才

芦堂 保四26ウ

路白〔日向都城〕 保五40才

鷺白〔出雲〕 保十16才

鷺風〔豊後日出〕 保三44ウ 保四16ウ

保五39才

炬沸〔備後鞆〕 保一26才

芦分〔肥前長崎〕 保十一9才

魯峰〔能登七尾〕 保一18才

芦邦〔淡路江井〕 保四27才

路蓬〔能登七尾〕 保四39才 保五24ウ

魯由〔越中今石動〕 保一20才

わ

倭一〔備中倉敷〕 保四10才 保五30才

和雲〔肥前〕 保三45才

和今日〔出雲女〕 保四9才

和月〔近江日野〕 政十一5ウ 保一10ウ

保三19才 保四42才 保十一32ウ

倭松〔伊勢〕 保四31ウ

和翠〔近江〕 保三20才

和翠〔武蔵江戸〕 保十31才

和声〔日向〕 保十一8ウ

和多〔雪窟〕〔加賀〕 保三25才

和潮〔尾張荒井〕 保一5ウ

和風〔筑前〕 保三43ウ 保四13才

保五34才 保五34ウ

和融〔伊予吉田〕 保一28ウ

〔難読〕

咄弓〔丹後〕 保三35ウ

付表一 各年本の編成 ※本冊の底本による

30	29	28	27	26	25	24	番		
天保十一	天保十	天保五	天保四	天保三	天保元	文政十一	年次		
なし	なし	なし	花供養	花供養集 天保三辰年 花供養会	花供養集 文政十三寅年 花供養会	三月十二日 花供養会	標題		
志郎	太室	太老	北馬	里童	楽斎	檐鷗	序文		
香雪	志可寿	霞柳	芹舎	麦洋	芳英	儼草	発句	卷頭連句	
朝陽	朝陽	蒼虬	蒼虬	千崖	蒼虬	脇句			
44	44	50	44	百韻略(30) 42	百韻略(24) 歌仙略(6)	41	句数		
区別せず	区別せず	区別せず	区別せず	区別せず	区別せず	区別せず	参列者		
51	39	57	56	53	45	27	丁数	奉納発句・連句	
474	397	775	805	703	651	366	※発句		
12	5	6	8	6	5	3	連句		
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	跋文		
菊屋平兵衛	菊屋平兵衛	菊屋平兵衛	菊屋平兵衛	菊屋平兵衛	菊屋平兵衛	無記載	刊行書肆		
奥付「天保十一歳庚子春」。底本に追加有り、校異本にはない。	奥付「天保十年己亥春」。			追加有り。	付録有り。		備考		

※連句の発句を除く・延数

付表二 各年・国別奉納者数 ※本冊の底本による

計	天保 11	天保 10	天保 5	天保 4	天保 3	天保 1	文政 11	地域
89	14		13	4	33	22	3	陸奥
8				2	1	2	3	出羽
17	1		7	1		1	7	下野
16			3	5	5	2	1	上野
12			4	3	1	2	2	常陸
1			1					安房
2			1		1			上総
47		6	9	16	6	8	2	下総
222	35	33	72	23	17	27	15	江戸・武蔵
5	3		2					相模
7			4		1	1	1	甲斐
2				1	1			伊豆
6			6					駿河
20	3	4	12				1	遠江
57	1	1	9	16	19	3	8	三河
70	6	8	24	2	15	8	7	尾張
18			6	3	2	4	3	信濃
12				1		6	5	飛騨
11	3		4		3	1		美濃
98	10	3	24	10	21	26	4	越後
125	11	7	20	19	23	37	8	越中
109	10	2	20	12	25	32	8	能登
5	2	2		1				佐渡
254	17	13	32	43	85	51	13	加賀
21	4	2	2	6	3	3	1	越前
22	4	4	1	4	9			若狭
155	5	6	39	47	15	14	29	伊勢
5	2	2					1	志摩
8			7			1		伊賀
400	52	43	61	69	69	57	49	近江
468	66	82	66	81	55	62	56	京・南山城・山城
19			4	5	5		5	大和
11	3	2	1	2	2	1		河内
152	15	20	12	27	31	23	24	浪花・大坂・摂津
10	3		1	1		2	3	和泉
12			2			5	5	紀伊
55	3	5	20	23	1	1	2	淡路
126	11	29	16	13	25	15	17	播磨
116	18	19	12	25	22	14	6	丹波
85			15	25	35	7	3	丹後
36	2		3	10	16	5		但馬
10	1	2		2		1	4	因幡
20	4	1	3	7	3	1	1	伯耆
81	5	7	31	34	3		1	出雲
15			1	1	2	10	1	石見
5			3			1	1	美作
10	5	4				1		備前
23	12	6	2	1		2		備中
29			9	3	3	8	6	備後
34			10	7	8	7	2	安芸
18	1		7	3	5	2		周防
12	5	1			2	2	2	長門
33	1	3	5	8	5	5	6	阿波
84	5	2	14	25	15	8	15	讃岐
92	8	7	13	7	21	32	4	伊予
12	7	2	2			1		土佐
300	17	23	72	101	45	32	10	筑前
53	20	13	8	2	2	2	6	筑後
43	1	2	9	6	10	12	3	豊前
39	11	1	11	4	4	7	1	豊後
218	45	8	29	56	28	38	14	肥前
26			1	5	2	17	1	肥後
52	8	5	20	8	5	2	4	日向
24	12	11		1				薩摩
10				1	5	4		壱岐
11				7	1	2	1	対馬
4168	472	391	785	789	716	640	375	計
	44	38	55	52	49	54	49	国数

(注1) 「行脚」「雲水」などの地域未詳の者は省く。(注2) 同年の複数句の入集者は、重複して算入しない。

### 三訂『花供養』所蔵翻刻一覧

二〇二四年一月九日現在

#### 凡例

一 略記号は次の通りである。

- 愛知県大 愛知県立大学附属図書館  
時雨 秋田県立秋田図書館時雨庵文庫  
石川歴博 石川県立歴史博物館大鋸コレクション  
糸井 京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫  
岩見 弘前市立弘前図書館岩見文庫  
頼原 京都大学文学部図書館頼原文庫  
燕々 岡山市立中央図書館燕々文庫  
大内初夫 佐賀大学附属図書館大内文庫  
河野美 今治市河野美術館  
雲英 早稲田大学附属図書館雲英末雄文庫  
月明 石川県立図書館月明文庫  
櫻井 立命館大学アート・リサーチセンター 櫻井武次郎文庫  
下垣内 尾道大学附属図書館下垣内和人文庫  
関口 長野県立長野図書館関口文庫  
高岡図 高岡市立高岡図書館  
竹冷 東京大学附属図書館竹冷文庫  
中島杏 富山県小矢部市立礪中図書館  
白鹿 兵庫県西宮市笹部桜コレクション―白鹿記念酒造博物館寄託―  
堀家 京都府城陽市歴史民俗資料館マイクログ  
武蔵 武蔵野大学附属図書館旧前田利治蔵  
森 大阪市立大学附属図書館森文庫  
山崎 大阪公立大学中百舌鳥図書館(旧大阪府立女子大学) 山崎文庫  
山田 大阪公立大学中百舌鳥図書館(旧大阪府立女子大学) 山田文庫  
麗澤 麗澤大学附属図書館田中文庫  
綿屋 天理大学附属天理図書館綿屋文庫

〈翻福〉 『福井県古俳書大観』七(全冊翻刻に限る)

〈翻Ⅰ〉 『花供養』翻刻集成Ⅰ

〈翻Ⅱ〉 『花供養』翻刻集成Ⅱ

〈翻Ⅲ〉 『花供養』翻刻集成Ⅲ

一 写本は原則として記さない。

#### 参考文献

櫻井武次郎「花供養所蔵先リスト」(大阪俳文学研究会「会報」38号)

『国書総目録』

『古典籍総合目録』

国文学研究資料館古典籍データベース(国書データベース)

各図書館・文庫目録及びデータベース

年次	主催	所蔵先〔翻刻〕	【備考】
1	天明六	關吏	綿屋・糸井・白鹿・柿衛・国会・愛知県大
			〔翻福〕〔翻I〕
2	七	關吏	綿屋・愛知県大・中島杏文庫
			〔翻福〕・〔翻I〕
3	寛政元	關吏	綿屋・櫻井
			〔翻I〕
4	二	關吏	月明(二部)・愛知県大・河野美・雲英
			〔翻福〕・〔翻I〕
5	三	關吏	綿屋・月明・芭蕉翁記念・松宇・堀家(袋付)・松本節子
			〔翻福〕・〔翻I〕
6	四	關吏	月明・柿衛・奈良文庫・堀家・河野美(二冊)
			〔翻I〕
7	五	關吏	綿屋・月明・白鹿・河野美・武蔵・雲英・下垣内
			〔翻I〕
8	六	關吏	綿屋・月明・武蔵・白鹿・蝸牛廬文庫・雲英・堀家(袋付)・二松学舎大・竹内千代子(翻I)・小林孔(翻I)
			〔翻I〕
9	七	關吏	綿屋・柿衛・白鹿・戸谷半之助(一茶全集)・燕々
			〔翻I〕
10	八	關吏	綿屋・月明(二部)・柿衛・白鹿・武蔵・高岡因・愛媛県因・須賀川市因・奈良文庫・燕々・雲英・下垣内・某家
			〔翻I〕
11	九	關吏	武蔵・雲英・小林孔(翻I)
			〔翻I〕
12	十	關吏	月明(二部)・柿衛・燕々
			〔翻福〕・〔翻I〕
			【備考】刊年無記載・あし丸序
13	十一	蒼虬	綿屋・白鹿・竹冷・国会・潁原・岩見(合本)・糸魚川市歴資・糸魚川歴資木村
			〔翻福〕・〔翻II〕
14	享和元	蒼虬	綿屋・柿衛・月明・武蔵・岩見(合本)・関口(二冊)・櫻井・小林孔(翻II)／「まつり見」合綴
			〔翻II〕
15	二	蒼虬	柿衛・山崎・岩見(合本)・台湾大(ビブリア42)
			〔翻福〕・〔翻II〕
16	三	蒼虬	綿屋・岩見(合本)・久留米因
			〔翻II〕
17	文化元	蒼虬	綿屋・奈良文庫・久留米因・雲英・高井悠子(翻II)
			〔翻福〕・〔翻II〕
18	二	蒼虬	綿屋・月明・高岡因・久留米因
			〔翻II〕
19	三	蒼虬	綿屋・糸井・岩見(合本)
			〔翻福〕・〔翻II〕
20	四	蒼虬	月明・高岡因・奈良文庫・聖心女子大・大内初夫・竹冷
			〔翻II〕
21	六	蒼虬	石川歴博・燕々・蝸牛廬文庫・吉田耕一(近世芸備俳諧年表)・武蔵
			〔翻II〕
22	九	蒼虬	綿屋・月明・糸井・白鹿・学習院大・岩見(合本)・石川歴博・竹内千代子(翻II)
			〔翻II〕
23	十三	蒼虬	月明・竹冷・白鹿・武蔵・愛知県大・岩見(合本)・学習院大・麗澤・石川歴博
			〔翻II〕
24	文政十一	蒼虬	文化一、二、三年興行を合併
			〔翻II〕
			【備考】文化一、二、三年興行を合併
			白鹿・武蔵・時雨(二部)・玉川大・麗澤
			〔翻III〕

- 25 天保 元 蒼虬 綿屋・月明(二部)・竹冷・白鹿・石川歷博・芭蕉翁記念・愛知芸大・愛知県大  
 (翻Ⅲ)
- 26 三 千崖 月明・糸井・武蔵・石川歷博・立教大・下垣内・雲英・山田  
 (翻Ⅲ)
- 27 四 蒼虬 綿屋・月明・糸井・芭蕉翁記念・愛知教大・徳島県図・燕々・下垣内・愛知芸大・九州大・麗澤・長崎県図苜蓿・白鹿(二部)  
 (翻Ⅲ)
- 28 五 蒼虬 月明・白鹿(二部)・芭蕉翁記念・山田・古宅家・神戸大  
 (翻Ⅲ)
- 29 天保 十 朝陽 月明・白鹿・武蔵・某家(国文研マイクロ)  
 (翻Ⅲ)
- 30 十一 朝陽 白鹿・立教大(袋付)・九州大・大内初夫  
 (翻Ⅲ)
- 31 十二 九起 立教大・山崎・櫻井  
 【備考】刊年無記載・九華序
- 32 十三 九起 綿屋・糸井・白鹿・八戸市図・八戸市図百仙洞・九州大・山田・蝸牛廬文庫
- 33 十四 九起 綿屋・月明(袋付)・大阪府図・芭蕉翁記念・立教大・武蔵・山田・奈良文庫・燕々・中島杏・山本唯一・下垣内・正宗文庫・富山県図
- 34 弘化 元 九起 月明・武蔵・国会・下垣内・雲英  
 【備考】芭蕉百五十回忌(二冊)
- 35 二 九起 月明・白鹿・武蔵(二部)・高岡図・九大・櫻井・燕々
- 36 三 九起 月明・白鹿(三部)・燕々・国文研・愛知県大・九州大・大内初夫・竹内千代子  
 (翻福)
- 37 四 九起 芭蕉翁記念・愛知県大・京大谷村・須賀川市図矢部・小林孔・大内初夫
- 38 嘉永 二 九起 白鹿・立教大・九州大・村野(国書総目)  
 【備考】嘉永元年興行も入集
- 
- 39 三 九起 芭蕉翁記念・立教大・宮城県立小西文庫・奈良大
- 40 六 公成 月明・柿衛・芭蕉翁記念・岩見(合本)・三康・国会・立教大・青森県図工藤(二部)・燕々・須賀川市図矢部・森・下垣内・小林孔
- 41 安政 元 公成 月明・石川歷博・立教大・下垣内・古宅家・櫻井・奈良大・三康・竹内千代子(旧柿衛)
- 42 三 公成 白鹿・中島杏・山本唯一・櫻井(欠損有)・内山(国書総目)・三康・奈良大・富山県図
- 43 四 公成 三康・内山(国書総目)・奈良大(袋付)
- 44 五 公成 月明・白鹿・芭蕉翁記念・下垣内・立教大・櫻井(欠損有)・内山(国書総目)・九州大・奈良大(袋付)・松本節子・竹内千代子(旧柿衛)
- 45 六 公成 月明・柿衛・三康・雲英・奈良大(袋付)
- 46 万延 元 公成 綿屋・白鹿・静岡大原・櫻井(二部)・内山(国書総目)・竹内千代子(旧柿衛)
- 47 文久 元 公成 月明・白鹿・三康・※芭蕉堂・九州大・奈良大・竹内千代子(旧柿衛)
- 48 二 公成 綿屋・芭蕉翁記念・白鹿・九州大檜垣・櫻井・竹内千代子(旧柿衛)
- 49 三 公成 糸井・芭蕉翁記念・三康・燕々・櫻井(欠損有)
- 50 元 治 元 公成 芭蕉翁記念・三康・櫻井(欠損有)・大内初夫・小林孔
- 51 慶応 元 公成 月明・芭蕉翁記念・須賀川市図矢部・早稲田大(俳海四〇)・櫻井・奈良大(袋付)
- 52 二 公成 綿屋・白鹿・石川歷博・芭蕉翁記念・岡山市図・龍人大宮・三康
- 53 三 公成 綿屋・月明・白鹿・芭蕉翁記念・三康・名古屋市鶴舞中央図・東海女短大関山文庫・燕々・櫻井・東海学園名古屋哲誠
- 54 明治 三 良大 綿屋・白鹿・芭蕉翁記念・三康・櫻井・大内初夫  
 【備考】明治二年興行、同三年刊

## 付記

一 本稿は、京都俳諧研究会の成果の一部である。研究メンバーは、竹内千代子、松本節子、小林 孔、高井悠子、金子貴昭、赤間 亮（敬称略）。

一 科学研究費助成事業・基盤研究（C）「近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧の研究」（課題番号JP20K00353）の成果の一部である。

一 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ 国際共同研究拠点」 共同研究課題「花供養と芭蕉顕彰俳諧の研究」（代表：竹内千代子）の一部である。なお、成果の一部はWEB公開中である。

<https://www.arc.critsume.ac.jp/archive01/theater/html/hanakuyo/index.html>

表紙『芭蕉堂三代発句集』（架蔵）

『花供養』翻刻集成Ⅲ

——蒼虬(2)千崖朝陽の時代 文政十一年～天保十一年——

発行日 令和六年一月三〇日

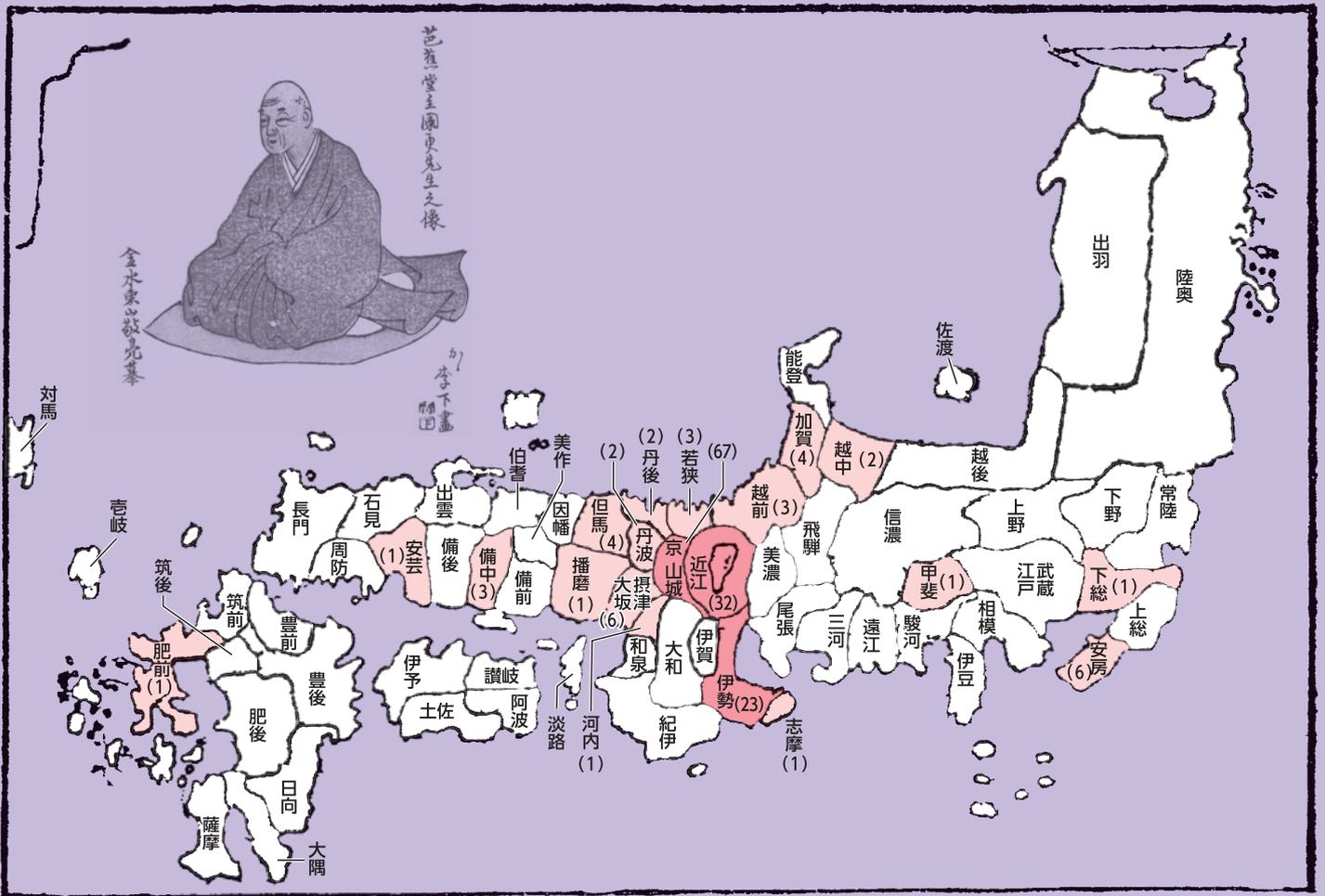
編・著 立命館大学(非)講師  
竹内 千代子

印刷 株式会社 昭英社

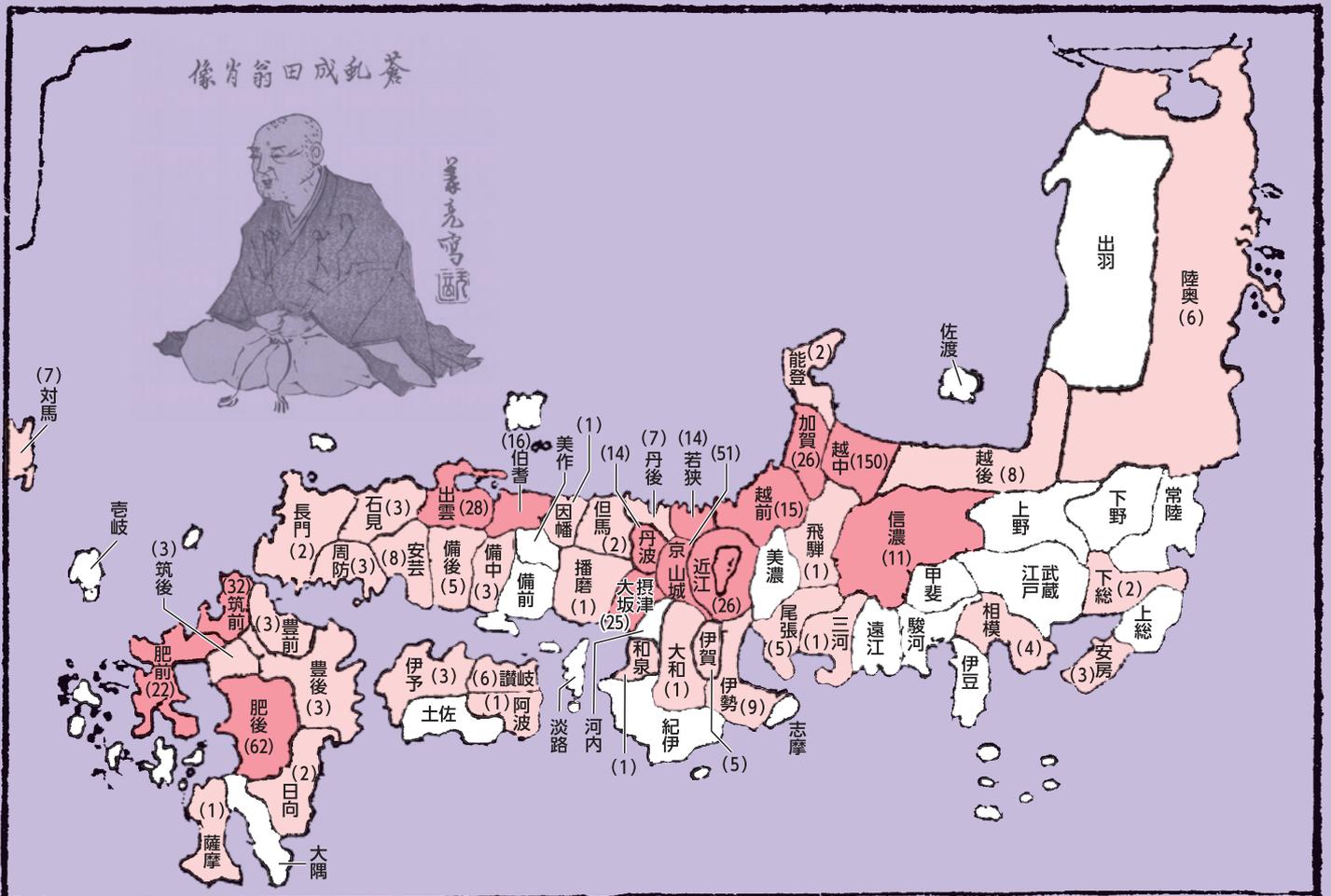
〒六〇〇八二一九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八

電話 〇七五―三五一―八二一



天明六年 關更主催『花供養』 ■ 10人以上入集 ■ 10人未満入集 ■ 未入集



文化四年 蒼虬主催『花供養』 ■ 10人以上入集 ■ 10人未満入集 ■ 未入集